

主要地方道成田安食線
地方道道路改良事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書

II

成 田 市

上福田和田谷津遺跡
上福田保町遺跡
仲兵遺跡
下福田稲荷原遺跡
上福田13号墳
松崎播磨遺跡
烏内遺跡

1993

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

巻首図版



上福田13号墳石室全景（南東から）

主要地方道成田安食線
地方道道路改良事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書

II

1993

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県北部に広がる下総台地は、恵まれた自然環境により先土器時代から歴史時代におよぶ多くの遺跡が所在しています。なかでも印旛沼北東の台地には、多くの古墳が集中しており、その一角には「千葉県立房総風土記の丘」も設置されています。

しかし近年、その隣接地に新東京国際空港が建設され、周辺地域の整備も望まれるようになってきました。このような状況のなかで、千葉県土木部により計画されたのが主要地方道成田安食線です。この計画に対して、千葉県教育委員会では道路建設予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いを、千葉県土木部道路建設課をはじめ、関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりました。その結果、路線変更が困難であるため工事区域内に所在する遺跡について、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講じることになりました。

発掘調査は、千葉県教育委員会の指導のもと、財団法人千葉県文化財センターが実施することになり、昭和55年度から調査を開始しました。栄町に所在する9遺跡の調査報告についてはすでに、『主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅宅地関連事業)地内埋蔵文化財調査報告書』として報告してありますが、このたび所収した上福田13号墳ほか6遺跡は、昭和58年度から行ってきた成田市に所在するもので『主要地方道成田安食線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』に次ぐものであります。

発掘調査では、多くの遺構を検出しましたが、上福田13号墳では石室が完全な姿で発見されました。この石室は調査後に関係各位の努力により保存されることになり、より一層この地域の古墳文化を考えるうえで重要な資料を呈示することができました。

本書が学術的な資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のために広く一般の方々に活用されれば幸いです。

終わりに、千葉県教育委員会及び成田市教育委員会、千葉県土木部・成田土木事務所の御指導、御助言に御礼を申し上げるとともに、酷寒・酷暑のなかで調査に尽力された調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成5年3月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 奥山 浩

本文目次

序 文

凡 例

第1章 調査経緯	1
1. 調査の経過と概要	1
2. 遺跡の位置と環境	3
3. 周辺の遺跡	4
4. 遺跡の調査概要	6
第2章 検出遺構	10
1. 上福田和田谷津遺跡	10
2. 上福田保町遺跡	13
3. 仲兵遺跡	14
4. 下福田稻荷原遺跡	15
5. 上福田13号墳	18
6. 松崎播磨遺跡	27
7. 烏内遺跡	32
第3章 出土遺物	35
1. 古墳時代以降の遺物	35
2. 縄文土器	47
3. 石 器	68
第4章 ま と め	69
1. 遺 物	69
2. 遺 構	76
3. 房総の終末期方墳	79
4. 結 語	84
別 表	87
図 面	
図 版	

挿 図 目 次

Fig. 1	遺跡の位置と周辺遺跡	2	Fig. 29	上福田保町遺跡出土泥めんこ	36
Fig. 2	龍角寺岩屋古墳墳丘測量図	4	Fig. 30	上福田13号墳出土土器	37
Fig. 3	龍角寺所用軒先瓦拓影	5	Fig. 31	松崎播磨遺跡 SI-08出土瓦	38
Fig. 4	路線と調査遺跡(1)	6	Fig. 32	松崎播磨遺跡 SI-11出土須恵器杯と土師器杯	40
Fig. 5	仲兵遺跡 確認調査状況図	7	Fig. 33	松崎播磨遺跡出土土製支脚	42
Fig. 6	路線と調査遺跡(2)	8	Fig. 34	松崎播磨遺跡 遺構外出土土器	43
Fig. 7	路線と調査遺跡(3)	9	Fig. 35	烏内遺跡 SK-533出土銭貨拓影図	44
Fig. 8	上福田和田谷津遺跡 溝実測図	11	Fig. 36	上福田和田谷津遺跡出土縄文土器実測図	46
Fig. 9	上福田保町遺跡 SI-01実測図	13	Fig. 37	上福田保町遺跡出土縄文土器実測図	48
Fig. 10	仲兵遺跡 基本土層図	14	Fig. 38	仲兵遺跡出土縄文土器実測図	50
Fig. 11	下福田稲荷原遺跡 SX-03実測図	16	Fig. 39	下福田稲荷原遺跡出土縄文土器実測図	52
Fig. 12	下福田稲荷原遺跡 SK-01実測図	16	Fig. 40	上福田13号墳出土縄文土器実測図	53
Fig. 13	下福田稲荷原遺跡 SB-01実測図	17	Fig. 41	松崎播磨遺跡出土縄文土器実測図(1)	55
Fig. 14	上福田13号墳 石材検出状況(南東から)	19	Fig. 42	松崎播磨遺跡出土縄文土器実測図(2)	57
Fig. 15	上福田13号墳 旧表土層上面確認状況(南東から)	20	Fig. 43	松崎播磨遺跡出土縄文土器実測図(3)	58
Fig. 16	上福田13号墳 石室後方裏込め土層(北から)	21	Fig. 44	烏内遺跡出土縄文土器実測図(1)	60
Fig. 17	上福田13号墳 石室後方掘形土層(北から)	21	Fig. 45	烏内遺跡出土縄文土器実測図(2)	61
Fig. 18	上福田13号墳 石室掘形内玄室と羨道部境土層	22	Fig. 46	烏内遺跡出土縄文土器実測図(3)	63
Fig. 19	上福田13号墳 石室天井石(玄室内)	24	Fig. 47	烏内遺跡出土縄文土器実測図(4)	64
Fig. 20	上福田13号墳 石室側壁の目地に充填された土	24	Fig. 48	烏内遺跡出土縄文土器実測図(5)	66
Fig. 21	上福田13号墳 石室天井石実測図(玄室内)	25	Fig. 49	烏内遺跡出土縄文土器実測図(6)	67
Fig. 22	上福田13号墳 周溝内土器出土状況(東から)	26	Fig. 50	飛鳥の土器と成田安食線出土土器の法量比較	70
Fig. 23	松崎播磨遺跡 確認調査状況図	28	Fig. 51	手捏土器器種分類図	74
Fig. 24	松崎播磨遺跡 石器出土状況図	29	Fig. 52	上福田13号墳周辺の古墳	79
Fig. 25	松崎播磨遺跡 竪穴住居跡平面図(1)	30	Fig. 53	印旛沼周辺の終末期古墳と古代寺院位置図	80
Fig. 26	松崎播磨遺跡 SI-11カマド実測図	31	Fig. 54	終末期方墳の分布	82
Fig. 27	松崎播磨遺跡 竪穴住居跡平面図(2)	32	Fig. 55	畿内産土師器の分布	82
Fig. 28	上福田和田谷津遺跡 SI-01出土瓦実測図	35			

別 表

1 竪穴住居跡一覧表

2 古墳時代以降の土器一覧表

3 土製品一覧表

原色図版

巻首図版	上福田13号墳石室全景（南東から）
COLOR PLATE	1 1. 上福田13号墳全景（上空から） 2. 上福田13号墳石室内
	2 1. 上福田13号墳出土土器 2. 畿内産土師器模倣土器

図版目次

P L.

1	航空写真	空からみた成田安食線周辺の地形(1:10,000)
2	上福田和田谷津遺跡	1.確認調査状況（北から） 2.遺構発掘状況（北から） 3.遺構発掘状況（北から）
3	上福田和田谷津遺跡 SB-01	1.全景（北から） 2.掘形土層断面（東から） 3.掘形土層断面（東から）
4	上福田和田谷津遺跡 SB-02	1.全景（北から） 2.掘形土層断面（東から） 3.掘形土層断面（東から）
5	上福田和田谷津遺跡 SI-01・SI-02	1.SI-01全景（南東から） 2.SI-02全景（南から） 3.SI-01カマド周辺遺物出土状況（東から）
6	上福田保町遺跡	1.遺構発掘状況（南から） 2.遺構発掘状況（東から）
7	上福田保町遺跡 SI-01	1.全景（東から） 2.土製鎌出土状況（北東から） 3.土製鋤先・鎌出土状況（北東から） 4.土製玉出土状況（西から）
8	上福田保町遺跡	1.遺構検出状況（南から） 2.縄文土器出土状況（南西から） 3.遺構検出状況（南東から）
9	上福田保町遺跡	1.SX-02検出状況（西から） 2.SK-01検出状況（南から） 3.先土器時代石器出土状況（南から）
10	仲兵遺跡	1.発掘前（北西から） 2.確認調査状況（南から） 3.SI-01発掘状況（南から）
11	仲兵遺跡 SI-01	1.SI-01全景（南東から） 2.カマド袖断面（南から） 3.カマド掘形（南から）
12	下福田稻荷原遺跡	1.遺構全景（北から） 2.遺構調査状況（北から） 3.遺構調査状況（南から）
13	下福田稻荷原遺跡	1.SX-02全景（西から） 2.SX-02遺物出土状況（北西から） 3.SI-01検出状況（東から）
14	下福田稻荷原遺跡	1.SI-02全景（南から） 2.SK-01全景（北東から） 3.SI-03・SI-04全景（南西から）
15	下福田稻荷原遺跡	1.SI-05検出状況（東から） 2.SI-06全景（北西から） 3.SI-07検出状況（北西から）
16	下福田稻荷原遺跡	1.塚（SX-01）全景（南東から） 2.庚申塔近景（南東から） 3.塚（SX-01）断面（北東から）
17	上福田13号墳	1.発掘前（南から） 2.発掘前（西から） 3.伐採前（北から）
18	上福田13号墳	1.表土除去後（南から） 2.表土除去後（西から） 3.表土除去後（南西から）

- 19 上福田13号墳 1.北側周溝(南西から) 2.西側周溝(南東から)
3.西側周溝近景(南東から)
- 20 上福田13号墳 1.西内側周溝(南東から) 2.東内側周溝(北西から)
3.北外側周溝(南西から)
- 21 上福田13号墳 1.墳丘盛土断面(南東から) 2.墳丘盛土断面(西から)
3.石室掘形(北西から)
- 22 上福田13号墳 1~3.石室掘形全景(上空から)
- 23 上福田13号墳 1.前庭部土層断面(南東から) 2.前庭部整地層断面(南から)
3.石室掘形土層断面(南西から)
- 24 上福田13号墳 1.石室掘形全景(北西から) 2.天井石検出状況(南西から)
3.天井石検出状況(南から)
- 25 上福田13号墳 1.天井石被覆土層断面(東から) 2.石室裏込め土層断面(南東から)
3.石室裏込め土層断面(南西から)
- 26 上福田13号墳 1.石室全景(南東から) 2.石室前庭部全景(南東から)
3.前庭部遺物出土状況(南から)
- 27 上福田13号墳 1.羨道部全景(南東から) 2.羨道部側壁部分(南から)
3.羨道部側壁部分(東から) 4.羨道部床面(南東上から)
- 28 上福田13号墳 1.玄門(石室内から) 2.玄室床面(石室奥から)
3.玄室西側壁(東から)
- 29 上福田13号墳 1.玄室奥壁(玄門から) 2.玄室奥床面(玄室手前から)
3.玄室西側壁部分(北東から)
- 30 上福田13号墳 1.石室養生作業完了(西から) 2.天井石養生作業(南から)
3.天井石養生完了(北西から) 4.墳丘盛土状況(西から)
5.前庭部埋め戻し状況(南東から) 6.前庭部埋め戻し完了(西から)
7.墳丘盛土終了(北から)
- 31 松崎播磨遺跡 1.南東遺構全景(北西から) 2.遺構全景(南東から)
- 32 松崎播磨遺跡 1.SI-02全景(南東から) 2.SI-03全景(南東から)
3.SI-05全景(南から) 4.SI-06全景(南西から)
5.SI-09全景(南東から) 6.SI-10全景(北西から)
7.SI-08全景(南東から) 8.SI-01全景(南東から)
- 33 松崎播磨遺跡 1.SI-15全景(南から) 2.SI-14全景(南から)
3.SI-4全景(南西から) 4.SI-12全景(南東から)
5.SI-11全景(南東から) 6.SI-16全景(南東から)
7.SI-13全景(南東から) 8.SI-07全景(南東から)
- 34 松崎播磨遺跡 1.SI-04馬具出土状況(東から) 2.SI-16遺物出土状況遠景(南東から)
3.SI-06遺物出土状況(南西から) 4.SI-16遺物出土状況近景(南東から)
5.SI-11遺物出土状況(南から) 6.SX-02全景(西から)
7.SX-02土層断面(南東から) 8.SX-01土層断面(南西から)
- 35 烏内遺跡 1.西側発掘前(南東から) 2.東側発掘前(南東から)
3.西側調査状況(対岸 北東から)
- 36 烏内遺跡 1.西側遺構全景(南東から) 2.SI-538全景(南東から)
3.西側遺構全景(北西から)
- 37 烏内遺跡 1.SI-520調査状況(西から) 2.SI-521全景(南東から)
3.西側発掘状況(北西から)

- 38 烏内遺跡 1.東側発掘状況(北から) 2.SI-536発掘状況(北東から)
3.SI-534発掘状況(北西から)
- 39 烏内遺跡 1.東側発掘状況(南東から) 2.東側発掘状況(北西から)
- 40 烏内遺跡 1.東側発掘状況(北から) 2.SK-523土層断面(北から)
3.SK-517土層断面(南西から)
- 41 烏内遺跡 1.SK-533人骨出土状況(北東から) 2.SK-533発掘状況(北から)
3.SK-542全景(西から)
- 42 土器 上福田和田谷津遺跡 SI-01(1~13)
- 43 土器・土製品 上福田和田谷津遺跡 SI-02(1~4 土器、6~11 土製品 12 石製品)
- 44 土器 上福田保町遺跡 SI-01(1~8)
- 45 土製品 上福田保町遺跡 SI-01(9~45)
- 46 土製品・土器 上福田保町遺跡 SI-01(46~52) 仲兵遺跡 SI-01(1・2)
- 47 土器・土製品 下福田稻荷原遺跡 土器(1~8) 手捏ね土器(9~23)
- 48 土製品 下福田稻荷原遺跡 土製玉(24) 手捏ね土器(25~46)
- 49 土器 上福田13号墳 前庭部(1・4~8) 周溝内(2・3) 墳丘(9) 石室内流土中(10)
- 50 土器 松崎播磨遺跡 SI-01(1~3) SI-02(4~14)
- 51 土器 松崎播磨遺跡 SI-03(1~6) SI-04(7~11) SI-05(12・13)
- 52 土器 松崎播磨遺跡 SI-06(1~4) SI-07(5・6)
- 53 土器 松崎播磨遺跡 SI-08(1~12) SI-09(13) SI-10(14・15)
- 54 土器 松崎播磨遺跡 SI-11(1~10)
- 55 土器 松崎播磨遺跡 SI-12(1~9)
- 56 土器 松崎播磨遺跡 SI-13(1~3) SI-14(4) SI-16(16~19)
- 57 土器 松崎播磨遺跡 SI-16(1~15)
- 58 金属製品・土製品 松崎播磨遺跡 金属製品(1~7) 土製品(8~13)
- 59 土器・金属製品 烏内遺跡 SI-520(1) SI-534(2~7) SI-536(8~10) SK-523(11)
- 60 須恵器 松崎播磨遺跡(1~11) 烏内遺跡(12・13)
- 61 縄文土器 上福田和田谷津遺跡 上福田保町遺跡
- 62 縄文土器 仲兵遺跡 下福田稻荷原遺跡
- 63 縄文土器 上福田13号墳 松崎播磨遺跡(1)
- 64 縄文土器 松崎播磨遺跡(2) 松崎播磨遺跡(3)
- 65 縄文土器 烏内遺跡(1) 烏内遺跡(2)
- 66 縄文土器 烏内遺跡(3) 烏内遺跡(4)
- 67 石器・墨書土器 ほか石器(1~5) 墨書土器(6~9) 松崎播磨遺跡遺構外出土土器(10・11)

図 面 目 次

- PLAN 1 成田安食線周辺の地形(1:10,000)
- PLAN 2 上福田和田谷津遺跡 遺構全体図(1:500)
- PLAN 3 上福田和田谷津遺跡 SB-01実測図(1:80)
- PLAN 4 上福田和田谷津遺跡 SB-01実測図(1:80)
- PLAN 5 上福田和田谷津遺跡 SI-01実測図(1:80)
- PLAN 6 上福田和田谷津遺跡 SI-02実測図(1:80)
- PLAN 7 上福田保町遺跡 遺構全体図(1:500)
- PLAN 8 上福田保町遺跡 SI-01実測図(1:40)

- PLAN 9 上福田保町遺跡 S D-01実測図(1:300)
- PLAN 10 上福田保町遺跡 S X-01実測図(1:0)
- PLAN 11 上福田保町遺跡 S K-01実測図(1:80)
- PLAN 12 上福田保町遺跡 先土器時代石器出土状況図(1:40)
- PLAN 13 仲兵遺跡 全体図
- PLAN 14 仲兵遺跡 S I-01実測図(1:40)
- PLAN 15 下福田稲荷原遺跡 遺構全体図(1:500)
- PLAN 16 下福田稲荷原遺跡 S X-02実測図(1:80)
- PLAN 17 下福田稲荷原遺跡 S I-01実測図(1:80)
- PLAN 18 下福田稲荷原遺跡 S X-02遺物出土状況図(1:20)
- PLAN 19 下福田稲荷原遺跡 S I-02実測図(1:80)
- PLAN 20 下福田稲荷原遺跡 S I-03・S I-04実測図(1:80)
- PLAN 21 下福田稲荷原遺跡 S X-05実測図(1:80)
- PLAN 22 下福田稲荷原遺跡 S I-06実測図(1:80)
- PLAN 23 下福田稲荷原遺跡 S X-07実測図(1:20)
- PLAN 24 下福田稲荷原遺跡 塚(S X-01)実測図(1:50)
- PLAN 25 上福田13号墳 位置図(1:500)
- PLAN 26 上福田13号墳 発掘前墳丘測量図(1:400)
- PLAN 27 上福田13号墳 墳丘測量図(1:200)
- PLAN 28 上福田13号墳 表土および周溝南北土層断面図(1:100)
- PLAN 29 上福田13号墳 表土および周溝東西土層断面図(1:100)
- PLAN 30 上福田13号墳 石室後方掘形土層断面図(1:40)
- PLAN 31 上福田13号墳 墳丘盛土および石室掘形土層断面図1(1:100)
- PLAN 32 上福田13号墳 墳丘盛土および石室掘形土層断面図2(1:100)
- PLAN 33 上福田13号墳 石室掘形平面図(1:100)
- PLAN 34 上福田13号墳 石室前庭部土層断面図(1:40)
- PLAN 35 上福田13号墳 掘形南北土層断面図2(1:40)
- PLAN 36 上福田13号墳 石室天井石および掘形裏込東西断面図(1:40)
- PLAN 37 上福田13号墳 閉塞石実測図
- PLAN 38 上福田13号墳 前庭部および遺物出土状況図(1:40)
- PLAN 39 上福田13号墳 横穴式石室実測図(1:40)
- PLAN 40 上福田13号墳 石室保存盛土状況図(1:400)
- PLAN 41 松崎播磨遺跡 全体図(1:500)
- PLAN 42 松崎播磨遺跡 竪穴住居跡実測図(1)(1:80)
- PLAN 43 松崎播磨遺跡 竪穴住居跡実測図(2)(1:80)
- PLAN 44 松崎播磨遺跡 SI-16遺物出土状況図(1:80)
- PLAN 45 鳥内遺跡 全体図(1:500)
- PLAN 46 鳥内遺跡 遺構実測図(1) S I-519 S I-538 S I-512 S D-508(1:80)
- PLAN 47 鳥内遺跡 遺構実測図(2) S I-520 S I-521(1:80)
- PLAN 48 鳥内遺跡 遺構実測図(3) S D-504 S I-536 S I-534 S D-508(1:80)
- PLAN 49 鳥内遺跡 遺構実測図(4) S D-506 S D-508(1:80)
- PLAN 50 鳥内遺跡 遺構実測図(5) S K-523 S K-515 S K-514 S K-513 S K-517(1:80)
- PLAN 51 鳥内遺跡 遺構実測図(6) S K-533 S K-542 S K-530(1:40)

凡 例

1. 本書は、千葉県土木部（成田土木事務所）による主要地方道成田安食線道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告である。
2. 発掘調査および整理作業の実施は、千葉県土木部の依頼により、千葉県教育委員会の指導を受けて、財団法人千葉県文化財センターが行った。
3. 本書に所収した遺跡は、昭和61年度に調査した松崎播磨遺跡、昭和61・62年度に調査した上福田和田谷津遺跡、昭和62・平成元年度に調査した上福田13号墳、昭和63年度に調査した烏内遺跡・上福田保町遺跡・下福田稻荷原遺跡、平成2年度に調査した仲兵遺跡である。
4. 遺跡コードは、工業技術院が日本工業規格（JIS）として官報告示した成田市（12211）と財団法人千葉県文化財センター遺跡コード（烏内遺跡=028、松崎播磨=041、上福田和田谷津=043、上福田13号墳=046、上福田保町遺跡=050、下福田稻荷原遺跡=051、仲兵遺跡=052）を使用した。
5. 本書は、「成田市烏内遺跡」に続く主要地方道成田安食線道路改良事業埋蔵文化財調査報告書の第2冊目にあたる。
6. 発掘調査は下記の職員により行われた。

調査部長 白石竹雄、鈴木道之助、堀部昭夫、天野努
部長補佐 根本 弘、岡川宏道、古内 茂、阪田正一
班 長 矢戸三男、藤崎芳樹
調査研究員 郷堀英司、麻生正信、永沼律朗、宮 重行、石橋宏克
7. 発掘調査において、上野純司、栗田則久他の協力を得た。
8. 整理作業・報告書刊行作業は、昭和58年4月1日から平成4年11月30日にかけて、下記の職員により行われた。

調査部長 堀部昭夫、天野 努
部長補佐 阪田正一、佐久間豊、深澤克友
班 長 藤崎芳樹、宮 重行、三浦和信
主任技師 永沼律朗、岡田誠造、小林信一
9. 整理作業において、萩原恭一、加納 実、高柳圭一、矢本節朗の協力を得た。
10. 本書の編集は永沼が行った。なお原稿は、石器が矢本、縄文土器が加納・高柳、それ以外は永沼が執筆した。
11. 鉄器については、国立歴史民俗博物館 永嶋正春氏に御教授と御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。
12. 発掘調査から本書の刊行にいたるまで、千葉県土木部（成田土木事務所）、千葉県教育庁生涯学習部文化課、成田市教育委員会の関係各位をはじめ、多くの方々に御指導、御助言をいただいた。深く感謝の意を表します。
13. 遺構番号は、調査時の番号をそのまま使用し、その前に遺構の性格を示す下記の記号を付けた。

SB=掘立柱建物跡、SD=溝、SI=竪穴住居跡、SK=土壌、SX=その他の遺構。
14. 本書におけるレベル高はすべて海拔を表し、方位は真北を示す。

第1章 調査経緯

1 調査の経過と概要

「新東京国際空港」からは、連日世界各国に向けて飛行機が飛び立ち、また多くの飛行機が外国から飛来している。「成田」は、今や日本の表玄関になったのである。

しかしそれに伴い、自然環境に恵まれていた周辺地域は大きく変わってきた。国際空港ができる前までは、「成田山新勝寺」の門前町として知られていたが、現在は空港とその関連施設に代表される新しい建物が立ち並ぶ新しい街に大きく変わりつつある。

この新しい街周辺の地域整備の一つとして千葉県土木部道路建設課により**主要地方道成田安食線は、成田市寺台から印旛郡栄町酒直に至るバイパス**として計画された。建設の目的は、空港関連および首都圏のベッドタウンである成田ニュータウン内への交通量を緩和することと、新東京国際空港への交通路を確保するという公共性の高いものである。

この道路が計画された印旛沼東岸の成田市、栄町はその恵まれた自然環境のもと埋蔵文化財が数多く所在する地域でもある。このため成田安食線の建設に先立ち、千葉県教育委員会では千葉県土木部道路建設課と幾度となく慎重な協議をかさねた。その結果路線内に所在する埋蔵文化財については記録保存の措置がとられることになり、その調査機関として財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は昭和55年度から開始され、栄町に所在する9遺跡についてはすでに調査が終了し、報告書も刊行されている⁽¹⁾。また、昭和58年度に発掘調査が終わった成田市烏内遺跡の路線中央部にあたる部分も報告書が刊行されている⁽²⁾。今回の報告はこれらの報告書に続くものであり、主要地方道成田安食線としては最後の報告書になる。

発掘調査は、続けて行ったのではなく、毎年数か月ずつ実施した。今回報告の遺跡では多くの遺構を確認したが、なかでも上福田13号墳は、遺物こそ少ないが特筆に値する古墳であった。成田安食線の用地確定の段階では、上福田13号墳は確認されていなかった。しかし、発掘調査が進むと、この古墳が方墳でしかもほぼ完全な横穴式石室が遺存していることが確認された。このため、本来古墳を大きく削りゆるやかなスロープにするはずだった道路工事を法切りの角度を変えることによって石室が壊れないようにし、墳丘の一部は道路になったものの石室が保存されることになったことは、当初予定されていなかったことであり、事業計画の一部設計変更を了承された道路建設課にお礼を申し上げるとともに埋蔵文化財保護に対する誠意に対してここに感謝の意を表したい。また今後は、より一層埋蔵文化財の保護と活用が図られるよう望むものである。

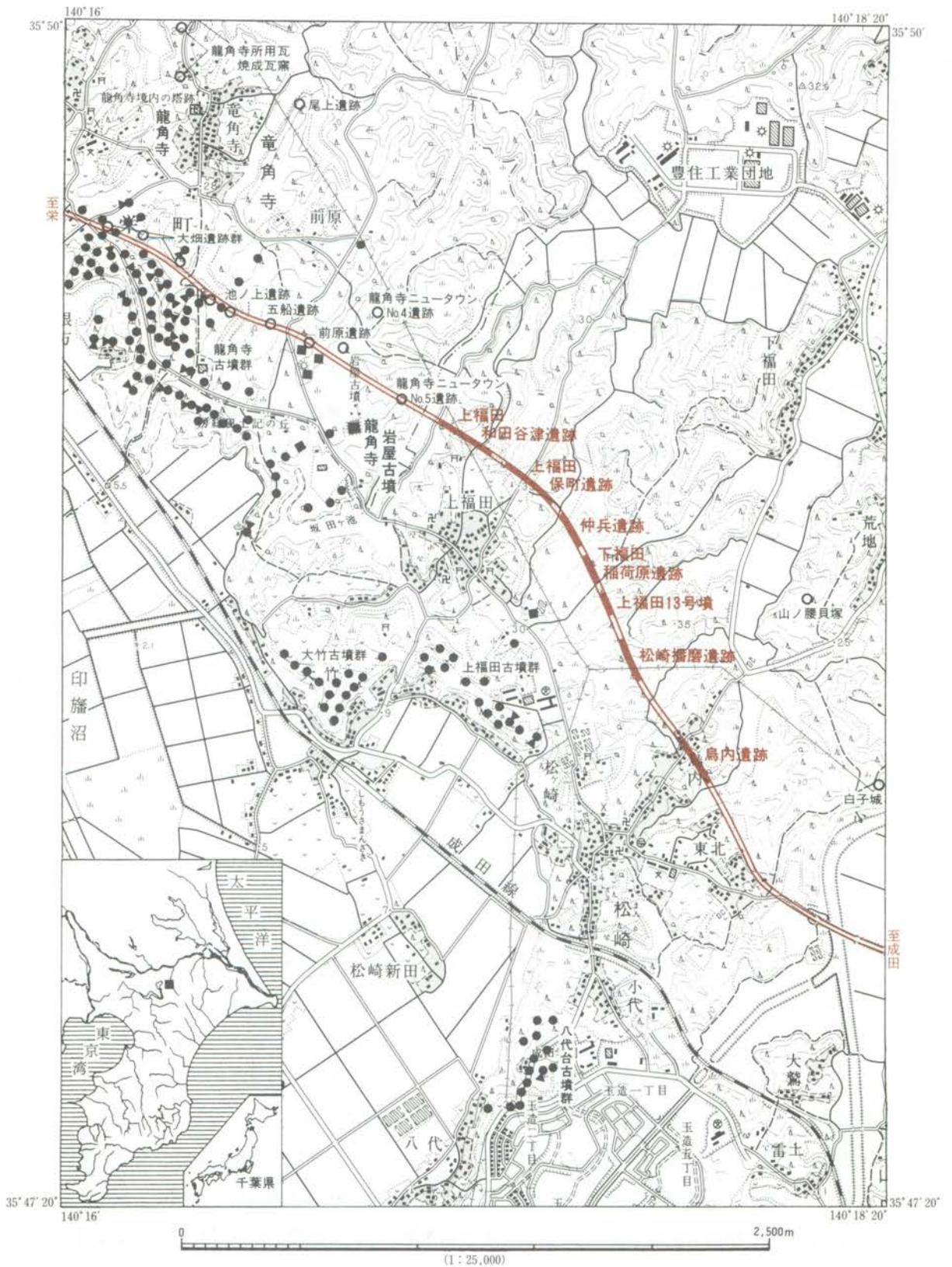


Fig.1 遺跡の位置と周辺地形図

2 遺跡の位置と環境 (Fig.1)

調査地は、千葉県北部、印旛沼北東方の台地上に位置する。

千葉県には大型の古墳は少ないが、中小規模の古墳はかなり分布している。県内で古墳が特に集中している地域は、東京湾に面した千葉市から市原市・袖ヶ浦市・木更津市・富津市、それと芝山地区から利根川にかけての地域、さらに印旛沼・手賀沼周辺である。このうち**印旛沼の周辺**には、大型古墳はないものの中小古墳が多数所在している。なかでも今回の調査地点の北方地域には、千葉県内では最大規模の群集墳「龍角寺古墳群」が所在する。**龍角寺古墳群**は、古墳時代後期を中心とした時期の群集墳であるが、なかには後述の日本最大の終末期方墳である岩屋古墳が所在する(以下**龍角寺岩屋古墳**とよぶ)。千葉県は、この印旛沼北西方の自然環境に恵まれ遺存状態のよい「龍角寺古墳群」と隣接する白鳳時代創建の「龍角寺」周辺を千葉県の風土記の丘、「千葉県立房総風土記の丘」と定めた。

しかし、最近この地域にも、新東京国際空港と東京のベッドタウンの一部として開発の波が押し寄せてきた。自然環境に恵まれ、首都東京に近く、しかも新東京国際空港が隣接しているため、急激に大規模な開発事業が行れるようになった。

新東京国際空港ができる前までは緑の多い土地であったが、険しい山がほとんどない台地の上は、あちらこちらに大規模な住宅団地や工業団地が造成されている。また、緑の山は山砂採取のためあちらこちらで削られ、緑がだんだん失われてきつつある。そのため、これらの開発と埋蔵文化財の保護との調和を図る必要性も増えてきているのである。

西に印旛沼、北に利根川が流れる調査地のある台地は、印旛沼に面する地域が高く、多くの中小河川は、利根川の支流**根木名川**に流れ込む。そのため、谷は北および東に向かって開く。根木名川は、新東京国際空港に近い富里町根木名付近に源を発し成田市内を北流して台地の北東方で利根川に続いている。

印旛沼に近い台地の端の集落内を走っている現道は狭く、両側には住宅があり拡張できない。このため、今回計画された成田安食線は、根木名川に続く谷が細かく入り組んでいる台地の中央部を北東から南西に貫いている。台地中央部であるが台地と谷の比高はかなりあり、計画路線は台地と谷を交互に通過することになる。そのような経緯のもとに、今回の調査地点は**印旛沼と根木名川に挟まれた台地上**で、細かくみると龍角寺古墳群と小橋川に挟まれた地域の計画路線内で遺跡の所在が確認されている台地部分となったのである。

今回報告の遺跡は、路線での調査ではあるもののほぼ同一台地上に位置し、時期的にも古墳時代後期から奈良時代を中心とした時期の遺構が主である。しかし、一番南の烏内遺跡だけが他の遺跡とは異質な遺跡である。烏内遺跡は古墳時代後期から奈良時代の遺構もあるものの、縄文時代と中世の遺構もかなり検出されているのである。

3 周辺の遺跡 (Fig.1)

印旛沼東岸の本遺跡群周辺は、数多くの遺跡が所在する地域として古くから知られている。遺跡の北西2kmの栄町には、史跡龍角寺岩屋古墳⁽³⁾をはじめとする大小112基の古墳によって構成されている龍角寺古墳群がある。成田安食線はこの古墳群の北側を通り、その路線内に所在する9遺跡が調査された。詳細については報告書を参照されたいが、大規模な掘立柱建物跡が検出された大畑Ⅰ遺跡⁽⁴⁾、唐三彩・畿内産土師器などを出土した向台遺跡⁽⁵⁾は、この地域の歴史展開を考えるうえできわめて重要な遺跡である。尾上遺跡⁽⁶⁾では、かなり大規模な方形の溝を巡らす遺構が発見されている。溝は深さ2m～5mほどあり、掘り上げた土は溝の外に積まれ土塁状になっており、殯に関係した遺構ではないかと推測されている。

縄文時代早期の遺跡としては、三戸・田戸式のいわゆる沈線文系土器を出土した、路線内の池上Ⅰ・Ⅱ遺跡⁽⁷⁾がある。中期では烏内遺跡と谷を隔てて立地する宝田山ノ腰貝塚⁽⁸⁾のほか、龍角寺ニュータウンN04・N05遺跡⁽⁹⁾でも遺構が発見されている。弥生時代の遺跡は根木名川水系に關戸遺跡⁽¹⁰⁾が調査され、あじき台遺跡⁽¹¹⁾でも後期の住居跡が20軒検出されている。この地域の古墳

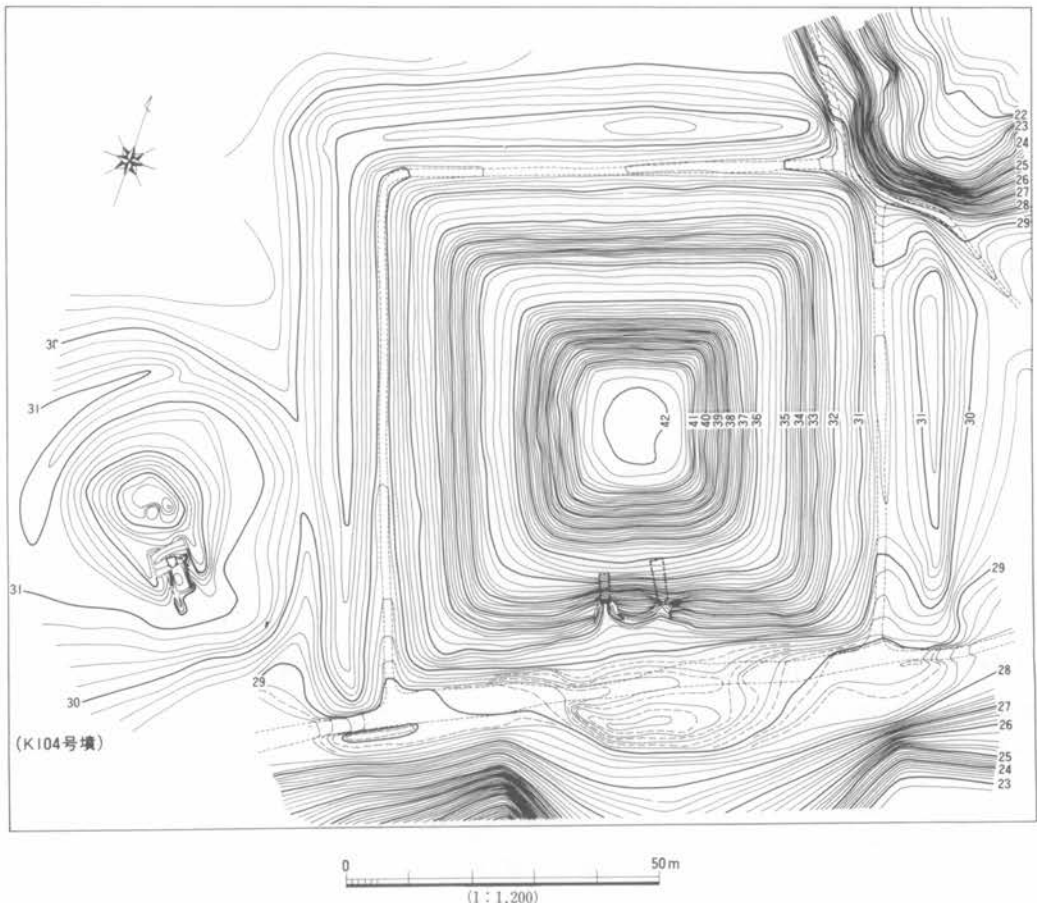


Fig.2 龍角寺岩屋古墳墳丘測量図 (報告書の図を改図転載)

で前期にさかのぼるものは確認されていないが、中期の古墳は印旛沼に近い台地の端に造られていることが多い。それとは逆に古墳時代後期から終末期にかけての古墳は利根川に続く谷に面した台地の端に造られている。古墳時代の集落は、龍角寺古墳群北側の前原Ⅰ・五反歩遺跡¹²で中期の住居跡が調査され、後期の集落も大畑と向台遺跡で確認されている。奈良・平安時代では、大畑Ⅰ・Ⅱ遺跡と向台遺跡を含めた一帯が、先に述べたような遺構や遺物から、**埴生郡衙の推定地**として注目されている。中近世城館跡として小川橋を望む位置に**白子城**が位置する。

今回報告の遺跡は、縄文時代の遺物も多いが、古墳時代以降の遺構・遺物が主である。それらの遺構の性格を考えるには、近くの遺跡のなかでも龍角寺古墳群と終末期方墳の龍角寺岩屋古墳、そして埴生郡衙の推定地や龍角寺が重要である。それらについて若干紹介しておく。

埴生郡衙推定地

龍角寺古墳群の北方の大畑遺跡と向台遺跡を中心とした地域が、埴生郡衙跡ではないかと考えられている。この遺跡からは、規則正しく並んだ多くの掘立柱建物跡が確認され、唐三彩の陶枕・墨書土器等が出土している。

龍角寺岩屋古墳 (Fig.2)

龍角寺古墳群は、120基以上の古墳からなるが、そのなかの龍角寺岩屋古墳は、三段築成で一辺80mの方墳である。終末期の方墳としては日本一の規模である。石室は南側に2基並んでいる。石室は古くから開口しており、出土遺物は知られていない。石室材は、今回報告の上福田13号墳と同じ貝化石を多量に含む砂岩であることも特徴の一つである。

龍角寺

龍角寺は、龍角寺古墳群の北方約600mの地点に位置する。数度の発掘調査が行われており¹³、出土する軒先瓦の特徴は、大和山田寺の意匠文様と非常によく似た文様で、龍角寺が白鳳時代創建の古代寺院であることは明らかである。

また、このことから龍角寺の創建にあたっては山田寺と同様に、蘇我氏の影響によるものではないかという推測も呈示されている¹⁴。

今回報告の遺跡は、時期的なことから考えてもこれらの遺跡と同時期の遺構・遺物が多い。当然これらの遺跡間には非常に密接な関係があったと思われる。7世紀から8世紀にかけて、この地域は畿内の勢力と深く結びつき、それまでの古墳時代から新しい時代へと変化していったのである。今回報告の遺跡は、まさにそのような時期の遺跡なのである。

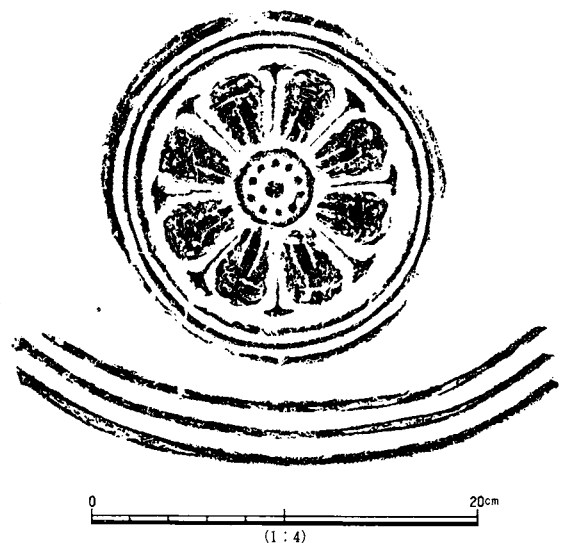


Fig.3 龍角寺所用軒先瓦拓影図

4 遺跡の調査概要

上福田和田谷津遺跡 (Fig.4)

上福田和田谷津遺跡は、成田市上福田字保町241-1を中心とした地域に所在する。確認調査は、昭和61年11月1日から同年11月30日の間に行い、本調査は翌年の9月1日から10月9日まで実施した。調査対象面積は7,000㎡であったが、確認調査の結果台地の北側では遺構は確認されず、南側の2,000㎡が本調査範囲になった。

今回の調査地点は、龍角寺や龍角寺岩屋古墳を含む龍角寺古墳群の隣接地であるが、間にはこの地域ではやや広めの谷が入り込み、遺跡の南西部には坂田ヶ池もあり、台地は分断されている。

上福田和田谷津遺跡は、今回の調査地点のなかでは一番北側に位置する。台地は南東側も根本名川から続く谷が入り込んでおり、決して広い台地ではない。谷を挟んだ対岸の北側の台地では龍角寺ニュータウンの調査により縄文時代中期の遺構が確認されている。また、西方の台地端には龍角寺岩屋古墳が、谷に面するようにして立地している。しかし、上福田和田谷津遺跡の北半分では確認調査の結果遺構は検出されず、遺構は南半分に片寄っている。遺構は古墳時代から奈良時代の移行期前後のものであり対岸の埴生郡衛跡と推定される遺跡に近い時期である。台地の南側に遺構が集中するのこの時期の特徴でもある。

標高は、約30m。水田面との比高は10mある。

上福田保町遺跡 (Fig.4)

上福田保町遺跡は、成田市上福田字宮前317-1を中心とした地域に所在する。調査対象面積は2,100㎡であるが、確認調査の結果1,670㎡が本調査対象地になった。発掘調査は、昭和63年12月5日から平成元年1月31日の間に確認調査と本調査を行った。

上福田保町遺跡の所在する台地は、半島状にのびる。遺跡は、台地の基部に近くやや広い地点に位置するが、その先の平坦面はかなり狭くなる。北方の上福田和田谷津遺跡とは谷で隔てられているが、谷は谷頭に近く同じ台地とみてもよいくらいである。遺構は、標高31～32mの地点に点在する。

確認調査では、先土器時代の石器が1点出土したので、調査区

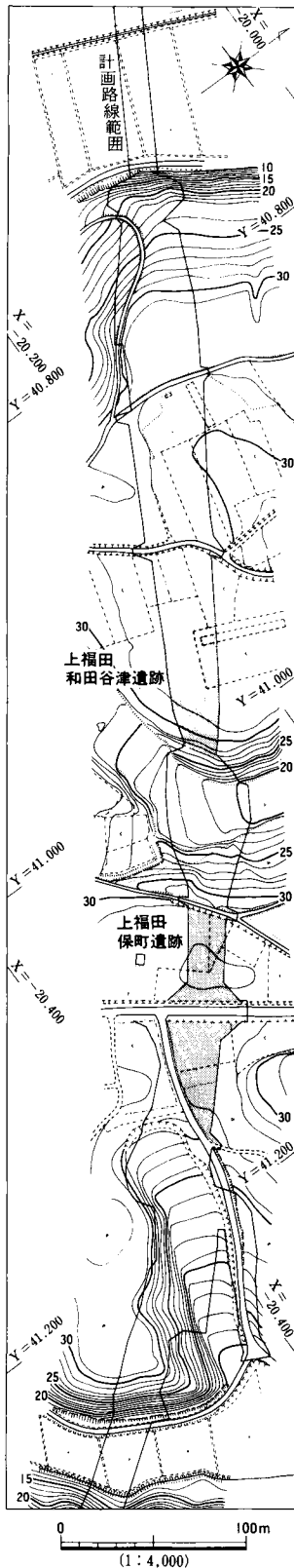


Fig.4 路線と調査遺跡 (1)

を広げたが他には出土しなかった。

また、台地の南端に近いところで、カマドの周辺から土製の鋏先・鎌が出土した古墳時代の竪穴住居跡を検出した。

仲兵遺跡 (Fig.5・6)

仲兵遺跡は、成田市上福田字仲兵489に位置する。発掘調査は、平成2年7月16日～同年9月7日に行った。仲兵遺跡も、北西側と南東側が谷で切られた平坦な台地である。上福田保町遺跡との間の谷は深く、幅も200mはある。上福田保町遺跡と仲兵遺跡の間の谷頭の台地には、今回報告の上福田地区では一番大きい方墳、上福田岩屋古墳が所在している。

遺跡の対象面積は、路線内の台地部分すべての3,700㎡であり、Fig. 5 のように調査区を設定して確認調査を実施した。発掘調査前には、地形的にみて路線内の他の調査地点と変わるところはなく、周辺の遺跡の状況から考えも遺構がかなり存在するものと考えていた。しかし、確認調査の結果、台地の北西斜面近くで竪穴住居跡が1軒しか確認できなかった。また、縄文時代前期の土器片が多数確認できたが、広い範囲に分布するものではなかった。周辺の遺構の検出状況から考えてこの台地に遺構がないとは考えられないが、調査地点が遺構密度の少ない部分であったと考えられる。

下福田稻荷原遺跡 (Fig.6)

下福田稻荷原遺跡は、成田市下福田字稻荷原731-2を中心にした地点に位置している。

発掘調査は、平成元年2月1日～同年3月29日まで実施した。対象面積は1,100㎡で、全域本調査を行った。先土器時代の遺物は発見できなかった。

下福田稻荷原遺跡も、北側と南側に谷が入り込んでいる。北側の仲兵遺跡との間の谷はやや深いものの、台地は幅は狭く接しており、南側の谷は谷頭に近いため浅く、かなり幅がある。台地は他の地点に比べるとやや広い。

遺跡の北側で手捏土器が多数出土した地点がある。明確な掘り込みは確認できなかったが、方形の掘り込みに上屋をもった遺構ではないかと考える。

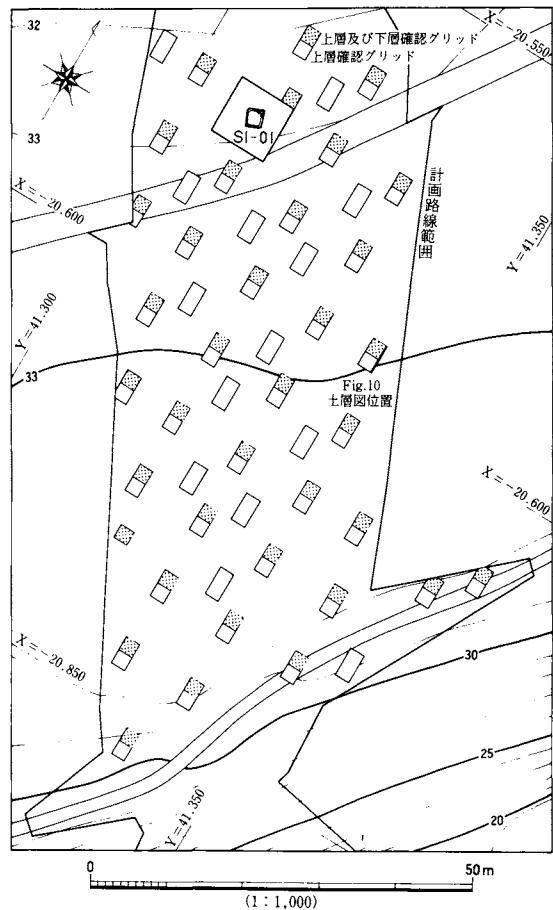


Fig.5 仲兵遺跡 確認調査状況図

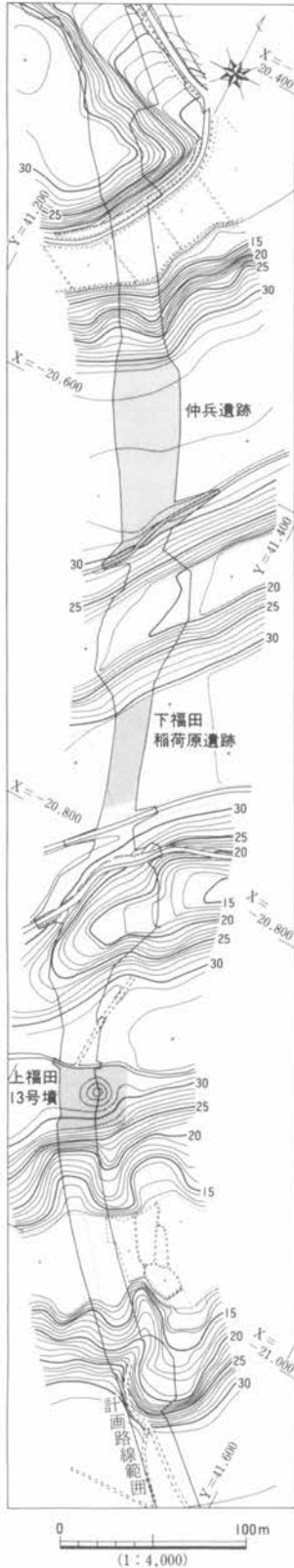


Fig.6 路線と調査遺跡 (2)

上福田13号墳 (Fig.6)

上福田13号墳は、成田市下福田字君作に所在する。発掘調査は、昭和62年10月12日～昭和63年1月30日と平成元年11月1日～平成2年1月30日までの2年度に分けて行われた。初年度には、墳丘と石室内の調査を行い、2年度目には石室の掘形と裏込めの調査を行い、石室保存のための養生作業および埋め戻し作業を行った。

下福田稲荷原遺跡と上福田13号墳の間の谷は、谷頭に近く浅いが、若干距離がある。上福田13号墳も他の調査地点同様に、北側と南側が谷に挟まれた狭い舌状台地に位置する。古墳は、台地のほぼ中央部から南側の急斜面の間に造られている。古墳の南側の谷は広く開けている。台地の中央には道が走っており、道の北側は松・檜が植林されている。

上福田13号墳は、成田安食線の路線決定の時点では確認されていなかった。それは、樹木とそれに絡みつくようにして繁茂していた草のためであろう。しかし、伐採・除草してみると、上福田13号墳の保存状況は非常によく、墳丘部分はほぼ完全な形をとどめているように観察できた。古墳は、幅50mほどの台地の南の端に接するように立地している。古墳南側の斜面は少し張り出しているようにも見られる。古墳の北側には山仕事用の道路が走っており、その部分は墳丘よりもかなり下がっていた。また、古墳の東側と西側も若干窪んでいた。谷に面する以外の墳丘の三方には道があるので、墳丘が改変されている可能性もあろうが現状を見る限り方墳であることが明かであった。

調査時の墳頂部の標高は約39mであった。古墳からの眺望は、南側は谷に面し、150m先に対岸の台地が見える。しかし、周囲の樹木がなかったとしても、遠くの広い平野は見渡せない。古墳は、根木名川から続く谷のかなり奥まった所に位置しているのである。

上福田13号墳のすぐ南西方にも方墳が所在する。しかし、近くでは、他に盛土が確認できる古墳はない。

松崎播磨遺跡 (Fig.7)

松崎播磨遺跡は、成田市松崎字播磨103-4を中心に所在した。発掘調査は昭和61年7月1日～同年10月31日まで行った。発掘調査面積は、対象地全域の3,000㎡である。確認調査で先土器時代の遺

物が1点出土したが、他には発見できなかった。本調査では、16軒の竪穴住居跡を確認した。

台地は根本名川からは一番奥、谷頭に近い所に位置する。台地は、印旛沼に近い県立成田園芸高等学校から続く舌状台地の先端に近い。台地の標高は他の地点同様に30~31m前後である。県立成田園芸高校は、かなり広い敷地に多数の建物と広い農場をもつが、それらを造る際には多数の古墳も失われたとの話も聞いている。おそらく、印旛沼に近い校舎やグラウンドのある地点には、多数の古墳が所在したのであろう。

上福田13号墳と松崎播磨遺跡の間の谷はかなり広く、幅も100mはある。

烏内遺跡 (Fig.7)

烏内遺跡は成田市松崎字烏内354-3他に位置する。発掘調査は、昭和63年4月1日~5月31日まで行った。烏内遺跡は、既に道路本体部分の発掘調査は済んでおり、今回の調査は歩道にあたる路線両端の幅の狭い地点である。面積は、550㎡である。先土器時代の遺物は出土していない。縄文土器が多数出土した。遺構としては、縄文時代の土壌・古墳時代と平安時代の竪穴住居跡、さらに中世の墓等を検出した。

烏内遺跡の所在する台地も、北側から入り込む谷のためかなり複雑な地形を呈している。松崎地区に源を発した川は、遺跡の北側を南西に入る谷津に流れ込み、松崎東北方面から伸びる細長い台地は、遺跡が立地する北東端部で八手状に複雑な地形を作り出しているのである。竪穴住居跡は、幅の狭い台地の平坦な部分を利用して建てられているが、谷が北東・南西・北西から入り込むため、平坦部は8の字を書いたようになっている。しかし、それでも根本名川の支流小橋川に面するわけではなく、すこし台地の中央部によっている。

台地の標高は30~33mで、現在の水田面との比高は12~13mある。平坦部である北西側と南西面とをつなぐ部分は竹林となっており、南側は畑地および林となっていた。

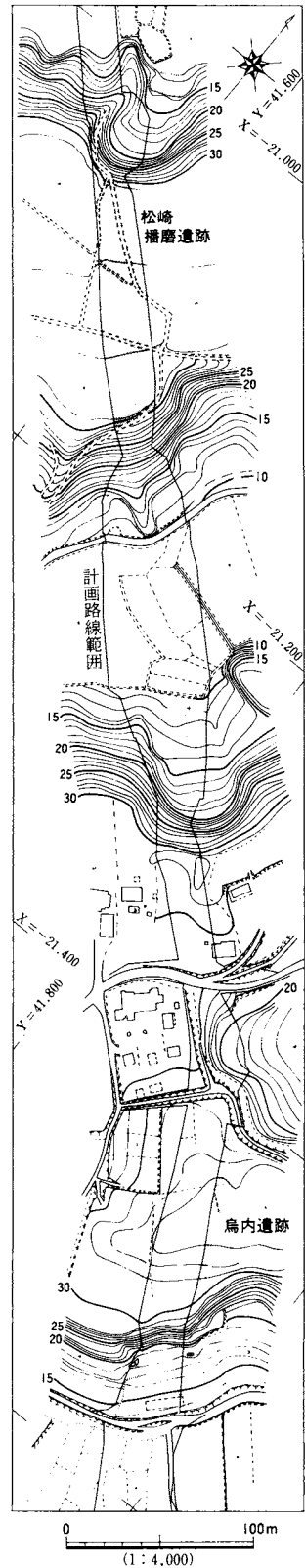


Fig.7 路線と調査遺跡 (3)

第2章 検出遺構

1 上福田和田谷津遺跡

先にも記したが、上福田和田谷津遺跡の確認調査は、路線内全域で行った。しかし、北側では遺構は確認できず、南側だけが本調査範囲になった。上福田和田谷津遺跡からは、掘立柱建物跡2棟・竪穴住居跡2軒それに溝が3条検出されている。先土器時代の確認調査も行ったが、遺物は発見できなかった。

SB-01 (PL.3, PLAN 3)

桁行3間、梁行2間の東西棟の掘立柱建物跡である。側柱の掘形は東西の中央のものが単独の円形で、深さは40cmである。側柱は、2本が組みとなった布堀である。柱を立てたと思われる部分は、円形ないし隅丸方形に一段深く掘り下げられている。深さは、深い部分で70cmある。覆土は、暗褐色土にごくローム粒子が混じる。土層からみると柱跡と思われる部分が確認できるが、必ずしも明確なものではない。柱間寸法は、狭いところで1.6m、広いところで2.2mぐらいと思われるが明確ではない。

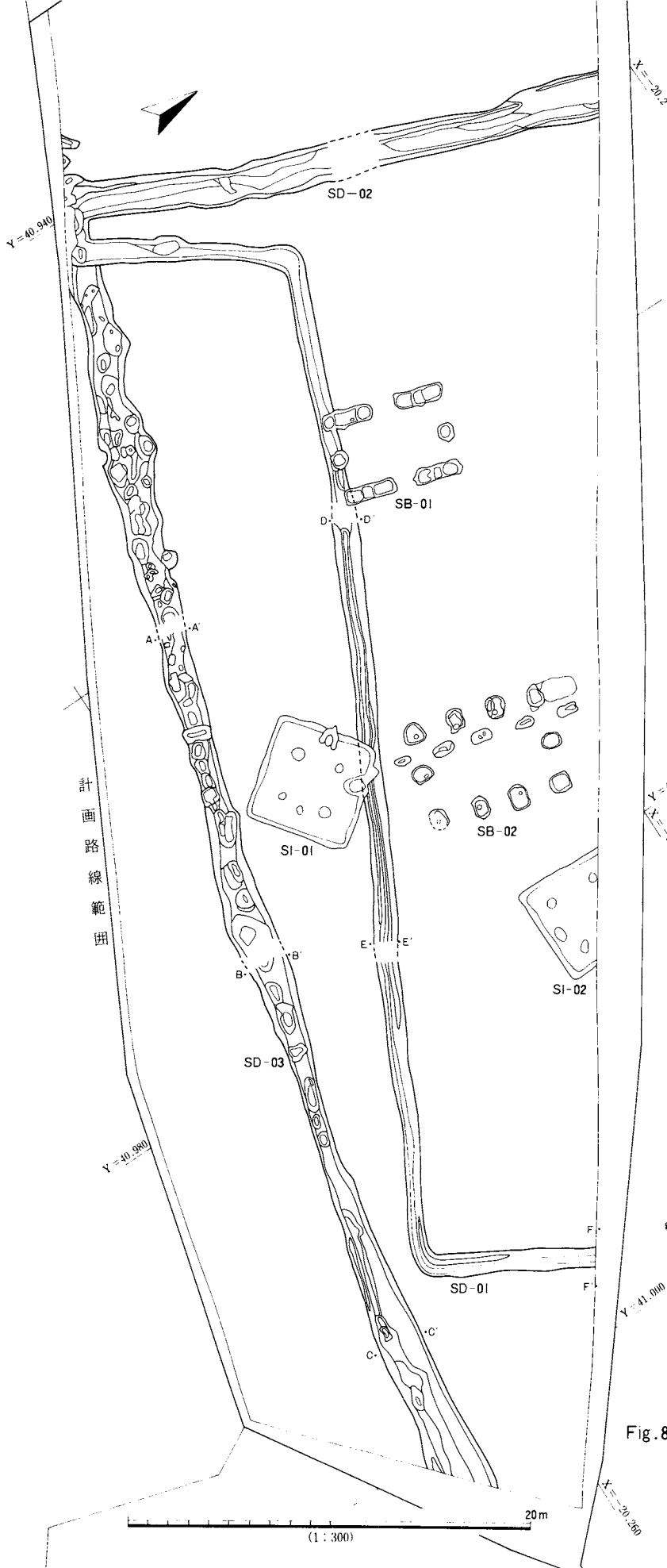
SB-02 (PL.4, PLAN 4)

桁行3間、梁行2間、東西棟の掘立柱建物跡である。側柱は、円形ないし隅丸方形の掘形である。覆土は暗褐色土にローム粒子が混じった土である。部分的にしまりがよい部分もある。深さは、50～70cm。柱は抜き取られていたと考えられるが、掘形の下部であったりと思われる部分を確認している。柱間寸法は、狭いところで1.9m、広いところで2.2mと必ずしも一定ではない。また、隅部のなす角は、直角ではなく若干東側に振れている。問題なのは、北側の側柱の内側に並ぶ落ち込みである。落ち込みは、東西方向に広い楕円形を呈し、深さは確認面から30～40cmと浅く中央部が少し深い。覆土は主に暗褐色で、特にしまりがよい部分はない。また、柱の掘形だとすると、抜き取りがあったのか柱痕跡は明確でない。このような落ち込みであるが、その並びが側柱の東西方の列と平行なことから、建物に関係するものと考えられる。しかし、性格を明確にすることはできなかった。

身舎の大きさは、南側のSB-02の方が少し大きく、掘形はまるで違うが、2棟の建物跡の中軸線が同じであることから、同時期の建物であろうと考える。しかし、これらの建物に伴う遺物はなく時期は不明である。ただ、後述の竪穴住居跡よりも新しいと考えるので、奈良時代以降の建物跡と考える。

SI-01 (PL.5, PLAN 5)

SI-01は、掘立柱建物跡SB-02の西側で検出された竪穴住居跡である。一辺5mの竪穴部が確認



X=20,200

Y=40,940

計画路線範囲

Y=40,980

Y=40,980

X=20,240

Y=41,000

X=20,260

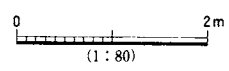
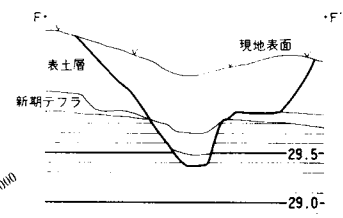
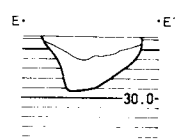
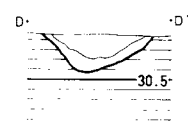
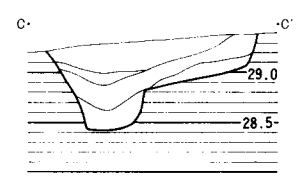
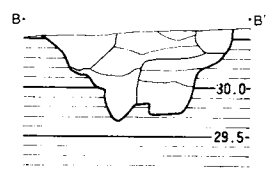
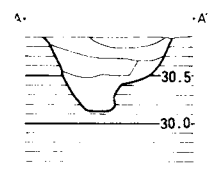
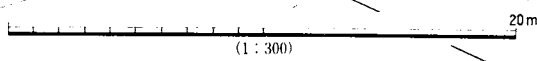


Fig.8 上福田和田谷津遺跡 溝実測図



できた。竪穴部の深さは、確認面から50cmほどである。主柱穴は4本で、カマドと反対側にもう1本の柱穴がある。カマドの遺存状態はよく、ほぼ原形をとどめていた。壁の下には深さ5cmの溝が全周するが、カマドの袖の下にも巡っている。カマドの袖は山砂で構築され、中央部には焼けて壊れた土製支脚が放置されていた。煙出しは、壁から20cmほど外にはみ出している。カマド南側の袖の外周囲の床面から遺物が集中して出土している。住居跡の東壁で溝SD-01と重複している落ち込みは、新しい攪乱である。竪穴住居SI-01は、溝SD-01に一部壊されている。

SI-02 (PL.5, PLAN 6)

SI-02は、調査区の関係で半分だけ調査した竪穴住居跡である。カマドがある部分は、調査区外になり調査できなかった。現地表面から床面までの深さは50cmほどである。住居南側の竪穴部の一辺は5mである。平面形は正方形の竪穴住居跡と考えられるが、西側の壁をみると少し東に振れていたかも知れない。壁の下に溝が全周している。住居の規模、出土遺物からみてSI-01と同時期・同規模の竪穴住居跡と考える。カマドの反対側の柱穴は、壁から70cmの所で検出した。柱掘形の近くで、白色粘土を確認している。竪穴部中央で炭化材を確認しているが、炭化材は他にないので住居全体を焼却した廃材ではないと考える。

溝 (Fig.8)

溝が3条検出されている。溝はさほど古い時期のものとは考えられず、畑や畦界であったかも知れない。

SD-01

SD-01は、直角に2度曲がる溝である。調査区の南東端で確認した土層からみて、新しい溝である。検出した溝の深さは確認面から40～60cmであるが、南東端の土層からみると現地表面に近い部分から掘り込まれているようであり、1mくらいあったかもしれない。SD-01は、掘立柱建物SB-01の掘形を一部壊している。また、調査区の北西端で、SD-03と切り合う。

SD-02

SD-02は、調査区を東西に走る浅い溝である。深さは50cmほどであるが、幅は狭い部分で1.5m、広い部分で2.2mをはかる。SD-02からは、土製玉が2個出土している。調査区の北西端で、SD-03と切り合う。SD-01とは切り合い関係をもたないことから、同時期の溝の可能性もあるかもしれないが、断言できる根拠はない。

SD-03

SD-03は、調査範囲の南側で東西に確認した土壌を伴う溝である。溝の形状は一定ではなく、土壌によってかなり凸凹している。溝の上端は1.5mあり、底ではおおよそ1mである。覆土の状況からみると、土壌は数度にわたって掘りなおされている。土壌の性格が明らかでないが、柵列のための掘形かと考える。古墳時代の土器が出土しているが、掘立柱建物の掘形を壊しているので明確な時期は不明である。

2 上福田保町遺跡

確認調査の結果上福田保町遺跡は、路線内全域が本調査範囲になった。本調査の結果は、古墳時代の竪穴住居跡が1軒と、非常に浅い溝と思われる遺構や性格は明確ではないが縄文時代の土壌と考えられる遺構を多数確認した。しかし、それらのうちの多くは、検討の結果掘形が明確でないこと、遺物量が非常に少ないことから遺構とは考えられないとの結論に達した。

また、先土器時代の遺物が、台地のほぼ中央部で1点だけ発見された。始良パミス層の下から出土している。遺物が出土した周辺をさらに広げたが、他には先土器時代の遺物は出土しなかった。

SI-01 (Fig.9, PL.7)

SI-01は、台地の中央部で検出した古墳時代後期の方形竪穴住居跡である。竪穴部の一辺は南側で4.5mである。確認面から竪穴部床面までの深さは、40~50cmである。壁の下には深さ5cmの溝が全周する。支柱穴は4本で、カマドと反對方にもう1本柱掘形がある。東壁の中央部にカマドが造り付けられている。遺存状態は非常に悪く、東側袖の下部に粘性の強い山砂を使用

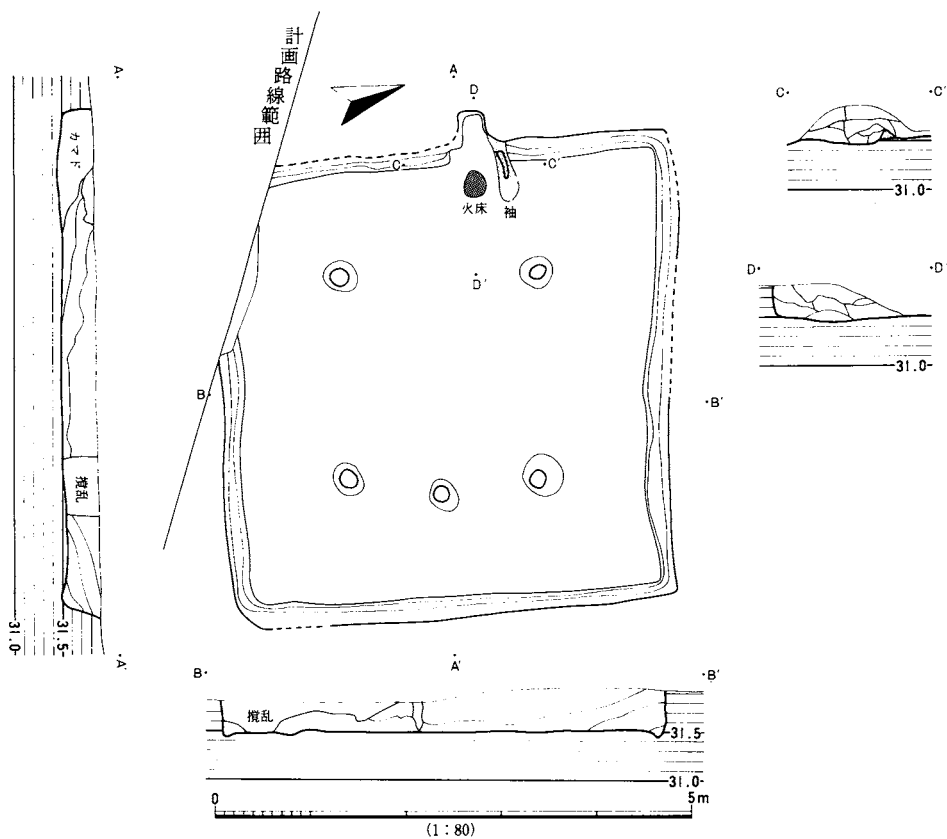


Fig.9 上福田保町遺跡 SI-01実測図

したカマド構築材が残っていたにすぎない。この袖の上から土製の模造鎌と鋤先が出土している。火床部はしっかりしていてロームが焼けてかなり堅くしまっている。また、竪穴部の南側壁近くで30個におよぶ土製玉が出土した。

SX-01 (PL.9, PLAN 10)

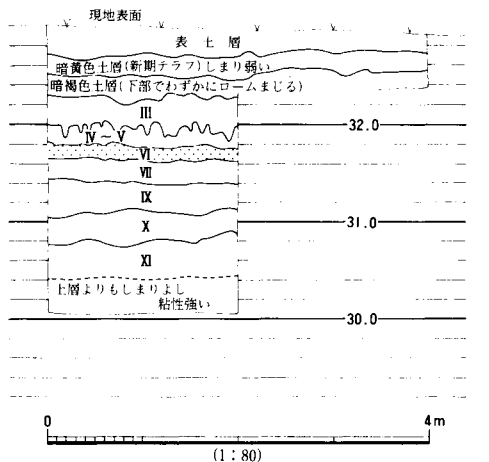
台地の中央部で検出した縄文時代の炉穴と思われる遺構である。炉穴は2基重なっているようである。覆土中には炭化粒子と焼土粒子を多量に含む。

SK-01 (PL.9, PLAN 11)

台地の中央部で検出した縄文時代の陥し穴と思われる遺構である。平面形は、長方形で短軸で70cm、長軸で180cmをはかる。深さは、確認面から170cmある。覆土には、炭化粒子・焼土粒子が多量に含まれる。

SD-01 (PLAN 9)

溝SD-01は、上端で1.7mの幅があり、底はやや丸みをもつものの硬化している。溝というよりは道だったのかも知れない。



- (1:80)
- III層 黄褐色土層(ソフトローム)
粘性・しまりあり。上半部暗黄褐色土まじる。厚さ約30cm。
 - IV～V層 黄褐色土層(ハードローム)
オレンジ・赤色粒子・白色粒子(直径1mm以下)少量混入。
第1黒色帯としてのV層は明瞭に分離されない。厚さ約15cm。
 - VI層 黄褐色土層(A, T.層)
粘性・しまり強い。赤色粒子・白色粒子(直径1～2mm)多量に混入。白色粒子はIV層～V層にも多く散る。IV層～V層より白っぽく見える。厚さ約20cm。
 - VII層 暗黄褐色土層(第2黒色帯上部)
粘性・しまり強い。赤色粒子・白色粒子少量、黒色粒子(直径1mm以下)微量混入。赤色バミス(直径3～4mm)。厚さ約30cm。
 - IX層 暗黄褐色土層(第2黒色帯下部)
黒色粒子(直径2～3mm)、VII層よりやや暗い程度で色調の差は明瞭ではない。白色粘土5cmほどの塊が入る。厚さ約40cm。
 - X層 黄褐色土層
粘性やや強くなる。黒色粒子・白色粒子(直径1～2mm)微量混入。比較的均一な層。厚さ約40cm。
 - XI層 灰褐色土層(武蔵野ローム層に相当するものと思われる)
X層の境は、漸移的で徐々に粘性が強くなる。

Fig.10 仲兵遺跡 基本土層図

また、調査区の南側で多数のピット群を確認したが、ピットは不揃いで掘立柱建物跡とは思えない。縄文土器は調査区からまんべんなく出土している。

3 仲兵遺跡

仲兵遺跡も、先述のように路線内全域で確認調査を行ったが、奈良時代の竪穴住居跡を1軒検出したにとどまる。

調査区の各地から縄文土器が出土したが、遺構は確認できなかった。先土器時代の遺物は、発見できなかった。他の遺跡の土層との比較のために、仲兵遺跡の基本層序図を示しておく。土層は、この地域でよく確認できる層序であり、土層の特徴も一般に確認されるのと同じである。詳細は土層の説明を参考にしてほしい。

SI-01 (PL.11, PLAN 14)

SI-01は、台地の北端で検出した竪穴住居跡である。竪穴部の一部は、斜面にかかっている。

竪穴部は一辺2.5mの正方形である。柱穴は確認

できなかった。床は、ハードロームで構築されており、若干凸凹があるものの全面硬化している。確認面からの深さは、50cmほどである。壁の下に深さ5cmの溝が全周する。壁材は、ロームブロックを利用して抑えられていたと思われ、溝の周囲からロームブロックを多く検出できた。明確な柱穴は確認できなかったが、カマドの前で一つだけピットを検出した。ピットの深さは17cmである。竪穴部の外でも柱穴は確認できなかった。カマドは竪穴部の北東隅にある。カマドは、全周する溝を埋め戻して構築している。カマド部分の溝は、他の部分より深い。天井部は崩れ落ちている。袖は基部をロームブロックを主とした暗褐色土で作り、その上の部分は山砂で構築している。カマドの内側の壁になる部分は、赤く焼けてブロック状になっている。火床部は住居竪穴部壁の下の部分が一番深い。煙道部は短かく、外への張り出しは10cmほどである。遺物は小さな破片が多く完形品はなく、覆土中、床面から出土している。

4 下福田稲荷原遺跡

下福田稲荷原遺跡には、調査区の南西端に小さな塚(SX-01)がある。

確認調査の結果から、下福田稲荷原遺跡も路線計画範囲の台地部分は、ほとんどが本調査対象地になった。この遺跡でも、先土器時代の確認調査は全面に実施したが、遺物は確認されなかった。

塚(SX-01) (PL.16, PLAN 24)

塚は、一辺約20mの方形で、墳頂にある石塔から庚申塚として構築したと思われる。塚は、石塔から元禄13年に造られたことがわかる。今回の道路建設にあたり、方形墳丘の東端隅が道路工事により削平されることになった。塚の南側には現在の道から窪みが続いており、本来この部分が庚申様への参道でなかったかと思われる。塚の内部の調査は路線内にかかる部分しか行っていないので明確ではないが、盛土は一部版築状に堅くしまっている。

また、塚の下層には溝が確認された。塚に伴う遺物は確認できなかった。

SX-02 (PL.13, PLAN 16・18)

表土から約20cm下で検出され、表土層とテフラ層中に掘り込まれた遺構である。東西7m・南北6mの方形の遺構で、確認できた掘り込みは浅く5cmほどである。表土下約5cmから多量の手捏土器が出土した。ピットが5つ検出できたが、ピット内からも多くの土器が出土している。覆土には、炭化粒子が多くみられた。遺構の北東隅と南東隅は、炭化粒子を含む面が検出できたため判断できた。北側は、新しい炭窯で壊されている。この方形の遺構にはカマドがないことと、出土した遺物から祭祀にかかわる特殊な遺構と考える。

この遺構の周囲からは、多数の手捏土器と土器が出土している。周囲には他に遺構がないこと、竪穴部の掘り込みが浅いことからこれらの遺物はこの遺構に伴うものと考えられる。また、土器は、ほとんどが壊れていることから、人為的に破碎されたものと考えられる。「倍」と書かれた

墨書土器は、遺跡の南側から出土した。

SX-03 (Fig.11)

検出時は、道の硬化面とも考えたが、明確な掘り込みはなく、ローム土層の上の黒色土層が硬化している。硬化している範囲を図化したのがFig.11の図である。竪穴住居跡の床面とも考えられるので提示した。

SI-01 (PL.13, PLAN 17)

表土下約10cmのところから土器が出土し、方形の竪穴住居跡と考えられる遺構である。土器は手捏土器の碎片が多い。調査ができたのは北東隅の一部だけで、ピットが一つある。遺構の深さは確認面から40cmである。床面近くから炭化粒子が確認できた。

SI-02 (PL.14, PLAN 19)

SI-02は、長軸315cm、短軸265cmのほぼ円形の遺構である。深さは確認面から40cmある。壁の北側に深さ20cmのピットがある。床面はロームブロックで厚さ2～3cmくらいが非常に硬化している。特に中央部が堅い。覆土中に炭化粒子・焼土粒子を含むがカマドは確認していない。性格・時期ともに明確でない。

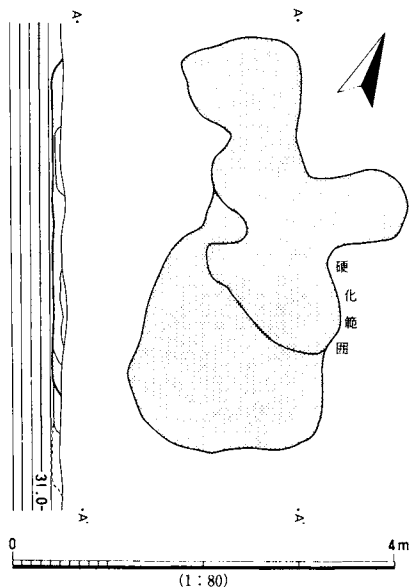


Fig. 11 下福田稲荷原遺跡 SX-03実測図

SI-03 (PL.14, PLAN 20)

SI-03とSI-04は、切り合っている。新しい方の遺構をSI-03、古い方の遺構をSI-04とする。SI-03は、長軸で390cm、短軸で370cmのほぼ円形の遺構である。確認面からの深さは30cmほどである。覆土には炭化粒子を含む焼土混じり土がかなり混じる。この遺構は住居跡かと思われ、炉を伴う。炉は長軸で110cm、短軸で65cm、深さは20cmである。柱穴かと思われるピットもあるが、並びに規則性はない。

SI-04 (PL.14, PLAN 20)

SI-04は、SI-03よりも古い住居跡である。東側が土壌で壊され、南側はSI-03で壊されている。深さはSI-03と同じくらいである。違いは床の下に住居跡の掘りか30cmほど掘り窪められ、大きめのロームブロックで埋め戻されていることである。炉は住居の方向と同じ楕円形で、長軸で109cm、短軸で64cmあり、SI-03とほぼ同じである。覆土はローム粒子が多い。

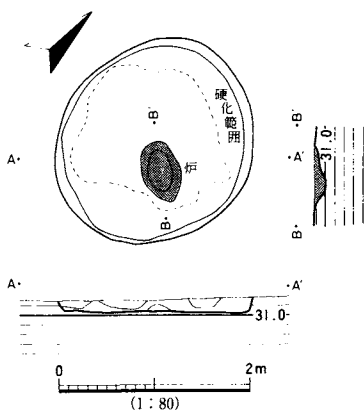


Fig. 12 下福田稲荷原遺跡 SK-01実測図

SI-05 (PL.15, PLAN 21)

調査区の関係で遺構の半分しか調査できなかった。調査区の境までで360cmの長さがある。形状はSI-01に似ているが床の硬化面はない。床面で深さ40cmのピットを2個検出した。覆土の中層で焼土の集中を確認している。表土からの土層からみて新しい遺構とは思えないが、時期は不明である。

SI-06 (PL.15, PLAN 22)

この住居跡も小判形の住居跡である。深さは30~35cmである。多数の柱穴と思われるピットが伴う。炉は長軸で45cm、短軸で35cm、掘り込みの深さは20cmほどである。

SI-07 (PL.15, PLAN 23)

SI-07も小判形の住居跡と思われる。東側が調査範囲からはずれる。確認面から床面までの深さは40cmである。覆土中には焼土がブロックで入っている。床には柱穴のピットが多数ある。ピットは深いもので25cm、浅いもので30cmほどである。炉は2か所で確認しており、西側壁に近い方が大きく長軸で80cm、短軸で50cmある。南側の炉は長軸で40cm、短軸で20cm弱である。

SK-01 (Fig.12)

表土下約10cmのところから土器が多数出土した。土器は手捏土器の碎片が多い。調査ができたのは北東隅の一部だけである。深さは40cm。床面近くで炭化粒子が確認できた。

SB-01 (Fig.13)

掘立柱建物跡かと考えられる遺構であるが、断言できない。深さ30cmくらいの土壇が5つ並ぶ。しかし、覆土の状況を見ると特に柱をつきかためたようすはない。

溝

溝は、調査区を南西から北東に走るものである。

SD-01は、幅80~110cmである。深さは確認面から15~20cmである。時期不明。SD-02は、幅160~180cmである。深さは確認面から70cmある。塚の土層からみても同じくらいの深さである。溝に伴う遺物はない。

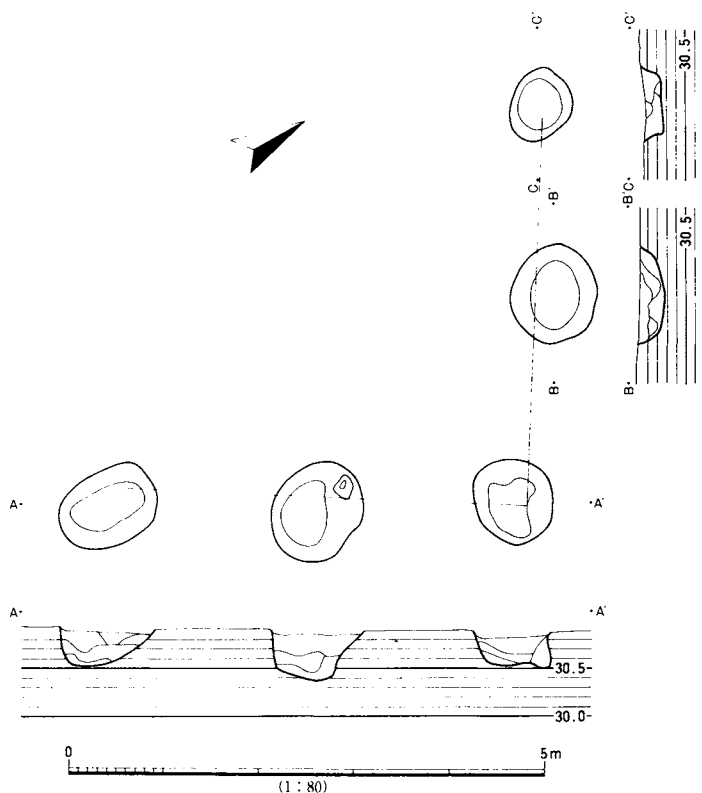


Fig.13 下福田稲荷原遺跡 SB-01実測図

5 上福田13号墳

(1) 発掘前の古墳の状況 (PL.17, PLAN 25)

発掘調査に入る前の墳丘測量の結果、墳丘の遺存状況は非常によいと思われた。先にも記したように墳丘のまわりには道があるので、墳丘は若干改変されている可能性はあるが、作成した墳丘測量図 (PLAN 25) を見ると四つの隅部はやや丸くなっており、谷側に向かってやや開く台形にも見えるが、四辺はほぼ直線であることから方墳と考えられたのである。

古墳は、南側の谷に向かってゆるく傾斜する平坦地に造られている。みかけの墳丘は、谷に面した一辺が約21m、反対側の台形の頂上にあたる部分で18m、それらの辺を結ぶ二辺はともに20mである。墳丘の高さは、台地側から見て約2m、谷側から見上げると4.5mになる。また、墳丘の谷側を除く三方は墳丘を囲むように窪んでいることも明かとなり、現在使用されている道と重複するものの、周溝部分の窪みかも知れないと考え、その場合には墳丘がみかけよりも大きくなるものと想像していた。この時点では、周溝が二重に巡るとは想像もしていなかった。

(2) 発掘区 (PLAN 26)

今回計画された成田安食線は、当初図面上で一番高い墳頂部から西側半分が路線となる予定になっていた。しかし、県教育委員会文化課の指導もあり、古墳については路線の予定地外も含め全面的に発掘調査が行われることになった。しかし、工事区域からはずれる墳丘外の東側の周溝は、部分的に発掘区を設定する最低限の調査にとどめることになった。また、路線内の古墳北側の平らな部分は、確認調査を実施したが最近まで使用されていたという道路が確認されたのみで遺構は確認されなかった。なお、上福田13号墳は初年度の発掘調査が終了後、石室が現状の位置で保存されることになったので、墳丘下の遺構の調査は実施していない。

(3) 墳丘 (PL.18・21, PLAN 27・28・29・31・32)

発掘調査の結果、墳丘は一辺約20mの方形であることが判明した。辺は各辺ともほぼ直線的である。発掘前には谷に向かって開く台形のようにもみえたが、発掘調査でほぼ正方形の方墳であることが確認された。しかし、方墳の墳丘としては特別に大きなものではないせいか、墳丘四隅の稜線や段築、墳丘上段の平坦面は確認できなかった。また、墳丘には埴輪や葺石は用いられていない。

墳丘の構築方法は、旧表土層から掘られた掘形に石室が構築され、さらに裏込めが行われた後に、墳丘の構築が行われている。石室の構築については後に詳述することとし、ここでは墳丘に限定してしておく。まず墳丘は、完成した石室の上に、土壇上に高くしかも堅く関東ローム土や粘土を積み重ねている。この部分の土層は、古代寺院の基礎工事でしばしばみられるようないわゆる版築状に、土をかなり薄く交互に積み重ねている。土層の確認作業においては、その土層の各層を確認できないほど強く叩き締められていた。その後、盛土は石室の上から石

室の掘形の上に広がる。この部分もやや締めりはよいが、石室の上ほどではない。最後に墳丘全体に盛土は行われる。

再度確認しておくが、上福田13号墳の石室は、盛土を行う前に旧表土層から掘り込みを造り、そのなかに構築されている。また、盛土に利用された土は、関東ローム層の赤土とその下の白色粘土である。墳丘構築の作業工程は、石室の被覆、次に掘形の被覆、最後が墳丘の構築と大きく3回に分けることができる。

以上のような順番で古墳が構築されているために、埋葬施設の確認には時間がかかった。石室については後述するが、この古墳の埋葬施設が横穴式石室であると確証を得たのは、墳丘の確認作業中に、南側斜面で貝化石の固まった石材を確認してからである。この周辺の方墳の埋葬施設は、ほとんどが貝化石の固まった石材を利用した横穴式石室であることが、発掘調査に入る前から知られていたからである。

(4) 周 溝 (PL.19・20, PLAN 28・29)

周溝は、いわゆる二重周溝である。石室の開口する南側の谷に面する部分は、周溝はないが他の三方には周溝が二重に巡る。周溝は、内側の周溝で旧表土面から約2mの深さがある。外側の周溝では確認された深さは50cmほどであるが、周溝底の高さは内外とも同じくらいであることから、当時の古墳の周囲が現在の地形のようではなく墳丘下の旧表土面と同じ高さであったとするならば、外側の周溝も2mくらい深かったことになる。

二重の周溝の間は、墳丘下の旧表土層より低いことも影響してか盛土は確認していない。上福田13号墳の場合、二重の周溝の間部分に盛土があったかどうかは不明である。

内側の周溝のうち北側から東側にかけて、墳丘側の下に近い部分にさらに幅20cmほどの溝が掘られている。土層の観察では、周溝が一度埋まってから掘り直したものではない。周溝がまだ埋まらない前にもう一度溝が掘られたものと思われる。場合によっては先にこの溝が掘られ、その後箱型に周溝が掘られたのかもしれない。

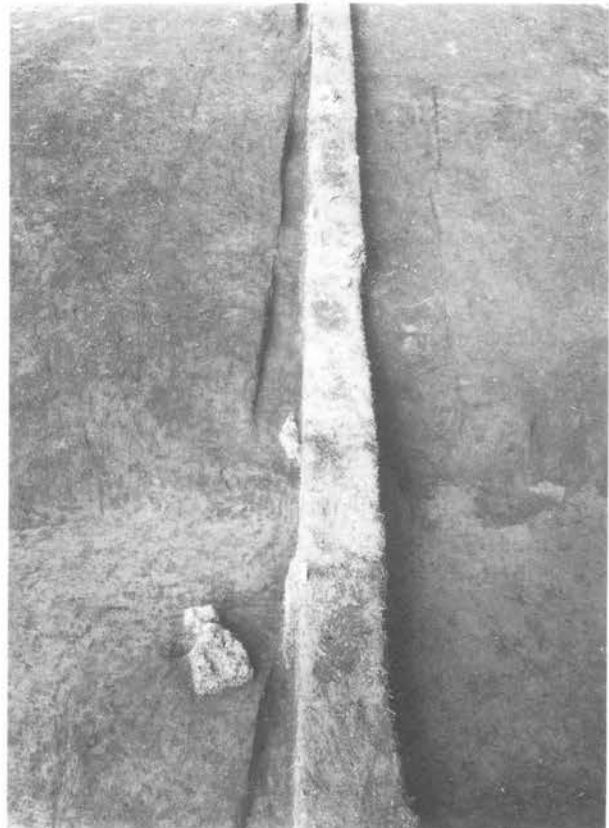


Fig. 14 上福田13号墳 横穴式石室石材検出状況(南東から)

(5) 旧表土面 (Fig.15)

墳丘が造られる前の地表面では、深さ20cmほどの溝状の落ち込みを多数確認した。しかし、それらは一定の規則によって掘られているようすはなく、発掘してみても遺物が出土することもない。また、トンネル状になる部分さえ確認できたことから、小動物によるものかと考えている。旧表土面では、それら以外に古墳に伴う遺構は確認できなかった。

また、石室が保存されることが決まっていたので、旧表土層の掘り下げはしていないため、下層の遺構の有無については不明である。

(6) 埋葬施設の構造

上福田13号墳の埋葬施設は、横穴式石室である。石室は、墳丘盛土前に旧表土面から造られた掘形内に造られている。今回の発掘調査では、石室を解体することなく保存することになったため、石室裏込め土も最小限しか掘り崩さないことにした。そのために、石室の掘形のすべてが解明できたわけではない。特に、石室を解体していないので、石室の床面下の状況についてはほとんどわからない。

石室材は、この地域にしばしばみられる貝化石が固まった石を切り出してきて利用している。貝化石が固まったといっても、完全に貝化石だけではなく貝と貝の間には灰色の砂が多量に混じっている。

石室の掘形 (PL.22, PLAN 33)

石室を構築するための掘形は、石室の形・大きさととは非常に違った形状である。掘形は、石



Fig. 15 上福田13号墳 旧表土上面遺構確認作業状況 (南東から)

室と相似形ではなく奥壁の後ろがかなり長く、しかも曲がっている。この石室奥壁後ろの部分は、石室床面よりも50cm以上高く、掘り残したような感じである。

掘形そのものは大きいものの、石室規模はその三分の二程度の大きさである。掘形の大きさについては、この石室を造るのに必要なものだったのか、石室の構築には必要でなかったが掘られたものだったのかが問題になろう。単に掘られたものだと考えるならば、掘形の向きが、南の谷に向かう斜面に対して直行しているように見えるので、古墳を造る際最初にこの掘形が掘られ、その時には石室の大きさ・方向が決められていなかったもので、ただ斜面に直行するように掘られたとも考えられる。しかし、もし大きな掘形が石室の構築に必要なものだったとすれば、石材の搬入か石室の組み立てに必要な空間だったということになる。発掘調査の結果からみると、この部分では奥壁の上の石材の高さで各所に石材に含まれている砂が散っていることから、石材を積みながら裏込め



Fig. 16 上福田13号墳 石室後方裏込め土層断面（北から）



Fig. 17 上福田13号墳 石室後方掘形東西土層断面（北から）

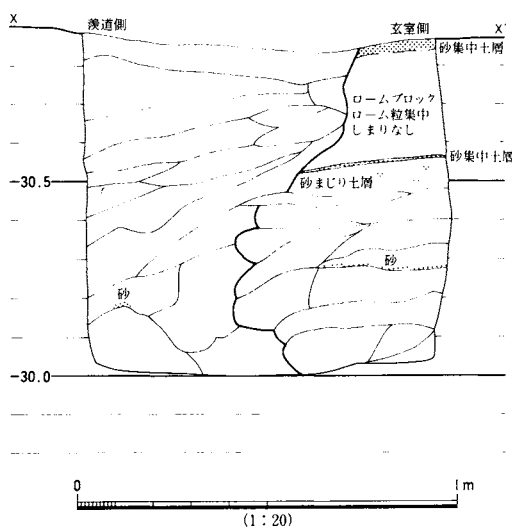
が行われたことは明らかである。このことから空間は石材搬入及び石室の構築に必要な空間だったと考える。

石室外側の裏込めの土層の観察では、石材は一段ずつ積んでいかれたことが明らかで、石材と石材の横の継ぎ目から掘形の外側に向かって徐々に高くなる石材の層の層が薄く延びている。

石室 (PL.24・25・26, PLAN 36)

石室は、短い羨道部をもつ単室の横穴式石室である。石室材は、この地域にしばしばみられる貝化石が固まった石を立方体に切って利用している。

石室の構築方法は、石室を解体していないので不明な点が多い。石室の構築は、はじめに掘形が造られ、次に石材を据える掘形の底を若干整地することからはじめられたであろう。整地が終わると石材の据え方になるわけである。はじめは、奥壁の一段目か玄室の最下段が据えられたのであろう。その際の石材の搬入は、掘形の南側の谷に開く方から搬入されたと考えられるが、北側からも運べないことはない。もし、玄室の下段の石材が先に据えられたのであれば、奥壁の石材は掘形の北側から運び込まれたことになる。理由は、玄室下段の石材が据えられた後では奥壁の大きな石材を運び込む通路が確保できなかったと思うからである。最下段が据えられると石材の裏には土が入られる。その後で、さらに上段の石材は積まれていく。石材は、積む高さが低いうちは石室の内側から持ち上げて積まれたかもしれない。しかし、石材を持ち上げるのが困難な高さになれば、掘形北側から搬入し上から重ねていくこともできたと思われる。おそらくそのような運び込みが行われたと思われる、奥壁後方の土層で薄い層となった細かい貝化石と砂の層を確認している。奥壁の上の石材の場合も基本的には側壁の石材を積む進捗に合わせて裏込めの土が入れたようであり、石材が運ばれる際の層と思われる石材層が混じっている。最後に天井石が架けられることになるが、側壁が積み上がった段階の裏込めだけで側



壁が崩れなかったのかは不明である。天井石が架構されるときには、掘形もほとんど埋め戻しは完了している。

楣石・玄門・框石は、側壁の構築とともに行われたと思われる。しかし、羨道部はかなり後に付けられたと考える。Fig.18は、石室掘形の土層の一部である。この土層断面図は、側壁と羨道部の後方にあたる部分のものであり、この土層から見ると側壁後方の裏込めが完全に終わってから羨道部後方の埋め戻しが行われたことがわかる。

Fig.18 上福田13号墳 掘形内玄室と羨道部境土層断面図

玄室 (PLAN 39)

石室は、羨道部から前庭部にかけて完全に土で覆われていたが、石室内はほとんど空洞のままであった。すなわち、玄門から流れ込んだ流土は、玄門部分で門の上部に達しているが、ここからは奥壁の床近くまで斜めに流れ込んだだけであった。写真で側壁や奥壁の下部が黒く見えるのは、流土が堆積していたためである。

玄室は単室で左右に袖がつき、羽子板状に奥壁に向かってわずかに開く形をしている。玄室の壁と天井は、すべて貝化石の混じる石材で構築されている。玄室内に照明を入れると、石材のなかの化石化した白い貝が玄室内に白く浮き上がり、幻想の世界にいるような気分になった。

玄室は、床に立てて据えられた石材によって二分されている。床を二分する石材は、貝化石を含む板材で、高さは手前の床から30cm、奥の床から25cmある。このため、この仕切石の最下部に削り出された段の高さも違う (PLAN 39参照)。また、この石材は側壁のなかには組み込まれてなく、側壁との間に隙間がなく玄室内にぴったり据えられている。仕切石の中央部はわずかにすり減ったように窪んであるが、本来は窪みがなかったと思う。貝化石を含むこの石材の硬度を考えると、埋葬時だけの出入りでこれだけすり減るとは考えられず、石室構築時に石工が仕切石を跨ぐたびにすり減ったのか、盗掘およびその後この石室が利用された可能性もあることも示しているのかも知れない。仕切石手前の床は、黄色砂岩でつくられている。砂岩はほとんどが方形に加工されているが、部分的には不整形な石もある。不整形な石材がはめ込まれているのは、この黄色砂岩がもろいことにも原因があるのではないかとと思われる。この床は、はじめに側壁に近い部分から敷き詰め、最後に中央部に砂岩を敷き詰めたのであろう。奥壁に近い部分の床は、手前の床より10cmほど高く、側壁等の石材と同じ貝化石が固まった石材が敷かれ、明らかに手前の床とは区別されている。奥壁に近い部分の床は、中央部の仕切石側が若干高く、奥壁寄りが低くなっている。床の石材は綺麗に9枚の石材で敷き詰められている。

側壁 (PL.28・29)

側壁は、奥壁に近い最下段で板石が立てられているが、他は石材が横置きにされている。また、側壁は持ち送りで構築されているので、側壁が高くなるにしたがって徐々に室内に迫り出している。側壁の持ち送りの傾斜は、2枚の奥壁の目地付近で若干変わる。横置きされた側壁材は、基本的に8段で構成されている。石材の厚さは、厚いもので約30cm、薄いもので約10cmである。石室内からの観察では、石材は1段ずつ据えられたと思われ、同じ段の石材の厚さはほぼ同じであるが、段によっては石材の厚さは違う。また同じ厚さの石材がなかったのか、薄い石材を2枚重ねているところもある。さらに、石材の継ぎ目の高さを調節するためか、鍵型に切り込みを入れている箇所もある。天井石に接する最上段の石材のうち、玄門から2番目の石材はかなり割れて崩れている。側壁の石材の間の隙間の大きい部分には若干土が填められている (Fig.20 参照)。また玄門手前の框石手前に別の石が框石と同じ高さに据えられている。側



Fig.19 上福田13号墳 石室天井石（玄室内）



Fig.20 上福田13号墳 石室側壁の目地に充填された土

壁の横方向の目地は、水平ではなく奥壁側が少し高い。

奥壁 (PL.29)

奥壁は、2枚の板石が縦に積み重ねられて構築されている。厚さは、石室の内外からの実測で約30cmと推測できる。2枚の石材の目地は、ほぼ水平である。

天井石

天井石は、壁材同様に貝化石の固まった砂岩の板石4枚で構成されている。板石の大きさは長い方で120cm、短い方で70cmほどである。上方の中央部が厚く、偏平な蒲鉾型を呈している。天井石は側壁・奥壁・石にそれぞれ10cmほど載って石室の安定を保っているようである。先述のように玄門から1番目と2番目の天井石に接する側壁最上段が少し崩れているため、玄門に接している天井石は、隣の天井石に接する部分が少し下がっている。天井石には一部黒っぽい部分があるが、それは空洞化していた石室内の水分がたまったあとのようである。

玄門 (PL.28)

玄門は、框石と左右の袖石、それと袖石の上に載せられた楣石で構成されている。楣石

上部外側は鍵型に切り込みが入れられているが、本来天井石を載せるための段ではなかったかと思われる。楕石が反対向きに載せられていれば楕石上部の切り込み部分に天井石がおさまり、側壁と天井石の間に隙間をつくることなくうまく石室が構築できたと思われるのである。

羨道部 (PL.27)

羨道部は、側壁に板石を左右にそれぞれ2枚立て、天井も2枚の板石で構成している。しかし、前庭部よりの側壁は支えがないためか上方がわずかに外に開き、2枚の天井石の間には隙間ができています。また、この2枚の側壁の前庭部に面する最上部隅の天井石に接した部分には、わずかに鍵型に切り込みが入れられている (PLAN 26参照)。床には貝化石の固まった石材が敷かれている。ただし、入口の中央部に盗掘の際に開けられたのであろうか浅い穴があるが、この穴で床石が抜かれたようすはない。

閉塞石 (PLAN 37)

前庭部に4枚の石材が散在している。石室内には石材が抜かれたようすがないことから閉塞石と考える。そのうち一番大きな石は、貝化石の固まった石材であるが、羽子板状を呈し長さが180cm、幅の広い方で91cmある。次に大きな石は、少し不整形であるがやや濃い灰色の凝灰質砂岩で薄く剝離する石材であり、貝化石が固まった石材とはまるで違う。貝化石の固まった石材は、谷に面した斜面近くでもかなり割れた状態で検出した。もう1枚灰色の凝灰質砂岩の上に、小さな貝化石が固まった石材がある。石室の閉塞がどの位置で行われたか明らかでないが、石材の大きさから考えて、一番大きな貝化石の固まった石材が玄門の閉塞石で、他の3枚が閉塞石の控え積みに使われた石材ではないかと考える。なお、貝化石の固まった石材に混じって、1枚だけ凝灰質砂岩が利用されている点については、龍角寺岩屋古墳でもほとんどの石室材が貝化石の固まった石材であるなかに、数枚濃緑色の砂岩が確認されているのと似ている。

前庭部 (PL.23・26, PLAN 34・38)

掘形内に石室ができあがると、石室前面も一度埋め戻す。そしてその後、もう一度新たに掘り直して前庭部を造りだしている。前庭部の最終的な床面は、羨道部の石が敷かれた面とほぼ水平である。前庭部付近の掘形の下面は、この面から20cmほど下である。土層を観察すると、

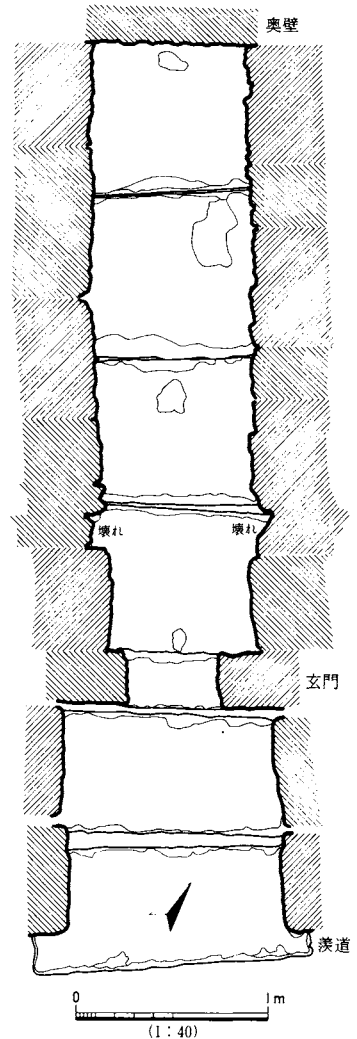


Fig.21 上福田13号墳 天井石実測図 (玄室内下から)

前庭部の床面の下には、かなり貝化石の屑や砂が堆積しており、石室構築時の作業面が確認できる。

前庭部の側面は、石室構築のために掘られた掘形を石室が完成した後に一度埋め戻し、最後にもう一度ハの字に開く前庭部を削りだし、仕上げている。

羨道部側壁と接する部分の床は半円形にわずかに窪み、その外側は若干高くなっている。石室の閉塞に関係がある施設があったのかもしれないが、明確にはできなかった。

遺物出土状況 (PL.26, PLAN 38)

上福田13号墳に伴う遺物は、石室入口の左右と周溝内から出土した土器のみである。調査では、石室内から鉄片や玉類の破片さえも発見できなかった。石室正面の前庭部には、向かって右の床に須恵器の甕が据え置かれ、左からは須恵器と土師器の身が出土した。左から出土した土器は、前庭部の床面から20cmほど高く、流土のなかで確認した。須恵器の蓋は、前庭部中央羨道に近い床面で発見した。須恵器の蓋はかなり細かく割れていたが、ほぼ完形に復原できる破片が集中して出土した。また、周溝の北西隅近くの周溝底から土師器の杯が2点近接して出土している。玄室に流れ込んだ流土の上から、土師器の杯 (PLAN49-10) が出土しているが、これは石室内に土が流れ込んだ時のものと考えられる。また、墳丘南斜面から古墳時代前期の土器が出土している。

石室は埋葬後、閉塞されたと思われるが、その後周囲の土が流れ込み前庭部は土で埋まっていたと思われる。前庭部左右の土器が古墳築造時のものかどうかは不明であるが、少なくともこの古墳に伴うことは間違いない。石室閉塞用の石材が前庭部に散在していることから、盗掘が行われたと考えられるが、盗掘は前庭部の土器が埋まってから行われたものと考えられる。その理由は、石室内に入ろうとした盗掘者は、埋まりはじめていた前庭部を掘り下げ閉塞石をはずし、石室内に侵入したと思われるが、このときに前庭部左右の土器は土に埋もれて盗掘者の目には入らなかったため、運び出さなかったのではないかと考える。

盗掘の時期

石室内に遺物が何もなかったことは、石室内にもともと副葬品がなかったか、盗掘者がすべて持ち去ったかどちらかと考える。仮に盗掘者がすべての副葬品を持ち出したとするならば、鉄製品の破片や一つの玉さえ見つかっていないので、副葬

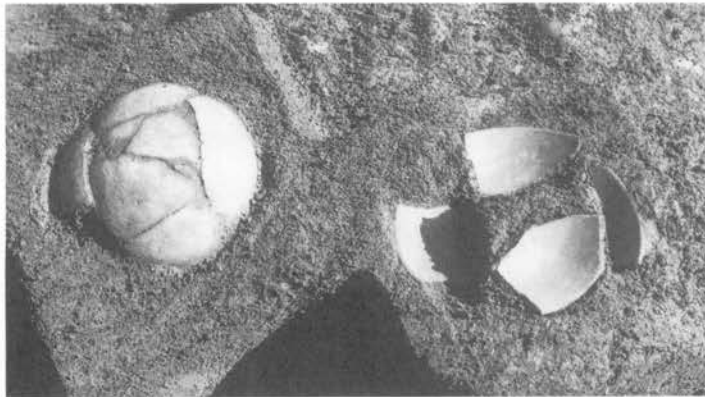


Fig. 22 上福田13号墳 周溝内土器出土状況 (東から)

品の有機質の部分が朽ち果て、副葬品がばらばらになる前に盗掘が行われたものと考えたい。そして、その盗掘の時期は、前庭部左右の土器が流土に埋まってから、石室内の流土上で出土した土器の年代の9世紀ころまでの間と考える。

(7) 石室の保存 (PL.30, PLAN 40)

上福田13号墳の石室は、初年度の発掘調査終了後に現状のまま保存されることが決まった。そのため、2回目の発掘調査は、初年度にできなかった石室の調査を行うことと石室の保存のための埋め戻しの作業を行うことになった。実施した石室の調査については前述のとおりで、石室の裏込めも最小限の掘削にとどめた。

石室の保存は、計画された道路はそのままつくり、そのままの計画では石室を壊してしまうので、路線幅いっぱいのところ垂直に法をつける工法に変更して行われた。

石室を保存するためには、発掘調査を行う前の状態に戻すことが最善の策であろうと思われた。そのため一度掘りあげた周溝と石室の掘形は埋め戻した。石室は、天井石の上は粘土で被覆し本来の状況と同じくした。石室本体は、一部側壁の上部が崩れているものの遺存状態はよかったので、特別に保存処理は行わないで土を入れた土嚢袋を充填してまわりからの圧力で石室が壊れないようにした。また、前庭部は南の斜面に一番近いところで検出したかなり割れた貝化石の固まった石材を取り上げたほかは、閉塞石と思われる石材もそのままの状態に石室と同じく土嚢袋を入れその上を土で被覆した。墳丘は、黒土とローム土を混ぜた土を踏み固めながら少しずつ積み上げて盛り上げた。墳丘は、発掘前よりもやや低いが、方形の土壇状に復原した。

現在、既に成田安食線は開通しており、上福田13号墳の復原した墳丘は道路の横で草に覆われている。

6 松崎播磨遺跡

松崎播磨遺跡からは、確認調査で先土器時代の遺物が1点出土し、遺構では調査面積に比較しまとまって16軒の竪穴住居跡が検出された。

以下に、石器の出土状況と各竪穴住居跡について説明する。

石器出土状況 (Fig.24)

先土器時代の石器は、確認調査の際に調査区でも南東端に近い地点で、上層の遺構確認作業中に関東ローム層を少し掘り下げたところから出土した。出土した土層は、関東ローム層でも上部にあたり、ソフトローム層の一番下ぐらいである。

先土器時代の確認調査も実施したが、これ以外には遺物は発見できなかった。

SI-01 (PL.32, Fig.25)

台地南の谷に近いところで検出した竪穴住居跡である。竪穴部は、一辺が4mで深さは40cm

である。支柱穴は4本で深さがそれぞれ約60cmあり、カマドと反対方にもう1本深さが25cmの柱穴がある。壁の内側には溝が巡る。深さは4～5cmである。カマドの天井部は陥没していた。火床部はすこし窪む程度である。カマドの袖は下部が暗褐色土で作られ、上部は黄白色の砂質粘土で構築されている。煙道部は、壁から20cmほど外にでる。出土遺物は少ない。

SI-02 (PL.32, PLAN 42)

台地の南の際に近い地点の竪穴住居跡である。竪穴部の掘り込みはすこし不整形で、中央部で南北3.6m・東西3.5mをはかる。覆土にはローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む。北東壁

の中央にカマドを付設するが、遺存状態は悪く袖もほとんど遺存しない。壁の下の溝は全周しない。溝は幅が3～4cmである。南東壁にそって貯蔵穴があり、床からの深さは40cmほどで平面形は長方形である。遺物は、破壊されたカマド・貯蔵穴内と床面から出土している。墨書土器が竪穴部の南側床面から出土した。

SI-03 (PL.32, Fig.25)

南側のゆるやかな斜面に造られた竪穴住居跡である。竪穴住居跡SI-02と1.5mくらいしか離れていない。竪穴部は深さ50cm、南北2.6m、東西2.9mと小さい。竪穴部の覆土には、僅かに焼土粒子とローム粒子が混じっていた。北側の壁の中央部に造られたカマドは、天井部が完全に陥没している。袖部も遺存状態は非常に悪く、かろうじてカマド構築材の白色粘土の散布する範囲から位置が推定できる程度である。西壁沿いのカマド近くに深さ30cmのピットがあるが、出土遺物はない。ピット南の楕円の窪みは床から5cmほどしか下がっていない。遺物の多くは、覆土の中層から下で出土した。1の墨書土器と2の土器は、入れ子の状態で覆土の中層から出土した。

SI-04 (PL.33, PLAN 43)

SI-04は、今回調査した竪穴住居跡のなかでは、最大の規模の住居跡である。覆土は、ローム粒子をかなり含み竪穴部の周囲から埋まっている。竪穴部の一辺は7.5mある。カマドは、北東壁でも南側に位置する。他の住居跡のカマドが北方向に多いことを考えると違和感がある方向である。カマドの袖は、比較的のこりはよい。4本の

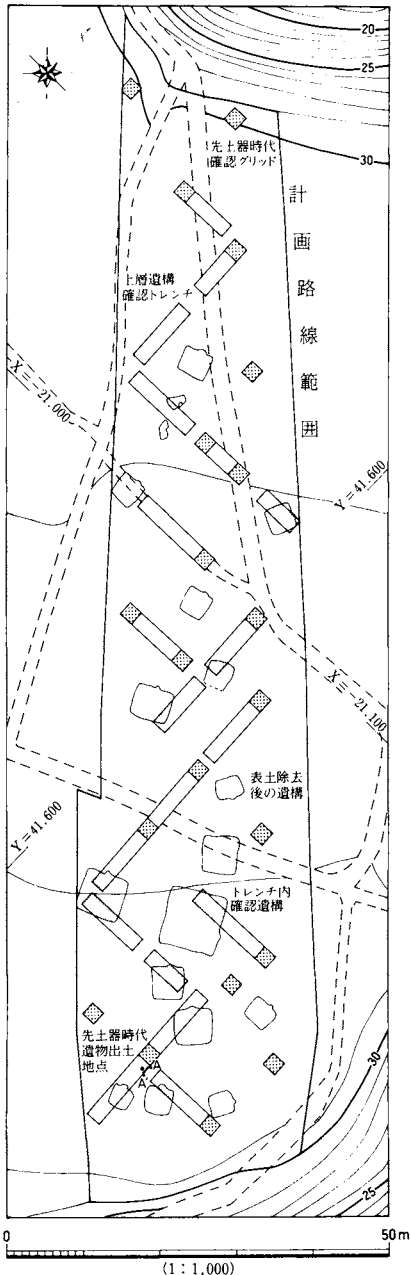


Fig. 23 松崎播磨遺跡 確認調査状況図

支柱穴は、深さが90cmほどある。壁の下の溝幅は5cmほどである。カマドの支脚は、カマドの反対方向の床面から出土している。遺物は、まばらに覆土および床面から出土している。

SI-05 (PL.32, Fig.25)

SI-05は、一辺約3mの方形の竪穴部をもつ住居跡である。深さは確認面から45cmである。壁の下に全周する溝がある。カマドは完全に崩壊しているが北壁のやや東よりの中央にあったと思われる、周辺にカマドの構築材が散っており、床には火床部らしく少し焼けたところがある。また、その部分の壁も煙出しのためか少し外にでる。床面は全体に硬化している。柱穴は確認していない。壁はやや外に開き気味である。畿内産土師器の深めの杯を模倣した杯がカマドの右側から出土している。

SI-06 (PL.32, PLAN 42)

この竪穴住居跡も南側の斜面に近いところで検出した。竪穴部は、一辺2.5~2.7mの方形である。確認面からの深さは60cmほどで、覆土の上層にはわずかに炭化粒子が含まれていた。壁の下の溝はカマドの西側で検出した。竪穴部に柱穴は確認できなかった。カマドの遺存状態は悪く、構築材が袖周辺に散っていた。火床部は3cmほど窪む程度、煙出し部は壁から20cmほど外にでる。袖の周囲からは土器が集中して出土した。

SI-07 (PL.33, Fig.25)

SI-07は、一辺約4.5mの方形竪穴部をもつ住居跡である。床までの深さは、確認面から約20cmある。覆土中には僅かに焼土を含む。床面はさほど硬化してないが、支柱穴が4本ある。カマドは壊れており、床から10~15cmほど浮いた状態で構築材を検出した。火床部はまったく確認できなかった。支脚をはじめとした遺物は、カマドの周囲から出土した。

SI-08 (PL.32, PLAN 42)

一辺約5.4mの正方形竪穴部をもつ竪穴住居跡である。確認面から床までの深さは40cm。覆土にはローム粒子が混じる。壁の下の溝は3cmほどで浅く、竪穴部の西側半分に巡る。支柱穴は4本で、カマドの反対側に深さ30cmのピットがある。カマドは袖部が遺存しているが、天井部は陥没している。火床部は床面よりも5cm程度窪む。袖の基部はロームでつくられている。煙道部は壁よりも45cmほど外へでる。畿内産土師器模倣の杯と皿が出土している。

SI-09 (PL.32, Fig.27)

住居は、一度拡張していると考えられる。竪穴部北西側のカマドが付設されていたと思われる部分は、新

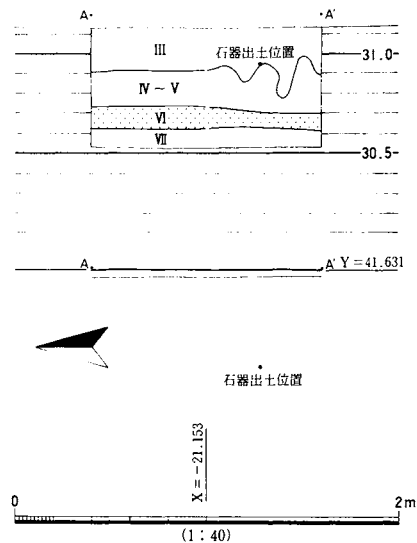
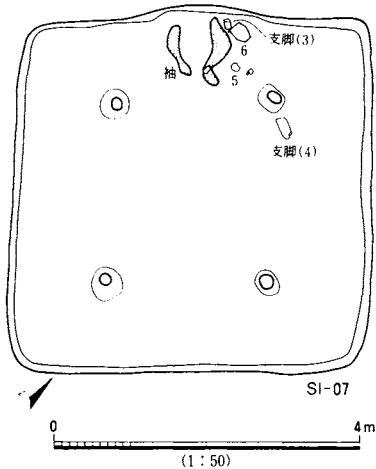
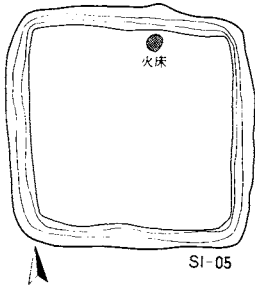
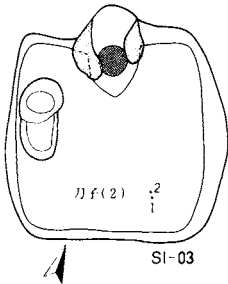
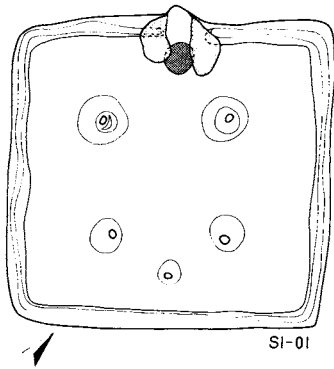


Fig.24 松崎播磨遺跡 石器出土状況図



しい道のために削平されており、竪穴部の壁は5cm程度しか遺存していなかった。床は、全体に堅くしまっている。住居の支柱穴は4本で、カマドの反対に出入口の施設の掘形と考えられるピットが一つある。支柱穴のうち北東側の2本は、住居の建て替に伴い新たにつくられたものと考えられる。カマドは、火床部が残るだけである。カマドの反対側にも焼土があるが、床から浮いた状態で厚さは10cmほどある。

SI-10 (PL.32, Fig.25)

竪穴部の南東方にカマドをもつ竪穴住居跡である。平面形は短軸で290cm、長軸で335cmの長方形を呈する。確認面から床までの深さは20cm。床には、著しく硬化した部分はない。カマドも袖部と考えられる部分で、少量の白色砂質粘土が確認できただけであった。遺物の多くは、カマド付近から出土した。カマド袖の近くで検出したピットは、深さが50cmある。床の状況やカマドの火床部が明瞭でないことから、この住居は長い間使用されなかったと考える。

SI-11 (PL.33, PLAN 42)

短辺が430cm、長辺が500cmの長方形の竪穴部をもつ住居跡である。壁の下には溝が全周する。床面は、確認面から40~50cm低い。支柱穴は4本であるが、掘形の形状を見ると少し不整形なので、柱の建て替か柱の抜き取りが行われたと考える。その他にもカマドの反対側に、出入口の施設用と思われるピットがある。カマドは天井部が陥没しているが袖の部分は遺存しており、内側の火床部から甕や杯がカマドの前からも杯が出土している。煙道部は壁から50cmほど外にでる。

SI-12 (PL.33, Fig.27)

確認面から床まで約20cm深さを確認した住居跡である。覆土中には、ローム粒子・ロームブロックが多量に混じる。確認できた住居の形はやや不整形の部分もあるが短軸で300cm、長軸で320~370cmをはかる。竪穴部内から柱穴は確認できなかった。カマドの遺存状況も悪く、袖の構築材をか

Fig.25 松崎播磨遺跡 竪穴住居跡平面図 (1)

ろうじて確認できたにすぎない。遺物は、カマド近くから多く出土している。

SI-13 (PL.33, Fig.27)

一辺320~330cmの正方形の竪穴住居跡である。床は、確認面から約40cmの深さがある。柱穴は確認できなかった。壁の下にはカマドの部分のをぞいて溝が巡る。カマドはかなり壊れており、構築材の白色砂質粘土がかなり散らばっていた。遺物は、カマド東側の壁近くで出土した。

SI-14 (PL.33, PLAN 43)

SI-14は、一辺320cmほどのやや菱形の竪穴住居跡である。カマドの部分を除いて、壁の下には溝が全周する。カマドは、北壁のやや東よりに位置する。カマドの遺存状態はよく、袖の内側もかなり焼けている。床面は確認面から50cmほどであるが、煙出し部の張り出しは短く15cmほどである。カマドの反対側で、出入口施設の掘形かと思われるピットを確認した。

SI-15 (PL.33, Fig.27)

方形の竪穴部をもつ住居跡であるが、4辺のうち1辺は310cmと短く、他の3辺は350cmある。壁の下には、溝が巡る。カマドは、北東壁の中央に位置する。遺存状態は悪く、北西側の袖の位置はおおよそわかるが、南東側の袖は明かでない。カマドの反対側にピットが一つあるが、他に柱穴は確認できなかった。

SI-16 (PL.33, PLAN 44)

短軸で320cm、長軸で350cmのやや長方形の竪穴部である。壁の下の溝は半周する。溝が切れる南東隅は、床の下が窪んでおり、白色粘土で貼り床されている。カマドの遺存状態はよくなく、カマド構築材の黄白色砂質粘土の状況から袖が推測できる。遺物は、カマドのなかとその東側で集中して出土した。

その他の遺構 (PL.34)

その他に竪穴住居SI-14とSI-16の間で、二つの落ち込み(SX-01とSX-02)を確認した。

しかし、二つの落ち込みは非常に浅く、平面形も明確でないことから遺構ではないと判断した。

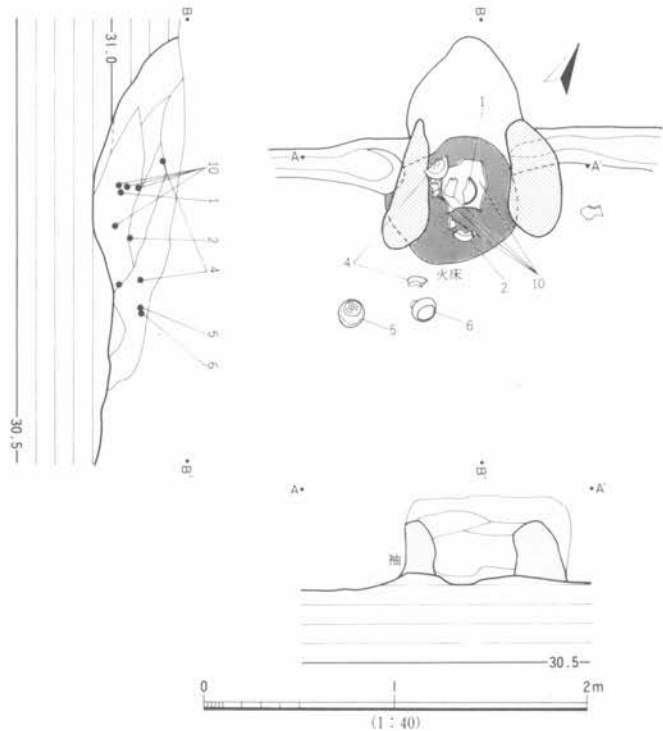
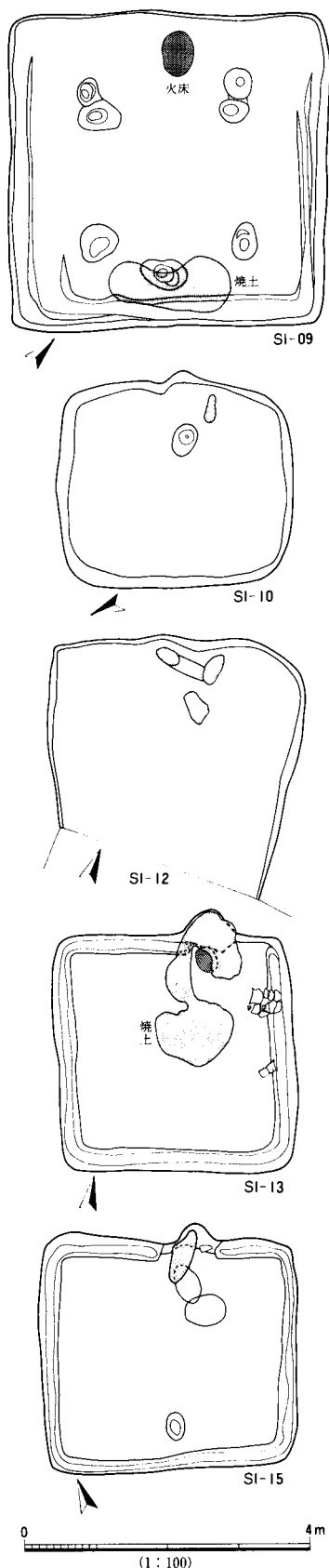


Fig.26 松崎播磨遺跡 SI-11カマド実測図



6 烏内遺跡

烏内遺跡は、先にも記述したように路線の中央部分は既に発掘調査が終了しており、今回は歩道部分の調査である。そのため、今回の成果だけでは十分な結果は得られないので、先の調査結果および成果を参考にしながらみていくこととする。

路線内の北側からは、面積のわりにはかなりの数の縄文時代後期の土器片が出土した。しかし、今回の調査では遺構は確認できなかった。また、中央部から南側にかけては、中世の遺構が集中しており古代の竪穴住居跡もかなり壊されている。以下に、確認した遺構の概要を調査区にそって西側から説明する。

SX-519 (PLAN 46)

SX-519は、先の調査で401号跡として報告された竪穴状遺構の東隅になる。先の調査では、中近世の竪穴遺構とされているものである。今回の調査でも住居跡と考える明確な根拠はなく、出土遺物もないことから、先の報告のとおり中近世の竪穴遺構と考えておく。遺構の北側で厚さ5～6cmの白色粘土を確認した。

SI-538 (PL.36, PLAN 46)

SI-538は、先の調査では検出されていない遺構である。カマドを北東壁に備えた竪穴住居跡である。支柱穴は4本である。確認面から床面までは25cmである。カマド及び住居の南西壁が攪乱されている。カマドは袖の一部が遺存しているものの残りは悪い。壊れたカマド内から甕の破片が少量出土しているが、明確な時期の確定できる資料ではない。

SI-512 (PLAN 46)

SI-512は、先の調査で023号跡とされた竪穴住居跡の南東隅にあたる。確認面から床までの深さは、7～8cmである。南壁の下では溝を確認できたが、東壁下では確認できなかった。

Fig.27 松崎播磨遺跡 竪穴住居跡平面図 (2)

SI-543 (PLAN 46)

SI-543は、調査区内で半分ほど確認した竪穴住居跡である。住居では明確な床と北壁でカマドを検出した。カマドは基部が僅かに残る程度で、火床部もよく硬化しているがほとんど赤色化はしていない。また、調査面積も少なく、攪乱もうけていることから遺物は確認できなかった。

SI-520 (PL.37, PLAN 47)

SI-520は、先の調査で024号跡とされた竪穴住居跡の東側半分にあたる。掘り込みは、しっかりしているが図化できた遺物は1点だけである。前の調査の成果と合わせると、一辺520cm前後の竪穴住居跡に復原できる。支柱穴は4本と思われるが、そのうちの3本を検出した。確認面から床までの深さは30cmほどである。一部は溝SD-508で壊されている。

SI-521 (PL.37, PLAN 47)

SI-521は、先の調査で030号跡とされた遺構の東側部分になる。先の調査では遺構の性格は不明であったが、今回の調査で北壁中央部でカマドの痕跡を確認したことから、竪穴住居跡であることが明らかとなった。遺構の中央部は溝SD-511で壊されており、不明な点が多い。壁の下では溝を確認し、カマドは火床部のみ確認できた。確認面から床までの深さは10cmほどである。

SI-536 (PL.38, PLAN 48)

SI-536は、先の調査で005号跡とされた遺構の北東部にあたる。遺構の北側は溝SD-504で切られている。壁の内側には深さ4cmほどの溝が巡っている。北東壁の中央部でカマドを確認した。カマドの袖は確認できなかったが、カマドの構築材と思われる山砂が検出されている。床は確認面から20cmほどの深さがある。今回調査した竪穴住居跡では、遺物が多く出土した。

SI-534 (PL.38, PLAN 48)

SI-534は、先の調査で007号跡とされた住居跡の東側半分にあたる。東壁と南壁の下で浅い溝を確認した。この溝から少し内側でも、深さ4cmほどの溝を確認した。カマドは完全に袖の部分が壊されており、火床部が10cmほど窪んでいるにすぎない。床面から破片ではあるが、かなりの遺物が確認された。

方形区画に伴う遺構 (PL.39)

先の調査で路線の南側で方形に整形された区画が確認されているが、今回の調査でもこの地点を中心に中近世と思われる遺構がかなり検出できた。ここでは、遺物および遺構の形状の明確なものを紹介する。

SK-523 (PL.40, PLAN 50)

SK-523は、竪坑と地下からなる地下式土壇である。竪坑の入口部の上部に白色粘土が詰められている。覆土はローム土が主で、埋め戻した可能性もある。地下室の一辺は約120cmあり、平面形は正方形である。確認面から底までの深さは、約200cmある。

SK-530 (PLAN 51)

SK-530も、竪坑と地下室からなる地下式土壙である。覆土の下層は天井部が陥没したローム土が主体である。完掘していないが、地下室の奥行きは最大で120cm、高さは高さ65cmある。

SK-533 (PL.41, PLAN 51)

SK-533は、人骨が出土した地下式土壙である。天井部の一部が崩壊している。竪坑は、幅80cm、長さが45cmで、地下室部の底面は一辺110cmの正方形である。地下室部の床面と竪坑の比高は110cmである。覆土中には炭化粒子が多く混じり、人骨は崩落した天井部のローム土層の上の層から発見された。人骨は、検出時にはかなり形をとどめていたが、取り上げ後にはかなり細かく割れてしまった。また、人骨の近くから「永楽通寶」4枚と二つに折れた刀子も出土した。出土状況からみて、これらの人骨および副葬品と思われる遺物は、この地下式土壙に埋納されたものではないと考える。

SK-542 (PL.41, PLAN 51)

SK-542は、縄文時代の陥穴と考える遺構である。底面はほぼ平坦で壁は垂直に立ち上がる。長さが200cmほどで、幅は広いところでも30cmしかない、非常に細長い形をしている。

SK-515・SK-514・SK-517・SK-513はいずれも、方形の浅い土壙である。

ほかにも多数の土壙状の遺構を確認したが、遺構の性格は明確でない。

他に、数状の溝も確認した。

SD-506 (PLAN 49)

調査区が一番北側の溝である。深さは確認面から80～100cmある。しっかりした掘り込みの溝である。溝は南に向かうにしたがって少しずつ浅くなり、溝SD-508と交差する地点では深さは5cmほどになる。

SD-508 (PLAN 49)

SD-508は、路線中央部の成果も含めて考えると、台地の中央部で方形に巡る溝である。溝の深さは確認面から20cmほどである。溝は複雑で今回調査した西側部では2条に分かれているようである。東側の調査区で検出した溝も2条に分かれており、深さも20cmと50cmである。この溝に伴う遺物は確認できなかったが中世と考える。

SD-511

表土からの土層の確認できる部分でみると、溝は深さが20cmで掘り込みは耕作土にはおおよんでいない。

SD-528

深さ10cmほどの溝である。

第4章 出土遺物

今回の調査では、多くの遺物が出土しているので、古墳時代以降の遺物、縄文時代の遺物、石器に分けて説明する。

1 古墳時代以降の遺物

(1) 上福田和田谷津遺跡

SI-01 (PL.42)

1は、高杯の杯部と考えられる。杯部は直線的にひらき、ミガキで丁寧に仕上げられている。内面は黒色処理されている。棒状部は径45mmくらいと考えられる。2と6は、底部外面を除くと丁寧にミガキで仕上げられ平滑で、口縁部がやや厚手ではあるが全体に薄いつくりである。3は、2や6に比べるとやや厚手である。4も最後は雑ではあるがミガキで仕上げている。口縁端部はシャープである。5は二次的に火をうけている。6は底部外面を除いて非常に細かいミガキで仕上げられ、漆状の樹脂が塗布されている。7もミガキで仕上げられているが、やや雑な感じがする。8は、やや深めの杯でミガキが少し入っている。口縁部は、ヨコナデで仕上げられ、僅かに外にひらく。9は、カマドで使用された煮沸用の甕である。11の外面は砂粒の移動が明瞭で、器表面は雑に仕上げられた感じがする。12は、内面頸部下に粘土紐の接合痕が明瞭である。13は、白色の砂粒がめだち胴下半は縦方向にミガキで仕上げられており、常総型の甕である。

SI-02 (PL.43)

1は須恵器の口縁部である。白色粒子がかなり混じり、焼成はよい。沈線が入られたのちに波状文が施文されている。頸部以下の形は不明である。2は須恵器の蓋である。僅かなかえりが内側にある。雲母がめだち、すこし脆弱な焼きなので常陸産と考える。蓋頂部のつまみは不明である。3の杯はやや雑なヘラケズリで仕上げられ、口縁端部はヨコナデで仕上げられている。4は畿内産土師器を模倣したと考える土師器の皿である。内側は丁寧にミガキで仕上げられ、表面は非常に滑らかである。外側は細かいヘラケズリで仕上げられている。胎土も精選されているようである。5はかなり長胴化した甕である。6～9は土製玉である。玉はほぼ球形で中央に穿孔されている。6の玉が少し大きい。他はほぼ同じくらいの大きさである。10は土製の環状製品である。色調は黒く、断面は内側がやや三角形になるが外側はほぼ丸く仕上げられている。形だけ考えると金属製の耳環に似ている。色から考えると、銀で装飾し



Fig. 28
上福田和田谷津遺跡
SI-02出土瓦実測図

た耳環を模倣したものかもしれない。11は土製の紡錘車である。上面は平滑であるが、下面は中央部が少し窪んでいる。孔内は横方向の擦痕がある。12の砥石は、上部に穴があげられ下げ砥石と使用されている。石材は凝灰岩質で表面はかなりザラついている。Fig.28の男瓦は、細片であるが竪穴住居SI-02の時期を決めるには重要な遺物である。時期的なことを考慮すると、この古瓦は、7世紀後半に創建された龍角寺の瓦と考えられる。

(2) 上福田保町遺跡

SI-01 (PL.44~46)

1は底部が非常に厚い杯である。体部は雑なミガキで仕上げられている。2は大型の杯の口縁部が大きくひらいた形のものである。口縁部はヨコナデで仕上げられている。3は口縁部が直立気味の小型の甕である。5は頸部に低い段がつく甕である。3~5までは外面ヘラケズリ、内面は工具で雑にナデで仕上げている。6~8は甕であるが、3点とも似た調整で仕上げられており、接合関係は特定できないが2個体になるものと思われる。この竪穴住居跡からは、土器とともに多量の土製玉と農耕具の模造品のようなものが出土している。そのうち土製玉は、ほとんどが同形同大である。穿孔は、稲科の植物で両側から行われているように観察できる。ほぼ球形に作られているが、穿孔された部分はやや平らになる。農耕具の模造土製品は、カマドの壊れた袖の上から出土した。46は土製の鋤先の模造品と思われる。つくりは丁寧で、刃の部分は薄く表現している。耳の部分は円柱状にはなっているが、木製の身に装着する扶れの部分も深さ3mm程度であるが表現してある。47と48は土製の鎌先の模造品である。刃の部分は指で挟んで薄くしている。通常の曲刃鎌とは反対に外に反っているが、刃部の表現・基部の表現から鎌の模造品と考える。51の土製紡錘車はヘラケズリの後ナデで仕上げられ、全体に平滑である。孔は一定の大きさにあけられている。52の紡錘車は偏平であり、ヘラケズリで仕上げられており、孔は中心部が狭く両側からあけられている。49は底部が厚く口縁端部がシャープな手握土器である。50のつまみは大きくて胎土中に細かい雲母が混じり、かなり丁寧にロクロでつくられている。これが蓋のつまみの部分ならばかなり大きな蓋が復原できる。

Fig.29の泥めんこは、表土層から出土したものである。

(3) 仲兵遺跡

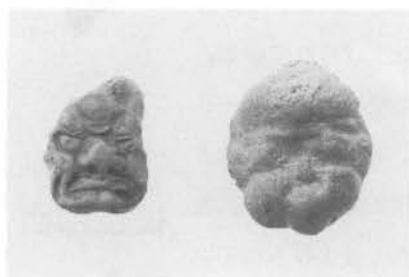


Fig.29 上福田保町遺跡出土泥めんこ

SI-01 (PL.46)

仲兵遺跡では1軒の竪穴住居SI-01しか確認できなかったが、遺物も非常に少ない。図化できたのは2個の遺物であり、他にはほとんど遺物はない。1は皿状にひらく杯である。底部は火を受けかなりいたんでいる。口縁端部は短く僅かに外にひらいている。2は常総型の甕の下半部である。破片はかなりあるが、こ

れ以上接合できなかつた。白色の砂粒が多量に混じり、ミガキで仕上げられている。

(4) 下福田稻荷原遺跡

SX-02 (PL.47・48)

SX-02の周辺から多量の手捏土器が出土している。この遺構は平面形が明確ではなく、カマドも確認されていないので、竪穴住居跡とするには疑問もあり、祭祀に関係した遺構と考える。出土遺物はかなりの数の土器破片が出土しているが、人為的に破碎されたかと思われるほど接合しない。1はロクロ使用の内外面赤く塗られた杯である。底部は不定方向のヘラケズリで仕上げられている。2は皿状にひろく杯であるが、1同様に内外面赤彩されている。口縁部のヨコナデは明確ではない。3はロクロを使用した非常にシャープな上がりの甕口縁部である。口縁下に断面三角形の凸帯が巡る。4は小石がかなり混じり、焼成もよくない須恵器の甕である。甕は外面に平行タタキの痕跡が明瞭であるが、内面は丁寧にナデで仕上げられており当て具痕は不明である。底部には藁状の圧痕のような細かい凹凸がついている。底径のわりに器高が低いのが特徴である。外面の底部周囲はヘラケズリで仕上げている。5は須恵器の蓋である。かなり小石が目立つ。6は底部が回転ヘラケズリ、体部の最下半にも回転ヘラケズリがみられる。内面は灰色であるが外面は淡いセピア色である。同じような杯の破片は多数あり、内面がセピア色のものもある。重ね焼きでできたものと考えられる。7は高台の付く杯である。高台は1.1cmある。やや大きめの白色砂粒がめだつが焼きは非常によい。8の「倍」の字のある墨書土器は、SX-02の南側から出土している。底部の中央部には糸切り痕が残り、周囲はヘラケズリで仕上げられている。手捏土器はいくつかの型式に分けることができるが、いずれも特別な調整を伴うものではなく、指でこねてつくられた物である。また、1つだけではあるが土製の玉は丁寧に作られており、他の遺跡から出土している物と同じつくりである。

(5) 上福田13号墳 (PL.49)

上福田13号墳から出土した土器は、前庭部から出土した須恵器の高台付き杯2点、蓋2点、底部に焼成後に穿孔されている甕、土師器杯1点と内側周溝の北西隅周溝底から出土した杯が2点である。他に石室の流土の最上部から出土した杯と、前庭部近くの流土から出土した罎が1点ある(Fig.30)。このうち前庭部から出土した土器は、完形かほぼ完形に復原できた。1は底部に木葉痕を残す、平底の杯である。内面は黒色処理されている。2と3は、周溝の北西隅近くから並んで出土した同形同大の杯である。内外面とも赤彩されている。器表面はなめらかで、非常に丁寧に作られている。前庭部の整地からつづれた

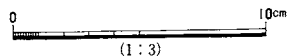
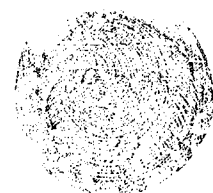
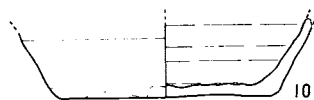
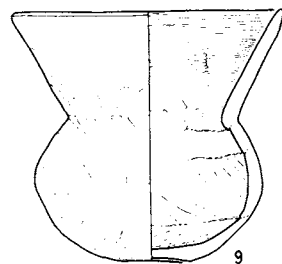


Fig.30 上福田13号墳出土土器

状態で出土した須恵器の蓋4は、かなり偏平な宝珠つまみに僅かなかえりがつく。内外面ともなめらかである。天井部の回転ヘラケズリの範囲は広く、白色砂粒子がめだつ。5は、つまみの宝珠形の下部が明確にくびれる須恵器の蓋である。器表面はザラつき、ロクロの使用痕が明瞭である。回転ヘラケズリの範囲はつまみの周辺だけである。6は口縁端部が僅かに内側に曲がる。口縁部の下半部までヘラケズリされている。胎土には僅かに白色粒子が混じる。7は6よりも深く、口縁部は大きくひらき、底部は高台とほとんど同じ高さである。Fig.30-1は上福田13号墳に伴う土器ではない。全体に丁寧なつくりである。Fig.30-2は石室内の流土上層から出土した土師器の杯である。口縁部を欠き、底部には中央部に糸切痕が残る。

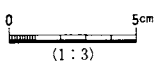
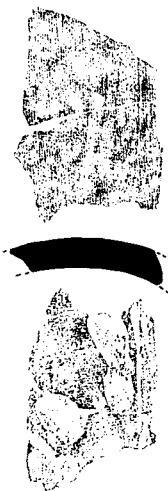
(6) 松崎播磨遺跡

SI-01 (PL.50)

1は土師器の杯である。2は甕の底部の破片である。3は、口縁部が内湾する鉢である。外面には粘土紐の接合痕が確認でき、底部近くでは一部指頭でおさえている。口縁部は横方向のナデで仕上げられている。底部には木葉痕がつく。

SI-02 (PL.50)

4は常陸産の須恵器蓋の一部であろう。つまみの先端も僅かに欠けている。軟質で灰色を呈するし、雲母を多量に含む。ロクロの回転は時計回りである。5はロクロ使用の土師器杯である。白色粒子を含む。6は底部中央に回転糸切り痕を残す。体部下半から底部の周縁部は手持ちのヘラケズリで仕上げている。7は口縁部に油煙が付着している。底部は回転ヘラケズリ、体部下半は手持ちヘラケズリで仕上げられている。8は体部に墨書文字が書かれたロクロ土師器杯である。文字があり「ツ里」と読める。底部は糸切り後、細かいヘラケズリで仕上げている。



9はロクロを使用していない土師器杯である。体部、底部とも手持ちヘラケズリである。灯明皿として使用されており、2か所に煤が付着している。10は胴部に、焼成後の穿孔がある小型の甕である。口縁端部は、外側に浅い2条の沈線が巡る。11はカマドに使用されていたと思われ、カマド構築材の山砂が付着している。胎土には白色粒子・雲母が混じり常陸産の甕であろう。12は、口縁端部を外側につまみ出している甕である。13は必ずしも焼成のよい須恵器の甕ではない。胎土中には細かい白色粒子が混じる。14の甕底部破片は、外面のタタキが確認できない。胎土中には非常に細かい白色粒子と黒色粒子が混じる。

SI-03 (PL.51)

1は完形品のロクロ土師器杯である。外面に「人」、内面に「酒」の墨書文字が書かれている。底部は、中央部に回転糸切り痕が残る、周囲は手持ちのヘラケズリで仕上げられている。2のロクロ土師器杯は底部および体部下半

Fig.31 松崎播磨遺跡
SI-08出土瓦実測図

が手持ちヘラケズリである。3は非常に小型の甕である。ほぼ完形で外面のヘラケズリは胎土がやわらかい間に行われており明瞭である。4は口縁端部を上方につまみ上げている甕である。5も口縁端部が外方に少しつまみ上げられている。内面は板状工具で横方向にナデている。6は外面は平行タタキの痕跡が明かであるが、内面の当て具ははっきりせず円形の窪みがついている程度である。白色粒子が混り、外面は灰色、内面は淡い黄土色、断面は淡い茶褐色を呈する。

SI-04 (PL.51)

7は須恵器蓋のつまみの部分である。焼成はよくなく灰白色を呈し、胎土には石英粒子を多く含む。常陸産の可能性が高い。8は小振りの杯である。内面のミガキはかなり細かく集中的に行われている。9の土師器の杯は、内外面ともミガキで仕上げられている。10の杯は外面がヘラケズリで内面がミガキで仕上げられている。11の椀も、外面がヘラケズリ、内面はミガキで仕上げられている。

SI-05 (PL.51)

12は口縁端部にヨコナデが行われている。外面はヘラケズリで、内面のミガキもさほど細かくはない。14はほぼ完形の椀で、外面は工具の痕がついているが横方向のヘラケズリで仕上げている。内面も明瞭なミガキは確認できないが、砂粒はよく沈んでいる。この土器は、つくりが丁寧であるばかりでなく、土器の仕上げ方や器形を見ると7世紀に畿内で作られた土師器の「飛鳥杯A I」類によく似ているように思える。

SI-06 (PL.52)

1は須恵器の杯である。口縁部の外側はヨコナデで仕上げられており滑らかである。底部は手持ちのヘラケズリである。雲母がかなり混じり焼成もよくなく軟質であることから常陸産ではないかと考える。2は粘土紐を巻き上げてつくられた椀である。粘土紐の接合もよくなく調整も雑である。内面は工具でナデられている。底部には、木葉痕が残る。3は頸部下に煤が付着することから煮沸用の甕であろう。外面はミガキと幅のあるミガキ的なナデで仕上げられているようである。底部には木葉痕がついている。4の甕は口縁端部に細い線が巡る。器表面の剝離と変色からみて煮沸用に用いられた甕と考える。

SI-07 (PL.52)

5はカマド近くで表採された土器である。内面は黒色処理されている。6の甕は長胴で口縁部も大きく屈曲しない。口縁端部の2cmほど下から底部まで内外面とも剝離が著しい。煮沸用の甕と思われる。

SI-08 (PL.53)

1は、須恵器長頸壺の上部である。全体にシャープに作られている。東海地方の製品である可能性が高い。2～5は全体に黒ずんだ焼き上がりで、脆弱な須恵器である。また、かなり広

い範囲で回転ヘラケズリが行われている。3と4は外面に浅いが沈線巡る。5の底部は回転ヘラケズリの後にナデで仕上げられ、その後に篋による記号がつけられている。6は須恵器甕の口縁部である。外面は平行タタキのち一部ナデで仕上げている。口縁端部はかなり摩滅しており判然としないが、少し上方につまみ上げられたものと思われる。7は畿内産土師器を模倣したと思われる椀である。外面はヘラケズリ、内面は横方向のミガキで仕上げられている。口縁端部に沈線はない。8も畿内産土師器を模倣したと思われる皿である。外面はヘラケズリ後一部ミガキ、内面はミガキで仕上げられている。9は甕の口縁部と思われる破片である。内外面とも横方向のナデで仕上げている。10も甕口縁部の破片である。外面はヘラケズリで仕上げられている。ヘラ工具のあたり痕がついている。11は甕の底部である。外面はヘラケズリ、内面は工具でナデで仕上げている。

SI-09 (PL.53)

13は甕の口縁部である。外面は調整不明であるが、内面は工具でナデている。

SI-10 (PL.53)

14は須恵器の杯である。15は須恵器の甕の底部である。胎土中に多量の白色小石が混じる。底部は剝離が著しく調整不明。外面は平行タタキが行われていると思われるが、底部周辺は荒いヘラケズリで仕上げられている。

SI-11 (PL.54)

1は外面がヘラケズリ、内側の口縁端部が横方向のミガキで仕上げられた土師器の杯である。2はロクロで整形された土師器杯である。外面は、かなり高い位置まで回転ヘラケズリで仕上げられている。3は須恵器の蓋である。かえりの部分は小さいが天井部よりも下にさがる。4～6は須恵器の杯である。4は胴中位まで回転ヘラケズリが行われている。内面は口縁端部が僅かに窪んでいる。底部は回転ヘラケズリで仕上げられ「×」のヘラ記号がある。5と6も胴部のかかなり上まで回転ヘラケズリが行われている。5は口縁端部の内面に明瞭な沈線がある。底部は回転ヘラケズリの後不定方向のナデで仕上げている。6は口縁端部内面は浅く窪む程度で沈線にはなっていない。底部は、単位は不明であるが回転ヘラケズリで仕上げられている。

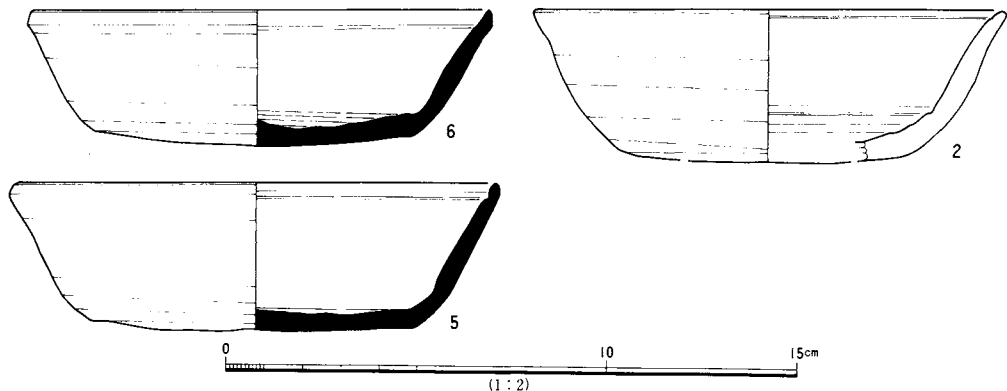


Fig.32 松崎播磨遺跡 SI-11出土須恵器杯と土師器杯

以上のように、2の土師器杯と4～6の須恵器の杯は焼成方法こそ違おうが、大きさと仕上げの特徴が同じ土器である。2の土師器の杯は、4～6須恵器の杯を意識したものではないかと思われる。7は完形の小さい手捏土器である。内外面とも指の痕が残る。8は土師器の小型甕である。9は、胴部下半から下の部分だけであるが土師器甕の破片である。10はやや長胴化した甕である。外面はヘラケズリ後に上部はナデ、下部はミガキで仕上げられている。胎土には雲母は混じらない。

SI-12 (PL.55)

1は口縁端部の内側に沈線が入る須恵器の杯である。色調は外面が黄褐色および黄灰色で内面はやや橙色な軟質の須恵器である。2は外面がヘラケズリ、内面は底部近くがナデ、口縁部近くがミガキで仕上げられた土師器の杯である。外面は荒れてみえるが内面はかなり平滑に仕上げられている。3の土師器杯も2と似た土器である。外面は口縁端部までヘラケズリで仕上げられ、内面は粗いミガキで仕上げられている。2と3は、ともに底部外面はナデで仕上げられている。4は、かなり大型の皿である。外面は横方向のヘラケズリの後、雑なミガキで仕上げられている。内面は非常に細かいミガキで仕上げているが、暗文は描き出していない。胎土も精選されたもののようで小さな小石も混じっていない。内面はやや橙色に近い色調である。畿内産土師器を模倣した土器と考える。5は粘土紐の接合痕を残した口縁部のやや長い土師器の甕である。6は外面が縦方向のヘラケズリ、内面が工具でナデで仕上げられた甕の上半部である。胎土中には白色砂粒を多く含む。7は外面がヘラケズリ、内面がナデで仕上げられた土師器甕の上半部である。胎土中には白色砂粒を多く含む。8は土師器甕の底部近くである。外側はヘラケズリ、内面は板状工具によりナデで仕上げられている。9は破片は多数あるが、これ以上復原できなかった常陸産と思われる土師器の甕である。外面はミガキ、内面は工具によるナデを施し最後はナデで仕上げている。胎土中には雲母と白色粒子がめだち、色調は淡黄色を呈する。外側の胴部中に煤が付着しており、煮沸用の甕と思われる。

SI-13 (PL.56)

1は粘土紐の接合痕を残した甕の一部と考える。外側はヘラケズリの後に雑なミガキ、内面は丁寧な横方向のナデで仕上げている。2と3は常陸産の土師器の甕である。口縁端部がやや外側に向かってつまみ上げられている。胎土中には雲母と白色砂粒を多量に含んでいる。頸部下には工具のあたりが残り、胴下半は縦方向のミガキで仕上げられている。内面は一部ヘラケズリが行われている。

SI-14 (PL.56)

4は甕の下半部である。外側はヘラケズリで仕上げられているが、器表面の一部がカマドで使用されていたことを物語るように摩滅している部分がある。内面は、底に近い部分がヘラケズリで仕上げられ他の部分はナデで仕上げられている。

SI-15

竪穴住居跡SI-15からは、図化できるような遺物は出土していない。

SI-16 (PL.56・57)

1～11は暗文こそないものの、畿内産土師器を模倣した可能性が高いと思われる土師器の杯である。1は外面が手持ちのヘラケズリ、内面が横方向のミガキで仕上げられている。口縁端部は丸く仕上げられている。2は外面がヘラケズリの後にミガキで、内面も横方向のミガキで仕上げられている。ほぼ完形で、焼きも非常によく色調は淡黄色である。口縁部は内面に弱い稜をもつ。3は外面がミガキ的なヘラケズリ、口縁部はヨコナデの後に端部のみ細かくミガキ的なヘラケズリが行われている。内面はやや雑なミガキで仕上げられている。口縁端部は丸く終わる。中央にひびが入り割れている。4はかなり歪んだ杯で、口径の復原は困難である。口縁端部はヨコナデ、外面はヘラケズリで仕上げられている。5と6は外面がヘラケズリで仕上げられている。口縁部はヨコナデを行った後、内面には浅い沈線を巡らしている。7～10も同様の作りであるが、内面はミガキで仕上げられている。7の口縁端部内面の沈線は非常に弱いものであるが、明らかに沈線を意識したものとする。8は僅かに歪がある。8と9の外面は、ヘラケズリの後に横方向のミガキが入っている。10の内面のミガキは縦および斜め方向のミガキである。11は、外面ヘラケズリ、内面ミガキで仕上げられている。口縁端部の外側に沈線が巡る。12は大振りの皿である。外面はミガキ的な粒子が沈むヘラケズリで仕上げられ、底部は一定方向のヘラケズリで仕上げられている。内面のミガキは横方向にかなり細かく行われている。特に中央部は丁寧な感じのするミガキ方である。13の杯は、色調は淡黄色、焼きは非常によく、他の杯類と一緒に焼かれたものと思われる。底部は、下方に突出し、木葉痕が明瞭に残る。口縁端部はシャープに仕上げられているが、粘土紐の接合痕が残る。14と15は小型の甕である。口縁部はヨコナデで頸部下に弱い稜ができる。外面へ

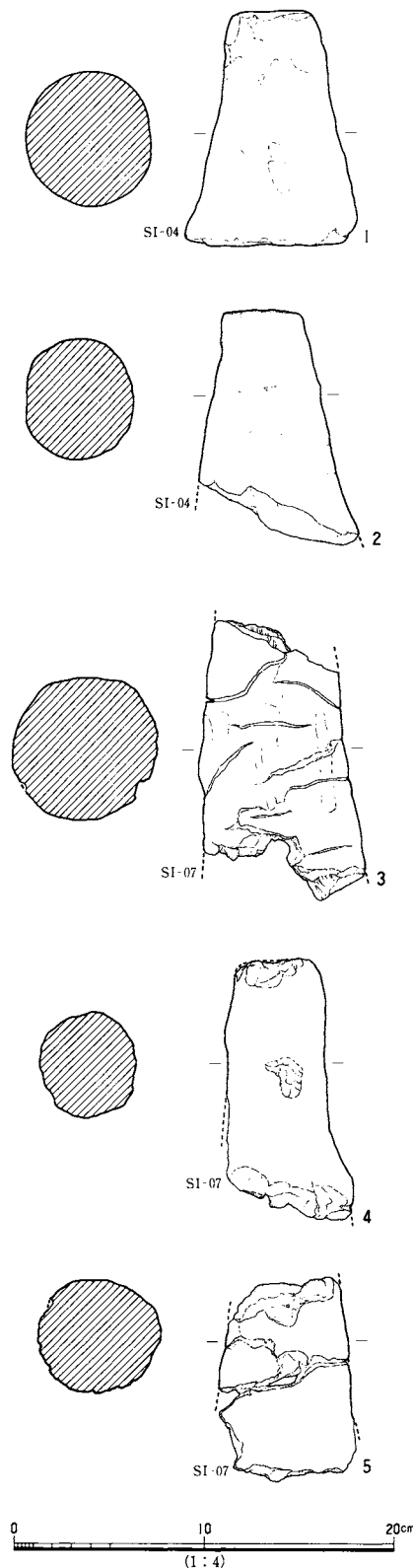


Fig. 33 松崎播磨遺跡 出土土製支脚

ラケズリ、内面はナデで仕上げられている。16～19は甕の破片である。16は外面に粘土紐の接合痕が残り、内面には工具のあたりが残る。19は外面ヘラケズリの後、部分的にミガキが行われている。

土製支脚 (Fig.33)

土製支脚の出土が確認されているのは、SI-04とSI-07から2本ずつとSI-08からの1本である。いずれも粘土塊を集めて整形されており、粘土塊ごとにひびが入ったり欠損している。形状は円錐台形をしており、下部がスカート状にひろく。

遺構外出土土器 (Fig.34)

調査地点の各地からも土器が出土しているが、図化した土器は3点である。3点とも土師器杯である。3は内外面とも赤色塗彩されており、また内面に放射状に暗文もある。これ以外にも土器片はあるが、それらのなかには先に紹介した住居跡から出土した土器とかけ離れた時期の土器や特殊な遺物は含まれていないので、遺存度のよい3点のみ図化した。また、須恵器の甕は、別に紹介する。

鉄製品 (PL.58)

1と2はSI-04から出土した馬具である。素環の鏡板がつく銜は、鏡板は完存するが片方の銜がない。鏡板と銜はかなり錆がひどく、一部付着している。立ち聞きの上部はやや丸くなる。銜の環は、鏡板に組む方が大きく、銜同士が組み合う方は一回り小さい。銜の他方の銜と組み合う中央側の環は、一部かなり細くなっている。X線写真で見ると僅かであるが隙間があり切れている。ただこれが擦り切れたものと考え、擦り切れた部分が環の内側ではなく外側なのでともこのような形状ではなかったかと考える。全体にきゃしゃな馬具である。2はSI-03から出土した刀子である。柄の根元の部分を銅製の金具で締めている。柄は先にくにしたがって徐々に太さを増している。3は、SI-08から出土した刀子である。柄の木質部を除くとほぼ残っている。柄は根元の部分で1.5cmほどである。4はSI-04から出土した鑿と思われる鉄製品である。刃先は錆がひどくX線を照射しても明確な先端は確認できないが、遺存状態から考えて直線的な刃先と考える。柄の部分には木質が遺存しているが本来の形状は復原できない。5はSI-08から出土した鉄鏃である。錆がひどいが片方の面は平らで反対側が少し膨らんだものと思われる。6はSI-04から出土した鉄鏃である。錆でかなり膨らんでおり、X線を投射してもあまりはっきりしない。ただ棘状突起は明瞭である。7はSI-08から出土した鉄片である。あまり遺存状態はよくないが鎌の

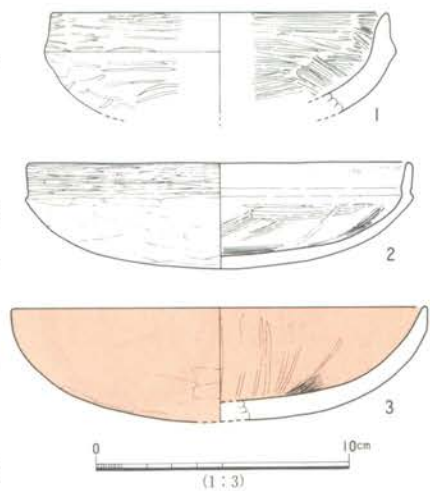


Fig.34 松崎播磨遺跡 遺構外出土土器

破片かと思われる。

土製品 (PL.58)

8と9はSI-01から、10はSI-06から出土し、他の3個は調査区の各地から出土した土製の玉である。8の玉は、棗玉風にやや縦長で他のものに比べて小さい。器表面は荒れている。9と10はほぼ球形であり、中央に小さく穿孔されている。11は、玉の大きさは9や10とほぼ同じであるが、孔が非常に大きくあけられている。他の二つは、非常に大きく形も球形ではないが重さは同じである。

(7) 烏内遺跡

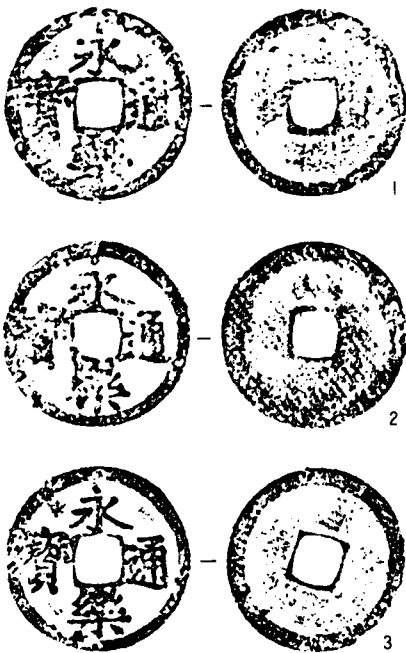
烏内遺跡からは、調査遺構数のわりに堅穴住居跡に伴う遺物は少ない。

SI-520 (PL.59)

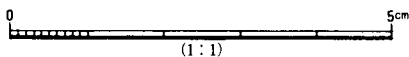
1はSI-520出土の須恵器杯である。口縁は端部が薄く内面に浅い沈線が巡っている。底部の周囲は回転ヘラケズリが行われている。底部は回転ヘラケズリの後ナデで仕上げられている。焼成はよく青灰色を呈している。遺存度がわるく、底部がやや下方に突出して復原できたが、本来の底部はもう少し水平かもしれない。

SI-534 (PL.59)

2は、ロクロを使用した土師器杯である。底部は一方方向のヘラケズリ、周囲は手持ちヘラケズリで仕上げられている。口縁端部内側が僅かに肥厚する。器表面の砂粒はよく沈み、淡い橙色を呈する。



3もロクロを使用した土師器杯である。底部周囲が手持ちヘラケズリで仕上げられている。口縁端部は外にひろく。4はロクロを使用した土師器杯の底部である。底部は2方向からのヘラケズリ、周囲は手持ちヘラケズリである。5は口縁部を欠く土師器甕である。器表面がかなり焼け、内面の底部近くは剝離が著しいことから、カマドで使用された煮沸用の甕と考える。6は土師器甕の底部である。底部には回転糸切り痕が残っている。内外面ともナデで仕上げられており、前段階の調整法は不明である。白色砂粒を多く含み、全体に赤みをおびた焼きになっている。7はロクロを使用した土師器甕である。外側には平行タタキの痕が確認できるが、内面は横方向のナデで仕上げられており当て具の形状は不明である。



SI-536 (PL.59)

Fig. 35 烏内遺跡 SK-533出土銭貨拓影図

8は僅かに雲母が混じり白色粒と石英粒がめだつ、須

恵器の杯である。9は焼成がよく器表面は濃い青灰色で、断面は内側がセピア色に焼き上がった須恵器の杯である。口縁端部が僅かに外にひらく。胎土中には白色粒子がめだつ。10は胴中に穿孔がある甕の破片である。穿孔は小さく焼成後に行われている。甕は口縁端部を大きく外にひらき、さらに強く上方につまみ上げている。口縁部の下面には平行タタキの痕がかすかに残る。内側には、当て具の痕跡が半円形に窪んだ部分もある。胎土には雲母と白色砂粒を多量に含む。

SK-523 (PL.59)

11は、SK-523から出土した銅製の柄がついた小刀である。柄は茎のまわりに木質があり、外側を銅製の柄で覆っているものと思われる。銅製の柄は銅板を丸めて作られたようで、板の合わせ目が背の部分で確認できる。

SK-533 (Fig.35)

SK-533は、人骨を伴う地下式土壌であるが、人骨の近くから4枚の「永楽通宝」が密着して出土した。1と2は剥がれたが、3は2枚の銭貨が剥がれず表の拓影図と裏の拓影図は別の銭である。

(8) 須恵器甕 (PL.60)

松崎播磨遺跡と烏内遺跡の調査区各地から須恵器甕の破片が出土しているので、主なものを紹介する。

1～3は、松崎播磨遺跡の竪穴住居SI-04から出土した。1と2は、内面が横方向にナデで仕上げられ、外面のタタキは山形文のようである。3は、特徴的な須恵器甕の破片である。本来ならタタキ板の当て具として須恵器甕の内面にあらわれるような同心円文が外側にある。すなわちタタキ板の文様が、細かい同心円文なのである。胎土には、雲母がかなり混じっている。他にSI-11からも出土している。この種の須恵器甕は、胎土からもうかがわれるように常陸産の可能性が高く、最近常総地域で相次いで確認されている。4は、松崎播磨遺跡SI-08から出土している。外面のタタキは1や2のタタキ板が重複したものとする。5～8は松崎播磨遺跡SI-13から出土した。5はやや薄手で、色調も白っぽい。6～8は、焼成が非常によく、6と8は色調は濃い青灰色で、7はセピア色である。これらに共通しているのは、内面の当て具の痕跡が同じ同心円文で深いことである。9～11は松崎播磨遺跡の調査区内各地から出土した須恵器甕の破片であるが、9と10は6～8と同じであり、11は5とよく似ている。12と13は、烏内遺跡SI-520から出土した須恵器甕の破片である。特徴はともに焼きがよく器厚が薄いことである。色調は外面が灰色で、内面はくすんだセピア色である。外面は細い平行タタキで、13には横にはしる沈線が2本あり、内面は細かく剝離している。

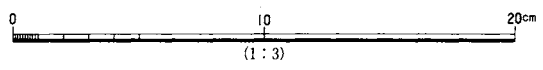
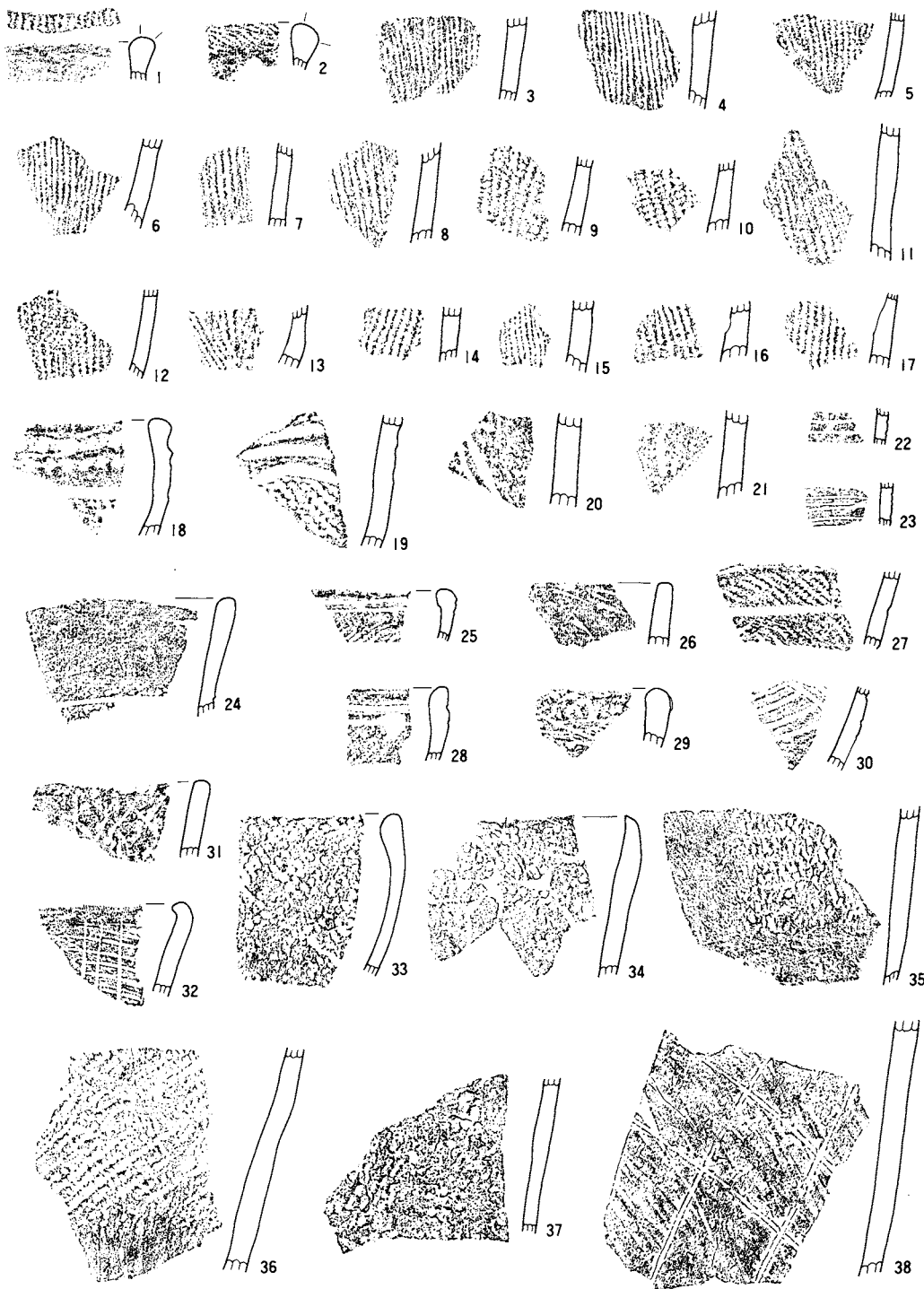


Fig. 36 上福田和田谷津遺跡出土縄文土器実測図

2 縄文土器

北端の上福田和田谷津遺跡から南端の烏内遺跡までは、直線で1.8kmと至近距離に立地する。烏内遺跡以外はいずれも縄文土器片が20～200片足らずの小規模な遺跡である。土器の様相は、烏内遺跡・上福田保町遺跡で堀之内1式が卓越するが、他遺跡では草創期～後期の資料が断片的に散見されるのみで、量的優位性は指摘できない。そのなかで上福田和田谷津遺跡の草創期後半、松崎播磨遺跡の早期前葉、下福田稻荷原・松崎播磨遺跡の後期後葉が特記されよう。

(1) 上福田和田津遺跡 (PL.61, Fig.36)

本遺跡からは総数82点の縄文土器が出土している。内訳は草創期後半21点、中期5点、後期42点、不明14点である。

1～17は草創期後半の撚糸土器である。1・2は外反し肥厚する口縁部破片で、口唇部にRLの横位回転圧痕をとどめる。井草II式。3～17は体部破片で、3～8は撚糸L、9～17はRLが密に施される。いずれも1・2と同一型式と思われる。

18・19はともに幅広で反復ナヅリの顕著な沈線を有するもので、加曾利EIII式土器（古段階）に相当する。20・21・38は堀之内1式土器に相当する。

22～37は加曾利B式である。22・23は横位の条線を有する鉢形の体部破片である。24は口縁部が無文で、区画沈線下に縄文が施される。加曾利B2式。25・28は口端が内肥し、口縁部に沿って2本の沈線が巡らされる。27は2段の縄文帯の体部破片であるが、文様構成は定かでない。29は口縁部に紐線が認められる。いずれも加曾利B3式。30は斜位の条線が交互に加えられる加曾利B2式の鉢であろう。31は格子目状の沈線、32には斜位の条線施文後縦位の条線が施される。33～37は縄文施文の粗製土器で、33は口縁部が内湾肥厚し、34は尖鋭となる。

(2) 上福田保町遺跡 (PL.61, Fig.37)

1～4は意匠内に列点を充填する特徴から、称名寺2式土器として捉え得るものである。厳密には、意匠内に列点を充填するというよりも、1・2・4に顕著なように、意匠描線に沿うかたちで列点が施されるものである。また、列点自体も丸先棒状工具の先端を器面に垂直に押し当てるもので、列点自体のかたちがほぼ円形に近いものとなっている。5は堀之内1式土器で、波状口縁下に、列点を充填する懸垂文が描かれ、口縁部無文帯と胴部縄文帯は、懸垂文間を連結する沈線によって区画される。口縁部は、波状部が他の部位に比してやや肉厚である。6は称名寺2式期ないし堀之内1式期に属する粗製土器である。当該期の東北地方南部の網目状撚糸文を有する土器群を沈線文化し、格子目状のモチーフを表出するものであり、原体は丸先棒状工具である。7は堀之内1式土器で、多截竹管により口縁下に1条の沈線を巡らせ、拓影図左半では平行する懸垂文が描かれる。8は加曾利B1式期の粗製土器であり、9は加曾利

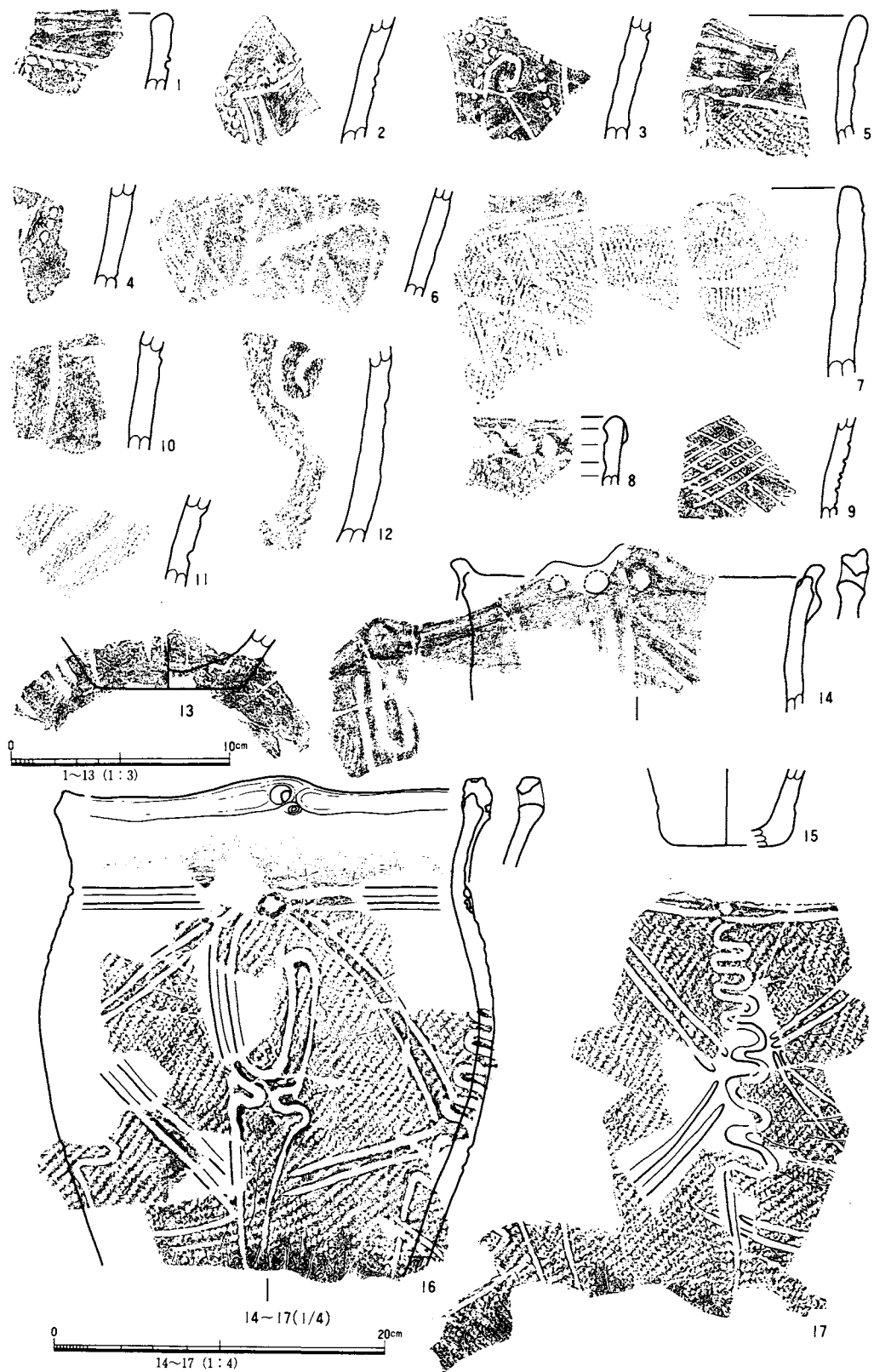


Fig. 37 上福田保町遺跡出土縄文土器実測図

B 3 式土器である。10～12・14～15は、胎土・色調・焼成等から判断して同一個体と思われる堀之内 1 式土器である。14に基づいて記載を進めるならば、推定口径約21.6cmを測る 5 単位の個体である。拓影図正面の単位部には、中央にやや大きめの穿孔が施され、左側には刺突が施される。ともに口縁端部は欠損している。中央穿孔部の右側には、やはり小さめの穿孔が施され、左側欠損部より連なる突起部上面には指頭圧による凹部が形成される。拓影図左端部は、中央部に比して低めの突起部が設けられ、指頭圧による大きめの凹部が形成される。口縁下には水平に巡る稜により文様帯が明瞭に作出され、以下胴部は横位のナデ調整により幅25mm程度の無文帯が作出されるが、この無文部下端と以下の縄文施文部間には横位の明瞭な区画は認められない。突起部下には、ともに所謂H字状文が懸垂文（単位文）として施され、懸垂文同士は斜行文によって連絡されるという基本構成を採る。平行する描線間は磨消される。13は加曾利 E II～III 式土器の底部である。16・17は堀之内 1 式土器である。同一個体であり、図示したもの以外に大小含めて同一個体の破片が多く出土しているが、全体の器形・文様構成の判別可能な代表的な破片のみ図示した。推定口径約25.6cmを測る個体で、おそらく 3 単位を呈するものと思われる。口縁端部は稜によって水平に区画され、指頭圧によりやや凹線風に調整される。単位部は穿孔され、口縁端部最大肥厚部下に、竹管による円形刺突が施される。頸部の無文帯は横位にナデ調整され、胴部施文部とは平行する沈線により区画される。区画線上の単位部には円形の貼り付けがなされ、竹管による円形刺突が施される。施文順序は、地文縄文→区画線→円形貼り付けである。胴部は単位部には J 字状文+銚先状文の懸垂文（単位文・主文様）が施され、単位文間に蛇行懸垂文（副文様）が施され、主文様と副文様は、斜行文によって連絡される。頸部の区画文間は縄文は認められない。文様描線間は一切磨消されない。ただし頸部の区画線は、縄文施文部上端に区画線を 1 本施し、その上部にさらに 1 本施すという工程を採るため、区画線間は結果として無文となる。

なお、本遺跡からの縄文土器の総出土点数は204点である。図示したもの以外の時期に該当する土器片として、草創期後半～早期初頭に属すると思われる無文土器片 1 点、阿玉台式土器と思われる土器片 1 点が出土しており、他は後期前半に属するもの、所属時期不明の小片である。

（3）仲兵遺跡（PL.62, Fig.38）

本遺跡では総数120点の縄文土器が出土している。内訳は早期19点、前期 2 点、中期11点、後期54点、時期不明34点である。

1～4 は早期初頭の無文土器である。1 はやや外反する器形で、口唇部に刻みを有し、口縁部付近には横位、体部には縦位の擦痕が認められる。2～4 は同一個体で、口縁付近に横位、体部に斜位の調整痕がみられ、内面には横位のケズリ痕が顕著で凹凸を呈する。三戸式ないし田戸下層式に属すると思われる。

5・6 は早期後半の繊維包含の土器で、5 には捺糸 L、6 には L R が認められる。前者は絡

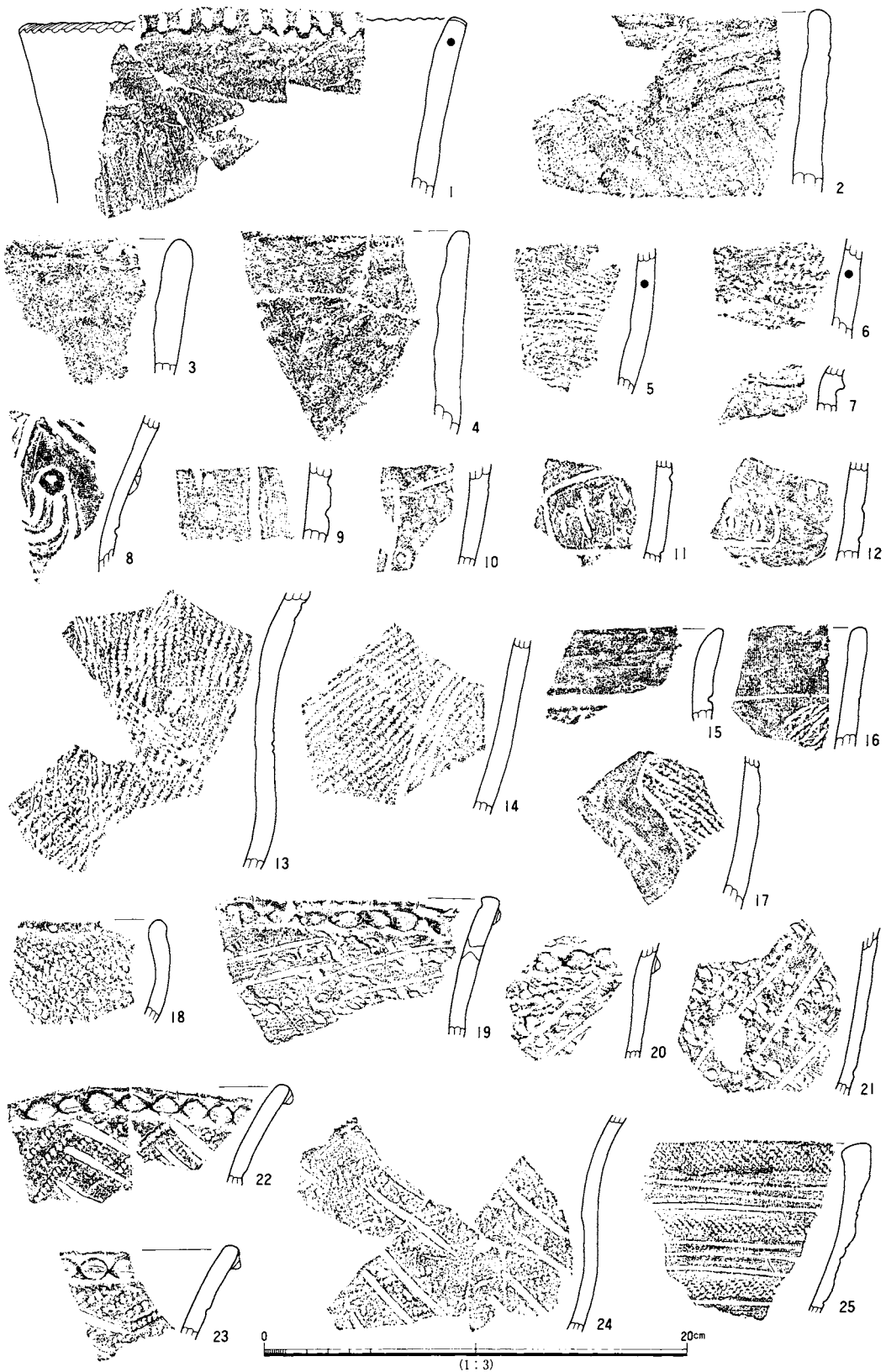


Fig. 38 仲兵遺跡出土縄文土器実測図

条体使用から判断して、子母口式の範疇と思われる。

7は曲線的な隆帯の両側に沿って、押し引きが加えられる。阿玉台式であろう。

8～12は称名寺式2式土器である。9～12は意匠内に列点を充填する典型例である。8はJ字文末端に円形浮文を施し、棒状工具により刺突を施すものである。沈線は器面の軟らかい段階で太く且つ深く施されるもので、ナゾリは看取されない。破片内では縄文は認められない。東北地方南部～北関東にかけて主体的に分布する類例の南下したものであり、おおむね当該期に比定し得るものの堀之内1式期初頭に下がる可能性もあろう。

13～17は堀之内1式土器である。13は3本単位の櫛状工具により施文がなされる。

18～24は加曾利B式である。18は口縁が肥厚し、内湾する椀形である。19～24は紐線を有する粗製深鉢で、体部に屈曲をもち、縄文地文に半截工具による斜位の条線が加えられる。24は屈曲部に貼付文が巡らされない。いずれも加曾利B2式と思われる。

25は安行1式の鉢形で、3段の帯縄文が認められ、帯縄文間に沈線が巡らされる。台付の脚部の可能性もあろう。

(4) 下福田稻荷原遺跡 (PL.62, Fig.39)

本遺跡では総数200点の縄文土器が出土している。その内訳は草創期1点、早期2点、前期3点、中期8点、後期167点、時期不明19点である。

1は稻荷台式で、口縁部が肥厚し、まばらな捺糸Lが施文される。2・3は早期末葉の表裏条痕文の土器で、2は口唇部に刻みが加えられる。

4～6は波状貝殻文を有する浮島式で、5・6にはアナグラ属の貝殻が用いられる。

7～10は加曾利E式である。8は両脇のナゾリ調整の顕著な隆帯が認められる。7・9・10は胴部懸垂文の破片で、無文帯が幅広の7・9は、8と同様加曾利EⅢ式土器(古段階)に相当しよう。

11～24は加曾利B式である。11は椀形、12・13は深鉢の口縁部資料で、11は口縁端部に凹線が、12は沈線で区画された無文帯が、13は刻目帯が巡らされる。14は屈曲を有する深鉢で、屈曲部に刻目帯を有する。いずれも加曾利B3式に相当しよう。16～24は同一個体で、加曾利B3式の波状口縁深鉢である。口縁部に1条の刻文帯、その直下に縄文帯を有し、括れ部に沈線区画を伴う刻文帯、胴部には弧線を組み合わせた磨消縄文が施され、波底部には小突起が付される。25～27は口縁が内傾する砲弾形の深鉢で、安行1式である。

28～35は紐線を有する粗製深鉢である。28は口内に凹線を有し、縄文施文後羽状の条線が加えられる。加曾利B2式であろう。29～31は括れ部にも紐線が巡らされ、頸部に横位の条線が施される。加曾利B3ないし曾谷式であろう。32・33は口縁部が肥厚し、内傾する砲弾形の器形で、32には口縁部に列点帯、33には貼付文が巡らされ、ともに斜方向の条線が施される。安行1式であろう。34・35は括れを持たず、紐線の上部分は横位、下部分は斜位の条線が施される。

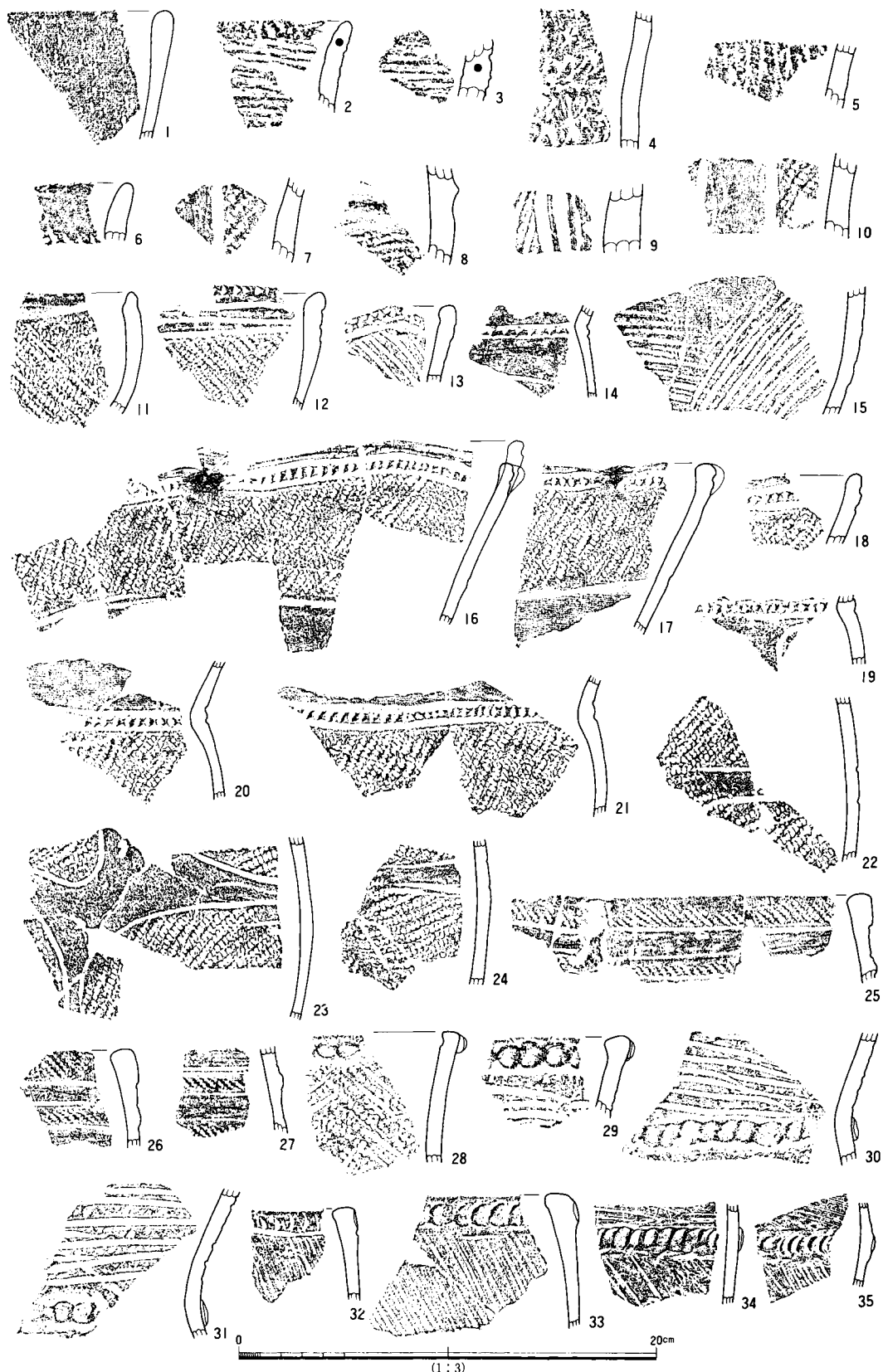


Fig. 39 下福田稻荷原遺跡出土縄文土器実測図

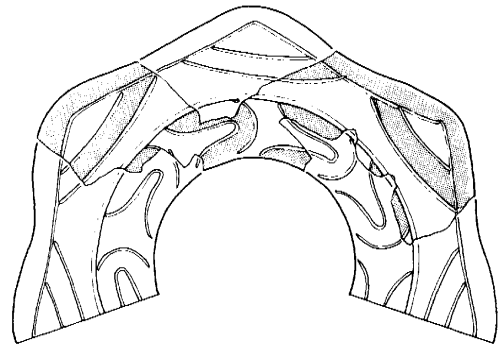
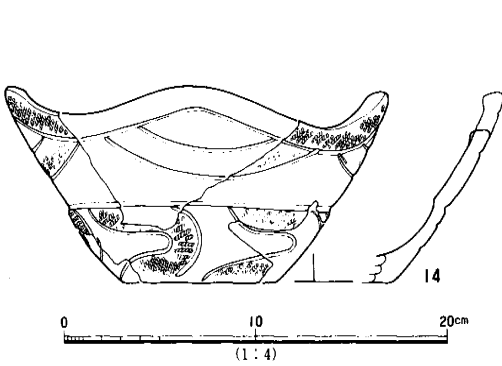
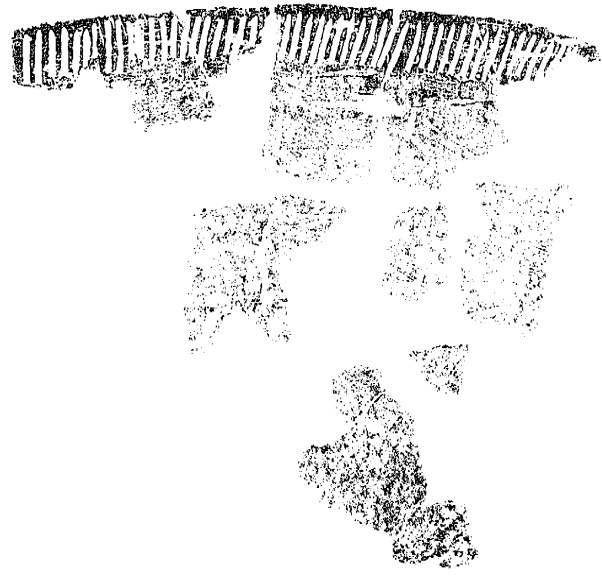
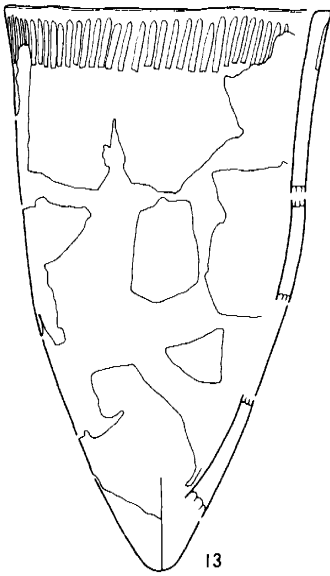
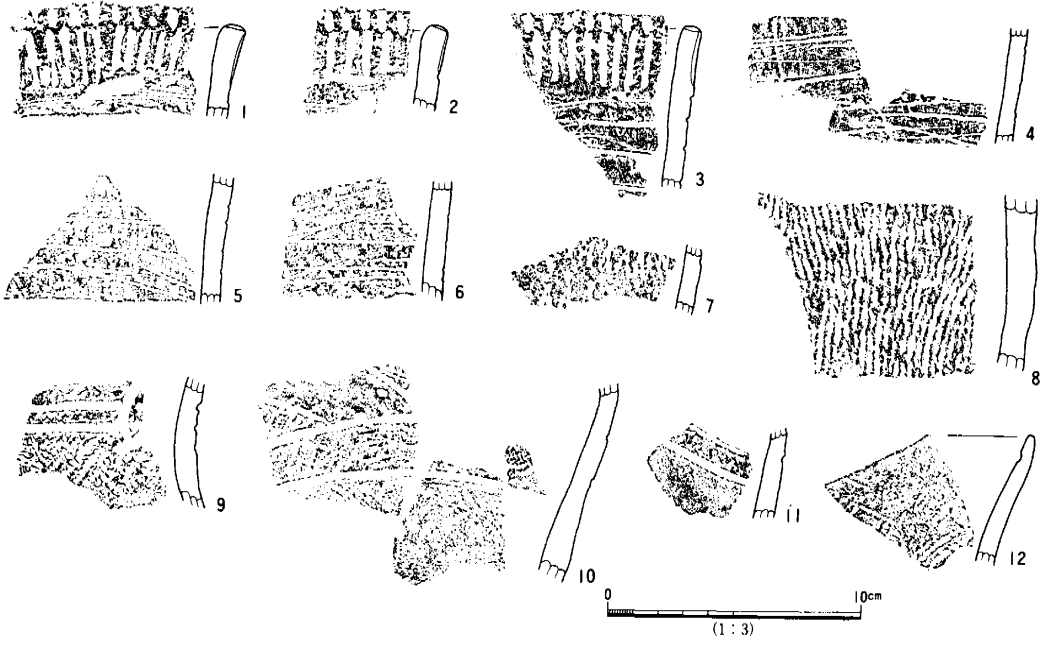


Fig. 40 上福田13号墳出土縄文土器実測図

安行2式であろう。

(4) 上福田13号墳 (PL.63, Fig.40)

本遺跡では合計23点の縄文土器が出土している。内訳は早期1点、前期10点、中期1点、後期10点、時期不明1点である。

13は口縁が弱く外へ開く尖底の深鉢で、口縁部に太い縦位の短沈線が巡らされる他は無文で、横位・斜位の擦痕が顕著に認められ、口唇部が平坦である。三戸式に相当すると思われる。1～6は同一個体で、口縁部に幅8～9mmの半截竹管による条線帯、口唇部に同一工具による刻目を有す。体部には横位の平行沈線が施されるが、鋭利な工具が用いられ、幅も一定ではない。興津I式である。7は小形のアナグラ属貝殻による波状貝殻文を施す。8は無節Lの斜位方向回転施文である。前期末葉の所産であろう。9は堀之内1式。10～12・14は加曾利B式である。10は大きく内湾する鉢形の体下半で磨消縄文が施され、縄文帯で区画される。縄文原体はLR・RLの異種が用いられる。14は4単位の波状口縁をもち体部で大きく屈曲する鉢形で、口縁に縄文帯が巡らされ、波底を連絡する弧線が配される。体部は5単位の「つ」の字の磨消縄文で構成され、波頂と一致しない。原体はLRを基調とするが、弧線部分のみRLである。加曾利B2式に位置づけられる。

(5) 松崎播磨遺跡 (PL.63～64, Fig.41～43)

本遺跡では総数133点の縄文土器が出土している。内訳は早期40点、前期38点、中期3点、後期51点、時期不明1点である。

1～37は三戸・田戸下層式である。1・2はともに横走する多重沈線を有し、沈線は浅くやや幅広である。2は沈線間に同一施文具による横長の刺突(列点)を有する。ともに比較的薄手で、淡い黄褐色系の色調が特徴的である。3～7は間隔のある細沈線文が縦位・横位・斜位方向に施される。7・8は同一個体である。9～13・15はペン字状の刺突文が施され、幾何学文様を構成する。14は横位の断続沈線が施される。16～21は丸味を帯びた口縁部形態を有する無文土器で、19のみやや角頭状を呈する。22～31は無文土器の胴部資料である。32～34はナデによる太沈線文が施される。38・39は条痕文が施され、38は表裏に横位方向、39は表面のみ縦位方向に施される。

40～51は胎土中に植物繊維の混入が認められる前期前半の土器で、広義の黒浜式に相当する。40は口縁に沿って半截竹管による押し引き、41は円形竹管が加えられる。42は口縁に粗雑な沈線が認められる。43・45・48は括れを有する器形で、異種原体による羽状縄文で構成される。55・51は茎状工具による沈線が施される。

52～68は前期後葉浮島式・興津式相当の土器である。52はやや丸味を帯びた口縁部を有し、幅10mmの施文具による変形爪形文が施されることから、浮島II式に比定される。53は傾斜した条線帯直下に、平行有節沈線文が認められ、浮島III式に比定される。54～58は波状貝殻文が施

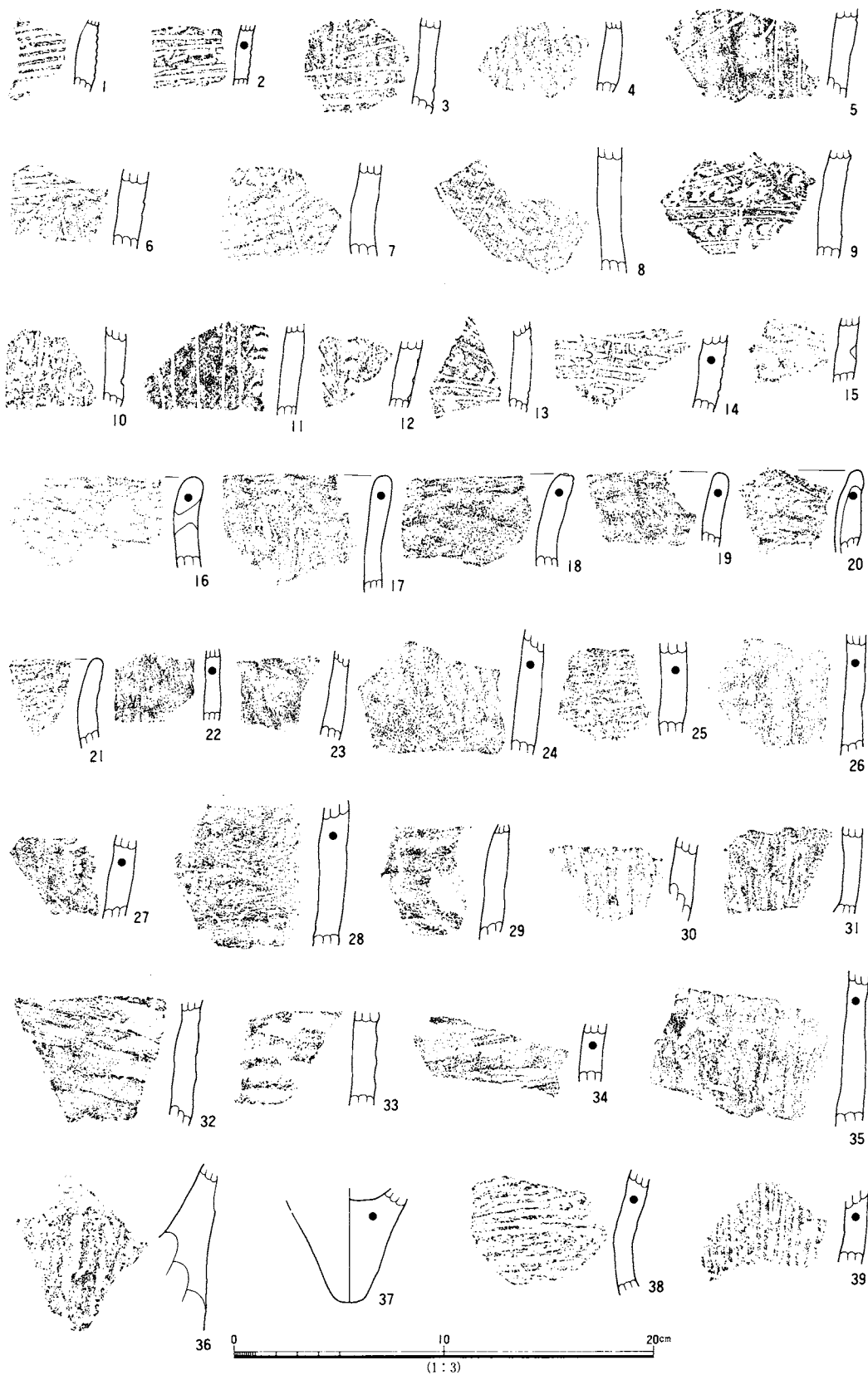


Fig.41 松崎播磨遺跡出土縄文土器実測図(1)

される。59～63は興津II式である。59は幅12mmの半截竹管による条線帯を有し、波状貝殻文を地文に条線帯と同一施文具で区画された幾何学文様で構成される。60・61は同一個体で、波状の口縁に幅4mmの半截竹管による条線帯を有し、波状貝殻文が施される。62・63も同一で、幅3mmの半截竹管による条線帯を有するが、一端のみ強調され、直下に波状貝殻文を地文とする磨消文が施される。64～68は沈線を主体とする土器で、64は半截竹管による集合沈線、65は単沈線による格子目状、66～68は半截竹管による曲線的文様が施される。いずれも興津IないしII式に比定される。

70～73は前期後葉～末葉の縄文施文の土器である。69・70は同一個体で、RLの側面圧痕が3段加えられ、前期末葉の土器である。71は口唇・体部に無節Lが施され、興津II式の範疇であろう。73は口縁が外に開き、口唇が尖鋭となる。

74は口縁内側に稜をもち、隆起線上に平行沈線文、口唇部に有節線文が施され、胎土に多量の砂粒が含まれる。阿玉台I b式であろう。

75・76は加曾利E式である。75は隆帯でパネル状に意匠を抽出（ふちどる）もので加曾利E III式古段階に相当する。76は隆帯そのもので意匠を抽出するもので加曾利E II式段階に相当する。

77は堀之内1式である。平行する沈線間にも縄文が認められるが、この沈線によって抽出された大柄の渦巻文内は無文である。

78～85・92は加曾利B式である。78は内傾する器形の括れ付近で、曲線的な磨消縄文が認められる。79は鉢形の口縁で、やや肥厚する。81は口縁に沿って刻目帯を巡らす加曾利B 3式の鉢形である。82は屈曲部に沈線区画のない刻文帯を有し、下半に条線が施される。加曾利B 2式の鉢形であろう。83は平坦で肥厚する口縁部を有し、丸味を帯びて底部に至る椀形土器で、体部に平行沈線による曲線的文様が施され、区画内が磨消される。加曾利B 3式であろう。84・92は口縁部が外に強く開く鉢形で、口縁に縄文帯をもち頸部が研磨され無文となる。屈曲を有する鉢形で加曾利B 3式であろう。85は無文帯を挟み上下に格子目状沈線が施される深鉢で加曾利B 2式と思われる。

86～91は同一個体で、体部で強く屈曲し、口縁がやや内湾する平縁の深鉢である。口縁部に2段の帯縄文をもち、直下に弧線文を有し、その端部は口縁部の突起に対応する。括れ部には刺突帯が1本巡り、胴部には磨消連弧文が配される。II a 文様帯の在り方から、安行1式古段階に位置づけられよう。93は口縁がやや外反するが、類似した平口縁の深鉢である。94～97も安行1式の胴部破片であろう。

98～102は紐線文土器である。98・100は口縁部に1条の粘土紐を巡らし、口内に2条の沈線・凹線を有する。101は2条の貼付文を有し、口内に2本の凹線を巡らす。加曾利B 2式の粗製土器であろう。102は体部で屈曲する器形で、上半に横位の密な条線を施す。曾谷～安行1式の粗製深鉢である。

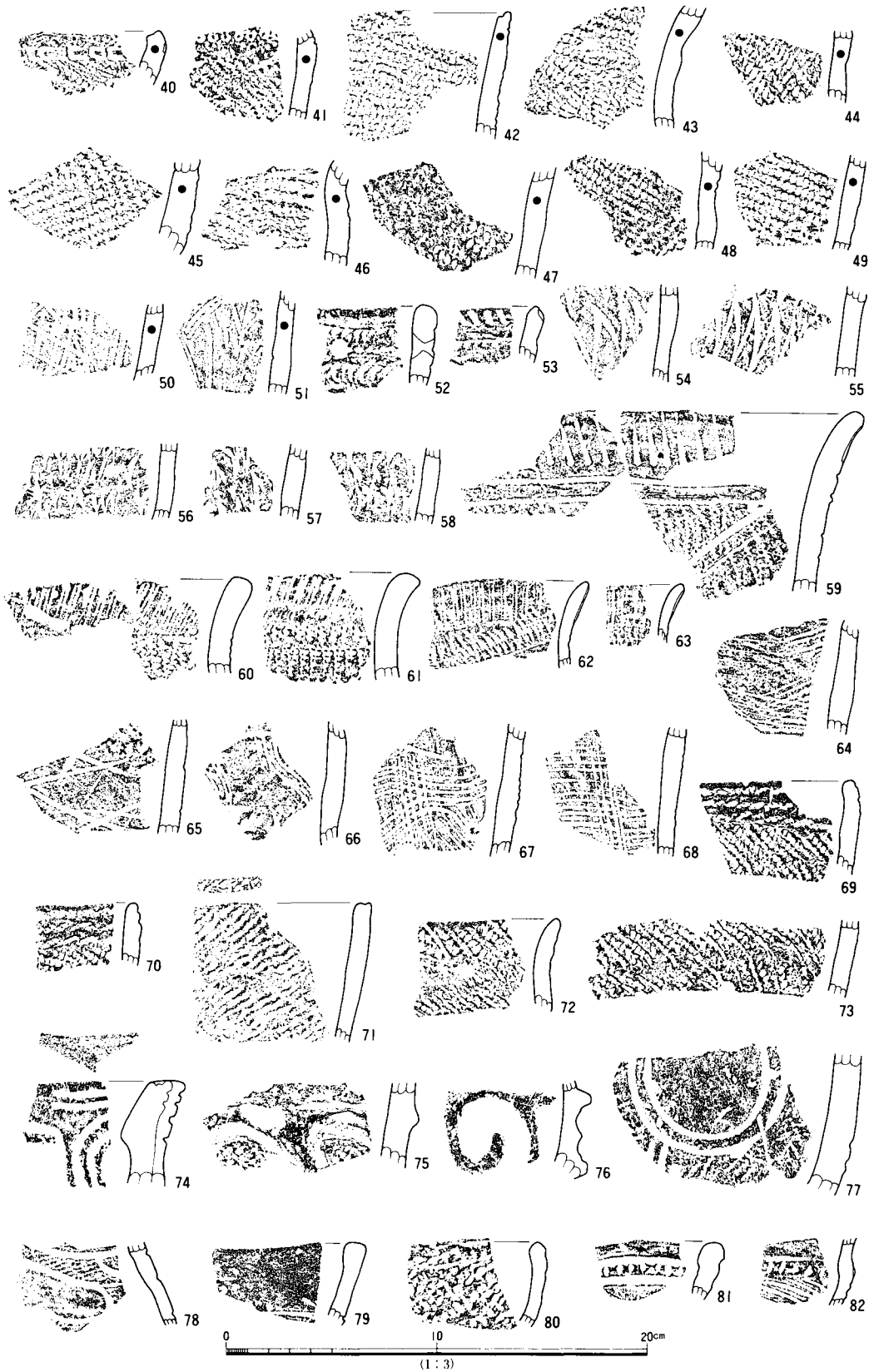


Fig. 42 松崎播磨遺跡出土縄文土器実測図 (2)



Fig. 43 松崎播磨遺跡出土縄文土器実測図 (3)

(6) 烏内遺跡 (PL.65~66, Fig.44~49)

本遺跡からは比較的多くの縄文土器が出土しているが、これらのうちの圧倒的多数は、堀之内1式期から堀之内2式期にかけてのものである。しかし残念ながら本遺跡からは当該期の遺構は検出されておらず、更に出土した土器片のほとんどが小片であることから、図示することは可能であっても、細別型式および細別型式内での細分された時期に言及し得る資料は限られてくるといった状況である。故に今回は、定型的な粗製土器や底部破片の資料提示については省略しつつ、所謂有文精製土器のうち、細別型式や細別型式内での細分された時期に言及し得る資料のみについて資料提示を行うこととした。

堀之内1式土器および堀之内1~2式土器

1は縦位区画効果を有する刻み目隆帯の上端が剥落している。隆帯の上部と口縁端部に円形刺突が施され、隆帯上部両脇に()状の沈線が施される。2の口辺突出部上面は丁寧にナデ調整され、若干の凹部が形成される。3は器面の軟らかい段階で、胴部の施文がなされた後に、口縁端部の調整が行われたため、調整の圧によりはみでた粘土が胴部モチーフ最上端部に覆いかぶさり、この段差が拓影図では沈線状に表象することとなる。胴部文様は懸垂文+斜行文構成であろう。4は鉢形土器の頸部以上の破片で、胴部との区画は平行する2本の沈線による。5の施文具は半截竹管ではなく棒状工具によるものである。7は頸部で若干のくびれを有する深鉢の頸部以上の破片である。平行する沈線により、胴部との区画文・単位部の懸垂文が描かれ、懸垂文が区画文をきるかたちとなる。意匠内は磨り消される。8の円形刺突は、中央が指頭圧的なものであり、両脇は竹管ないし棒状工具によるものである。器壁は薄手であるものの、器面の極めて軟らかい段階での施文がなされる。9は拓影図左端の蛇行懸垂文部は、若干の波状口縁を呈するようである。10は14・20と同一個体であろうと思われ、器面の軟らかい段階で施文がなされる。11は朝顔形深鉢の胴部破片で、おそらく、縄文→懸垂文→斜行充填沈線→懸垂文間磨消し、という施文順序を採るものと思われ、器面の比較的軟らかい段階での施文である。12は口縁部に外反する幅広の無文帯を有する類型で、主文様(懸垂文)内は磨消されている可能性がある。13は器面の軟らかい段階で施文がなされる。15は小形の深鉢の胴中位の破片であり、単沈線による蛇行文(懸垂文)間を斜行文で連絡する構成を採る。16は12同様、口縁部に外反する幅広の無文帯を有する類型で、主文様部上端に沈線施文後の円形の貼り付けがなされる。17は横断面の湾曲の度合いから類推するとやや大形の個体であろうと思われるが、器壁はやや薄手である。18は器面の軟らかい段階での施文であり、蛇行文+側線、ないし蕨手文+側線という構成を採るものと思われる。19は口縁部に外反する幅広の無文帯を有する類型で、胴上半が樽状に張る器形の当該部位破片であろうと思われる。21は比較的器面の硬化した段階での施文である。22は器面の軟らかい段階で、縦位の集合沈線手法が採られるもので、部分的に横位ないし斜位に単沈線による意匠内の充填がみられる。23は蕨手文に2本単位の側線が加わ

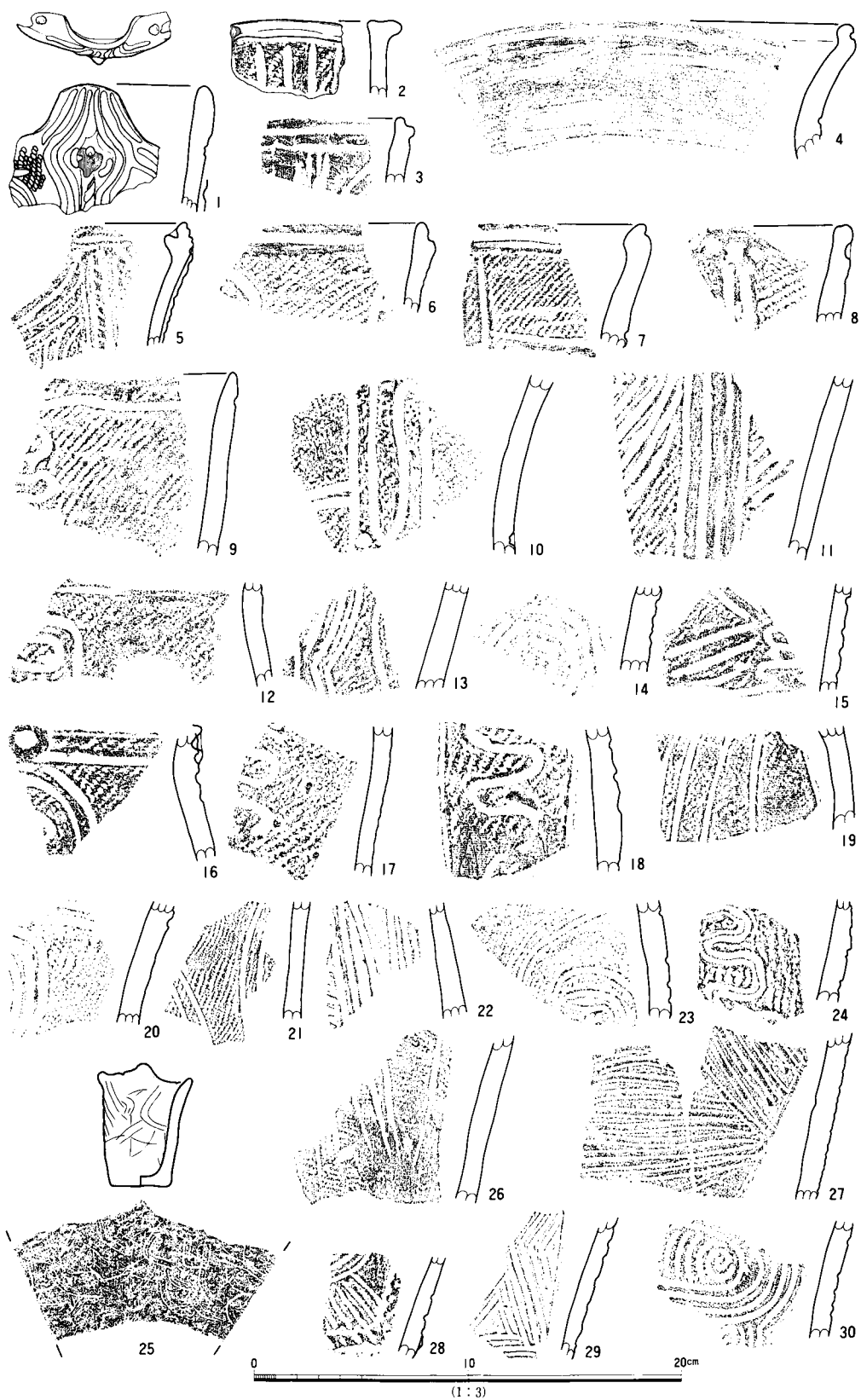


Fig. 44 烏内遺跡出土縄文土器実測図 (1)

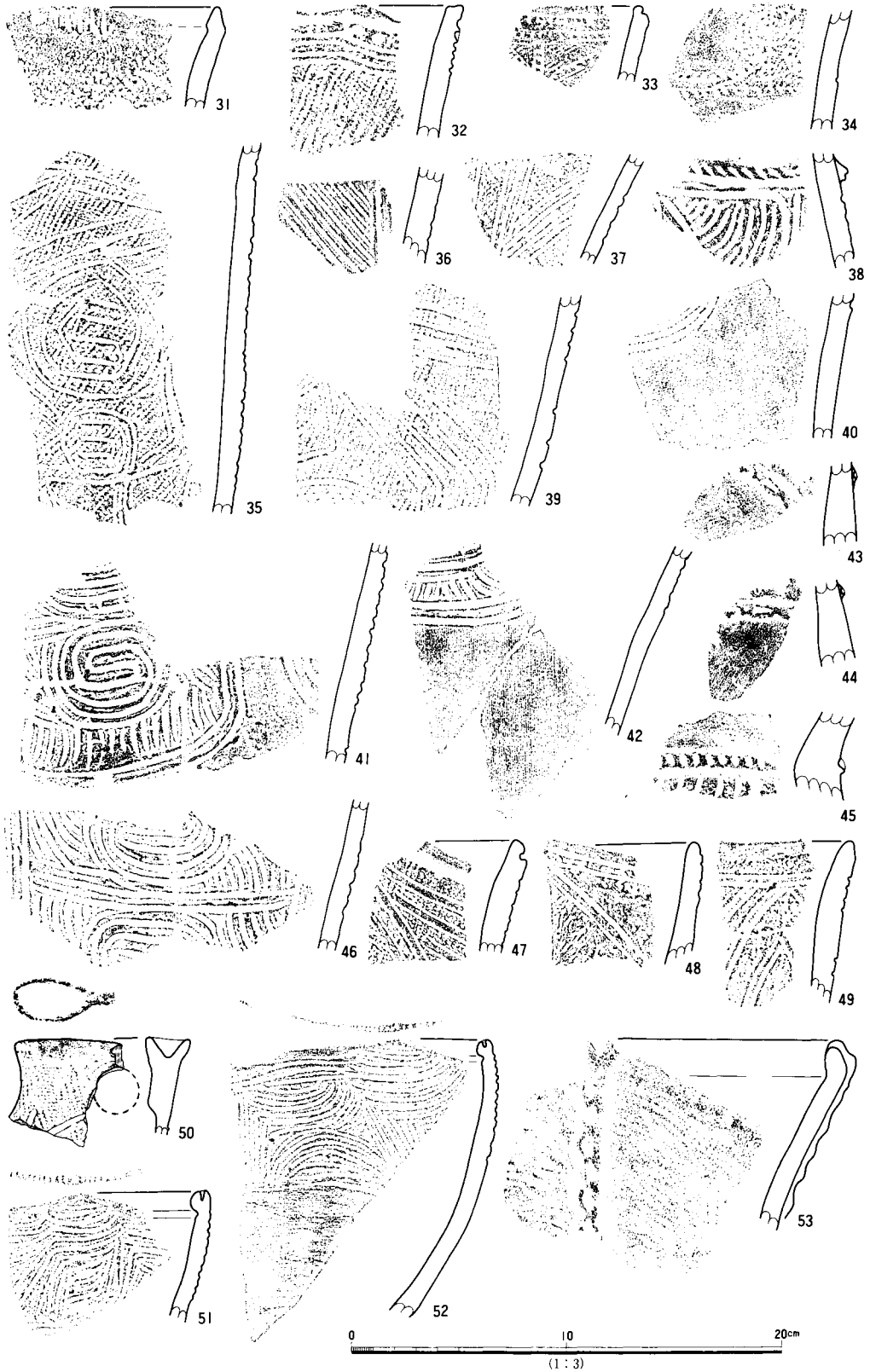


Fig.45 鳥内遺跡出土縄文土器実測図 (2)

る構成である。24は器面の軟らかい段階での、半截竹管による施文である。25は小形コップ形土器で、口縁の一部が欠損するのみである。波状部は一箇所のみで、半截竹管により粗雑な意匠が描かれる。26は底部に近い部位の破片であり、沈線は比較的浅い。27は朝顔形深鉢の胴部破片で、半截竹管により斜方向に描かれた懸垂文間を、やはり半截竹管により横位ないし斜位方向に充填するもので、胴下半部位の破片であろう。28は朝顔形深鉢の胴下半破片で、縦位の隆帯上には円形刺突が押捺され、横位の隆帯上には斜方向の刻みが施されるが、施文具が異なるか否かについては判然としない。29は朝顔形深鉢の胴部破片で、顕著な集合沈線手法を採る。30もおそらく朝顔形深鉢の胴部破片で、やや厚手の作りである。

31は縄文のみの半精製土器で、波状口縁を有し、口縁端部に明瞭な無文部を作出する。波頂部の縦位方向の意匠部は、口縁端部が内側に意図的に湾曲され、拓影図左端部は逆に内側から指頭圧により湾曲させている。なお、内面には明瞭な稜を有する。32は直行の口縁形態で、極めて緩やかな波状口縁を有し、単位部は若干突出し、突出部上面は僅かながらの凹部が作出される。33・34はおそらく同一個体の朝顔形深鉢であり、半截竹管文中に刻みを充填する。基本的な文様構成は、懸垂文+両脇の縦位弧線文で、胴下半には明瞭な横位の区画文が巡る。35・39は同一個体で、主文様は円文+円文内のコ状文（逆コ状文）であり、測線・充填沈線が多用される。36は朝顔形深鉢の胴部破片で、半截竹管が用いられる。37も朝顔形深鉢の胴部破片で、棒状工具が用いられる。38は鉢形土器の胴上半部の破片であり、貼り付け隆帯の側面上部は著しく摩滅しており、側面下部同様の刻みが施されているか否かは不明である。40～42・46は同一個体である。朝顔形深鉢の胴部破片で、主文様である渦巻文を囲むように施文域が設定され、この施文域内に短沈線が充填される。沈線は器面の比較的軟らかい段階で太く施されている。43は連鎖状貼付文が添付される。44は比較的厚手で、胎土に白色粒を多く含む特徴を有している。刺突を有する隆帯が斜位に施されるものであり、鉢形土器の胴部破片になろうか。45は胎土・焼成が44に類似する鉢形土器の頸部付近の破片で、極めて厚手である。隆帯上面に大きめの刺突が施され、沈線も太く深い。47は朝顔形深鉢の把手部（波頂部）に近い部位の破片である。縄文→半截竹管施文→磨消という施文工程を採る。48は波状部へ向かう部位の破片で、施文具は半截竹管であるか否かは判然としない。49は半截竹管を用いるもので、I文様帯上半はナデ調整により明瞭に無文部が作出される。50は朝顔形深鉢の把手で、円孔部で割れている。縄文は比較的細かく、堅緻な焼成である。60は半截竹管が用いられ、平縁口縁を呈することはなさそうである。66～74・76～78は堀之内1式期終末～堀之内2式期前半にかけての、口縁がやや外反し胴部との境に沈線を巡らせる深鉢の胴部付近の破片であり、いずれも半截竹管が用いられる。66～69は同一個体であり、70・73・74・76～78も同一個体である。75は朝顔形深鉢の胴下部破片で、半截竹管が用いられる。79は器高が低く胴下半から底部へ向けて屈曲する器種の屈曲部付近の破片であり、半截竹管が用いられており磨消効果は窺えない。80は鉢形土器

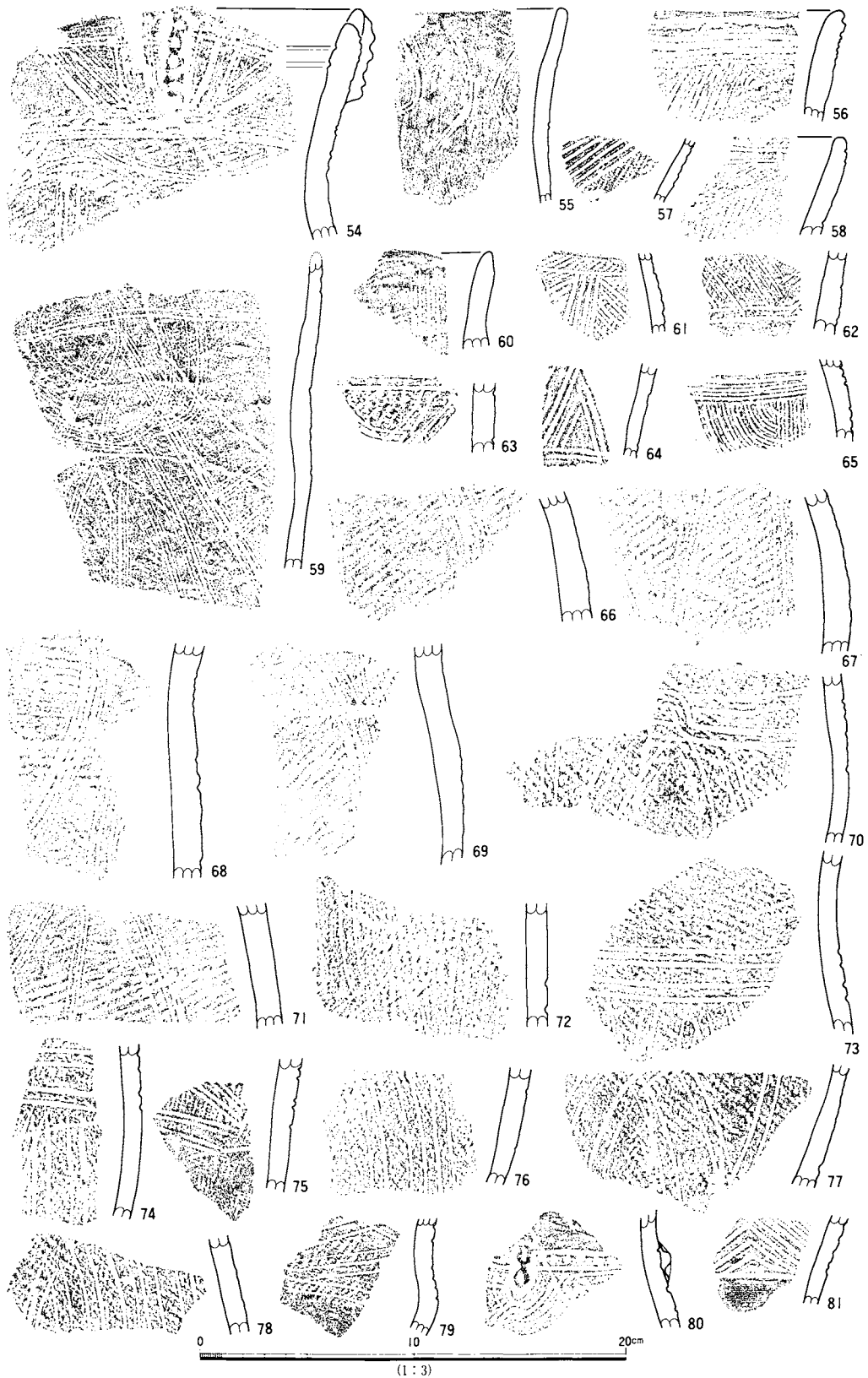


Fig.46 鳥内遺跡出土縄文土器実測図 (3)

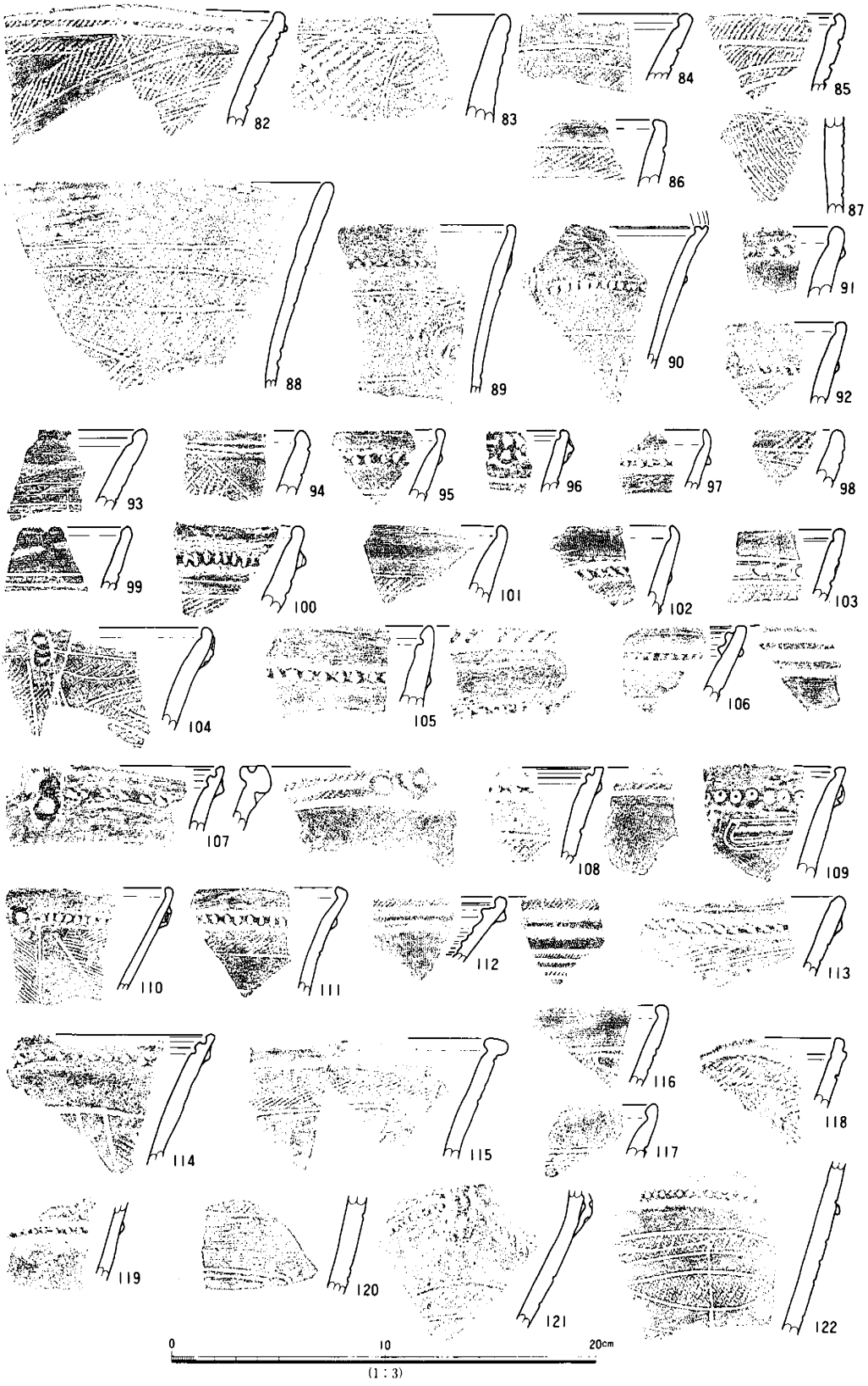


Fig.47 鳥内遺跡出土縄文土器実測図(4)

の胴上半付近の破片であり、やはり半截竹管が用いられており磨消効果は窺えない。81は朝顔形深鉢の胴下部破片で、下半に明瞭な区画沈線を獲得している。縄文の施文は認められない。83は49に類似するが、49に特徴的なI文様帯上半のナデ調整は認められない。119は胎土・焼成・色調ともに堀之内2式的であるが、朝顔形深鉢の胴下部破片で、横位の隆帯による区画文を有していることから、堀之内1式土器として捉えなければならない。172は厚手でかなり大形の鉢形土器の胴部破片であり、胴部を縦位に分割する隆帯を有しており、隆帯の左右では、施される意匠が異なり、一部磨消縄文効果を有している。

堀之内2式土器および堀之内2式～加曾利B1式土器

比較的定型的な堀之内2式土器～加曾利B1式土器が主体であり、多くの説明を要しない。51・52は同一個体であり、椀形の器形を呈する。内面は比較的丁寧に研磨調整される。53は鉢形土器の頸部以上の部位で、顕著な波状を呈し、波頂部の口唇面から隆帯が垂下する。54は緩やかな波頂部に棒状浮文（隆帯）が添付され、3本単位の櫛状工具により施文がなされる。内面には口縁の波状のラインに沿うように2本の沈線が巡る。器表面の橙褐色の色調が特徴的である。55は薄手で、半截竹管により雑な蛇行文が描かれる。口縁内面はナデ調整により、ごく僅かに凹部風の効果を表出しているようでもある。56は口縁直下の一条の沈線以外は、全て半截竹管によるものである。57は磨消縄文による三角文内外に沈線を充填させる定型的な朝顔形深鉢の胴部破片である。58は磨消縄文を有し比較的厚手であり、内面に沈線ないし凹部が巡らないものである。59は薄手で黒褐色、やや脆弱な焼成が特徴的であり、半截竹管が用いられる。61・63・65は鉢形土器の胴部上半の破片であり、61は薄手で小形のものになり、63・65はともに半截竹管を用いるが、前者は雑書き風で、後者は明瞭な集合沈線手法を採る。62・64は朝顔形深鉢の胴下部破片である。82は細い隆帯上面に縄文が施される。85は磨消効果を有してはいない。93は縄文が認められず、半截竹管により雑書き風の横位の意匠が描かれ、拓影図下半で縦位方向の施文が認められる。103は平行する沈線間に列点が施されている。109は縄文が認められず、半截竹管による流水文風の意匠が認められる。118は朝顔形深鉢的な形態を採らず、波状口縁を有する単純な深鉢であろう。120は磨消縄文を有する部分とそうでない部分がある。155・156・158は、79同様の器高が低く胴下半から底部へ向けて屈曲する器種の屈曲部付近の破片である。166は口唇の内面側から上部にかけて刻みを施す。153・169～171は椀形土器の胴部破片で、171は横位に巡る幅広の微隆帯上面の、上半のみに細かな縄文が施されるが、これは当初より意識された可能性が有ると同時に、縄文施文後の調整時に消されてしまった可能性もあろう。斜位に施される同様の微隆帯は、隆帯脇の片方のみにナゾリ風の沈線が施される。なお、微隆帯上部および微隆帯付近には、微隆帯の意匠に沿うかたちでの赤色塗彩が認められる。173～184はいわゆる土器片製円盤であり、本遺跡からの土器片錘の出土はみられない。素材の問題として、堀之内2式期の定型的な朝顔形深鉢の破片は、薄手のためであろうか、多用されるが少な

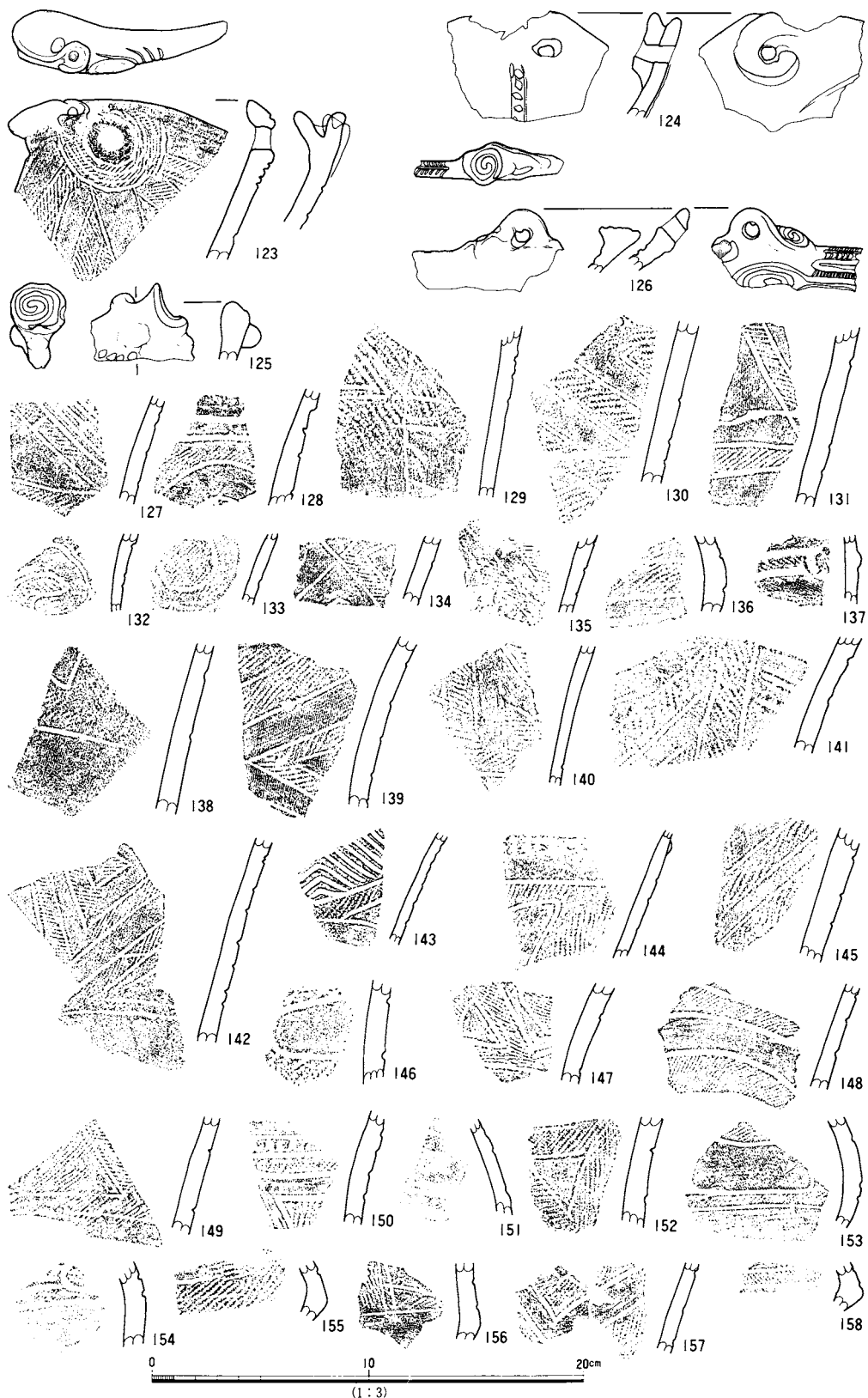


Fig.48 鳥内遺跡出土縄文土器実測図 (5)

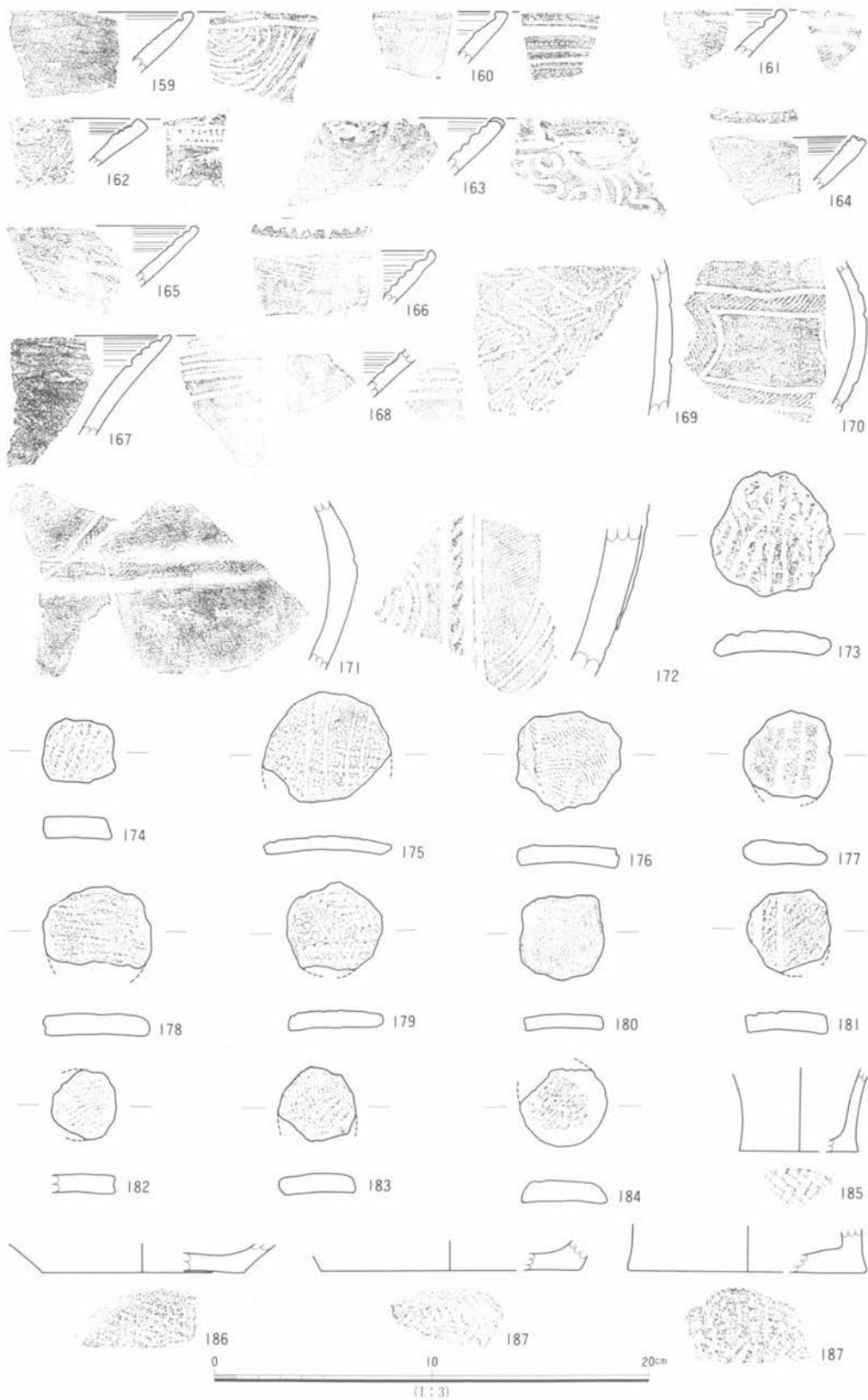


Fig. 49 烏内遺跡出土縄文土器実測図 (6)

いようである。

185～188は網代痕を有する底部破片である。

3 石器

成田安食線所在の遺跡では、少数であるが石器が検出されている。各遺跡検出の石器をここでまとめて報告することとする。

旧石器時代石器 (PL.67 1・2)

松崎播磨遺跡では、旧石器時代のブロックは検出されなかったが、下層確認調査で遺物が1点検出されている。上福田保町遺跡でも下層確認調査に伴って遺物1点が検出され、拡張して調査を行ったが他に遺物は検出されなかった。

1は松崎播磨遺跡出土のナイフ形石器である。出土層位はIV・V層上面である。横長剥片を素材として左側面に急斜角なブランディングが施される。背面には打面方向からの剥離面と自然面が看取され、この自然面の鋭利なエッジを刃部としている。最大長4.85cm、最大幅1.96cm、最大厚1.02cm、重さ7.23g、石材は珪質頁岩。武蔵野編年V層・IV層下部段階に位置づけられる資料である。

2は上福田保町遺跡出土の削器である。出土層位はVII層上部である。厚手の縦長剥片を素材として、腹面からの平坦剥離と急斜角の調整により右側縁に直線的な刃部を作出している。左側縁には使用痕が観察されることからカッティングの機能も合わせもつ可能性がある。最大長8.88cm、最大幅3.58cm、最大厚1.52cm、重さ34.64g、石材は安山岩。

縄文時代以降石器 (PL.67 3～5)

3・4は松崎播磨遺跡出土の石鏃である。

3は側縁部が肩が張り基部が平らになる。平面形状が五角形になり特異な形態を呈するものである。片面中央部が研磨されており局部磨製石鏃の範疇に入るものである。茨城県花輪台貝塚¹³⁾出土の石鏃に局部磨製石鏃が存在し、本遺跡の石鏃と同様の形態をした石鏃も含まれることから本遺跡の石鏃との類似性が指摘できる。最大長2.37cm、最大幅1.18cm、最大厚0.32cm、重さ0.85g、石材はチャート。竪穴住居SI-04出土。

4は基部が浅く袂れ脚部が尖るもので、先端を欠損する。最大長1.50cm、最大幅1.37cm、最大厚0.25cm、重さ0.59g、石材はチャート。

5は下福田稻荷原遺跡出土の二次加工を有する剥片である。縦長剥片の側縁を切断状に切り取り、下端部に背面から微細な調整加工が看取される。最大長1.79cm、最大幅0.96cm、最大厚0.37cm、重さ0.49g、石材は黒曜石。

第4章 ま と め

7世紀から8世紀、古墳時代の終末期には、今回報告の遺跡の地域は、東国のなかでも最も重要視される地域の一つである。それは、当時としては日本一大きな方墳「龍角寺岩屋古墳」が築造されていることに端的に示されている。しかし、この地に最大の終末期方墳が造られた理由については諸説があるものの、明確な答は出されていない。この問題の答を見つけるためにも、7世紀代のこの地域の歴史の解明が待たれている。

今回の発掘調査では、多くの遺構と遺物を発見した。それらのなかには重要な意味をもつものもあると思われるが、発掘調査および報告書の作成にあたり、気がついた点を検討して今後の問題解決の糸口とし今回の報告のまとめにかえたい。

1 遺 物

はじめに遺物を検討するのは、各遺構の時期を決める際の基準となる遺物、とりわけ土器の製作年代を明確にするためである。土器は、竪穴住居跡を中心にかなり出土している。今回報告の遺跡は路線の調査であり、すべての住居が一つの集落を形成するわけではない。しかし、各遺跡はそれぞれ谷を一つずつ隔てているだけなので、土器の様相が大きく変わるとも思えない。そこで本報告では各遺跡単位に土器の検討を行うのではなく、すべての遺跡をまとめて考えていくこととする。

(1) 土 器

今回報告の資料のうち、縄文土器を除くと多くが7世紀以降の土器である。ここではそれらの土器を中心に検討していく。

畿内産土師器模倣土器

まずはじめに、今回報告の7世紀以降の土器のなかに古墳時代からの土器の系譜のなかではあまりみられない土器があるので、それらの土器を検討することとする。それらの土器とは、松崎播磨遺跡の竪穴住居SI-16等から出土した杯と皿に代表される土師器群である。伴出した須恵器の年代から、7世紀から8世紀にかけての土師器と考えられるものである。これらの土師器の特徴は、多くの場合胎土が精選されており、土器の内側がヘラミガキで仕上げられているものが多く、器形としては口径が大きく皿のように開くもの(皿とよぶ)、やや深めの椀型の土器(杯Aとよぶ)、口径が16cm前後の浅目の杯(杯Cとよぶ)の3種類がある。皿とした土器は、4個体分(Fig.48 15~18)確認しているが、いずれも復原すると器高は低く、口径はかなり大きく口縁部が外にひらいたままの皿状の土器になるものである。仕上げは、外面が細かいヘラケズリで、内面はヘラミガキで仕上げられている。杯Aに分類した土器は、今回の出土品の

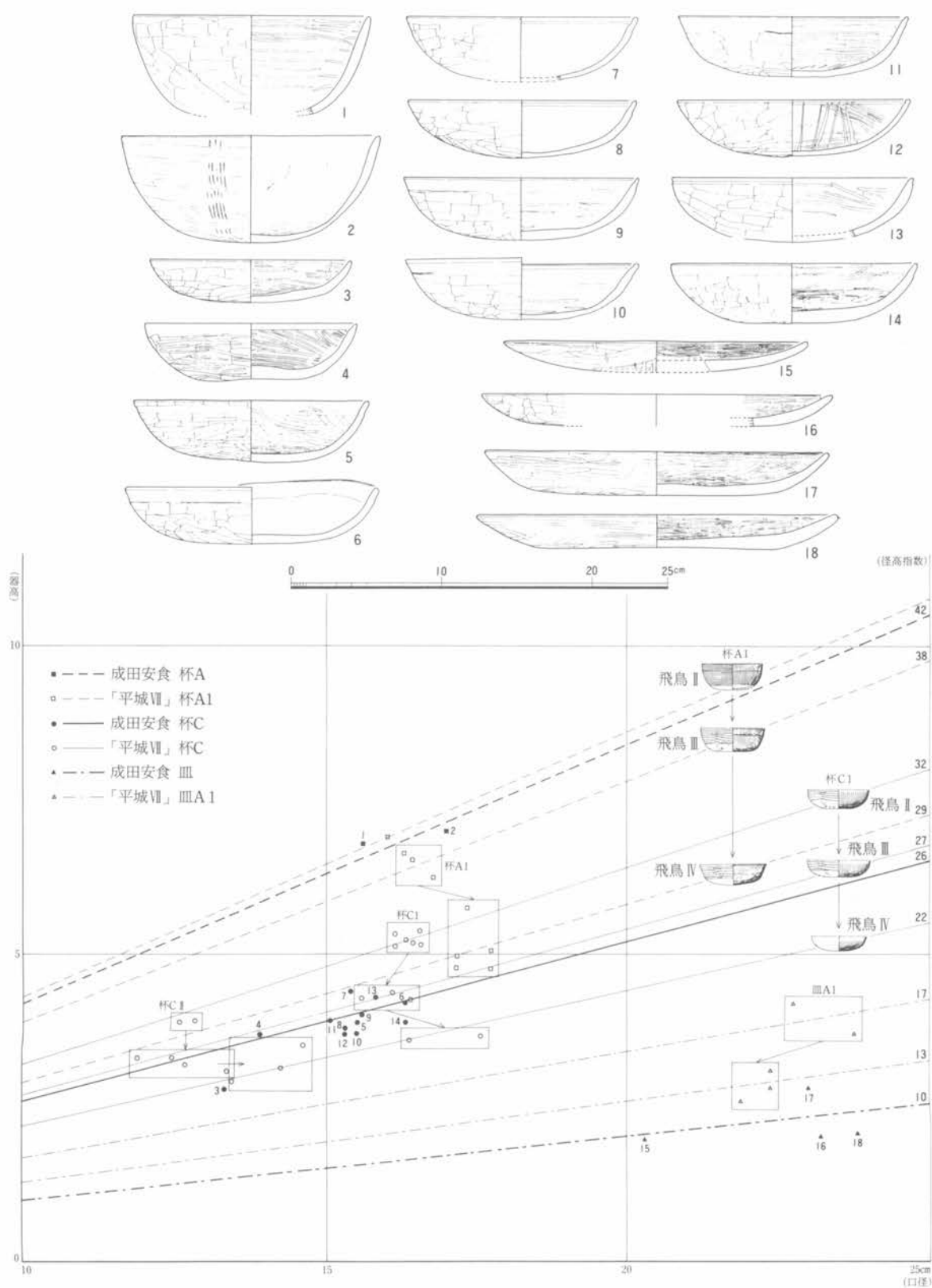


Fig. 50 飛鳥の土器と成田安食線出土土器の法量比較

なかでは2点 (Fig.50 1・2) しか確認していない。復原できる土器の大きさは口径が16~17 cm、高さは7cmほどで2点ともほぼ同じ大きさである。外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキで仕上げられている。杯Cとするものは、定義する内容によってはかなりの土器が該当する可能性があるが、ここではとりあえず外面がヘラケズリ、内面はヘラミガキで仕上げられている浅い杯としておく (Fig.50 3~14)。なかには、口縁部の内外面のどちらかに沈線を巡らしたのものもある (Fig.50 7~13)。また、内面のヘラミガキの間隔は土器によって粗密がある。杯Cは口縁端部が杯Aのように上方に向かうことはなく、大きく外にひらく。出土した土器には完形のものも多いのでその資料からみると、口径は16cm、高さは2cm前後のものが一番多い。胎土・整形・調整法も先の土器と同じで外面がヘラケズリ、内面が細かいヘラミガキで仕上げられている。

さて、これらの土器は、この地域の古墳時代の土器から系譜が辿れるものではない。特に杯Cと皿は明白である。そこで考えられることは、これらの器形が畿内産土師器とよばれる土器のうち飛鳥時代に製作された土器に非常に似ており、それらの土器を模倣したのではないかということである。畿内産土師器とは、「畿内、とくに大和・河内では、飛鳥時代になると、精製された胎土を用い、丁寧に暗文やヘラ磨きを加えた土師器がみられるようになる。・・(筆者略)・・杯形態を中心として、皿・鉢・高杯・壺などがみられる。これらの土師器は、器形・器種構成のうえで、古墳時代のそれとは明らかに異なり、7世紀初頭、朝鮮半島から将来された金属製容器を模倣することにより成立したと考える。」¹¹⁵とされるものである。しかもそれらの土器には法量の規格性があるという。また、土器の各型式ごとの製作年代もかなり細かく決定されている。大略を示すと、飛鳥I期は、7世紀の前半頃、飛鳥II期が7世紀前半でも中ごろに近い時期、飛鳥III期は7世紀後半の中ごろに近い時期、飛鳥IV期は7世紀後半でも末に近い時期、そして飛鳥V期は都が藤原京におかれた時期であり、次の土器型式平城宮I期と重複している¹¹⁷。今回確認した土器群と畿内産土師器の似ているところは、器形と土器の仕上げ方にあるが、また相違点として、畿内産土師器の土器内面のヘラミガキは暗文と呼ばれる文様を描き出していることが多いが、今回の土器群には暗文とよべる文様は確認できなかったことである。

では、具体的に飛鳥の土器と成田安食線出土の土器を比較してみたい。飛鳥地方で作られた土器は、かなり分析が進んでおり、土器の型式はもちろん、土器型式ごとの口径指数¹¹⁸と呼ばれる指数が確立している。そこで成田安食線出土の土器も口径指数を出して比較したのがFig.50である。

この図から、成田安食線出土杯A・杯C・皿は、それぞれ飛鳥の杯A I・杯C I・皿に大きさがよく似ていることがわかる。細かくみると、成田安食線出土杯Aは、飛鳥の杯A IのII期からIII期の口径指数に近い値を示している。杯Cも飛鳥III期の口径指数に近いところに集中しているのがわかる。しかし、皿は、飛鳥で皿A Iと呼んでいる器形よりは明らかに扁平であり、

指数からみると口径はほぼ同じであるが高さが低いことがわかる。このように、成田安食線出土の土器のなかに飛鳥地方でつくられた土器と口径指数が非常によく似た土器があることがわかるが、ではなぜ口径指数が同じ土器が作られたのであろうか。その際に考えられることは、7世紀代には畿内産土師器がこの地域にももたらされている事実があることである。県内では畿内産土師器が多数確認されており、古い例としては佐倉市江原台遺跡で飛鳥Ⅱ期の土器の出土が確認されている¹⁹⁾。この地域では成田市の囲護台遺跡から飛鳥Ⅲ期の杯A・C・蓋・皿が出土している²⁰⁾。8世紀になると、その数は増え埴生郡衙跡と考えられる大畑1遺跡・向台遺跡をはじめ成田ニュータウン内の遺跡からも畿内産土師器が出土している。とにかくこの地域には、飛鳥Ⅲ期の畿内産土師器がもたらされているのである。この事実から考えると、成田安食線出土の畿内産土師器に口径指数が似た土器は、この地で新たに考案された器形と考えるよりも畿内からもたらされた畿内産土師器を模倣して製作したと考えられるのである。口径指数の比較からは成田安食線出土の畿内産土師器模倣土器のすべては、ほぼ同時期に飛鳥Ⅲの畿内産土師器を模倣して製作したと考えられる。これら畿内産土師器を模倣した土師器の製作年代は、先の飛鳥の土器の製作年代を参考にするならば7世紀後半でも中頃以降と考えられるわけであるが、伴出した須恵器から7世紀後半でも末に近い時期以降の製作と考えておきたい。成田安食線出土の畿内産土師器模倣土器を出土した竪穴住居跡から、細片ではあるが瓦が出土していることもこの年代比定を裏づけるものである。それは、この地域に瓦がもたらされたのは、龍角寺²¹⁾が一番初めと思われるが、龍角寺は大和山田寺の系譜の軒先瓦を採用していることから、7世紀後半以降の創建と考えられるからである。今回紹介した成田安食線出土の畿内産土師器模倣土器群は、伴出する遺物や焼成具合から同じ時期に製作されたものと考えているわけであるが、畿内産土師器の模倣はこの時期だけに限定できることではないと思われるので、製作年代も少し幅を持たせてもよいかもしれない。

今回は松崎播磨遺跡SI-16号住居跡等から出土した土器を中心に検討したが、7世紀代の千葉県北部では口径が16cmほどで外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキの杯Cに似た土師器杯は多い。これらの土器の多くも、畿内産土師器の影響下に製作された可能性が高いと考えている。また、8世紀には上総地域でも斜格子の暗文のつく杯が畿内産土師器の影響下につくられており、畿内産土師器の模倣は今回紹介した土器だけにとどまるものではない。今回とりあげた土器は、畿内産土師器の模倣が7世紀から行われていたことを示す一例と考える。

畿内産土師器についてはまた後で触れるとして、ここでは在地で作られた土器のなかに畿内産土師器を模倣した土器があることを指摘するにとどめておく。

外面に同心円文のタタキを有する須恵器甕

今回報告する須恵器甕のなかに、外面に同心円文のタタキを有する破片を3点確認している。そのうちの1点は松崎播磨遺跡のSI-04号住居跡(PL.60-3)から、もう2点は同じく松崎播磨遺

跡SI-11号住居跡から出土している。SI-04号住居跡から出土した破片は図示したが、SI-11から出土した破片は1cm×1.5cmと2cm×3cmの非常に小さな破片なので図示しなかった。この種の須恵器甕については既にいくつか指摘⁽⁵⁾されている。それらをまとめると、この種の須恵器甕は茨城県と千葉県北部に多く分布し、7世紀末から9世紀初頭の遺物であるとされている。また、胎土中には雲母を含むものが多いことも確認されている。千葉県内でも4遺跡で確認されており、そのうち3遺跡の遺物は7世紀末から8世紀前半の時期とされている。今回出土した同心円文のタタキを有する須恵器甕の時期は、出土した住居跡の伴出土器から考えると7世紀末から8世紀初めころであろう。

この種の須恵器甕は、一つの集落内では数点しか確認されていないこと、破片状態で発見されることが多いということも、松崎播磨遺跡で発見された状況と似ている。しかし、松崎播磨遺跡ではこの土器に特殊な性格があったかどうかまでは明確ではない。

古墳時代後期から下総地域と常陸の地域には「変則的古墳」や「常総型甕」とよばれるこの地域に特有の遺構・遺物が知られているが、同じような分布を示す遺物がまた一つ増えたことになる。

墨書土器

今回の調査では、「倍」「ツ里」「酒」「人」の4文字3点の土器が出土している。これらはいずれもロクロを使用した土師器杯に書かれたものである。

「倍」の文字が書かれた杯は、下福田稻荷原遺跡SX-02から出土した。土器の製作年代は9世紀代と考えられる。SX-02は祭祀遺構と考えているが、多くの手捏土器に混じって出土している土器は8世紀から9世紀のものである。

「ツ里」と土師器杯の外側に書かれた土器は、松崎播磨遺跡SI-02から出土している。土器は8世紀の末に近い時期のものとする。カタカナの「ツ」の上にも文字があったのかどうかも不明であり、文字の意味も明らかではない。

土師器杯の内側に小さく「酒」と書かれ、外側に「人」と書かれた土器は、松崎播磨遺跡SI-03から出土している。土器は9世紀初め頃の製作と考える。文字の示す意味は明らかではない。いずれの墨書土器も単独の出土であり、土器に書かれた墨書の性格は明確ではない。

編年

最後に、今回報告の土器の年代を示しておく。

7世紀代の土器のなかで古いのは、古墳時代の土器の要素を残した下福田稻荷原遺跡SI-01出土の土器や松崎播磨遺跡SI-01出土の土器である。これらの土器は7世紀の前半から中葉頃の製作と考える。上福田保町遺跡SI-01出土の土器はこの後に続くのかもしれない。次に、先に検討した畿内産土師器を含む土器群が7世紀後半から末に位置付けることができると考える。例として上福田和田谷津遺跡SI-02・上福田13号墳・松崎播磨遺跡SI-04・同遺跡SI-05・同遺跡SI-

06・同遺跡SI-08・同遺跡SI-12・同遺跡SI-16出土の土器をあげることができる。松崎播磨遺跡SI-11出土の土器はこれらの土器よりはやや新しく8世紀初めころと考えるが、細片ではあるが畿内産土師器模倣杯が伴出しているので、少し古く考え7世紀代でもいいのかも知れない。

8世紀の中ころの土器は明確ではない。8世紀後半の土器としては、烏内遺跡SI-534や松崎播磨遺跡SI-02出土土器が比定できよう。松崎播磨遺跡SI-03出土の土器は、9世紀の初めころと考えたい。今回報告の土器でまとまった資料として一番新しいのは、烏内遺跡SI-536出土土器群であり9世紀の後半代の製作かと考える。

非常に大まかに時期を示したが、いずれにしても今回報告の土器は古墳時代の終末期以降の土器であり、畿内産土師器模倣土器にみられるように7世紀後半の土器が多い。

(2) 土製品

今回の報告の遺跡からは、手捏土器、土玉、土製の鎌・鋤先等の土製品が出土している。

手捏土器

下福田稲荷原遺跡SX-02を中心とした地点からかなりの数の手捏土器が出土した。これらの土

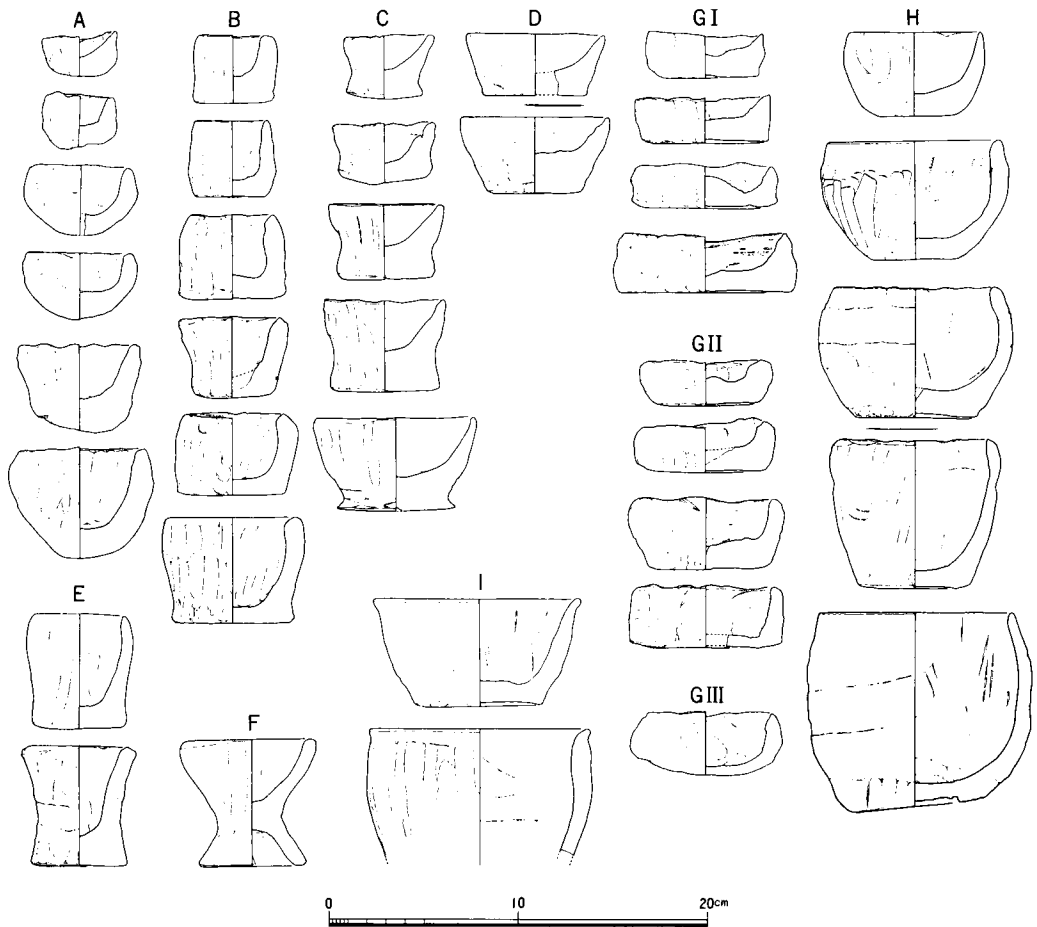


Fig. 51 手捏土器器種類図

器は、出土地点が集中するわりに、完形で出土した土器は少ない。あたかも故意に壊されたと思われるような状態である。また伴出した手捏土器以外の土器からみると、製作された時期は若干時間幅があることも考えねばならないかも知れない。それにしても、出土した手捏土器は器種が豊富である。他遺跡からも手捏土器は出土しているが、その場合でもこれだけの器種は揃っていることは少ないようである。その点、下福田稲荷原遺跡から出土した手捏土器は、手捏土器とよばれるほとんどの器種が含まれているようである。

これらを大きく分類したのがFig. 51である。Aとしたものは、明確な底部がなく小振りなものである。Bは平らな底部があり、体部はほぼ直線的に上方にのび口縁端で僅かに内湾するものである。Cは、底部と体部の境が僅かにくびれるものである。DはCに似るが底部の上方のくびれがなく、体部が外上方に大きくひろく。また、底部が厚いのも特徴である。Eは体部がやや長めのものである。Fは大きくひろく体部に脚が付く。G I・G II・G IIIはいずれも偏平なものである。そのうちG Iは底部が厚く中央部が盛り上がり、体部が短く先端が尖った特徴がある。G IIとしたものはそれに比べると体部先端の鋭さが無いものである。G IIIは偏平であるが底部が丸いものである。HとIはこの種の手捏土器のなかではやや大きめのものである。Hの特徴は、体部が大きく内湾することにある。Iは口縁端部が僅かに外にひろくのが特徴である。特に記述はしなかったが、これらの手捏土器の底部には常緑樹かと思われる木葉痕がつくものがあるのも特徴である。

以上が下福田稲荷原遺跡SX-02から出土した手捏土器の分類である。しかし、手捏土器の分類はできたが、これらの器種がどのような性格をもつのかは明確ではない。また、これらの手捏土器の年代についても明確にすることはできない。いえることは伴出する土器が8世紀から9世紀前半代のものであるということだけである。

土製玉

土製玉は、大きく2種、細分すれば3分類できる大きさのものが出土している。上福田和田谷津遺跡SI-01からは小さなものが、上福田保町遺跡SI-01も小さいものが集中して出土している。下福田稲荷原遺跡も小さい土製玉が出土している。松崎播磨遺跡からは小さいものと大きいものが出土している。明確な用途を明らかにすることはできないが、今回報告の資料はいずれも祭祀用の遺物と考えられるような遺物と共伴することが多いので、これらの土製玉は祭祀用の遺物と考える。特に上福田保町遺跡SI-01号住居跡では、カマド周辺に土製の農耕具があり、その反対側から土製玉が集中して出土しており、その使用方法に関心がもたれる。

土製農耕具

上福田保町遺跡の7世紀後半代の竪穴住居跡SI-01のカマドの袖の上から、土製の鎌と鋤先の模造品が出土している。県内の類例としては、日秀西遺跡の3軒の竪穴住居跡から土製の鋤先模造品が出土している^⑧。しかし、土製の鎌先の模造品は出土例を知らない。日秀西遺跡041Bから

は、カマド周辺から完形のものを含めて8個の土製の鋤先模造品が出土している。日秀西遺跡032C住居跡からは、畿内産土師器杯A類「飛鳥Ⅲ」が出土しており、他の2軒の住居跡もほぼ同じ時期の住居と考えられることから、日秀西遺跡の土製鋤先の年代も上福田保町遺跡SI-01同様7世紀中葉から後半ころと考えられる。

上福田保町遺跡SI-01から出土したのは土製の鋤先模造品が1つと鎌形模造品が2つであり、日秀西遺跡からは鎌形の模造品は出土していないが、出土品が農耕具である点は同じで出土状況も似ている。日秀西遺跡では「これらのものが祭祀又は儀礼用の器具として使用されたものならば、屋内祭祀を考えなくてはならないであろう。」⁽⁷⁾としている。しかし、いまだこの種の発見例が少ないので、これ以上これらの遺物の性格は言及しないが、カマドの祭祀と関係があるものと考えておきたい。

土製環状製品

上福田和田谷津遺跡SI-02から土製玉等といっしょに、土製の環状製品が出土している。一見すると耳環ともみえるものである。福島県夕日長者遺跡5号住居跡のカマド周辺からも土玉などとともに出土しており、この遺物も祭祀に関係がある遺物かも知れない。

2 遺 構

次に、各遺構についてもまとめておく。

(1) 上福田13号墳

上福田13号墳は、二重周溝を巡らし、横穴式石室を埋葬施設にもつ終末期方墳である。先の土器の検討から、上福田13号墳の前庭部から出土土器は、7世紀後半から末にかけて製作された土器であると考えられる。しかし、この土器の年代だけから単純に上福田13号墳の築造年代を決めることはできない。それは、これらの土器が前庭部から出土した土器であり、埋葬かそれ以降の祭祀に伴う土器であることはまちがいないが、古墳の築造時期を示しているとは簡単に判断できないからである。また、すぐ近くに所在する日本で最大規模の終末期方墳龍角寺岩屋古墳の年代が不明なのであるが、龍角寺岩屋古墳の石室とよく似た石室を内蔵する上福田13号墳の年代が龍角寺岩屋古墳の年代にも関連するからでもある。すなわち、最近の調査では県内では2番目に大きい終末期方墳の成東町駄ノ塚古墳(一辺約60m)の築造年代が7世紀の初めころであることが明らかとなり、大型方墳の築造年代が7世紀でも前半代の可能性が高いと考えられるようになってきた。また、県内3番目に大きな終末期方墳木更津市割見塚古墳(一辺約40m)の築造年代は7世紀の中葉に近い前半と考えられるので、上福田13号墳の築造年代を単純に出土した土器の年代から7世紀後半とはいいいくいのである。

大化の改新の際に出された薄葬令が史実ならば、薄葬令後に大型の古墳が造られたと考えに

くいことも龍角寺岩屋古墳の築造年代を7世紀の中葉以後にすることに躊躇する理由である。しかし、最近県内各地で上福田13号墳同様に中規模で周溝を二重に巡らした終末期方墳が発見されている。それらの古墳の築造年代も明確でないものが多いが、出土する土器からみると7世紀の末に近い古墳があるようである。この点から考えると上福田13号墳の築造年代は、前庭部から出土した土器が示す年代に近いと考えてもよいのかも知れない。

とりあえずここでは、上福田13号墳が終末期方墳であることを確認しておく。

また、最近の調査例から終末期方墳の多くが古墳の規模にかかわらず二重に周溝を巡らしていることも確認されているが、古墳の周溝が二重に巡らされている例は、中期の古墳でも確認されていることであり、終末期の方墳だけの特徴ではなくその性格は明確にできない。

(2) 下福田稲荷原遺跡 手捏土器出土遺構 (SX-02)

先の遺構の説明の箇所でも記述したが、下福田稲荷原遺跡のこの遺構は非常に掘り込みの浅い竪穴部を有し、カマドはないが柱穴らしい穴が確認されていること。そして、意識的に破碎されたと思われる須恵器・土師器・手捏土器が多量に出土している。このことから、この遺構は上屋をもった祭祀遺構と考える。また、出土した土器の年代から祭祀がおこなわれたのは8世紀から9世紀にかけての時期と思われる。しかし、祭祀の内容がどのようなものであったのかは不明である。

(3) 上福田和田谷津遺跡 掘立柱建物跡 (SB-01・SB-02)

上福田和田谷津遺跡から検出された掘立柱建物跡は、2棟である。規模からみて必ずしも大きな建物ではない。しかし、SB-01では柱の掘形に布掘りがおこなわれている。建物の時期は明確ではないが、同じ遺跡内で調査した竪穴住居跡よりは新しく奈良時代以降の掘立柱建物かと考えている。また、2棟の掘立柱建物跡は、主軸がほぼ同じなので同時期の建物と考えられる。これらの掘立柱建物跡の性格は明らかではないが、初めにも述べたように、この地域の7世紀から8世紀は、畿内の影響をかなり受けていた地域であり、近くには埴生郡衙と考えられる遺跡もあることから、当時のこの地域での役割りを考えるとその性格に興味もたれる。

(4) 竪穴住居跡

今回の調査では多くの竪穴住居跡を確認しているので、出土土器の検討から考えられる竪穴住居跡の時期を示しておく。

上福田和田谷津遺跡

SI-01は、今回報告のなかでは古手の住居跡と考える。出土した土器から、古墳時代の終末期7世紀前半から中葉ころの竪穴住居跡と考える。SI-02は、完掘できたわけではないが出土した土器のなかに畿内産土師器を模倣した土器が含まれており、その土器の年代から7世紀後半代の住居跡と考える。また、住居跡の覆土中から細片ではあるが瓦が出土していることも、SI-01は7世紀末から8世紀はじめころの住居跡と考える理由である。

上福田保町遺跡

上福田保町遺跡SI-01は、出土した土器から上福田和田谷津遺跡SI-01に近い時期の竪穴住居跡と考える。出土した遺物には、土器のほかに鋤先と鎌と思われる土製の模造品がある。これらの遺物は、確認されている例が少ないので明確にはいえないが、出土した地点がカマドに近いのでカマドか火に関係した祭祀用の遺物なのかもしれない。また、カマドの反対側からは土製玉が集中して出土している。土製玉も先の遺物と関係があるのか興味もたれる。

仲兵遺跡

仲兵遺跡SI-01は、小型の竪穴住居跡である。カマドは方形の竪穴部の隅の部分に位置している。出土した土器は2個体分しかなく明確ではないが、8世紀代の住居跡であろうか。仲兵遺跡では確認調査の結果1軒しか竪穴住居跡は確認されなかったが、これは住居の性格か時期的な特徴を示しているのかもしれない。

下福田稻荷原遺跡

SI-01は、出土遺物が少なく時期が明確でないが、古墳時代後期以降の竪穴住居跡と考える。また、縄文時代の住居も確認しているが、ほとんど遺物を伴っていないので、時期は明らかにできない。

松崎播磨遺跡

松崎播磨遺跡で古い住居跡は、7世紀中頃のSI-01である。7世紀後半から末にかけては住居の数が一挙に増える。例としてはSI-04・SI-05・SI-06・SI-07・SI-08・SI-12・SI-13などが該当する。SI-11も、ほぼ同時期か8世紀初めころの住居跡ある。この時期に松崎播磨遺跡では住居が増えるが、その後また住居は減る。SI-02は8世紀末、SI-10は8世紀中ごろから後半代、SI-03は9世紀はじめの住居跡である。これらの住居跡のなかでは、馬具・鑿・刀子等の鉄製品を出土した竪穴住居跡SI-04は、住居の規模が大きいのが目立つが、ほかの住居跡は遺構からみると特に変わったところはない。

烏内遺跡

烏内遺跡は出土遺物が少なく時期が確定できる住居跡は少ないが、SI-520が8世紀の前半代SI-534は8世紀後半代、SI-536は9世紀の終わりの住居跡と考えられる。

今回発掘調査を実施した範囲は、路線で狭い範囲であり、各遺跡の全体まではわからないが、調査の成果からみると、今回報告の遺跡では松崎播磨遺跡に代表されるように古墳時代の終末期から住居が造られ、7世紀の後半から8世紀の初めころに住居数は最大になり、その後また住居の数は減るようである。これは、これらの集落の性格にもよるのだと思うが、畿内産土師器そのものは出土していないが、それを模倣した土器が多数出土していることも含めて特徴的なことである。

3 房総の終末期方墳

(1) 上福田13号墳周辺の古墳

上福田13号墳が含まれる古墳群は、上福田古墳群とよばれている。上福田古墳群は龍角寺古墳群の南東方に位置し、10数基の古墳で構成されている。これらの古墳のうち円墳と前方後円墳は印旛沼に面した台地の西側に多く位置し、それらは墳形から前期から中期にかけての古墳と考えられる。台地の東側は、利根川に注ぐ根木名川から続く谷が樹枝状に入り込んでおり、その台地の端に上福田13号墳は位置する。13号墳のすぐ南西にも方墳と思われる高まりがある。現在墳頂には祠が祭られており若干改変されている可能性もあるが、墳丘は13号墳と同じくらいの規模があるようにみられる。横穴式石室は確認していない。また、13号墳の北西方には、特異な形の横穴式石室で以前から知られている上福田岩屋古墳が所在する¹⁰。上福田岩屋古墳も石室が開口する南東側は、根木名川から続く谷に面している。上福田岩屋古墳は、小松眞一氏

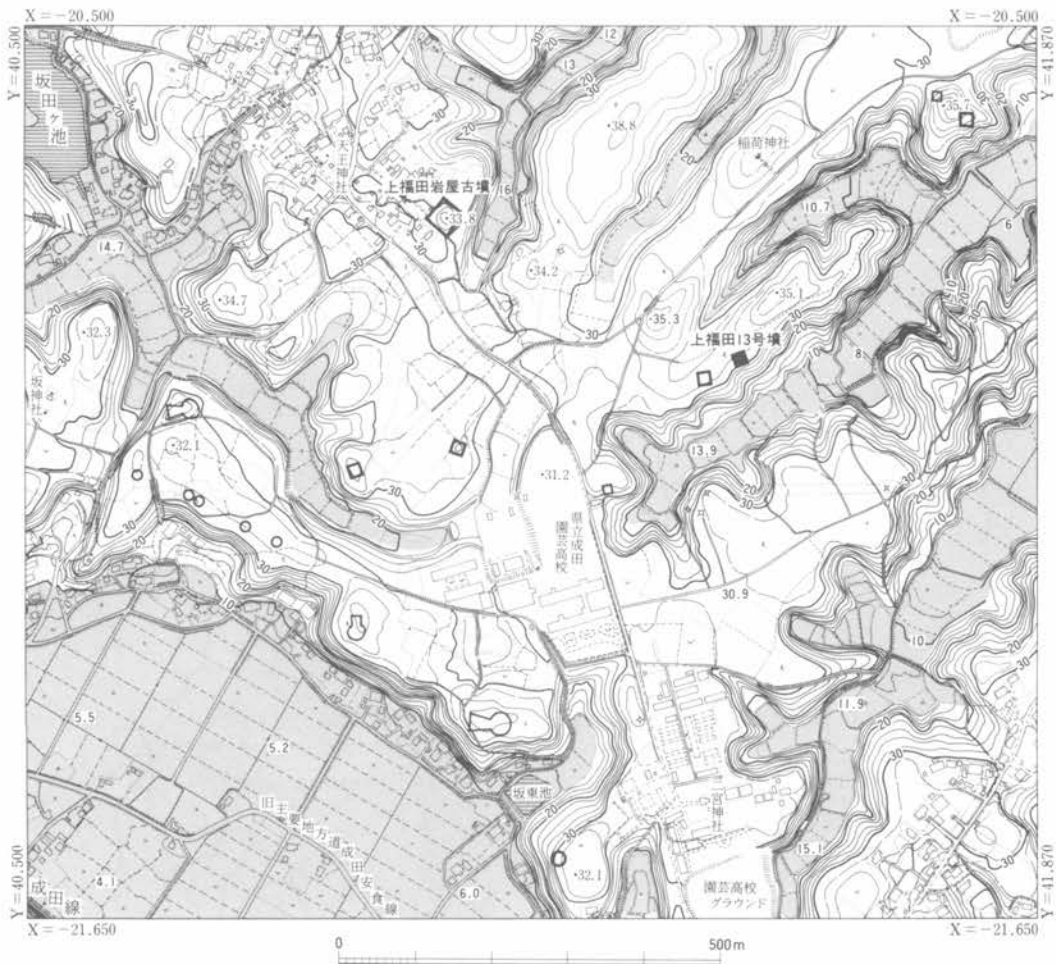


Fig. 52 上福田13号墳周辺の古墳

により特殊な石室としてすでに大正時代に紹介されている¹⁰⁾。古墳は二段築成の方墳であるが、周溝は不明である。石室前面には、平坦面がある。石室は上福田13号墳と同じ貝化石を含む砂岩で構築されている。石室は形からみると横穴の玄室を思わせるような形態で、T字形に横に広がっている。床には間仕切り石がある。奥壁・側壁は四面とも持ち送りで構築されており、天井は高い。小松眞一氏はその特異な石室の形態から、朝鮮半島との関係も示唆している。この古墳も出土遺物は知られてなく、時期が決めにくい古墳である。

以上のように、上福田13号墳の周辺古墳は、印旛沼に近い台地の端に前期から中期にかけて円墳と前方後円墳が所在し、終末期の方墳は根木名川から続く谷に面している。

(2) 印旛沼周辺の終末期方墳

さらに、目を印旛沼・手賀沼にまで広げてみる。この地域には古墳時代の前期から古墳は造られているが、大型の古墳はみあたらない。この傾向は、古墳時代の後期まで続く。中小規模の古墳の数は多いが、大型の前方後円墳はないのである。この事実は、県内の他の東京湾沿岸・九十九里沿岸・芝山地区・小見川地区などの古墳群中には、大型の前方後円墳が含まれている

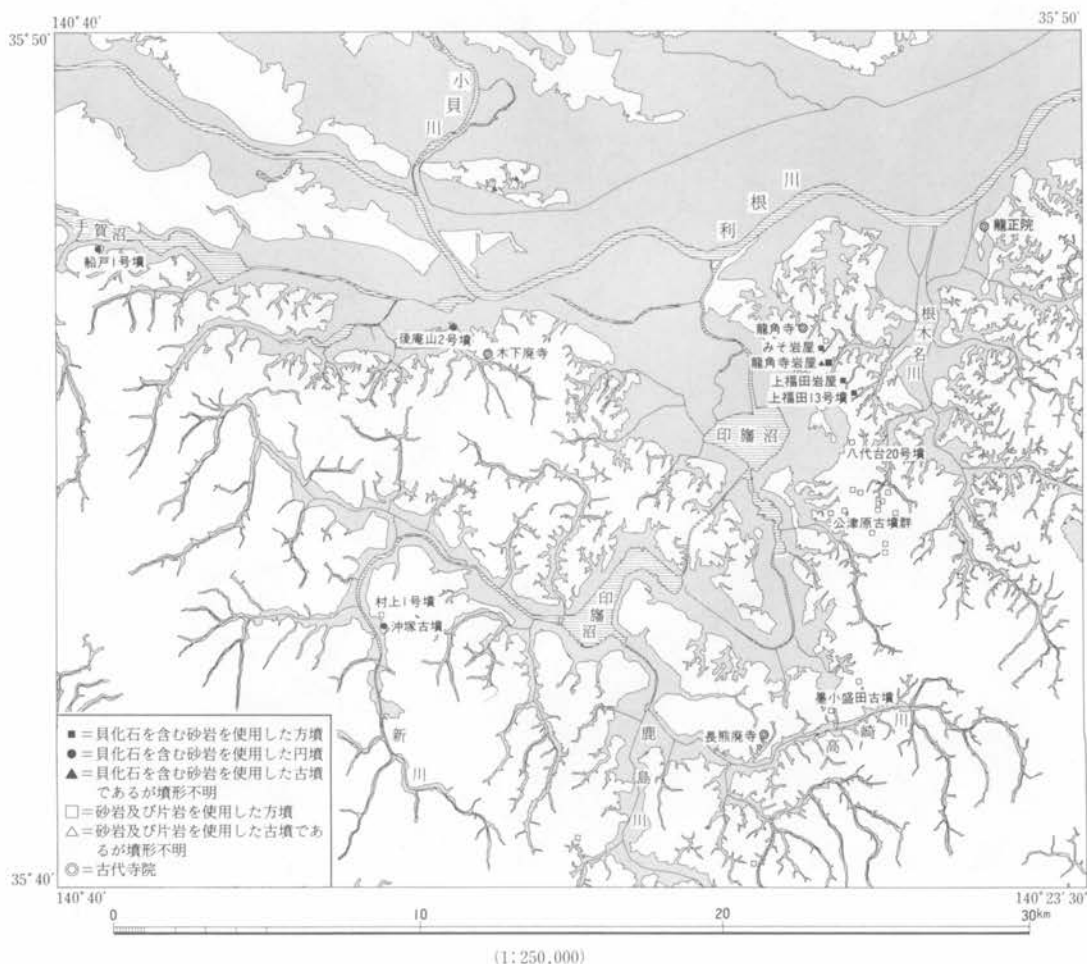


Fig. 53 印旛沼周辺の終末期古墳及び古代寺院位置図

ことと違う点である。ところが、終末期の方墳に限るとそれまでの古墳のあり方とは変わってくる。すなわち、当時としては日本一大きな一辺が80mの方墳龍角寺岩屋古墳が造られていることは、既に紹介したとおりである。

県内の終末期古墳の埋葬施設の多くは、横穴式石室である。筆者は、先に県内の横穴式石室を形態と分布する地域から大きく三つに分類したことがある⁽¹³⁾。その一つが、印旛沼周辺のこの地域なのである。特徴は、横穴式石室の構造が多くの場合単室なのである。成東町駄ノ塚古墳をはじめとした九十九里浜から山武郡、そして東京湾岸の養老川流域までの横穴式石室が、多くの場合軟質の砂岩を使用し、横穴式石室が複式構造のものが多く地域とは明らかに違うのである。

また、この地域の石室材には、上福田13号墳と同じように貝化石の混じる砂岩が使用されている古墳がある。代表的な例としては、龍角寺岩屋古墳、その北方に位置する龍角寺みそ岩屋古墳⁽¹⁴⁾、上福田岩屋古墳、印西町の上宿古墳⁽¹⁵⁾等がある。この石材は、成田層のなかの特に貝層が集中した部分を切り取ったものである。この貝層は、木下貝層ともよばれ成田周辺ではその露頭を数か所で見ることができる。現在確認することができる木下貝層の露頭では、貝はほとんど固まっておらず石室材としては不適であり、所在地は明確にできないが、周辺地域に石室材として適当な木下貝層があり石室材はそこから切り出したものと考えている。砂岩中の貝化石の固まった石材を使用している埋葬施設は、北は利根川の対岸の古墳から、南は八千代市の沖塚古墳⁽¹⁶⁾の範囲で確認している。沖塚古墳は円墳であり6世紀末から7世紀初め頃の古墳と考えられることから、この石材を使用した埋葬施設をもつ古墳のなかでは古い古墳である。先に記したように、この地域の横穴式石室は単室構造という共通点があるが、そのなかでも貝化石の混じる砂岩を使用した石室をもつ古墳は、さらに一つのグループとして捉えることができるのではないかと考える。

(3) 終末期方墳

最後に、終末期方墳の性格を考えてみたい。終末期方墳が千葉県に多いことは、しばしば指摘されている。そのなかでは、日本一大きな龍角寺岩屋古墳がよく知られているが、最近の大規模な発掘調査の成果により中小規模の終末期方墳が多数確認され、数のうえからも終末期方墳は千葉県が一番多い。また、先の印旛沼周辺の古墳の分布図のなかにも示しておいたが、この地域には龍角寺に代表される大和山田寺系の軒先瓦を屋瓦に採用した古代寺院が所在する。しかも、この龍角寺の軒先瓦の系譜をくむ古代寺院は、房総半島で多く確認されている⁽¹⁷⁾のである。

このような状況のなかで、龍角寺岩屋古墳に関して安藤鴻基氏は、「終末期最大の方墳でその墳種・規模からみて、単なる在地豪族との関係だけでは到底理解できない。大型の終末期方墳には、・・(筆者略)・・畿内の中枢の一部ではあるが、蘇我氏に関する有力者の墳墓とみられるも

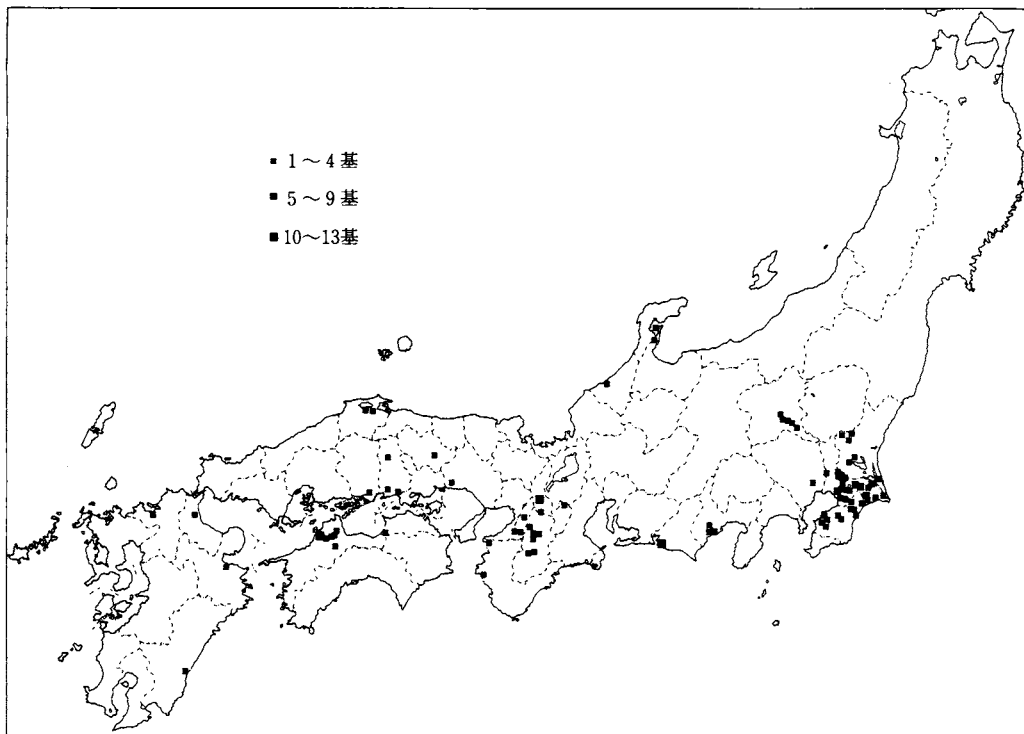


Fig. 54 終末期方墳の分布 (安藤 鴻基「終末期方墳」より改図転載)

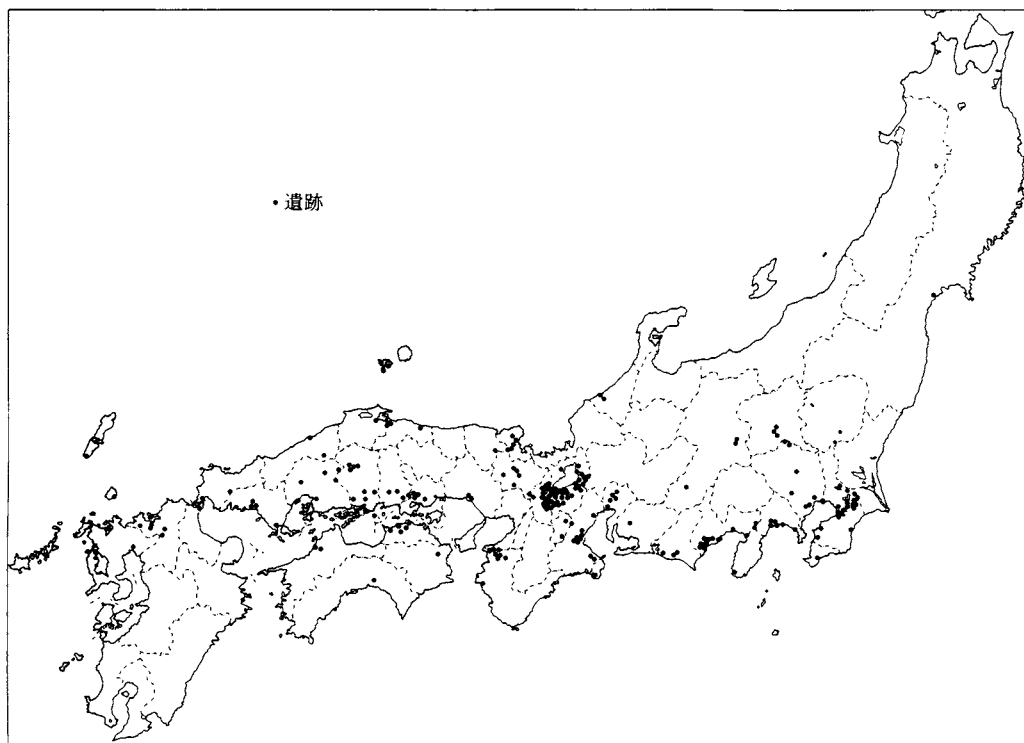


Fig. 55 畿内産土師器の分布 (林部 均「律令国家と畿内産土師器」より改図転載)

のが存在する。そして、龍角寺の屋瓦は、蘇我倉山田石川麻呂の発願によって創建された奈良県の山田寺のものによく似ている。また、千葉市に鎮座する式内の蘇賀比咩神社は、蘇我氏の本貫地である奈良県橿原市の式内・宗我坐宗我都比古神社に対応し、ともに蘇我氏の氏神的存在とみられる。蘇賀比咩神社の位置は、岩屋古墳や龍角寺の所在地から相当離れているが、岩屋古墳の被葬者の強大な権力を思えば、必ずしも遠くはない。むしろ千葉県内の終末期方墳や龍角寺系(屋瓦所用)寺院跡の分布からすれば、その勢力が及んでいたとみることもできる。・

(筆者略)・以上のような言わば状況証拠から私見では岩屋古墳の被葬者について、蘇我一族の一人と考え⁴⁹・」と考えを示している。

今回畿内産土師器模倣土器を調べていくなかで、畿内産土師器の分布と終末期方墳の分布が非常に似ていることに気づいた。Fig. 55は畿内産土師器の分布図である。この図をFig. 54の終末期方墳の分布と比較すると、分布状況がほとんど同じであることが明らかである。千葉県にこれだけ多い終末期方墳も、日本中どこでもあるわけではない。東北地方ではいまだ確認されていない。東海地方や北陸地方では、海に近い地域には所在するが、内陸では確認されていない。関西方面でも畿内に多いことは当然としても瀬戸内沿岸地域に多いが、四国の太平洋側や九州南部ではほとんど確認されていないのである。「飛鳥・奈良時代の土器」は7世紀から8世紀代の土器である。終末期方墳も古い古墳は6世紀末と考えられ、新しい古墳も8世紀初め頃のものもあると思われるが、いずれにしても終末期方墳の時期と畿内産土師器の製作された時期は重なっている。もちろん古墳から畿内産土師器が出土することもある。すなわち、同じ時期の古墳と遺物が同じような分布状況を示しているのである。

畿内産土師器については、林部均氏の詳細な研究がある。林部氏の研究によれば、畿内産土師器の地方での出土は、律令国家とのかかわりの度合いをあらわしているとされ、律令国家の意図に基づくものであるとされている。また、畿内産土師器のあり方について、西日本と東日本では違いがあるともいう。では、畿内産土師器と終末期方墳の分布は非常に似ているので、終末期古墳の偏った分布も畿内産土師器の地方での出土と同じ理由によるものと考えられるのであろうか。今回細かい検討はしないが、国内の山田寺系軒先瓦の分布も畿内産土師器・終末期方墳と似たような分布を示しているのである。

筆者は、房総半島に終末期方墳が多いことについて、畿内政権の7世紀代の東国経営と関係があるのではないかと考えたことがある。今回、畿内産土師器と終末期方墳の偏った分布の状況が非常に似ていることに気づき、その考えを補強することができたように思う。すなわち、畿内産土師器の分布が畿内を中心に当時の主要街道に沿って出土しており、宮城県で1例出土例があるがその分布のほとんどが関東地方までなのである。畿内産土師器の分布の先端と終末期方墳の分布の先端が同じなのであり、その末端に近いところに最大の終末期方墳と多くの中小規模の終末期方墳があることは、その先方の東国経営に関係していると考えられるのである。

房総半島に多い終末期方墳と大和山田寺系の軒先瓦を採用した古代寺院は、安藤氏のいうように蘇我氏となんらかの関係があったものと考えられ、当然、龍角寺岩屋古墳の築造は在地豪族との関係だけでは理解できないであろう。しかし、畿内産土師器も同じような分布状況しており、それらのことも含めて考えると、逆に単に特定の氏族との結びつきだけでも理解できないと思うのである。

上述のように、畿内産土師器・終末期方墳・山田寺系の軒先瓦が房総半島に多く分布する理由は、古墳時代から律令国家へと移行する7世紀代に、畿内政権が他の地域よりもこの地域と多く接触をもっていたことを示しているのであり、それはこの地域が関東以北の東国経営に重要な地点に位置していたためと考えたいのである。またその場合に、当時畿内政権の中核にあって大きな力をもっていたであろう蘇我氏が関与していたことは当然考えられる。

4 結 語

本書は、「新東京国際空港」に近い千葉県印旛沼東岸に建設された主要地方道成田安食線建設に伴う発掘調査報告書である。

調査成果については報告のとおりであり、多くの住居跡・古墳・土器などを発見した。そのなかでも、特筆されなければならないのは、上福田13号墳の調査成果である。上福田13号墳は、当初小規模の方墳と考えられたが、調査の結果墳丘こそ小さいものの、周溝を二重に巡らし、横穴式石室は龍角寺岩屋古墳の石室材と同じ貝化石の固まった砂岩を使用していることが明らかとなった。石室内から副葬品は出土しなかったが、前庭部から埋葬かその後の祭祀に伴うと思われる7世紀後半から末ころの土器が出土した。終末期の方墳が多い房総半島のなかでは中規模の古墳であるが、この地域の古代史を考える上では重要な古墳である。

また、畿内産土師器を模倣した土器を確認できたことにより、8世紀には畿内の土器の模倣が確認されていたが、それが7世紀から行われていたことが明らかとなった。

終末期の方墳と畿内産土師器を模倣した土器、これらは畿内政権が古墳時代から律令体制に移行する時期の重要な歴史的な産物である。そして、これらの歴史的産物は、畿内政権がこの地域を東国経営に重要な地域と考えていたことを示しているものと考えられる。

最後に、保存された上福田13号墳の石室が今後活用され、一般県民に千葉県の古代史の一部が理解されることを望む。またこのような文化財がまだまだ多く眠っているであろうこの地域が、これ以上緑をなくし、歴史を想像できないような環境にならないことを祈って報告を終わる。

文献

- (1) 千葉県文化財センター『主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅宅地関連事業）地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 1985年3月30日
- (2) 千葉県文化財センター『主要地方道成田安食線道路改良事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』 1985年3月
- (3) 房総風土記の丘『龍角寺古墳群測量調査報告書』 千葉県教育庁文化課 1982年6月
- (4) (1)に同じ。
- (5) (1)に同じ。
- (6) 石土啓夫ほか『龍角寺尾上遺跡・龍角寺谷田川遺跡』 印旛郡市文化財センター 1991年9月
- (7) (1)に同じ。
- (8) 小川和博「千葉県成田市宝田山ノ越貝塚研究素描」『奈和』第18号 奈和同人会 1980年
- (9) 越川敏夫ほか『龍角寺ニュータウン遺跡群』龍角寺ニュータウン遺跡調査会 1982年
- (10) 谷 旬 「関戸遺跡」『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』千葉県文化財センター 1983年
- (11) 橋口定志『あじき台遺跡』あじき台遺跡調査団 1983年
- (12) (1)に同じ。
- (13) 滝口 宏『下総龍角寺調査報告書』千葉県教育委員会 1962年3月
- (14) 安藤鴻基「終末期方墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集第一法規 1992年3月
- (15) 吉田 格ほか『関東の石器時代』雄山閣 1973年
- (16) 林部 均「律令国家と畿内産土師器」『考古学雑誌』第77巻 第4号 1992年3月
- (17) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告書Ⅶ』 1976年3月
- (18) (17)に同じ。
- (19) 『江原台遺跡』江原台第1遺跡発掘調査団 1979年
- (20) 『成田都市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』成田市圏護台遺跡発掘調査団 1990年3月
- (21) (1)に同じ。
- (22) 白石竹雄・天野 努ほか『公津原Ⅱ』千葉県文化財センター 1981年3月
- (23) (13)に同じ。
- (24) 佐久間豊「斜格子状暗文を有する土師器杯について」『史館』第15号 市川ジャーナル社 1983年10月
- (25) 酒井清治「房総における須恵器生産の予察（Ⅰ）」『史館』第13号 市川ジャーナル社 1981年
- (26) 上野純司ほか『千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』千葉県文化財センター 1980年2月
- (27) 山口直樹「土製鋤先模造品について」『千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』千葉県文化財センター 1980年2月
- (28) 菅原文也「福島県の祭祀遺跡」『福島の研究』第1巻 地質考古編 清文堂 1986年12月
- (29) 小沢 洋「上総南西部における古墳終末期の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 第一法規 1992年3月
- (30) 石田広美「大畑遺跡」『関東官衙遺跡の検討』茨城県考古学協会 1990年11月
- (31) 工藤英行「上福田岩屋古墳」『成田市の文化財』第9輯 成田市教育委員会 1980年3月
- (32) 小松眞一「下総国に於ける或る三・四の石室古墳」『人類学雑誌』第37巻第4号 東京人類学会 1915年4月
- (33) 永沼律朗「印旛沼周辺の終末期古墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 1992年3月 第一法規
- (34) 多宇邦雄・永沼律朗「みそ岩屋古墳の検討」『古代』第65号 早稲田大学考古学会 1979年3月
- (35) 高木博彦「印西町大森上宿古墳」『ふさ』5・6合併号 ふさの会 1974年12月
- (36) 八千代市史編さん委員会「沖塚古墳」『八千代市の歴史』資料編 原始・古代・中世 八千代市 1991年3月
- (37) 永沼律朗『長熊廃寺跡確認調査報告書』千葉県教育委員会 1986年3月
- (38) 『山田寺』奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館 1981年10月
- (39) (33)に同じ。

別 表

1. 竪穴住居一覧表
2. 古墳時代以降の
土器一覧表
3. 土製品一覧表

別表 1 竪穴住居一覧表

遺跡名	遺跡名 コード	遺構 コード	挿図番号	図面番号	図版番号	種別	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)
上福田和田谷津	211-043	SB-01		PLAN 3	PL. 3	掘立柱建物	長方形	6.00	4.55
		SB-02		PLAN 4	PL. 4	掘立柱建物		7.30	5.45
		SI-01		PLAN 5	PL. 5	竪穴住居	方形	4.98	4.58
		SI-02		PLAN 6	PL. 5	竪穴住居		4.50	(4.24)
上福田保町	211-050	SI-01	Fig.9	PLAN 8	PL.7	竪穴住居	方形	4.50	4.26
仲兵	211-052	SI-01		PLAN 14	PL.11	竪穴住居	方形	2.09	1.87
下福田稲荷原	211-051	SI-01		PLAN 17	PL.13	竪穴住居	方形	3.00	2.70
		SI-02		PLAN 19	PL.14	竪穴住居	円形		
		SI-03		PLAN 20	PL.14	竪穴住居	円形		
		SI-04		PLAN 20	PL.14	竪穴住居	円形		
		SI-05		PLAN 21	PL.15	竪穴住居	円形		
		SI-06		PLAN 22	PL.15	竪穴住居	円形		
		SI-07		PLAN 23	PL.15	竪穴住居	円形		
松崎播磨	211-041	SI-01	Fig. 25	PLAN 42	PL. 32	竪穴住居	方形	3.80	3.50
		SI-02	Fig. 25		PL. 32	竪穴住居	方形	2.90	2.44
		SI-03		PLAN 43	PL. 32	竪穴住居	方形	2.36	1.98
		SI-04	PL. 33		竪穴住居	方形	7.02	6.84	
		SI-05	Fig. 25	PLAN 42	PL. 32	竪穴住居	方形	2.60	2.50
		SI-06	PL. 32		竪穴住居	方形	2.72	2.40	
		SI-07	Fig. 25	PLAN 42	PL. 33	竪穴住居	方形	4.20	4.18
		SI-08	PL. 32		竪穴住居	方形	5.02	4.09	
		SI-09	Fig. 27	PLAN 42	PL. 32	竪穴住居	方形	4.24	4.06
		SI-10	Fig. 27		PL. 32	竪穴住居	方形	2.78	2.04
		SI-11	Fig. 27	PLAN 42	PL. 33	竪穴住居	方形	4.66	3.56
		SI-12			PL. 33	竪穴住居	方形	3.14	2.64
		SI-13	Fig. 27	PLAN 43	PL. 33	竪穴住居	方形	2.82	2.70
		SI-14	PL. 33		竪穴住居	方形	2.88	2.60	
		SI-15	Fig. 27	PLAN 44	PL. 33	竪穴住居	方形	3.10	2.60
		SI-16	PL. 33		竪穴住居	方形	3.42	2.80	
烏内	211-028	SI-512		PLAN 46	PL. 36	竪穴住居	方形	(4.66)	(4.40)
		SI-520		PLAN 47	PL. 37	竪穴住居	方形		
		SI-521		PLAN 47	PL. 37	竪穴住居	方形		
		SI-534		PLAN 48	PL. 38	竪穴住居	方形		
		SI-536		PLAN 48	PL. 38	竪穴住居	方形		
		SI-538		PLAN 46	PL. 36	竪穴住居	方形		

面積 (㎡)	壁高 (m)	主軸 北から時計回り	カマド位置	貯蔵穴 位置	主柱穴 数	出入口口 位置	壁溝	時期	
(24.480)	0.39	270°	北西壁中央 (北壁中央)	なし	4本	東壁中央 南壁中央	全周 (全周)	7世紀中葉	
(19.984)	0.76	290° 325° 2°		なし	(4本)			7世紀末	
(20.000)	0.36	285°	西壁中央	なし	4本	東壁中央	(全周)	7世紀後半	
4.096	0.49	341°	北東隅	なし	なし	なし	全周	8世紀代か	
5.392	0.46						なし	縄文時代? 縄文時代? 縄文時代? 縄文時代? 縄文時代? 縄文時代?	
(7.392)	0.64						なし		
(11.008)	0.32						なし		
(10.800)	0.3						なし		
(7.392)	0.22						なし		
(10.880)	0.39						なし		
23.296	0.39						なし		
14.464	0.37	320°	北西壁中央	なし	4本	南東壁中央	全周	7世紀中葉	
8.704	0.48	329°	北西壁北より	西壁中央	なし	なし	全周せず	8世紀末	
5.648	0.46	338°	北西壁北より	西壁中央	なし	なし	なし	9世紀前半	
49.968	0.34	59°	東壁中央	なし	4本	なし	全周	7世紀末	
7.248	0.45	0°		なし	4本	なし	全周	7世紀末	
6.928	0.52	27°	北東壁中央	なし	なし	なし	全周せず	7世紀末	
19.664	0.21	313°	北西壁中央	なし	4本	なし	なし	7世紀後半	
25.568	0.39	337°	北西壁北より	なし	4本	南東壁南より	全周せず	7世紀末	
18.512	0.37	319°	北西壁中央	なし	4本	南東壁中央	全周せず		
7.344	0.25			なし		なし	なし	8世紀後半	
18.112	0.47	335°	北西壁北より	なし	4本	南東壁南より	全周	8世紀初め	
9.376	0.17			なし		なし	なし	7世紀末	
8.064	0.37	346°	北壁中央	なし		なし	全周	7世紀末	
8.656	0.47	352°	北壁中央	なし		南壁中央	全周		
9.328	0.29	24°	北東壁北より	なし		南西壁中央	全周		
10.208	0.28	338°	北西壁北より	なし	なし	なし	(全周)	7世紀末	
(17.536)	(0.28)	20°	北西壁西より	なし	4本	なし	なし	一部か	8世紀前半
		325°					なし	一部か	
		335°					なし	全周か	
		40°					なし	一部か	
		297°					なし	全周か	
						(全周)	9世紀後半		

() 内の数値は、推定値である。[] 内の数値は、現存値である。

別表2 古墳時代以降の土器一覧表

遺跡名	遺跡名 コード	遺 構 コード	遺物番号	挿図番号	図版番号	種 別	器 種	遺存度 (%)	口 径 (cm)	底 径 (cm)		
上福田和田谷津	211-043	SI-01	1		PL.42	土 師 器	高杯	15	15.0	6.8		
			2		PL.42	土 師 器	杯	50	11.0			
			3		PL.42	土 師 器	杯	80	12.1			
			4		PL.42	土 師 器	杯	50	14.1			
			5		PL.42	土 師 器	杯	50	13.8			
			6		PL.42	土 師 器	杯	80	14.1			
			7		PL.42	土 師 器	杯	70	14.0			
			8		PL.42	土 師 器	甕	70	11.6			
			9		PL.42	土 師 器	甕	20	17.2			
			10		PL.42	土 師 器	甕	30	(16.0)			
			11		PL.42	土 師 器	甕	20	16.0			
			12		PL.42	土 師 器	甕	40	21.8			
			13		PL.42	土 師 器	甕	40	21.8			
			SI-02	1		PL.43	須 恵 器	壺	10	(12.2)		
		2			PL.43	須 恵 器	蓋	40	16.8			
		3			PL.43	土 師 器	杯	40	15.2			
		4			PL.43	土 師 器	皿	20	20.0			
				5		PL.43	土 師 器	甕	50	18.0		
		上福田保町	211-050	SI-01	1		PL.44	土 師 器	杯	100	19.4	6.0
2					PL.44	土 師 器	杯	100	10.9			
3					PL.44	土 師 器	甕	90	12.0			
4					PL.44	土 師 器	甕	40	16.0			
5					PL.44	土 師 器	甕	20	18.0			
6					PL.44	土 師 器	甕	60	26.4			
7					PL.44	土 師 器	甕	50	27.6			
8					PL.44	土 師 器	甕	40				
仲 兵	211-052	SI-01	1		PL.46	土 師 器	杯	30	16.9	12.0		
			2		PL.46	土 師 器	甕	20				
下福田稻荷原	211-051	SX-01	1		PL.47	土 師 器	杯	70		17.2		
			2		PL.47	土 師 器	杯	20	14.8			
			3		PL.47	土 師 器	甕	10	21.0			
			4		PL.47	須 恵 器	甕	40	30.5			
			5		PL.47	須 恵 器	蓋					
			6		PL.47	須 恵 器	杯					
			7		PL.47	須 恵 器	高台杯					
			8		PL.47	土 師 器	杯	100	12.5			
上福田13号墳	211-046	SX-01	1		PL.49	土 師 器	杯	100	12.0	4.5		
			2		PL.49	土 師 器	杯	100	11.8			
			3		PL.49	土 師 器	杯	100	11.1			
			4		PL.49	須 恵 器	蓋	100	14.8			
			5		PL.49	須 恵 器	蓋	100	15.1			
			6		PL.49	須 恵 器	高台杯	100	13.5			
			7		PL.49	須 恵 器	高台杯	100	13.9			
			8		PL.49	須 恵 器	甕	100	17.8			
			9		PL.49	土 師 器	杯	70	7.0			
			10	Fig.30 Fig.30	PL.49	土 師 器	杯	60	[11.5]			
松崎掃磨	211-041	SI-01	1		PL.50	土 師 器	杯	50	11.8	8.2		
			2		PL.50	土 師 器	甕	50				
			3		PL.50	土 師 器	鉢	100	13.7			
			SI-02	4		PL.50	須 恵 器	蓋	20		7.6	
		5			PL.50	土 師 器	杯	90	12.5			
		6			PL.50	土 師 器	杯	30	(12.3)			
		7			PL.50	土 師 器	杯	100	11.6			
		8			PL.50	土 師 器	杯	100	12.0			
		9			PL.50	土 師 器	杯	50	16.9			
		10			PL.50	土 師 器	甕	100	12.8			
		11			PL.50	土 師 器	甕	30	19.0			
		12			PL.50	土 師 器	甕	15	27.0			
		13			PL.50	須 恵 器	甕	10	31.0			
		14			PL.50	土 師 器	甕	20				
			SI-03	1		PL.51	土 師 器	杯	100	10.9	6.2	
		2			PL.51	土 師 器	杯	80	12.5			
		3			PL.51	土 師 器	甕	95	9.8			
		4			PL.51	土 師 器	甕	40	16.5			
				5		PL.51	土 師 器	甕	40	17.3	4.6	
				6		PL.51	須 恵 器	甕	30			
			SI-04	7		PL.51	須 恵 器	蓋	60			
		8			PL.51	土 師 器	杯	25	9.8			
		9			PL.51	土 師 器	杯	25	12.6			
10		PL.51		土 師 器	杯	20	(17.3)					
11		PL.51		土 師 器	杯	20	(17.7)					
	SI-05	12		PL.51	土 師 器	杯	90	16.2	8.0			
13			PL.51	土 師 器	杯	100	16.9					
	SI-06	1		PL.52	須 恵 器	杯	50	15.5	10.0			
2			PL.52	土 師 器	鉢	100	10.0					
3			PL.52	土 師 器	甕	100	18.0					
4			PL.52	土 師 器	甕	20	14.5					

器高 (cm)	色調	混入物	底部調整	体部調整	内面調整	備考
[3.8] 2.9 4.2 5.7 [5.1] 4.9 [3.7]	内黒外明褐色 にぶい褐色 内橙外黒褐色 にぶい黄褐色 内黄褐色外暗赤褐色 暗赤褐色 灰黒色 明赤褐色	白色粒子 白色粒子 白色針状物室 白色粒子	ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ	ヘラケズリ ミガキ ヘラケズリ ヘラケズリ ナデ ヘラケズリ ナデ ヘラケズリ	ミガキ ナデ	内面黒色処理 タール状の付着物 煮沸用甕
1.9 5.0 2.0 [1.0]	灰オリーブ 暗褐色 橙 明褐色	白色粒子 霧母 白色粒子 白色砂粒		ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ後一部ミガキ ヘラケズリのちナデ		口縁部一部のみ
7.3 4.0 10.2 [13.5] [13.0] [18.5] [18.0] [9.0]	明黄褐色 黒褐色 明黄褐色 明褐色 褐色 明褐色 黄褐色 明黄褐色	色針状物室		ヘラケズリ ヘラケズリのちナデ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ	ナデ ミガキ ミガキ ミガキ	
3.3 [9.0]	明褐色 外浅黄内明黄褐色	白色粒子		ヘラケズリ ミガキ		
[3.5] [3.4] 19.0 4.4	赤褐色 赤褐色 明褐色 外灰内オリーブ 黄褐色	白色粒子 白色針状物室	回転ヘラケズリへら ヘラケズリ ヘラケズリ	ヘラケズリ ナデ タタキ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ 底部糸切り	ミガキ ナデ	内外面赤彩 内外面赤彩 底部に囊状圧痕 墨書「倍」
4.0 3.3 3.1 4.6 2.4 3.9 4.4 35.0	内黒色外橙 赤褐色 赤褐色 青味灰 青味灰 明るい青味灰 明るい灰色 明るい灰色		木葉痕	回転ヘラ 回転ヘラ 回転ヘラ 回転ヘラ タタキ	ミガキ ミガキ ミガキ ナデ	内外面赤彩 内外面赤彩 肩に自然釉
9.2 [2.9]	明褐色 明褐色		ヘラケズリ 回転糸切り	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	流土出土 石室内流土出土
3.9 [2.5] 11.9	淡黄褐色 橙 橙	白色粒子 白色砂粒 白色砂粒		ヘラケズリ		
[1.1] 4.2 3.8 3.7 3.6 3.9 10.2 [14.0] [7.0] [7.5]	灰色 橙 橙 黄褐色 明赤褐色 淡黄褐色 黄褐色 にぶい黄褐色 黄褐色 黒・赤褐色 黄土色	霧母・白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色粒子 白色砂粒 霧母・白色粒子 黒色粒子 白色粒子 黒色粒子	回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ	ヨコナデ 一部ヘラケズリ 一部ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ナデ ナデ ヘラケズリ ヘラケズリ	ナデ ナデ	常陸産? 墨書「酒・人」 胴部に穴
3.7 3.9 6.6 [8.3] [9.0]	明黄褐色 橙 黄褐色 赤褐色 淡黄褐色 灰色	白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒	ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ	一部ヘラケズリ 一部ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ タタキ		墨書「ツ里」
[19.0] [2.8] [3.0] [4.3] [6.1]	灰白色 淡黄褐色 褐色 明褐色 橙	白色粒子 白色砂粒 霧母・白色針状物質 白色砂粒		回転ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ	ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ	常陸産?
3.9 7.0	赤褐色 赤褐色	白色砂粒	ヘラケズリ ヘラケズリ	ヘラケズリ ヘラケズリ	ミガキ ミガキ	体部に工具痕
4.9 10.2 19.1	明褐色 黄褐色 赤褐色	霧母 白色砂粒 白色砂粒	ヘラケズリ 木葉痕 木葉痕	ナデ ミガキ的ナデ ヘラケズリ		煮沸用?

() 内の数値は、推定値である。[] 内の数値は、現存値である。色調は、標準土色帖による。

遺跡名	遺跡名 コード	遺構 コード	遺物番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	遺存度 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)			
		SI-07	5		PL.51	土師器	杯	100	11.2				
			6		PL.51	土師器	甕	80	17.4	8.5			
		SI-08	1		PL.53		須恵器	長頸壺	20	10.0	8.3		
			2		PL.53		須恵器	蓋	100	9.0			
			3		PL.53		須恵器	蓋	95	11.5			
			4		PL.53		須恵器	蓋	100	11.8			
			5		PL.53		須恵器	杯	100	13.6			
			6		PL.53		須恵器	甕	10	(20.3)			
			7		PL.53		土師器	杯	30	15.4			
			8		PL.53		土師器	皿	10	23.0			
			9		PL.53		土師器	甕	10	14.0			
			10		PL.53		土師器	甕	10	14.9			
			11		PL.53		土師器	甕	30				
			12		PL.53		土師器	甕	10				
		SI-09	13		PL.53		土師器	甕	15	(22.8)			
		SI-10	14		PL.53		須恵器	杯	60	(12.6)	7.9		
			15		PL.53		須恵器	甕	20		14.5		
		SI-11	1	Fig.32	PL.54		土師器	杯	40	(12.7)	(7.0)		
			2		PL.54		土師器	杯	20	(12.4)	(7.1)		
			3		PL.54		須恵器	蓋	50	14.5			
			4		PL.54		須恵器	杯	100	13.4	9.0		
			5		PL.54		須恵器	杯	100	12.6	8.5		
			6		PL.54		須恵器	杯	100	12.0	8.3		
			7		PL.54		土師器	甕	60	12.2			
			8		PL.54		土師器	甕	20		9.0		
			9		PL.54		土師器	甕	80	[23.3]	(9.5)		
		SI-12	1		PL.55		須恵器	杯	95	11.8	6.6		
			2		PL.55		土師器	杯	80	15.3			
			3		PL.55		土師器	杯	50	16.8			
			4		PL.55		土師器	皿	80	23.5	16.0		
			5		PL.55		土師器	甕	50	(16.6)			
			6		PL.55		土師器	甕	30		(6.8)		
			7		PL.55		土師器	甕	15	15.4			
			8		PL.55		土師器	甕	20		(10.8)		
			9		PL.55		土師器	甕	35		8.0		
		SI-13	1		PL.56		土師器	甕?	50	24.4			
			2		PL.56		土師器	甕	10	(25.4)			
			3		PL.56		土師器	甕	50	(25.8)	7.6		
		SI-14	4		PL.56		土師器	甕	40		9.8		
		SI-16	1		PL.55		土師器	杯	50	(13.1)	12.7		
			2		PL.55		土師器	杯	100	13.8	6.6		
			3		PL.55		土師器	杯	100	15.4	7.0		
			4		PL.55		土師器	杯	60	16.3			
			5		PL.55		土師器	杯	95	15.4	6.8		
			6		PL.55		土師器	杯	100	14.9	5.5		
			7		PL.55		土師器	杯	30	15.4			
			8		PL.55		土師器	杯	100	15.5	6.0		
			9		PL.55		土師器	杯	95	15.2			
			10		PL.55		土師器	杯	100	15.2			
			11		PL.55		土師器	杯	20	(15.7)			
			12		PL.55		土師器	皿	50	22.6	14.0		
			13		PL.55		土師器	杯	100	10.7	5.9		
			14		PL.55		土師器	甕	70	12.9	6.2		
			15		PL.55		土師器	甕	80	15.8	(7.1)		
			16		PL.56		土師器	甕	40	14.0			
			17		PL.56		土師器	甕	50				
			18		PL.56		土師器	甕	30		(9.2)		
			19		PL.56		土師器	甕	40				
		遺構外	1	Fig.33			土師器	杯	20	(13.0)			
			2		PL.67		土師器	杯	70	15.0			
			3		PL.67		土師器	杯	40	(16.2)			
		鳥内	211-028	SI-520	1		PL.59	須恵器	杯	30	12.9	9.8	
					3		PL.59	土師器	杯	40	(16.2)		
				SI-534	2		PL.59	土師器	杯	95	12.9	7.2	
					3		PL.59	土師器	杯		13.6	8.0	
					4		PL.59	土師器	杯	30		7.0	
					5		PL.59	土師器	甕	90		8.0	
					6		PL.59	土師器	甕	50		9.0	
				7		PL.59	土師器	甕	50	27.0			
				SI-536	8		PL.59		須恵器	杯	20	(14.0)	
					9		PL.59		須恵器	杯	20	(14.2)	
		10			PL.59		須恵器	甕		(25.0)			

器 高 (cm)	色 調	混 入 物	底 部 調 整	体 部 調 整	内 面 調 整	備 考
4.1 20.4	外明赤褐色内黒褐色 赤褐色	白色粒子	ヘラケズリ	ヘラケズリ ヘラケズリ		煮沸用
[10.6] 2.7 3.3 3.5 3.6 (6.0) [6.5] 2.1 [3.8] [5.5] [5.3] [6.4]	灰色 くすんだ黒 黒褐色 濃いグレー 灰白色 灰色 橙 橙 明褐色 褐色 外橙内黒褐色	白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒		ナデ 回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ タタキ後ナデ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ	ミガキ ミガキ	東海産？
[9.4]	明黄褐色	白色砂粒				工具ナデ
4.2 [7.1]	橙 灰色	白色砂粒 雲母・白色粒子	手持ちヘラケズリ ヘラケズリ	ヘラケズリ		
3.4 3.9 [1.5] 4.2 3.8 3.6 [10.8] [5.8] [29.8]	橙 橙 灰色 灰オリーブ 明黄褐色 灰色 橙 橙 明褐色	白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒	ヘラケズリ 回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ	ヘラケズリ 回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ後ミガキ		
3.6 4.2 3.8 2.2 [7.9] [9.0] 8.3 [5.8] [17.2]	黄灰色 明赤褐色 橙 橙 橙 橙 淡褐色 橙 黄褐色	白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 雲母・白色粒子	回転ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ	ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ミガキ	ミガキ ミガキ ミガキ	煮沸用
12.7 [5.1] 34.1	明赤褐色 黄灰色 明褐色	雲母 雲母・白色粒子		ヘラケズリ ヘラケズリ後ミガキ	ナデ	
[12.6]	赤褐色	白色砂粒		ヘラケズリ		
12.7 3.8 4.0 4.2 4.0 3.9 4.3 4.0 3.8 3.8 [3.9] 2.8 3.3 11.8 17.8 [7.0] [9.5] [7.8] [11.8]	明褐色 褐色 明褐色 明褐色 明褐色 明褐色 褐色 明褐色 明褐色 橙 橙 明褐色 橙 橙 黄褐色 明褐色 橙 明褐色	白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒 白色砂粒	ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ	ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ	ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ ミガキ	内面口縁部沈線 内面口縁部沈線 内面口縁部沈線 内面口縁部沈線 内面口縁部沈線 外面口縁部沈線
4.1 4.3	明褐色 黄土色 赤褐色	白色砂粒		ミガキ・ヘラケズリ ミガキ・ヘラケズリ ヘラケズリ	ミガキ ミガキ 放射暗文	赤彩
[4.3]	青灰色			ヘラケズリ		
4.0 3.5 [2.0] [14.3] [4.5] [14.3]	橙 赤褐色 赤褐色 赤褐色 赤褐色 橙	白色粒子 白色粒子	ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ ヘラケズリ 回転糸切り	ヘラケズリ ヘラケズリ	ナデ ナデ	
[4.0] [4.4] [9.2]	青灰色 濃青灰色 オリーブ灰	白色粒子 白色粒子 白色粒子		タタキ	ナデ	胴部に穿孔

() 内の数値は、推定値である。[]内の数値は、現存値である。色調は、標準土色帖による。

別表3 土製品一覧表

遺跡名	遺跡名 コード	遺構 コード	図版番号	遺物 番号	種別	最大 高 (cm)	最大 幅 (cm)	重量 (g)			
上福田和田谷津	211-043	SI-02	PL.43	6	土製玉	1.82	2.33	8.25			
			PL.43	7	土製玉	1.32	1.78	3.64			
		SD-02	PL.43	8	土製玉	1.25	1.63	2.30			
			PL.43	9	土製玉	1.45	1.73	3.44			
			PL.43	10	土製環状製品	2.20	2.30	3.76			
			PL.43	11	土製紡錘車	2.70	3.80	40.87			
グリッド	PL.43	12	砥石	2.00	1.80	31.51					
上福田保町	211-050	SI-01	PL.45	9	土製玉	1.92	2.08	8.02			
			PL.45	10	土製玉	1.72	1.95	5.62			
			PL.45	11	土製玉	1.83	2.11	7.73			
			PL.45	12	土製玉	1.67	1.99	6.09			
			PL.45	13	土製玉	1.93	2.04	7.12			
			PL.45	14	土製玉	1.93	2.11	7.83			
			PL.45	15	土製玉	1.79	2.02	7.41			
			PL.45	16	土製玉	1.96	2.03	7.44			
			PL.45	17	土製玉	1.70	2.16	7.12			
			PL.45	18	土製玉	1.75	2.08	5.86			
			PL.45	19	土製玉	1.77	2.03	6.50			
			PL.45	20	土製玉	2.03	2.22	8.86			
			PL.45	21	土製玉	1.93	2.15	8.09			
			PL.45	22	土製玉	1.64	1.99	5.92			
			PL.45	23	土製玉	1.83	2.04	7.16			
			PL.45	24	土製玉	2.01	2.06	8.10			
			PL.45	25	土製玉	1.96	2.19	7.87			
			PL.45	26	土製玉	1.94	2.09	7.38			
			PL.45	27	土製玉	1.90	2.00	6.94			
			PL.45	28	土製玉	2.00	2.12	8.30			
			PL.45	29	土製玉	1.89	2.18	8.05			
			PL.45	30	土製玉	1.81	2.13	7.19			
			PL.45	31	土製玉	1.95	2.14	8.14			
			PL.45	32	土製玉	1.98	2.17	7.94			
			PL.45	33	土製玉	1.81	1.99	6.82			
			PL.45	34	土製玉	1.85	2.04	7.35			
			PL.45	35	土製玉	1.89	2.18	7.99			
			PL.45	36	土製玉	1.88	1.96	6.45			
			PL.45	37	土製玉	1.67	1.94	5.78			
			PL.45	38	土製玉	1.84	2.11	7.06			
			PL.45	39	土製玉	1.80	1.95	6.39			
			PL.45	40	土製玉	1.99	2.10	7.78			
			PL.45	41	土製玉	1.87	2.05	7.18			
			PL.45	42	土製玉	1.91	2.05	4.03			
			PL.45	43	土製玉	1.79	2.00	6.25			
			PL.45	44	土製玉	1.43	2.01	4.48			
			PL.45	45	土製玉	1.64	1.88	5.67			
			PL.46	46	土製鋤先	1.50	2.30	33.47			
			PL.46	47	土製鎌	1.10	1.70	19.75			
			PL.46	48	土製鎌	1.00	1.60	15.55			
			PL.46	51	土製紡錘車	2.50	4.70	54.37			
			PL.46	52	土製紡錘車	1.60	7.40	106.43			
			下福田稻荷原	211-051	SX-01	PL.48	24	土製玉	1.77	2.20	6.90
			松崎播磨	211-041	SI-01	PL.58	8	土製玉	1.60	1.45	2.48
						PL.58	9	土製玉	1.51	1.85	4.99
					SI-06	PL.58	10	土製玉	1.68	1.87	5.30
					グリッド	PL.58	11	土製玉	1.82	1.99	6.50
						PL.58	12	土製玉	2.93	3.29	25.45
			PL.58	13		土製玉	3.00	3.30	25.45		



面版
図

1. 遺構写真の撮影方向は、極力左下に示した。
2. 遺構実測図地山の横線は、すべて水平線である。
3. 遺物写真のPlate番号は、対向ページの実測図にも及ぶことにする。縄文土器も挿図中の番号に一致させた。ただし、写真を掲げず実測図のみ示すもの、実測図を掲げず写真のみを示すものもある。
4. 遺物写真のスケールは、ページの左下に示した。特にスケールが違う場合は、写真の左下に示した。



1.上福田13号墳全景（上空から）



2.上福田13号墳石室内

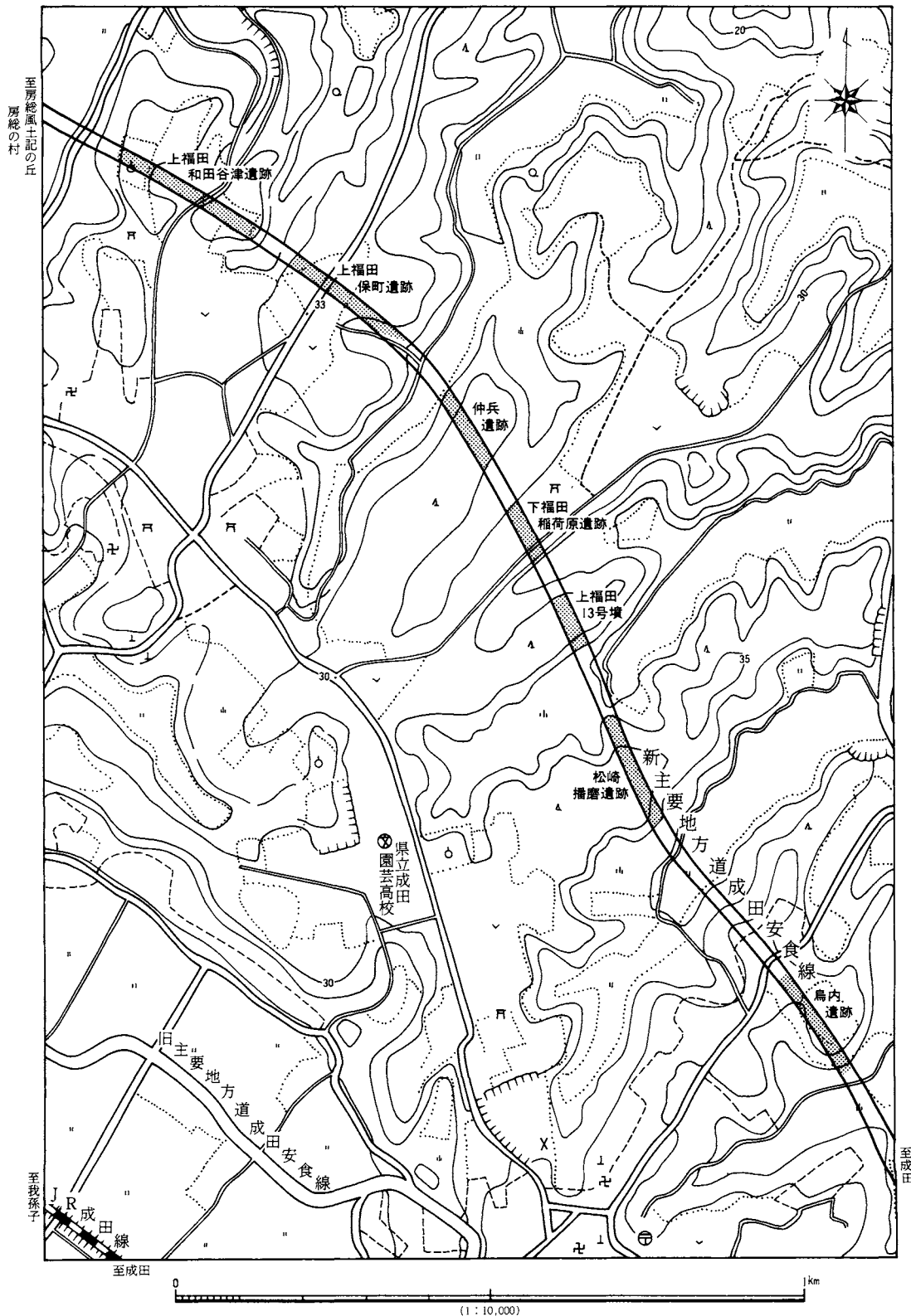


1. 上福田13号墳出土土器



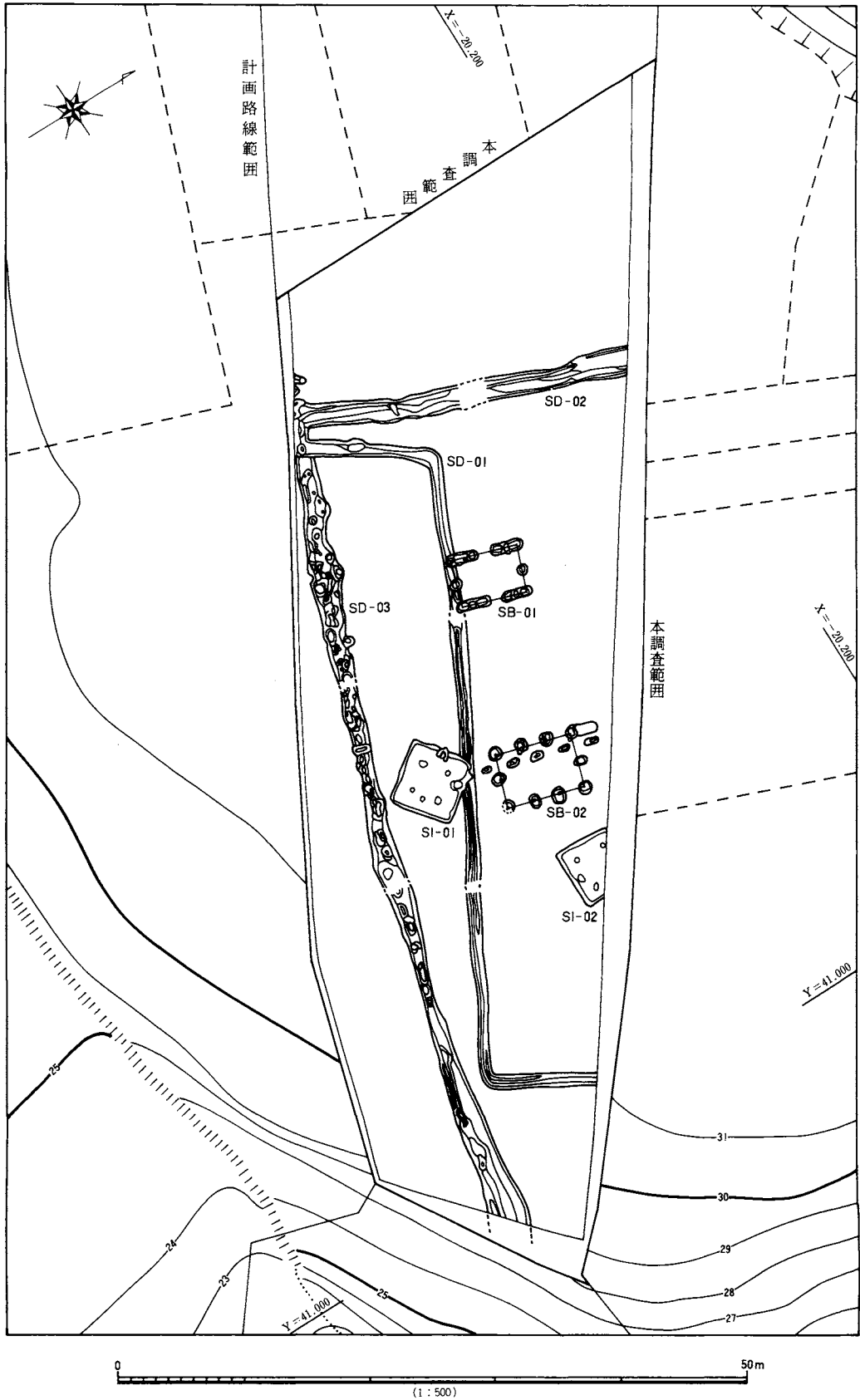
2. 畿内産土師器模倣土器

PLAN I 成田安食線周辺の地形



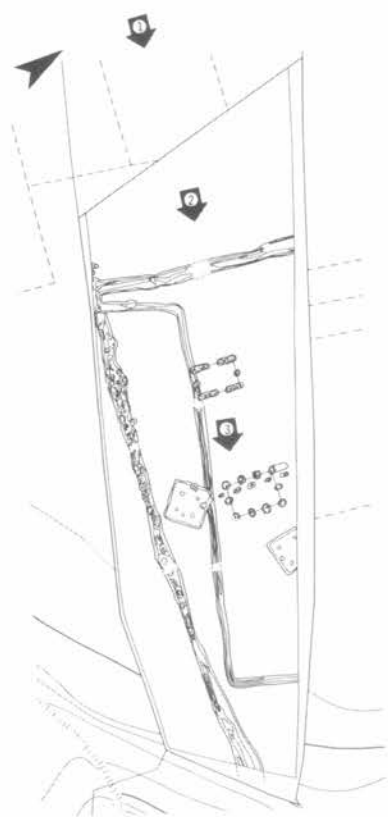


PLAN 2 上福田和田谷津遺跡 遺構全体図

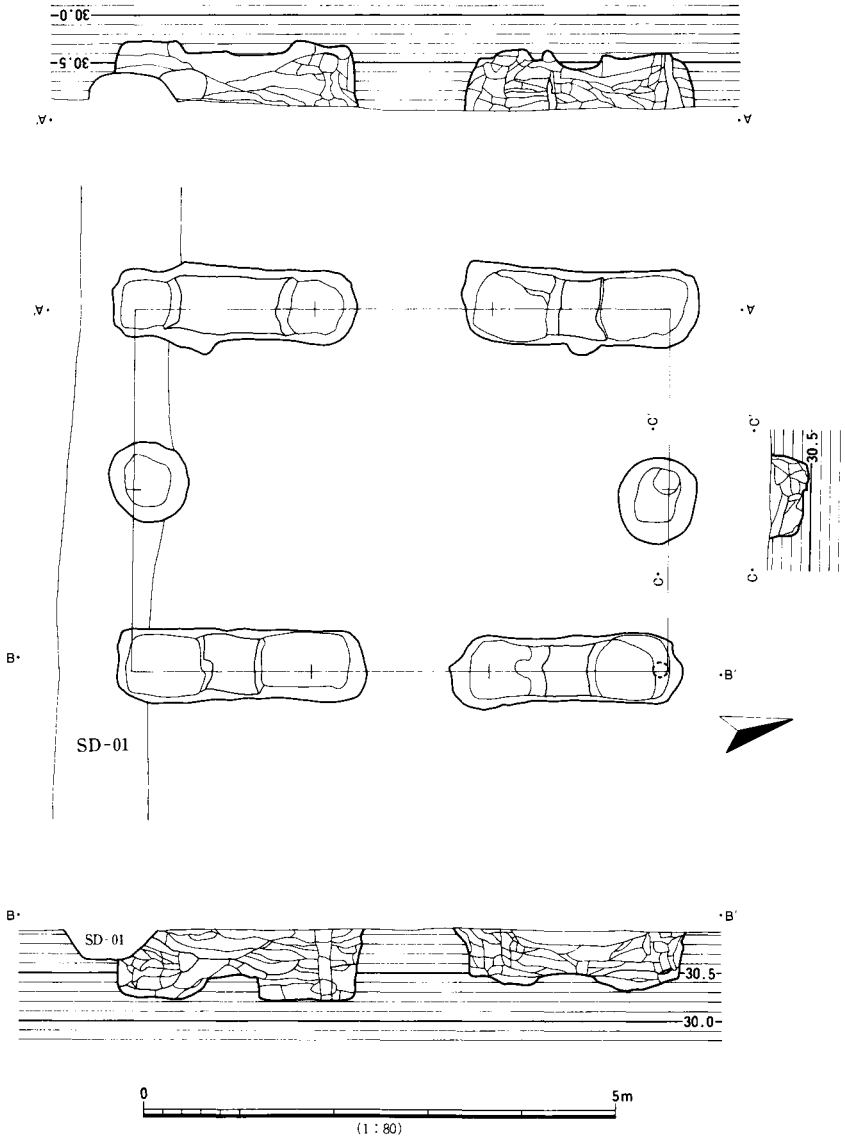


上福田和田谷津遺跡

1. 確認調査状況
(北から)
2. 遺構発掘状況
(北から)
3. 遺構発掘状況
(北から)

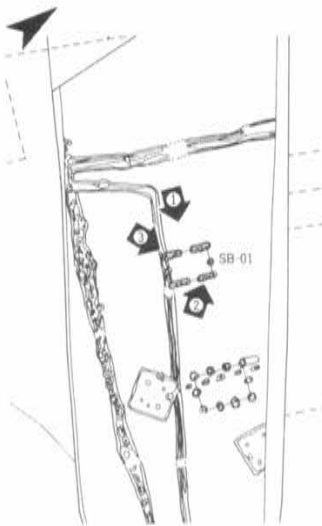
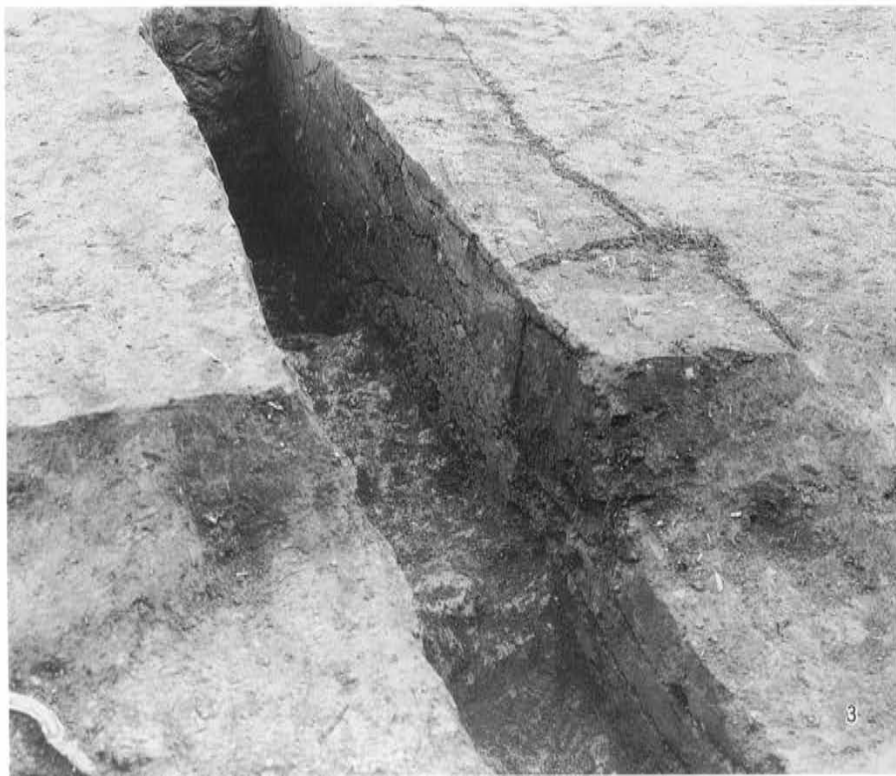
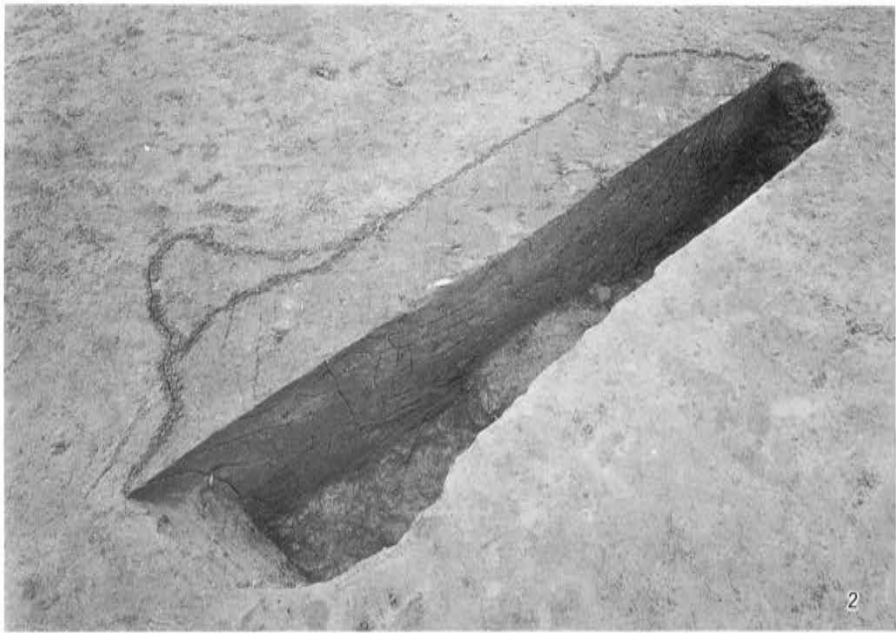
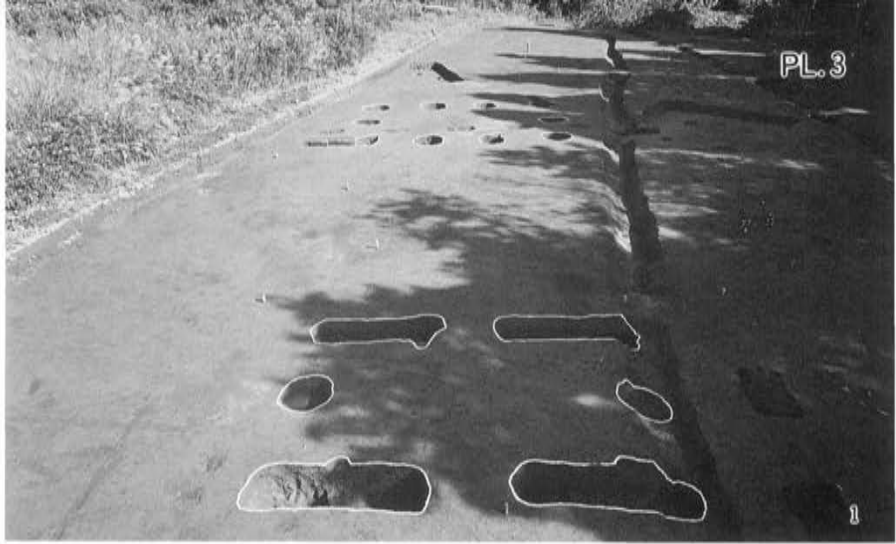


PLAN 3 上福田和田谷津遺跡 SB-01実測図

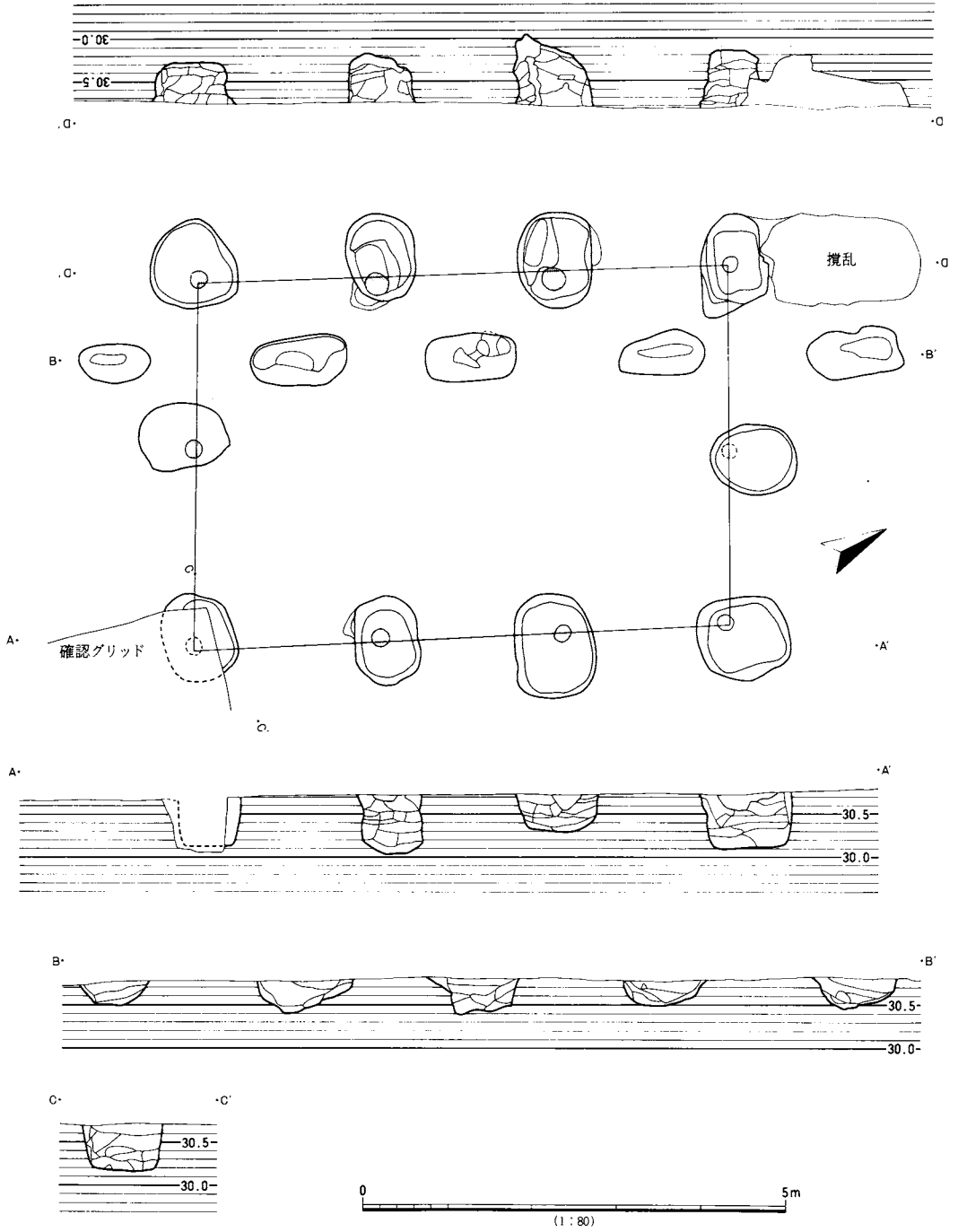


上福田和田谷津遺跡
SB-01

- 1. 全 景
(北から)
- 2. 掘形土層断面
(東から)
- 3. 掘形土層断面
(東から)

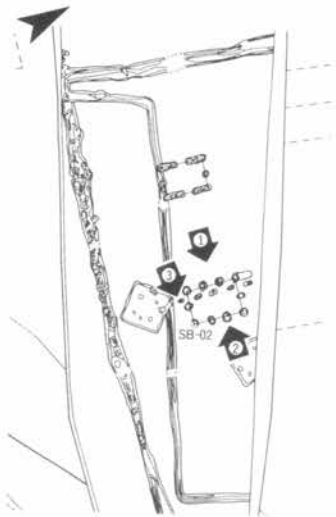
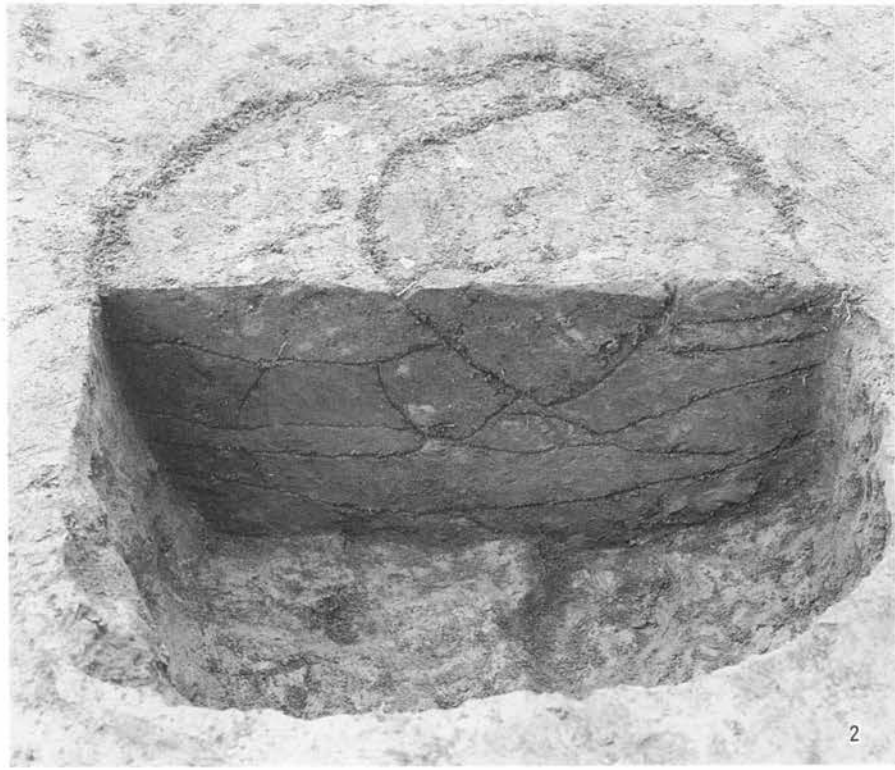
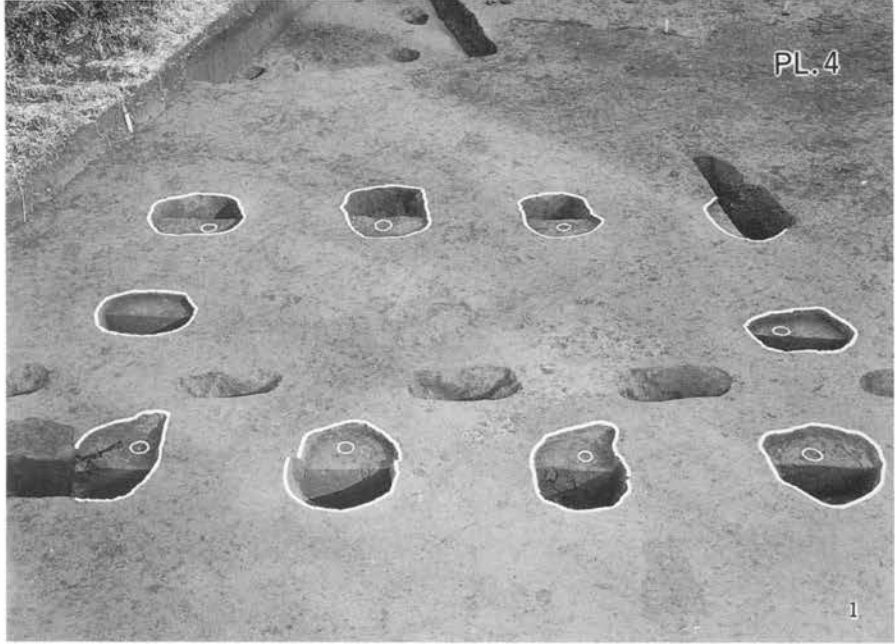


PLAN 4 上福田和田谷津遺跡 SB-02実測図

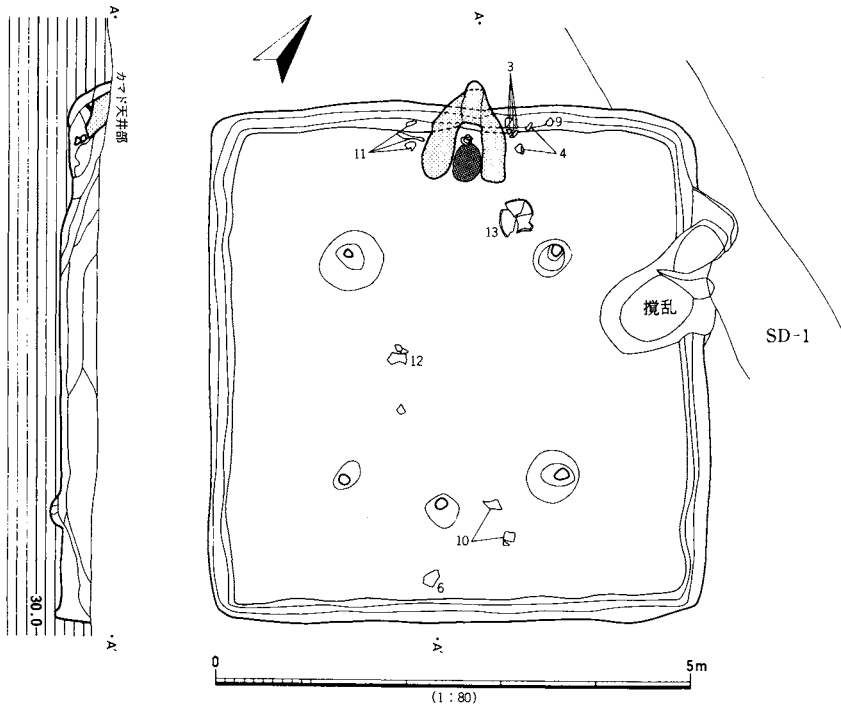


上福田和田谷津遺跡
SB-02

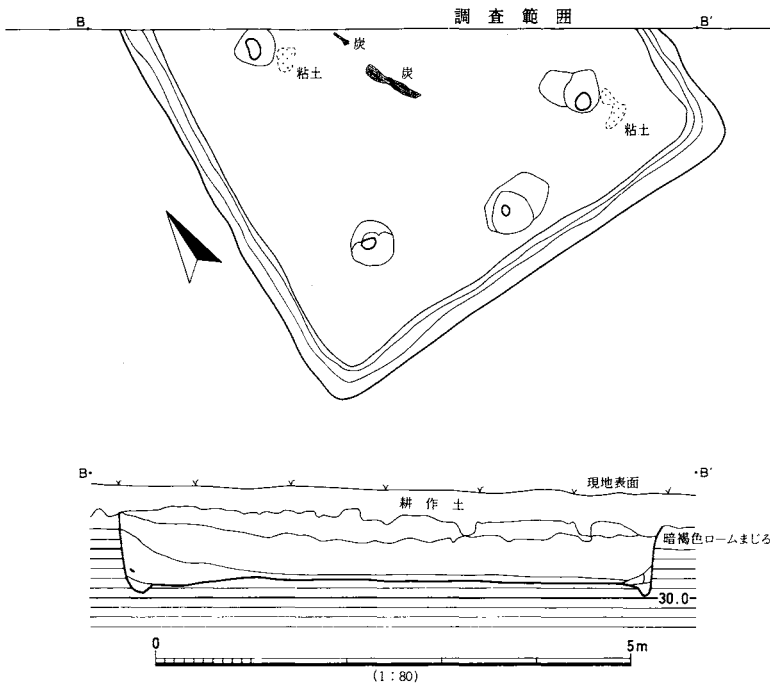
1. 全 景
(北から)
2. 掘形土層断面
(東から)
3. 掘形土層断面
(東から)



PLAN 5 上福田和田谷津遺跡 SI-01実測図

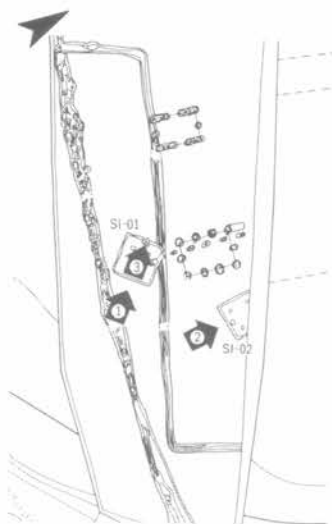


PLAN 6 上福田和田谷津遺跡 SI-02実測図

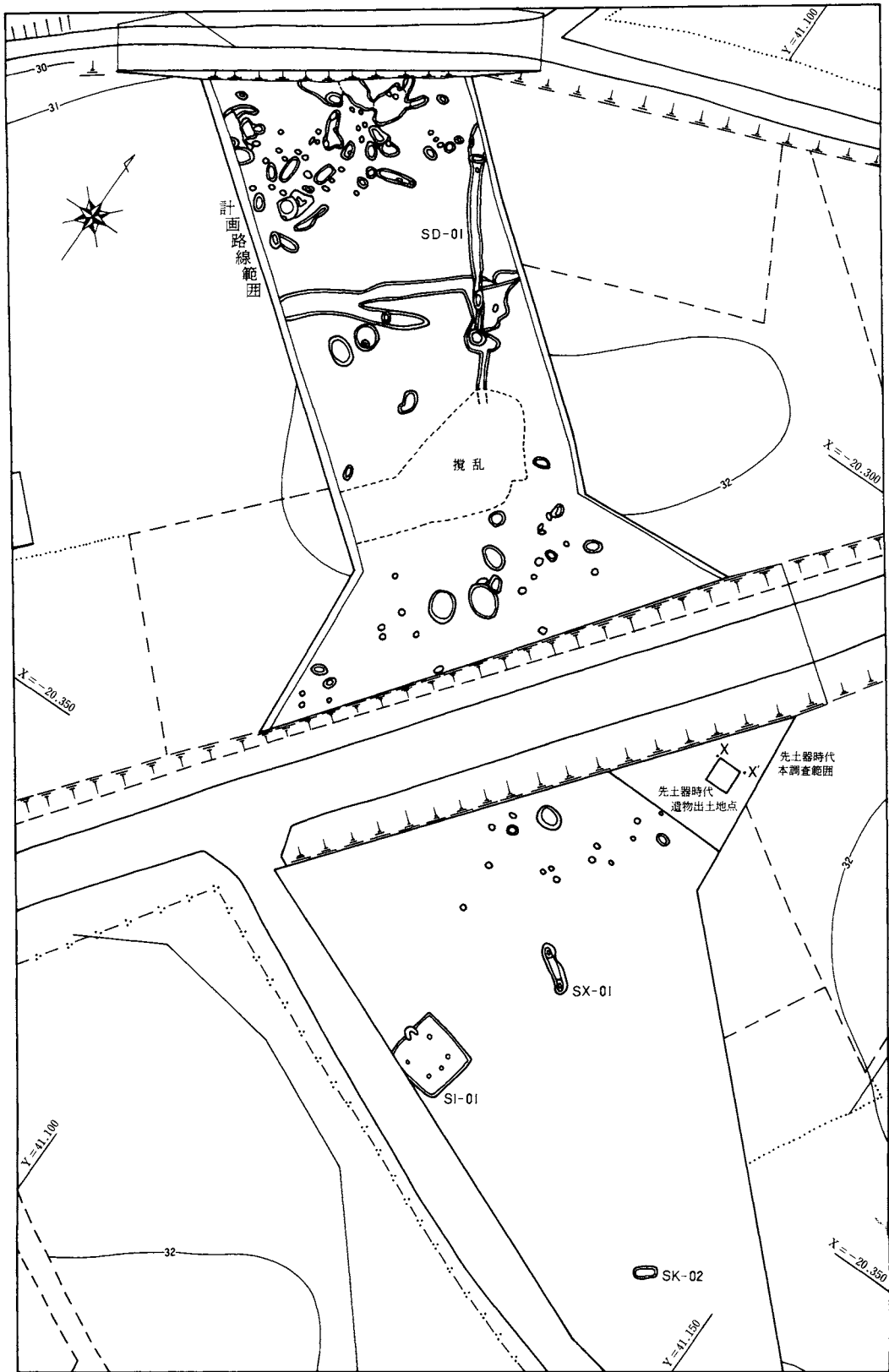


上福田和田谷津遺跡
SI-01・SI-02

1. SI-01全景
(南東から)
2. SI-02全景
(南から)
3. SI-01カマド周辺
遺物出土状況
(東から)



PLAN 7 上福田保町遺跡 遺構全体図





遺構発掘状況 (01/20/05)

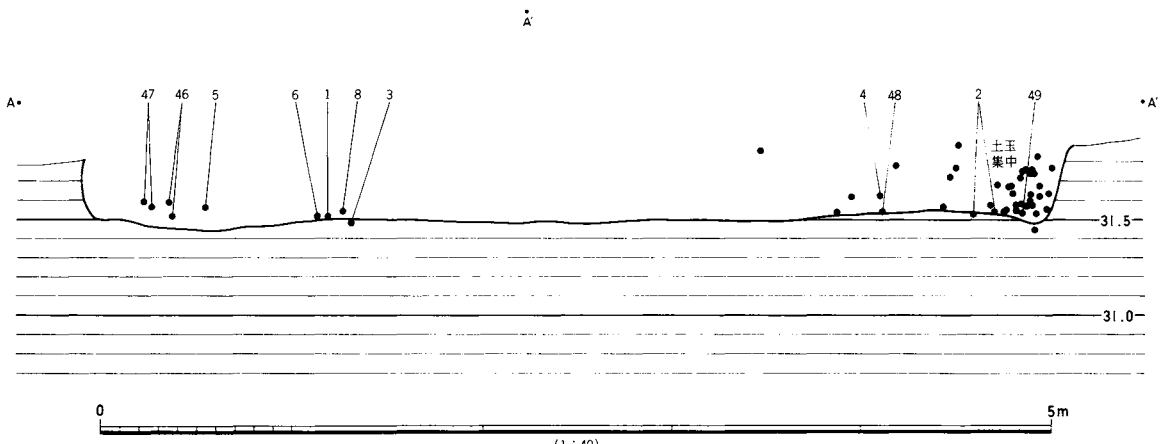
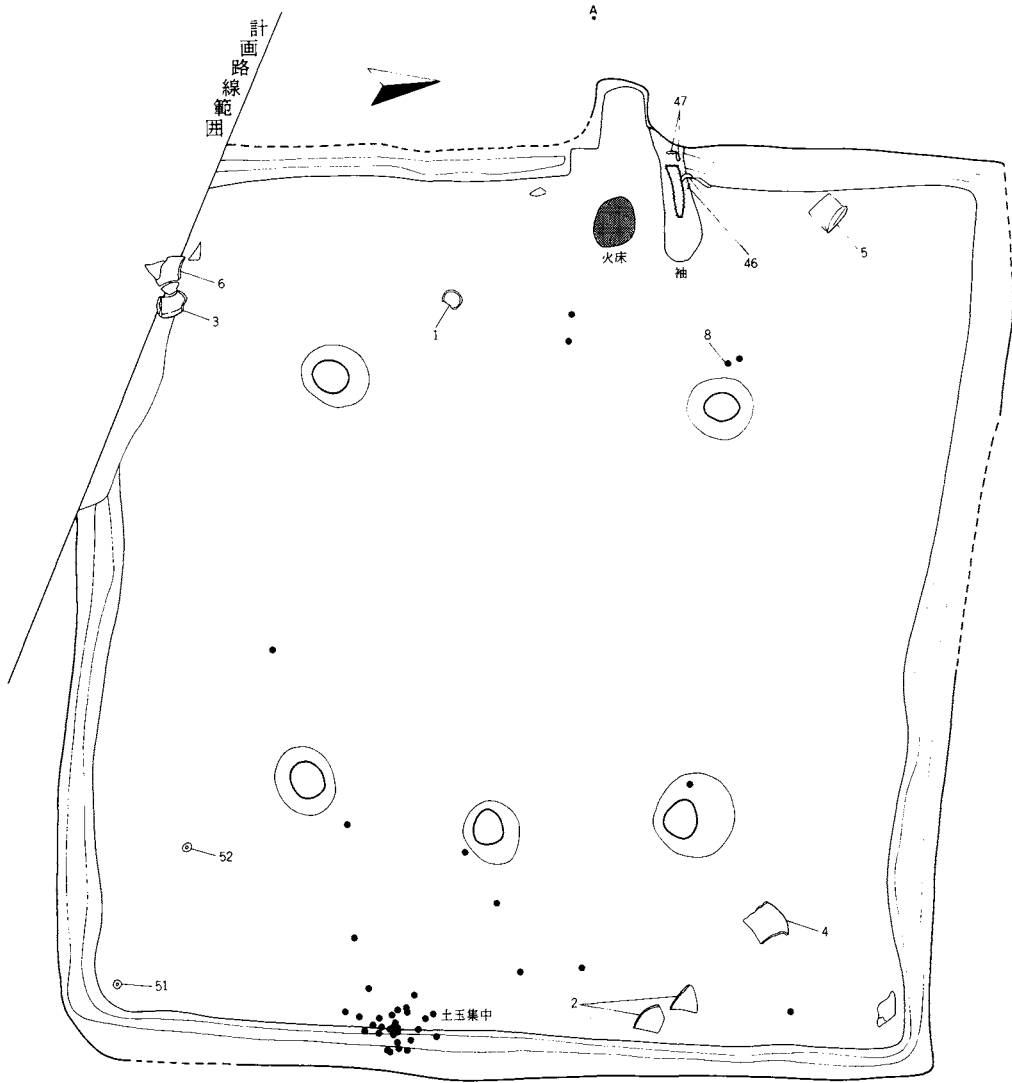
1



遺構発掘状況 (01/20/05)

2

PLAN 8 上福田保町遺跡 SI-01実測図

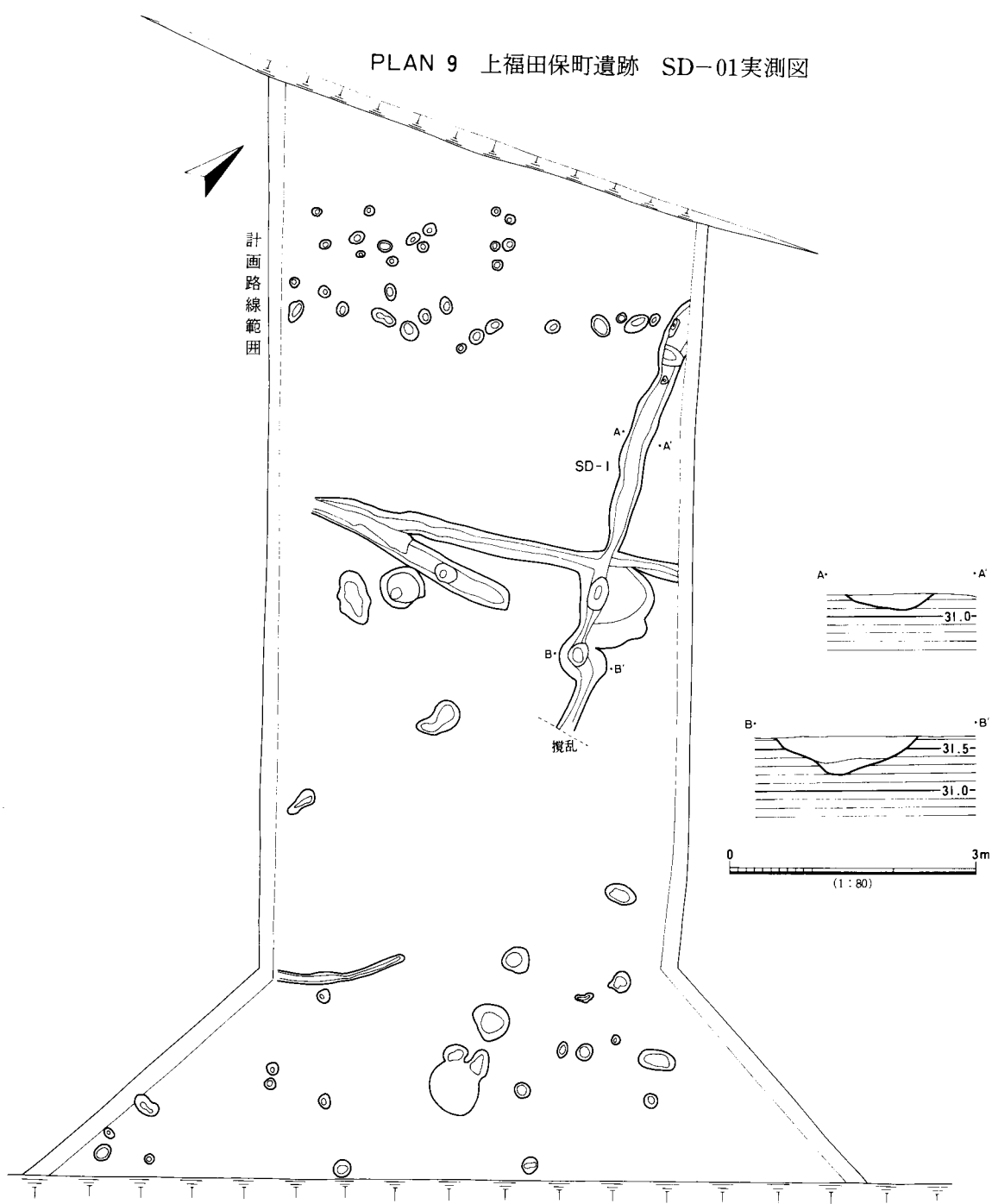


上福田保町遺跡
SI-01

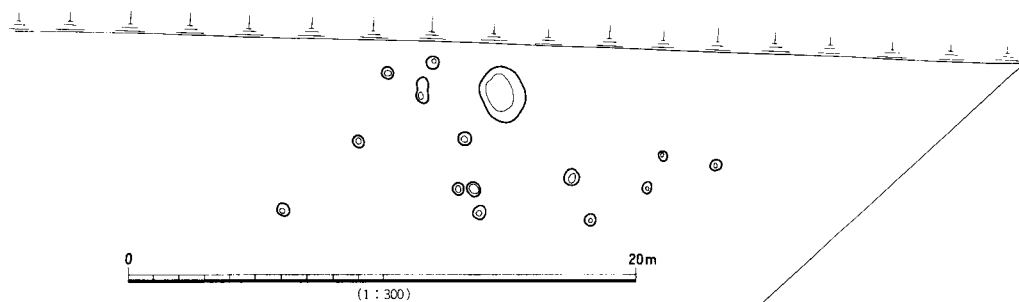
1. 全 景
(東から)
2. 土製鎌
出土状況
(北東から)
3. 土製鋤先・
鎌出土状況
(北東から)
4. 土製玉
出土状況
(西から)



PLAN 9 上福田保町遺跡 SD-01実測図



道路



上福田保町遺跡

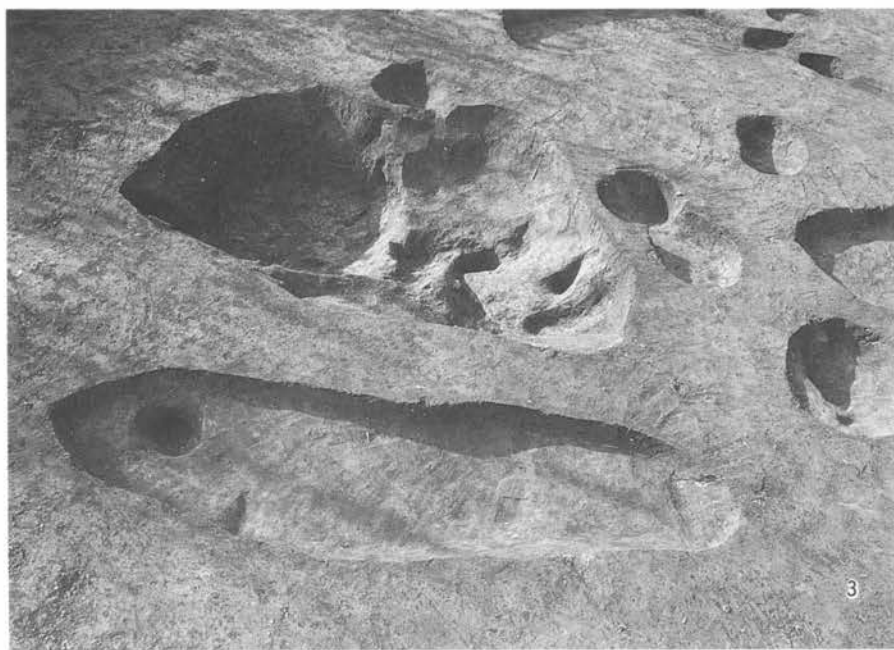
1. 遺構検出
状況
(南から)
2. 縄文土器
出土状況
(南西から)
3. 遺構検出
状況
(南東から)



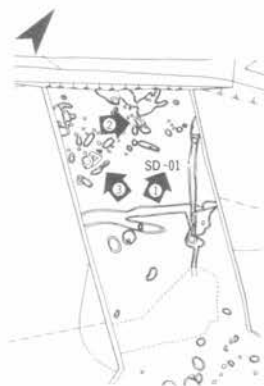
1



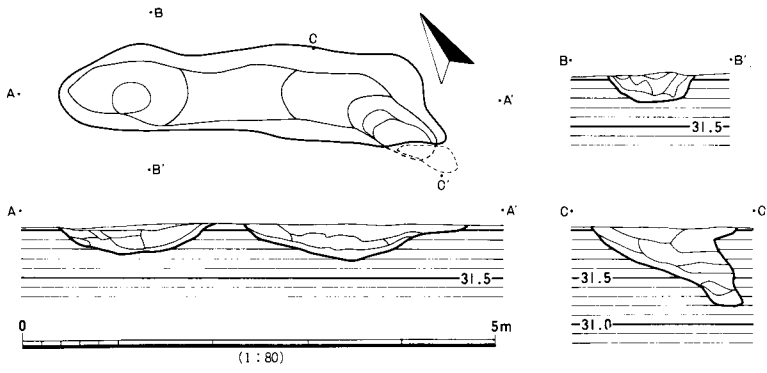
2



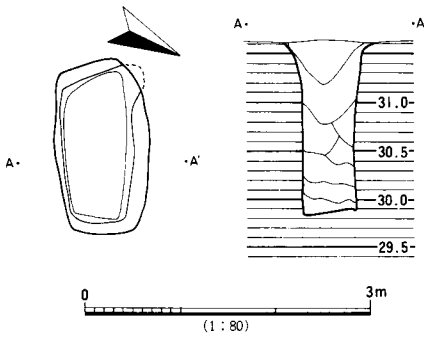
3



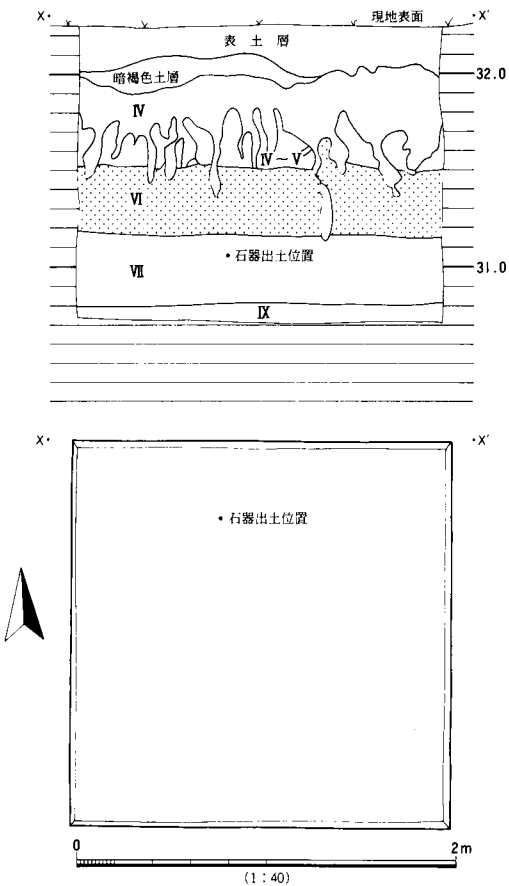
PLAN 10 上福田保町遺跡 SX-01実測図



PLAN 11 上福田保町遺跡 SK-01実測図

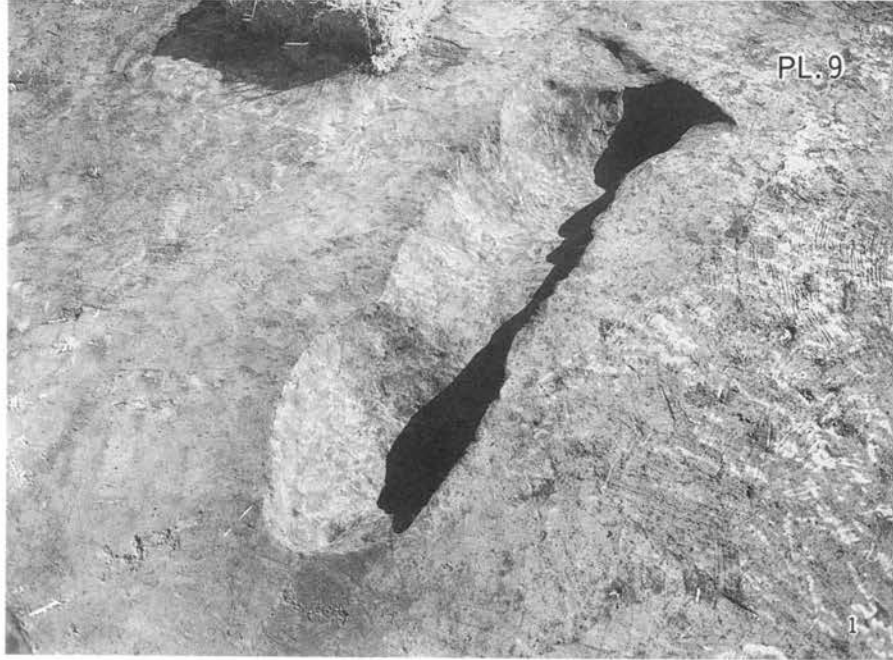


PLAN 12 上福田保町遺跡 先土器時代石器出土状況図



上福田保町遺跡

- 1. SX-01検出状況
(西から)
- 2. SK-01検出状況
(南から)
- 3. 先土器時代
石器出土状況
(南から)



1

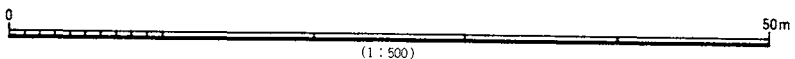


2



3

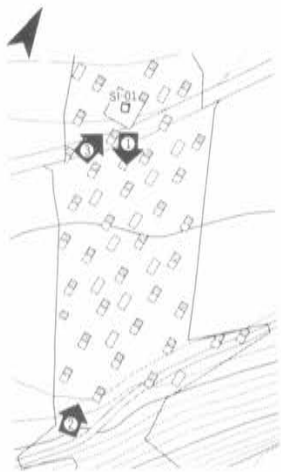
PLAN 13 仲兵遺跡 全体図



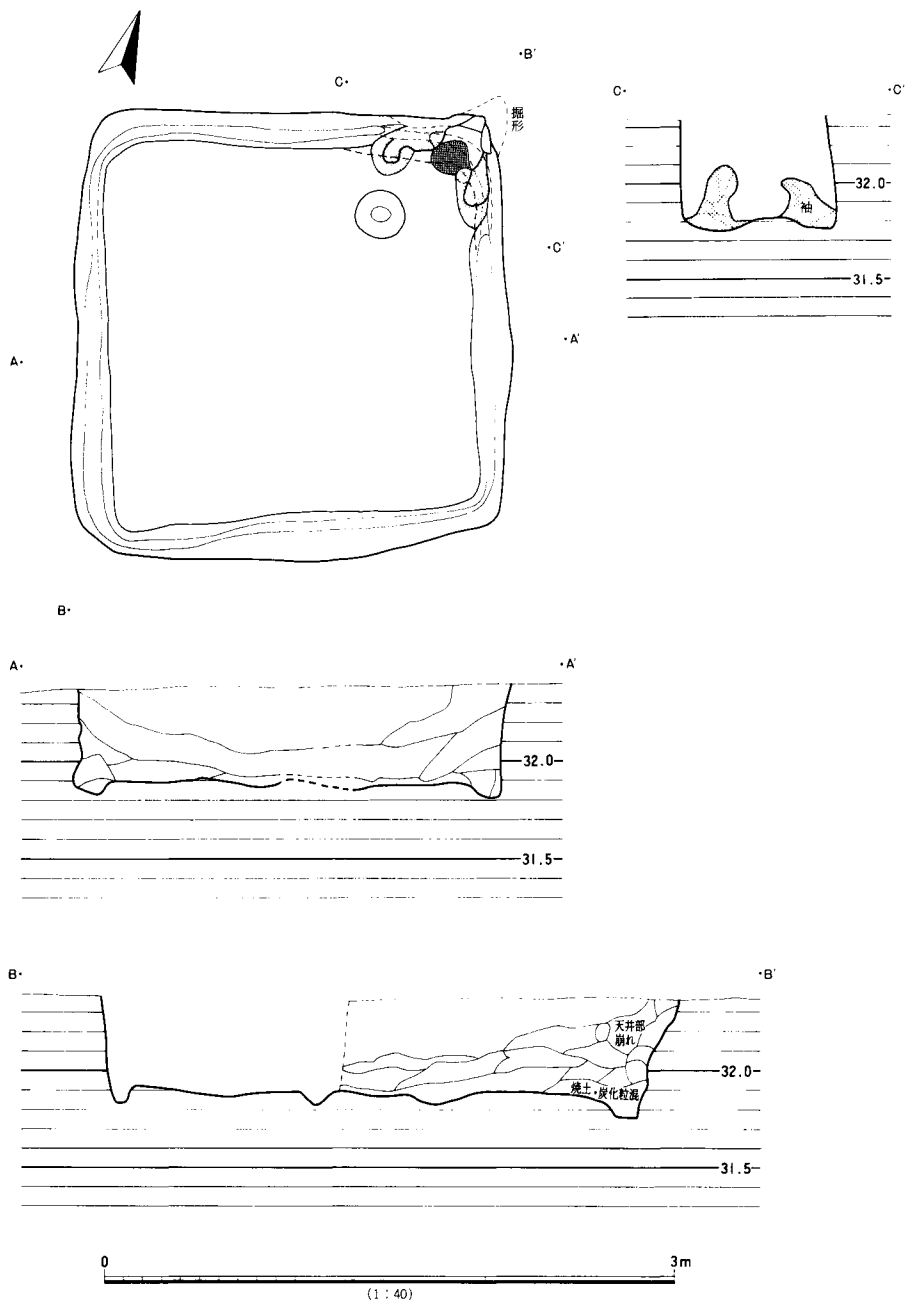
(1 : 500)

仲兵遺跡

1. 発掘前
(北西から)
2. 確認調査状況
(南から)
3. SI-01発掘状況
(南から)



PLAN 14 仲兵遺跡 SI-01実測図



仲兵遺跡
SI-01

- 1. SI-01全景
(南東から)
- 2. カマド袖断面
(南から)
- 3. カマド掘形
(南から)



1



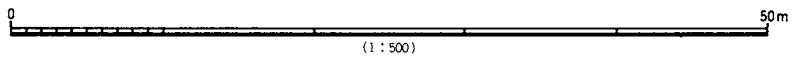
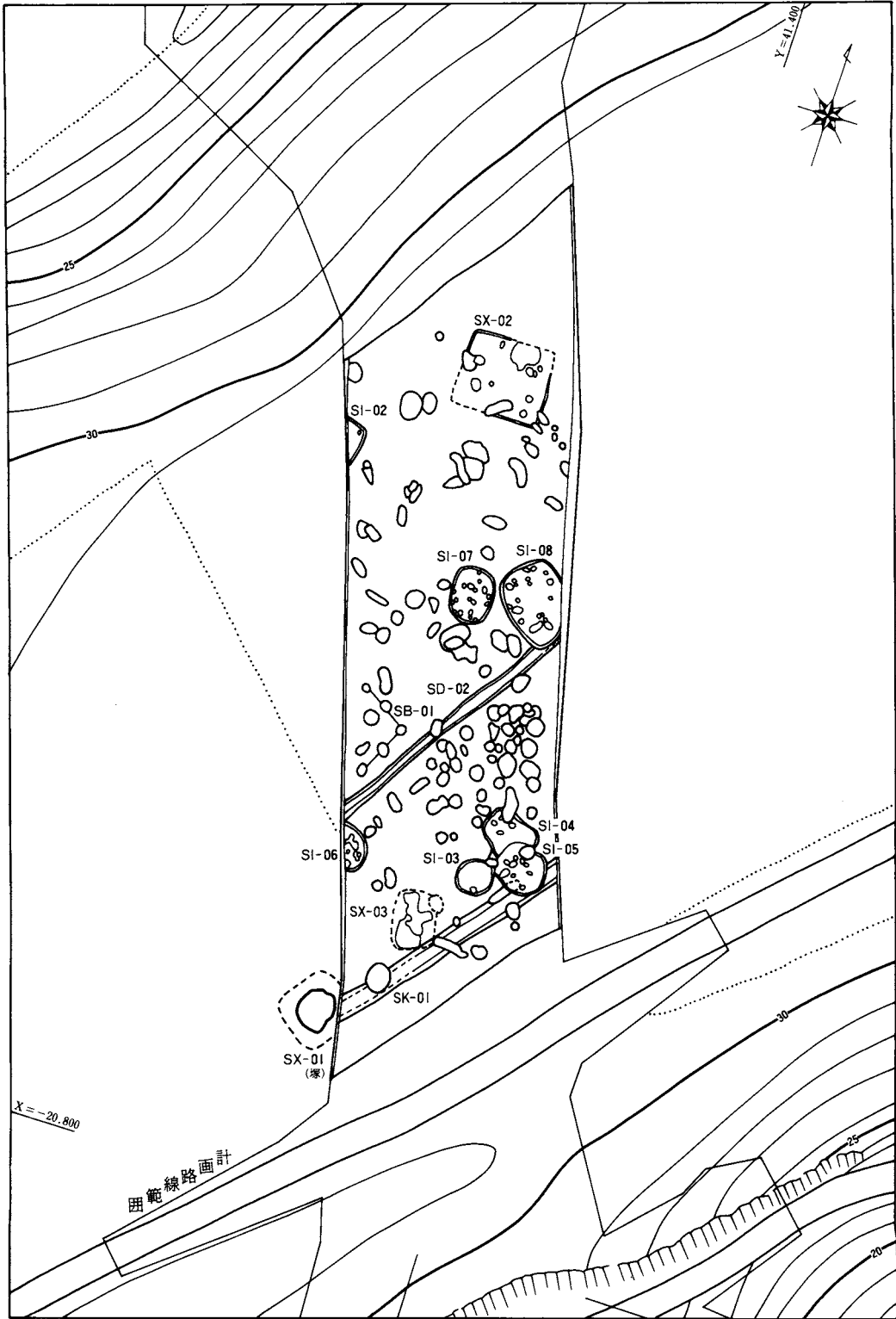
2



3



PLAN 15 下福田稲荷原遺跡 全体図



下福田稲荷原遺跡

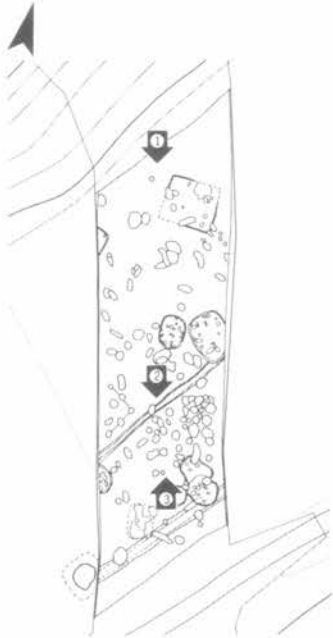
1. 遺構全景
(北から)
2. 遺構調査状況
(北から)
3. 遺構調査状況
(南から)



1

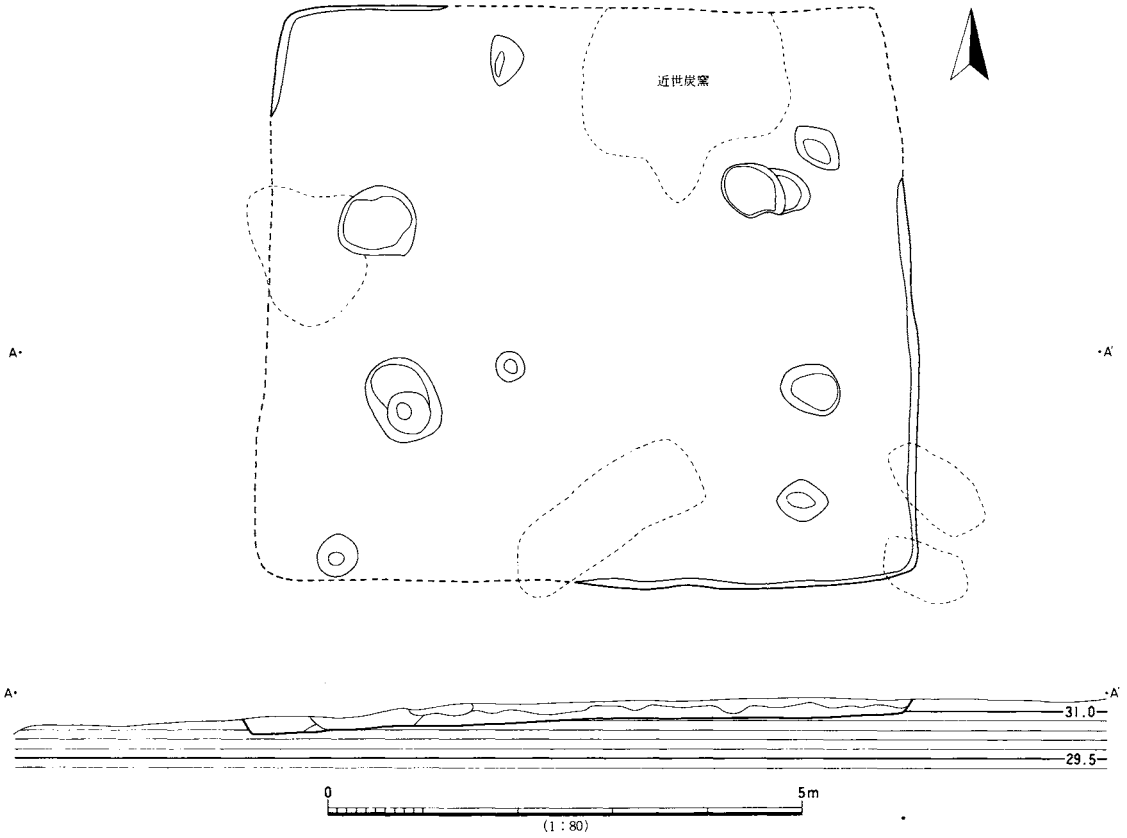


2

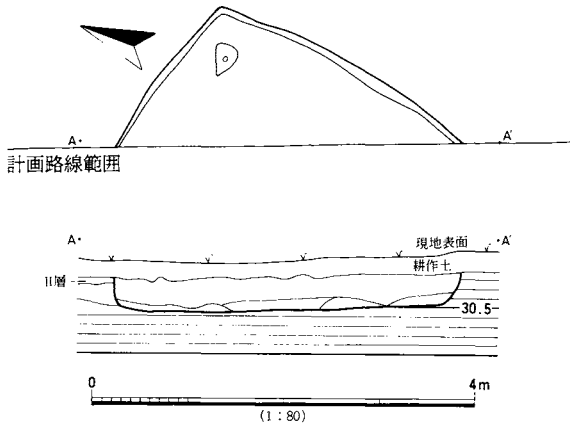


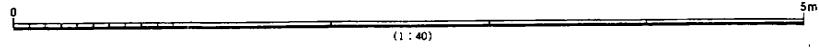
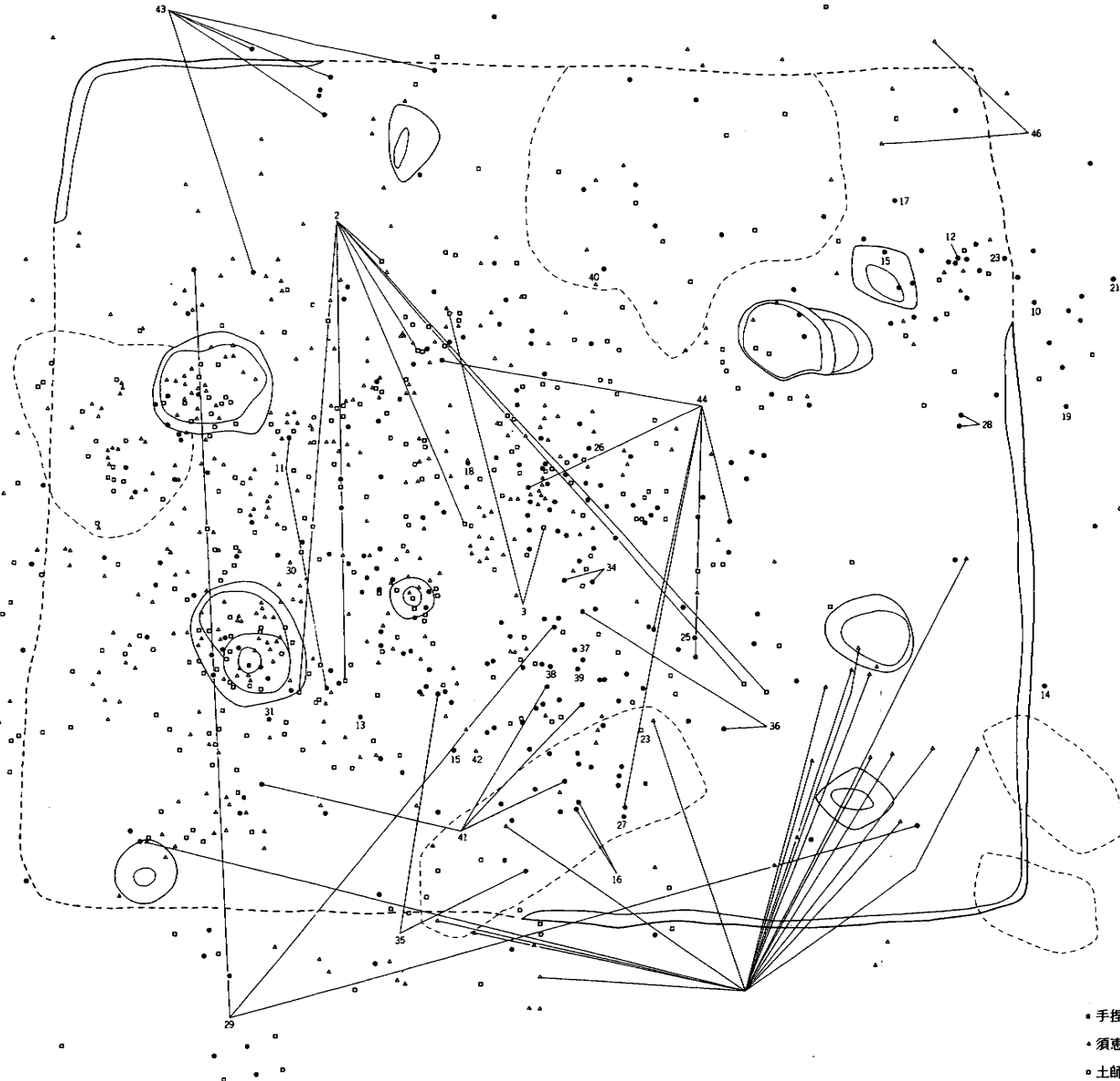
3

PLAN 16 下福田稻荷原遺跡 SX-02実測図



PLAN 17 下福田稻荷原遺跡 SI-01実測図

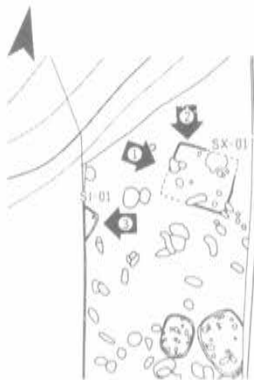




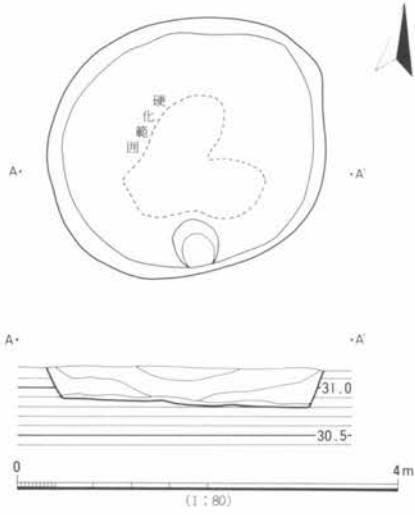
● 手捏土器
▲ 須恵器
□ 土師器
(番号は遺物番号)

下福田稲荷原遺跡

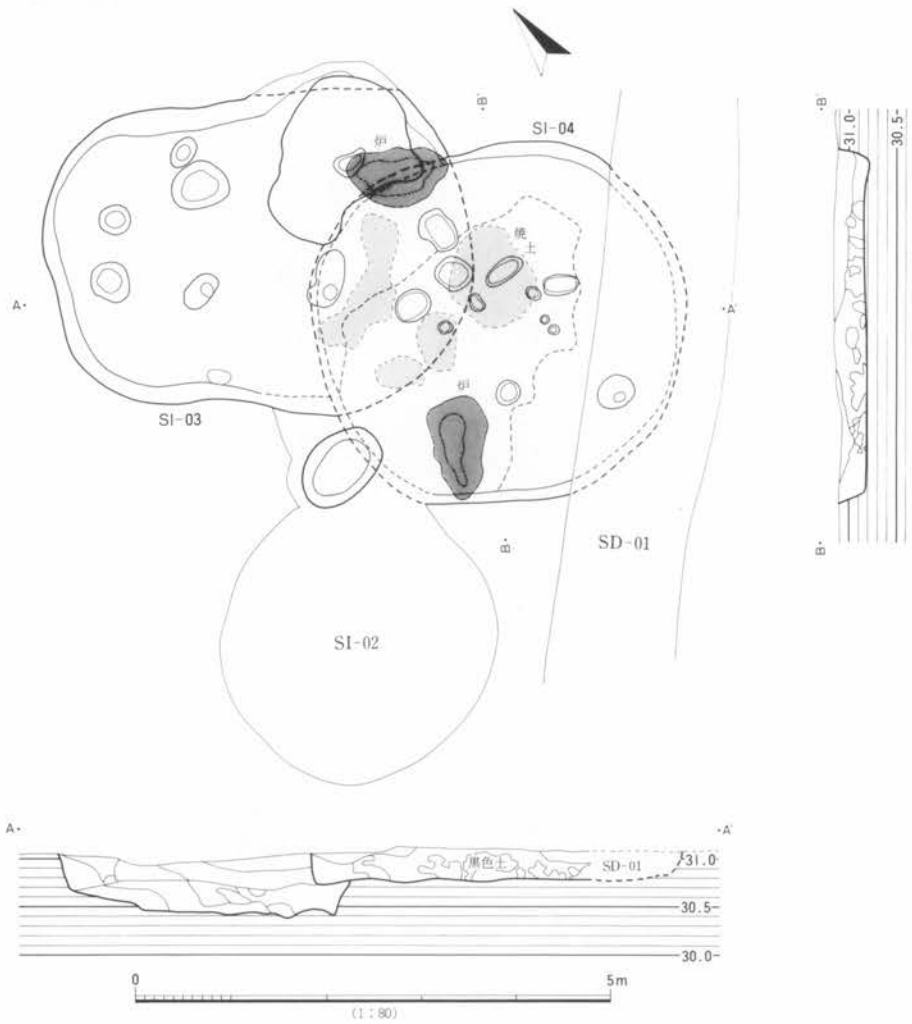
1. SX-02全景
(西から)
2. SX-02
遺物出土状況
(北西から)
3. SI-01検出状況
(東から)



PLAN 19 下福田稲荷原遺跡 SI-02実測図

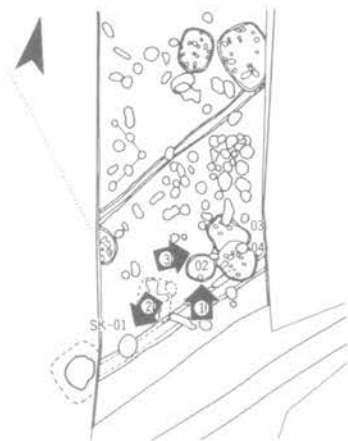


PLAN 20 下福田稲荷原遺跡 SI-03・SI-04実測図



下福田稲荷原遺跡

1. SI-02全景
(南から)
2. SK-01全景
(北東から)
3. SI-03・SI-04全景
(南西から)



下福田稲荷原遺跡

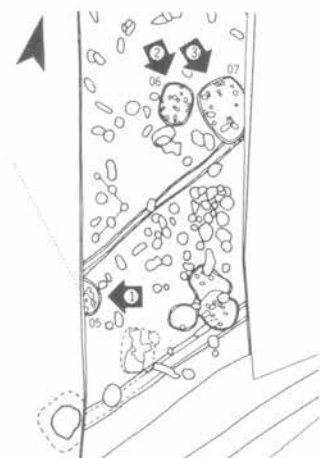
1. SI-05検出状況
(東から)
2. SI-06全景
(北西から)
3. SI-07検出状況
(北西から)



1

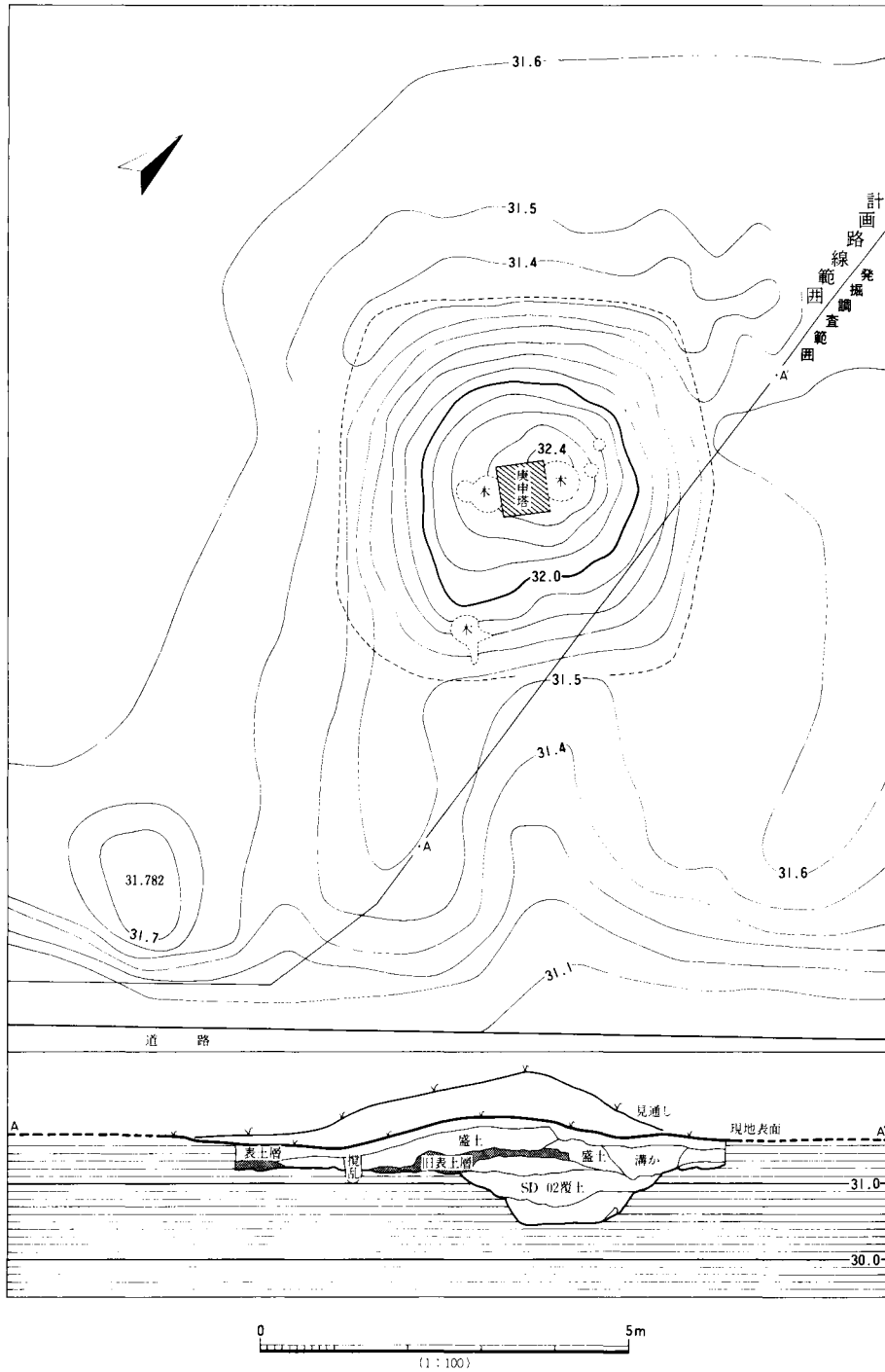


2



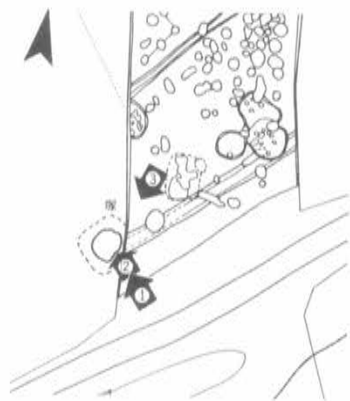
3

PLAN 24 下福田稻荷原遺跡 塚 (SX-01) 実測図

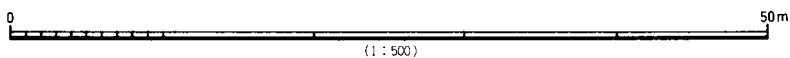
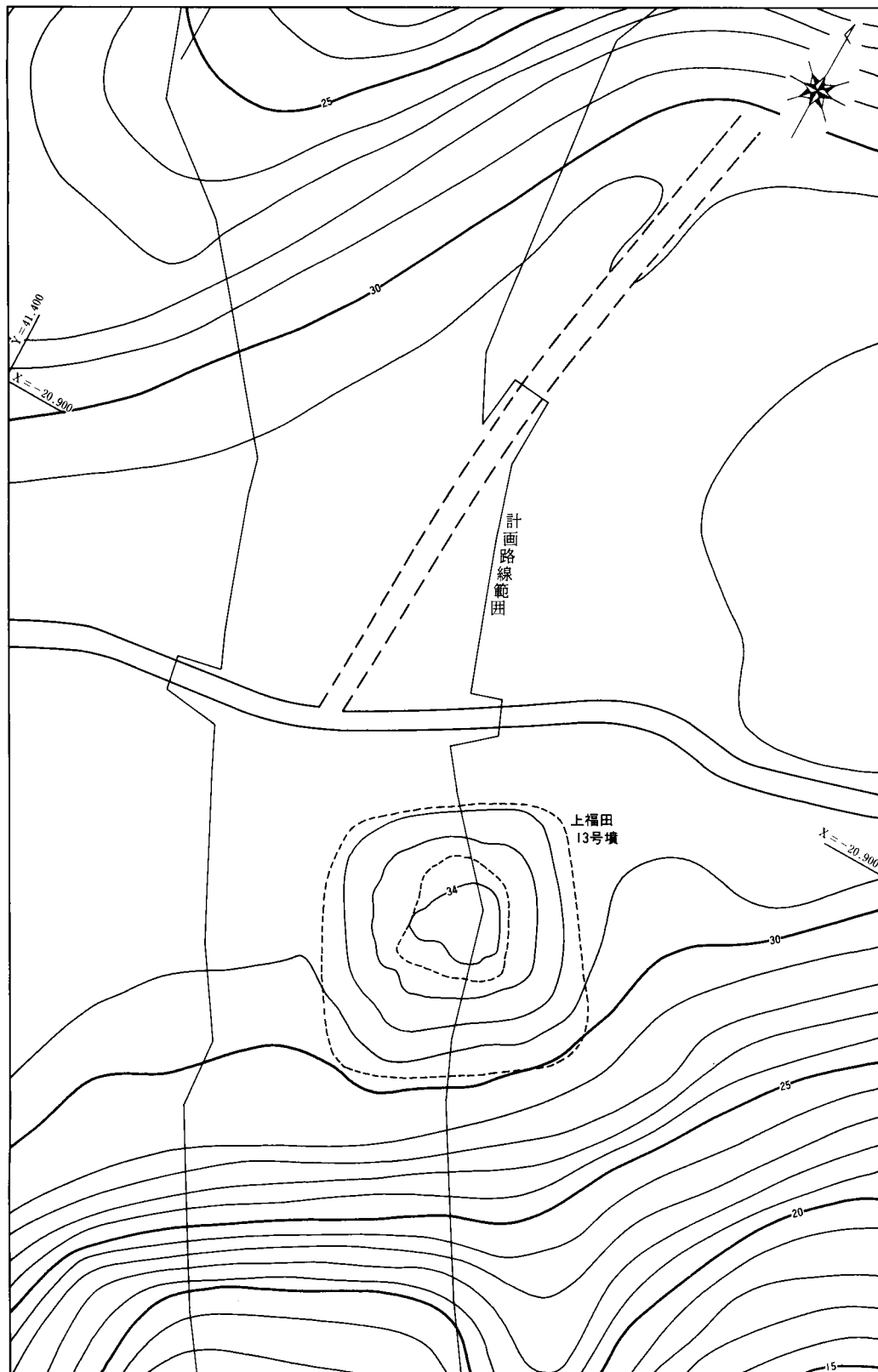


下福田稲荷原遺跡

1. 塚 (SX-01) 全景
(南東から)
2. 庚申塔近景
(南東から)
3. 塚 (SX-01) 断面
(北東から)



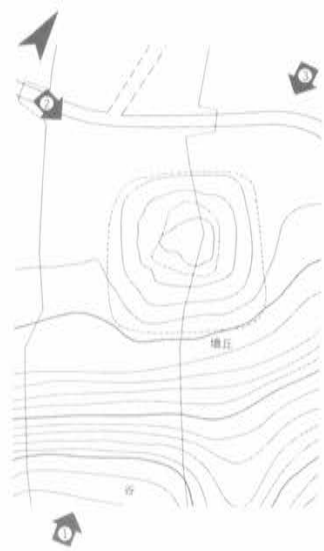
PLAN 25 上福田13号墳 位置図



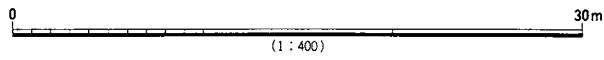
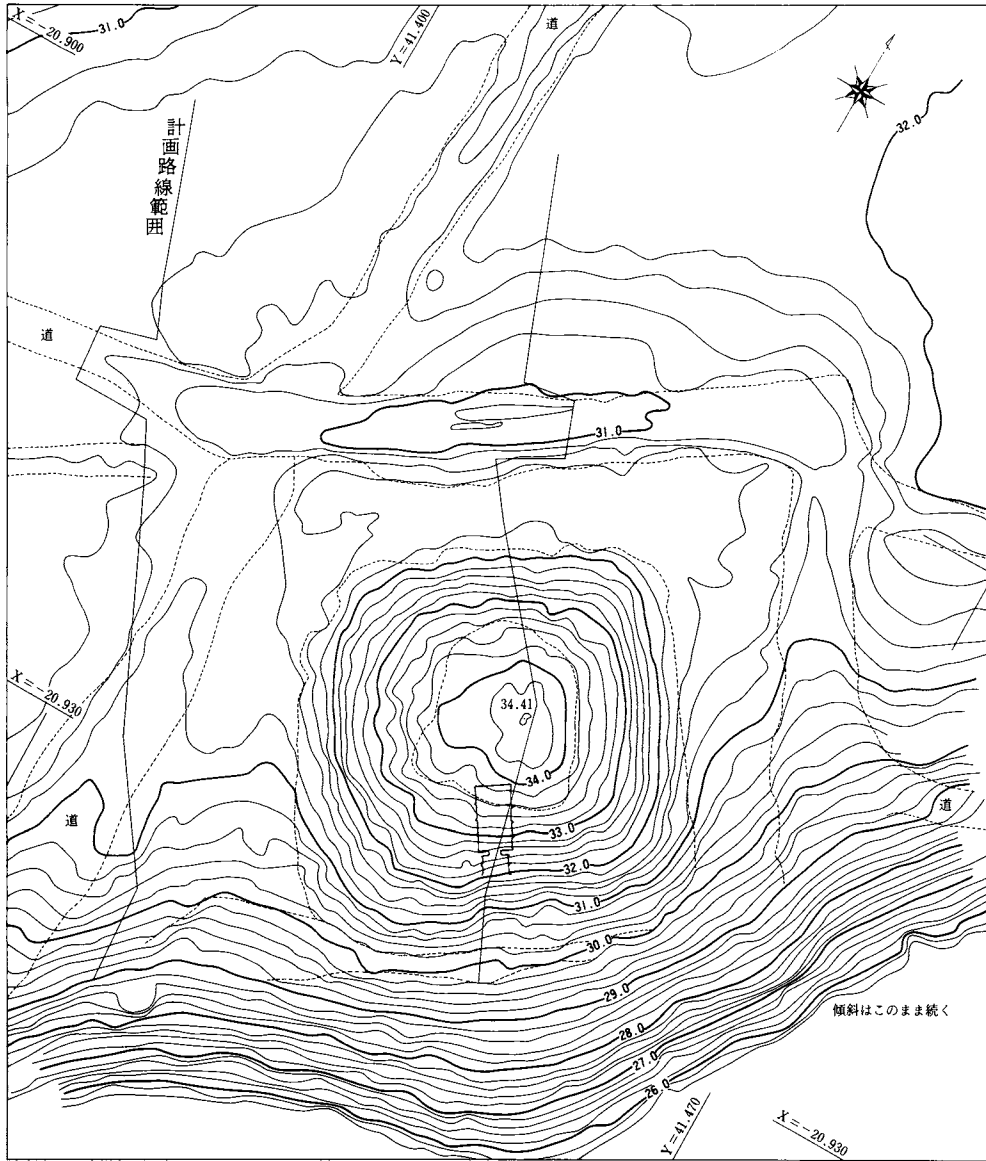
(1 : 500)

上福田13号墳

1. 発掘前
(南から)
2. 発掘前
(西から)
3. 伐採前
(北から)

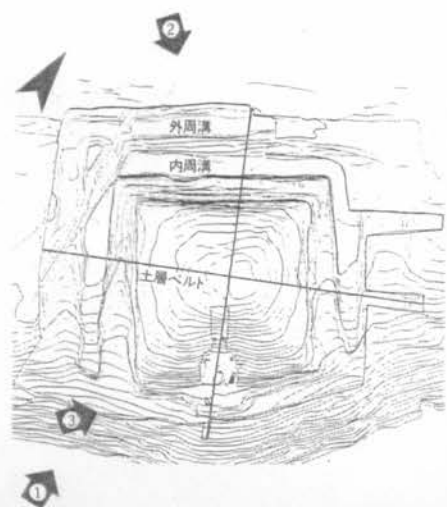


PLAN 26 上福田13号墳 発掘前墳丘測量図

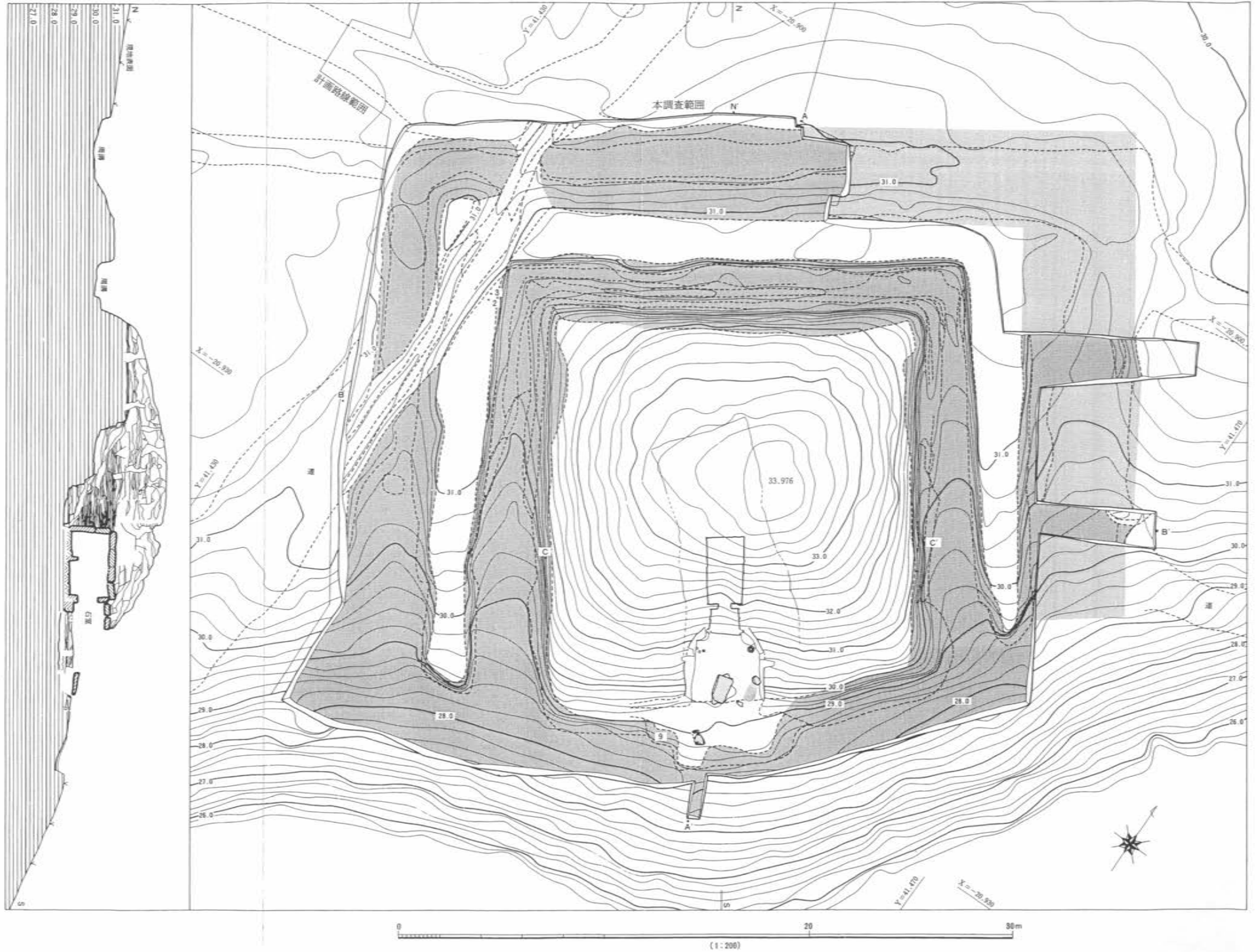


上福田13号墳

1. 表土除去後
(南から)
2. 表土除去後
(西から)
3. 表土除去後
(南西から)

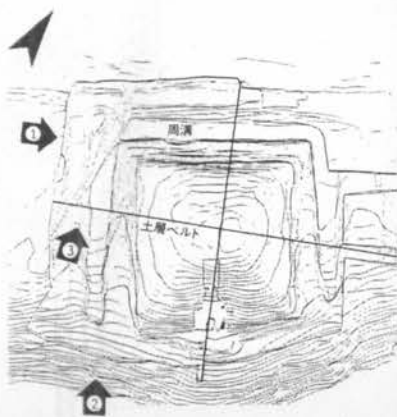


PLAN 27 上福田13号墳 墳丘測量図



上福田13号墳

1. 北側周溝
(南西から)
2. 西側周溝
(南東から)
3. 西側周溝近景
(南東から)

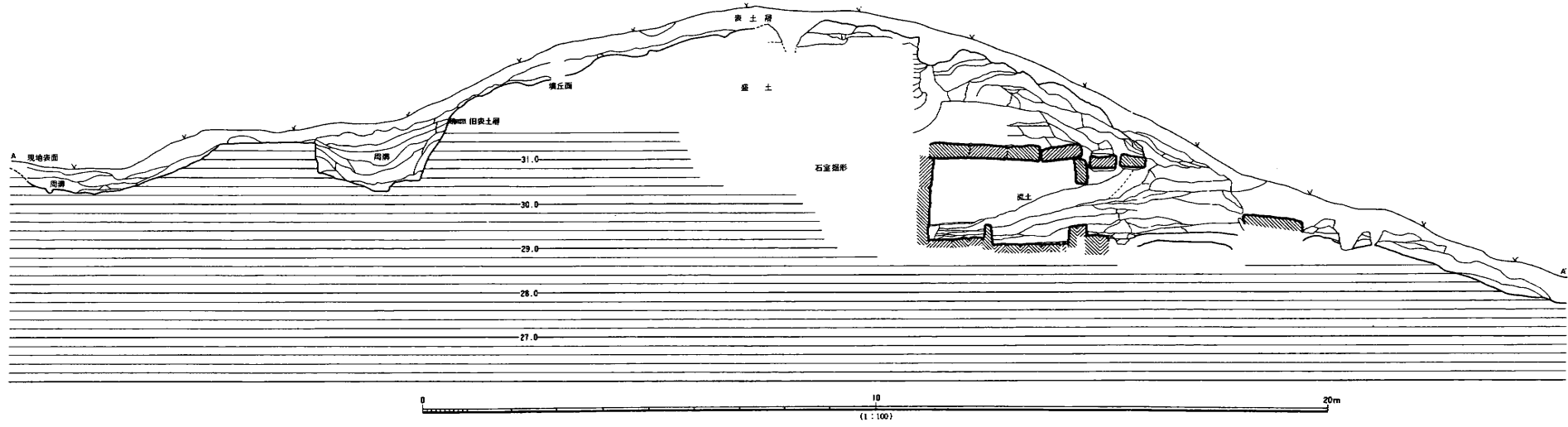


1

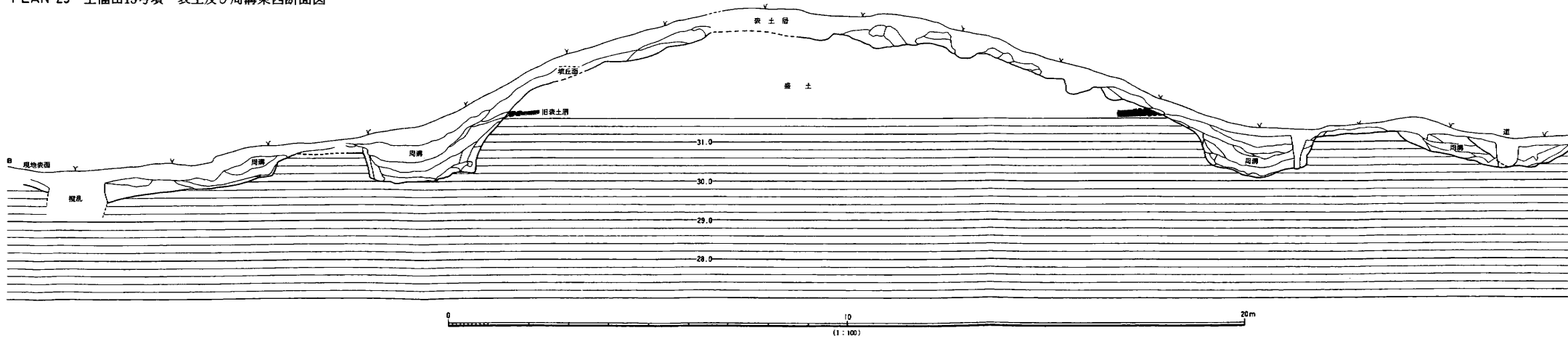
2

3

PLAN 28 上福田13号墳 表土及び周溝南北断面図

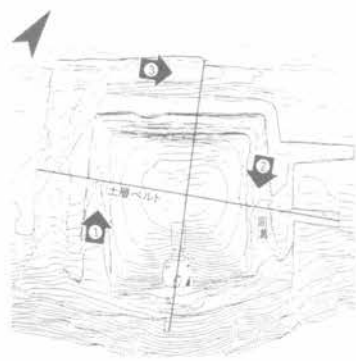


PLAN 29 上福田13号墳 表土及び周溝東西断面図



上福田13号墳

1. 西内側周溝
(南東から)
2. 東内側周溝
(北西から)
3. 北外側周溝
(南西から)

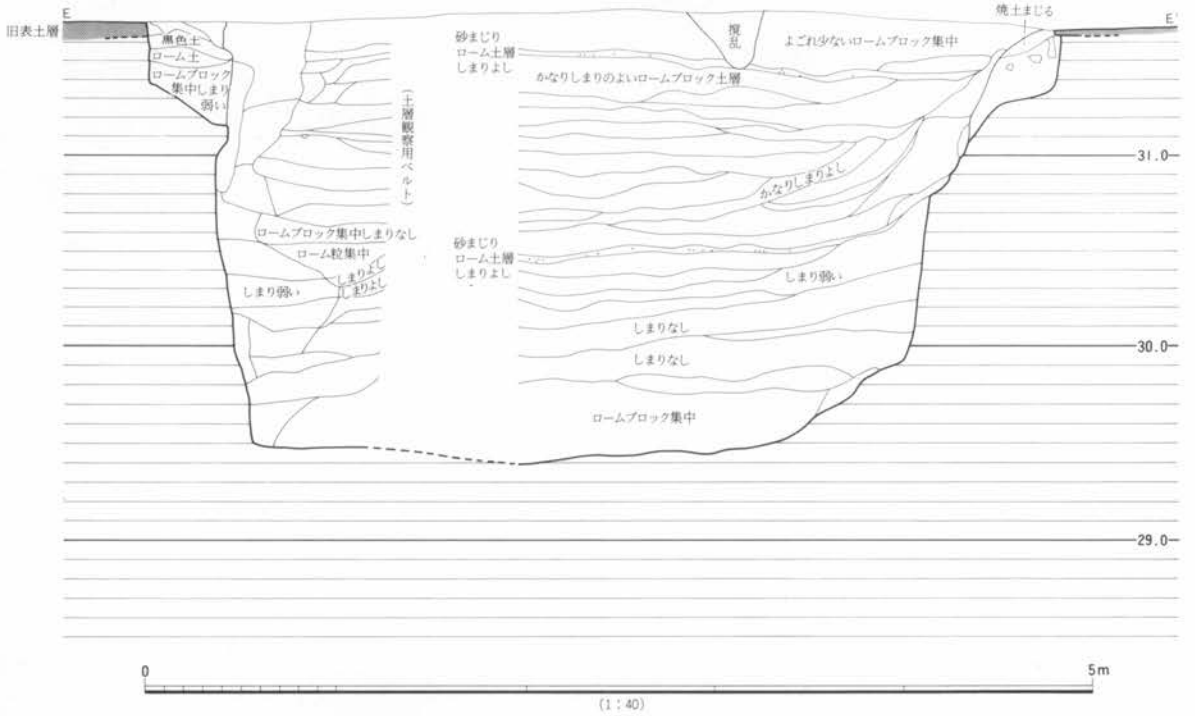


1

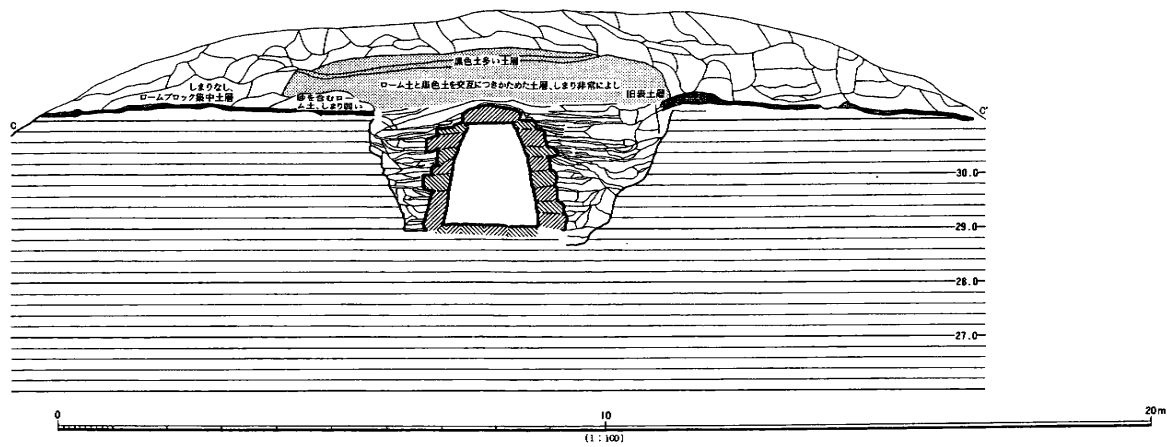
2

3

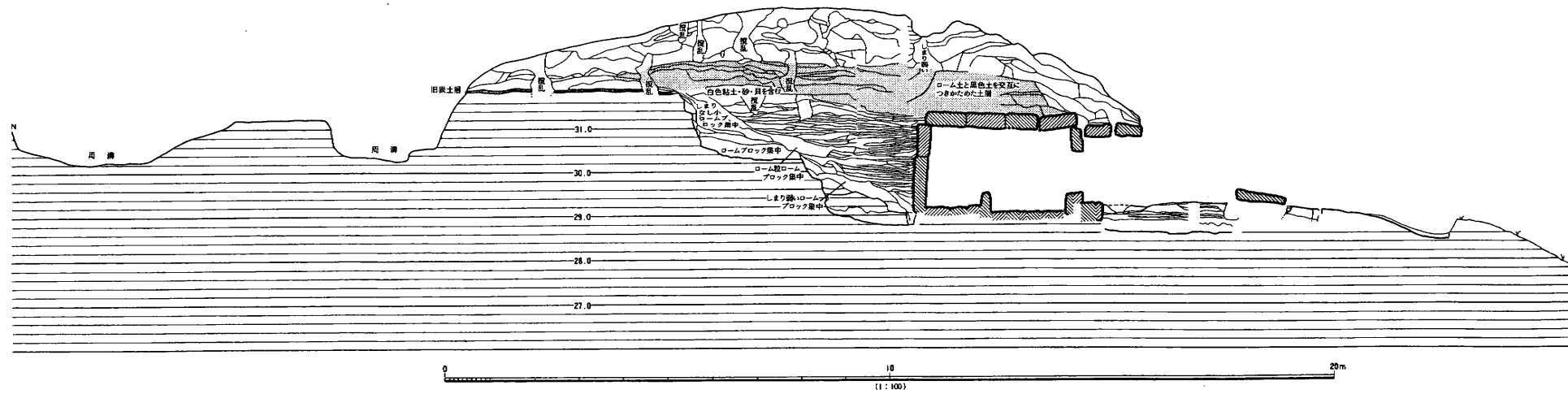
PLAN 30 上福田13号墳 石室後方掘形土層断面図



PLAN 31 上福田13号墳 墳丘東西断面図

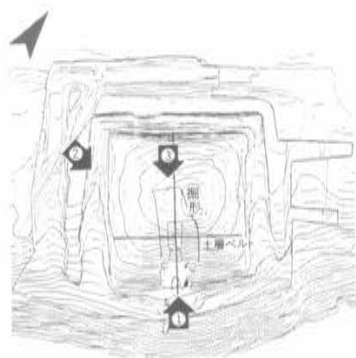


PLAN 32 上福田13号墳 墳丘南北断面図

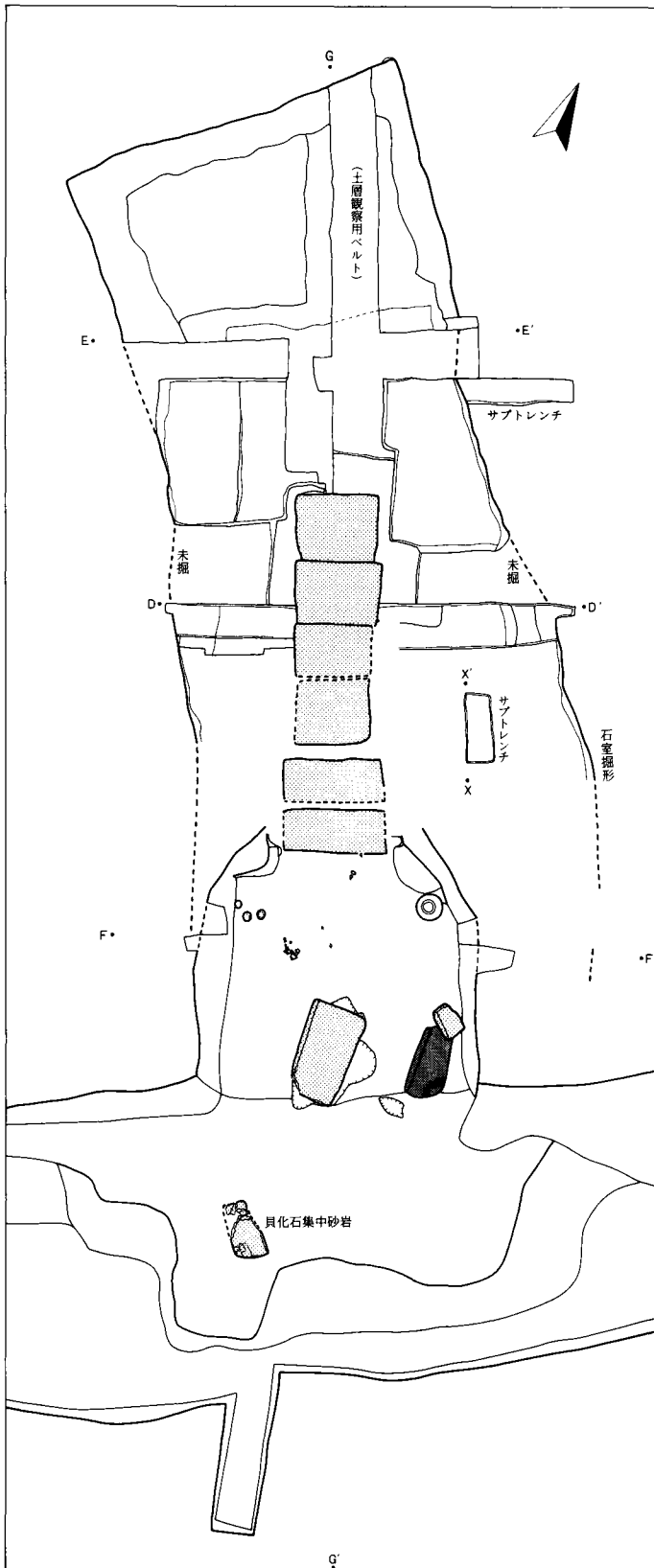


上福田13号墳

1. 墳丘盛土断面
(南東から)
2. 墳丘盛土断面
(西から)
3. 石室掘形
(北西から)



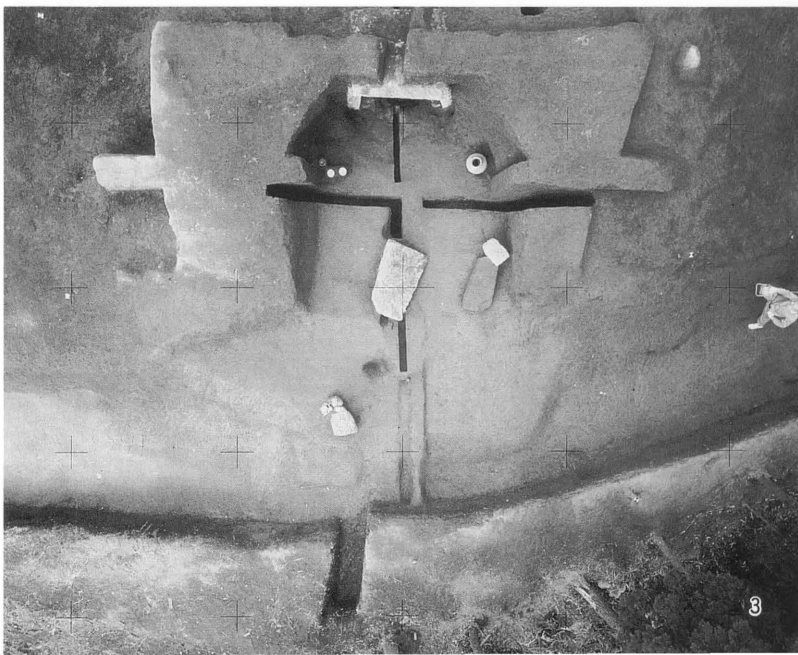
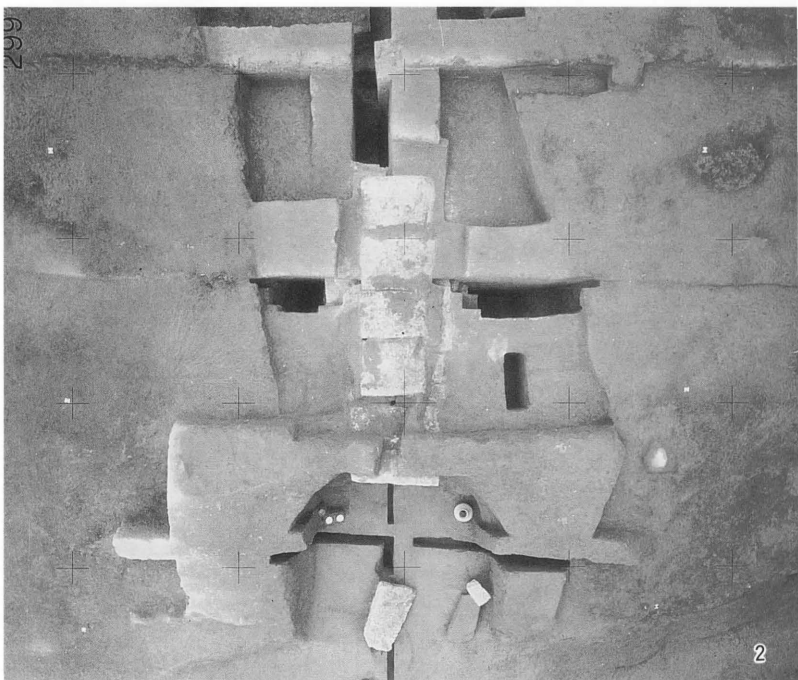
PLAN 33 上福田13号墳 掘形平面図



0 5m
(1 : 100)

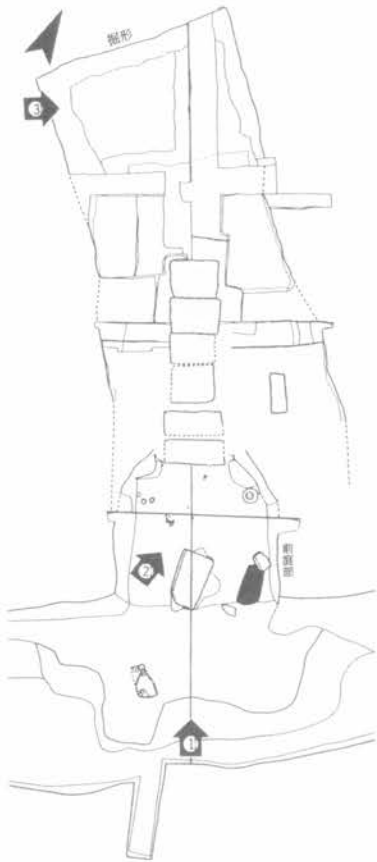
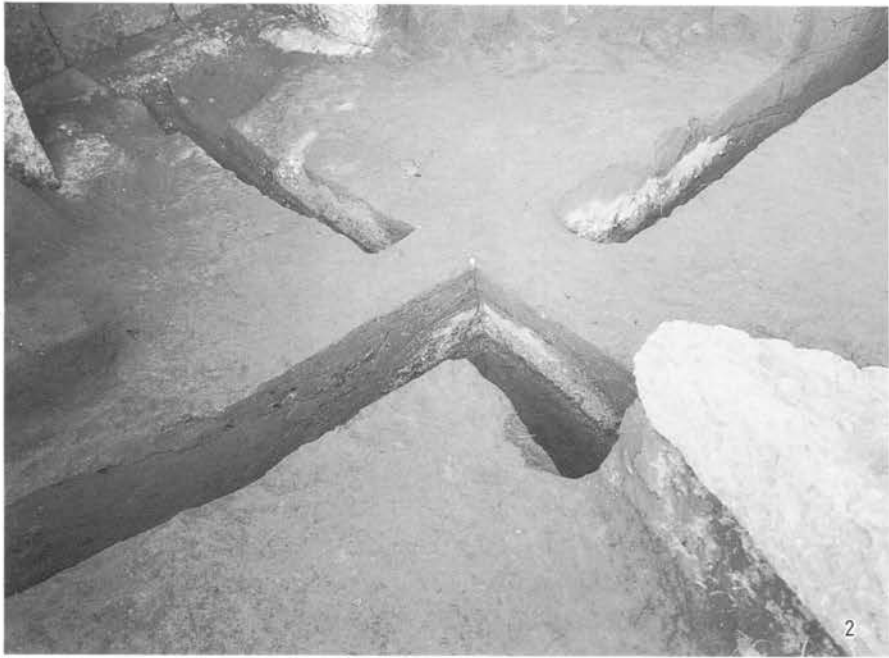
上福田13号墳

1~3. 石室掘形
全景
(上空から)

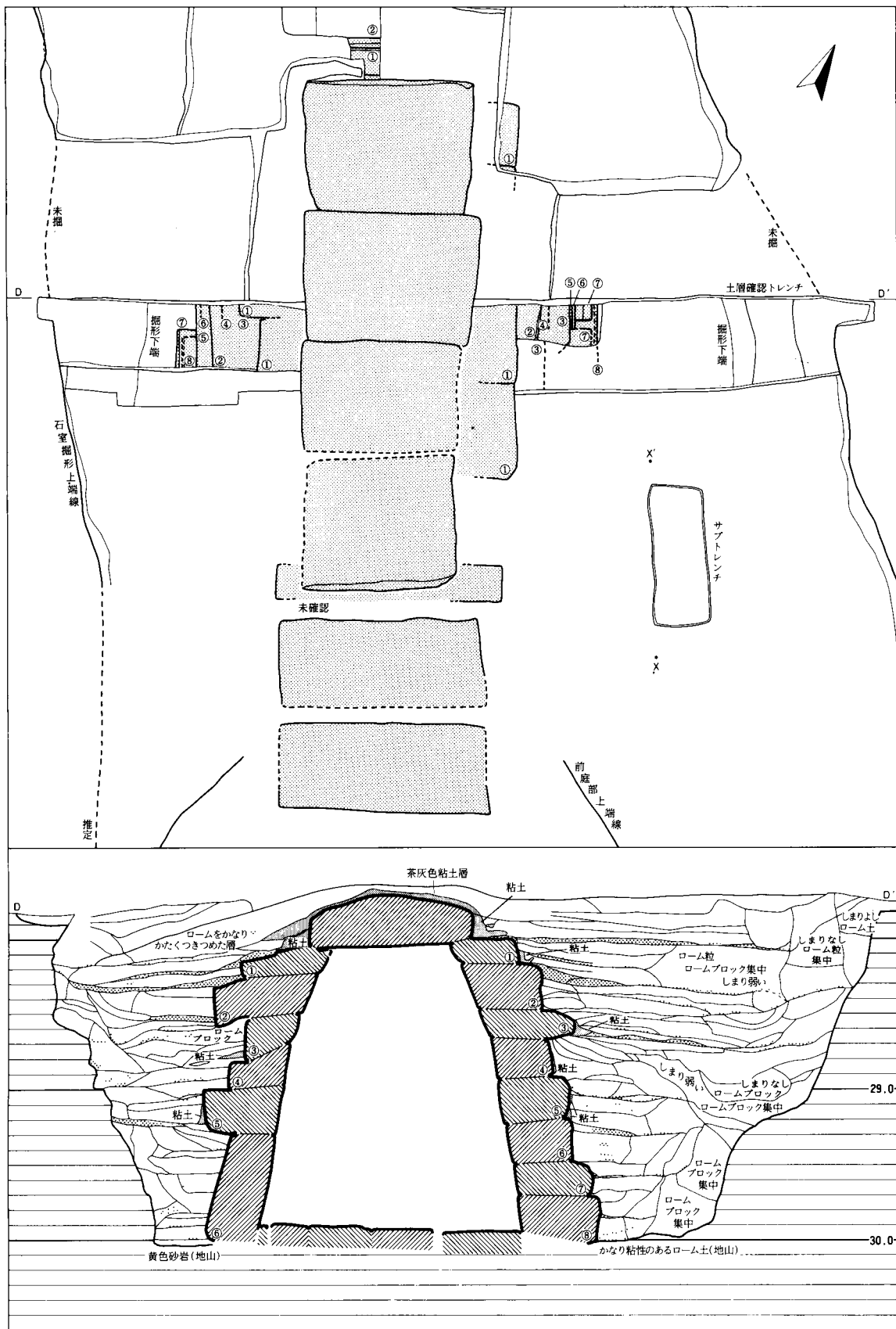


上福田13号墳

1. 前庭部
土層断面
(南東から)
2. 前庭部
整地層断面
(南から)
3. 石室掘形
土層断面
(南西から)

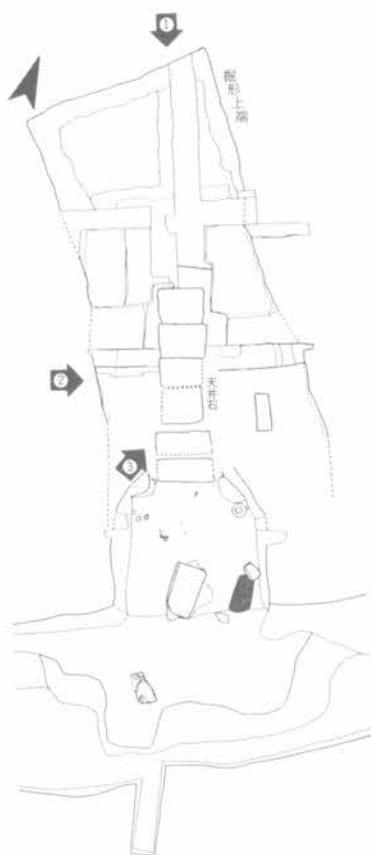


PLAN 36 上福田13号墳 天井石及び掘形東西断面図

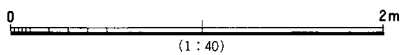
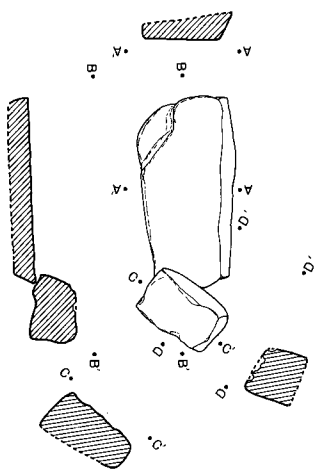
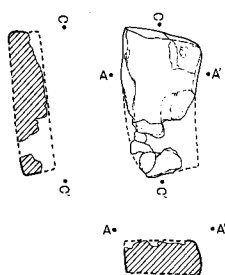
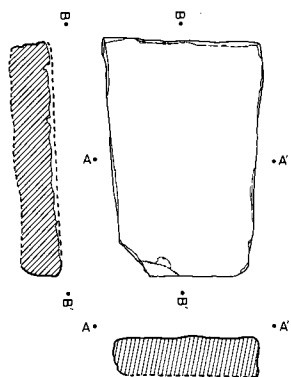


上福田13号墳

1. 石室掘形
全景
(北西から)
2. 天井石
検出状況
(南西から)
3. 天井石
検出状況
(南から)



PLAN 37 上福田13号墳 閉塞石実測図



上福田13号墳

1. 天井石被覆土層断面
(東から)
2. 石室裏込め土層断面
(南東から)
3. 石室裏込め土層断面
(南西から)



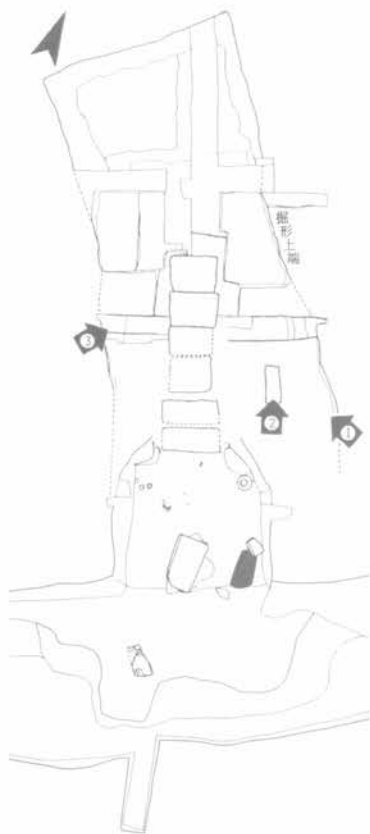
1



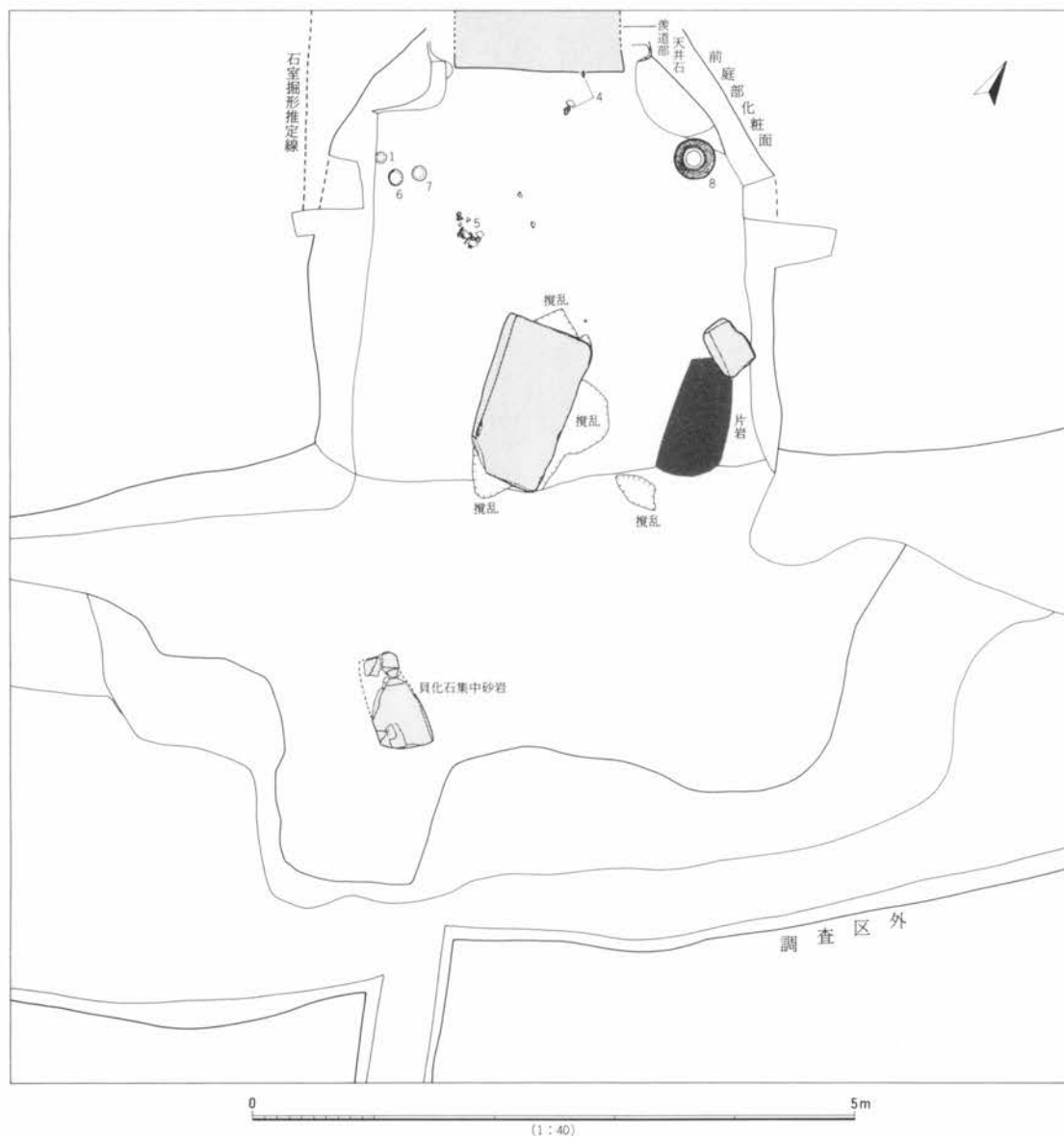
2



3

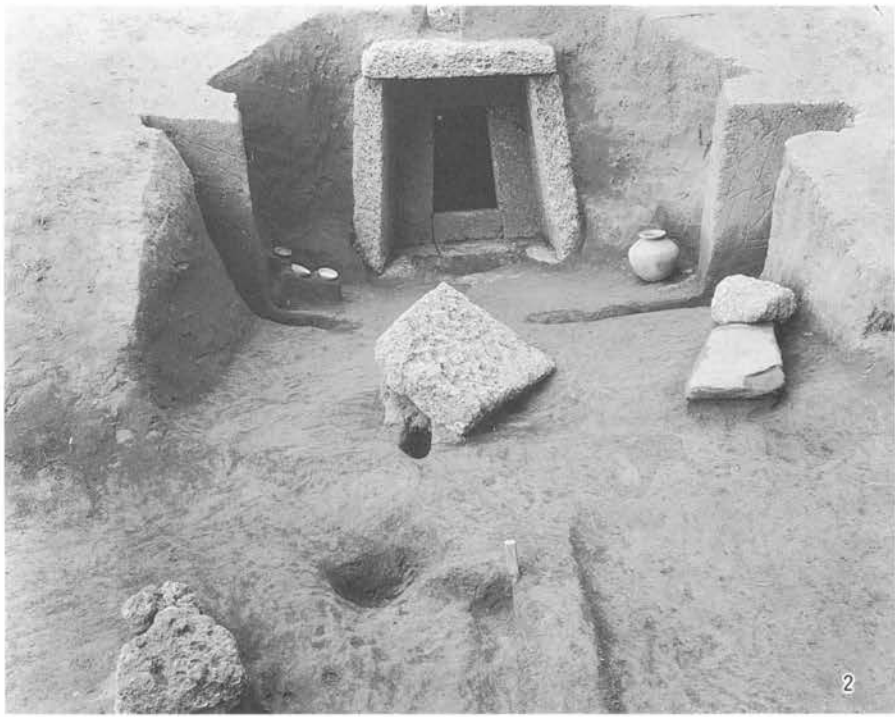


PLAN 38 上福田13号墳 前庭部実測図

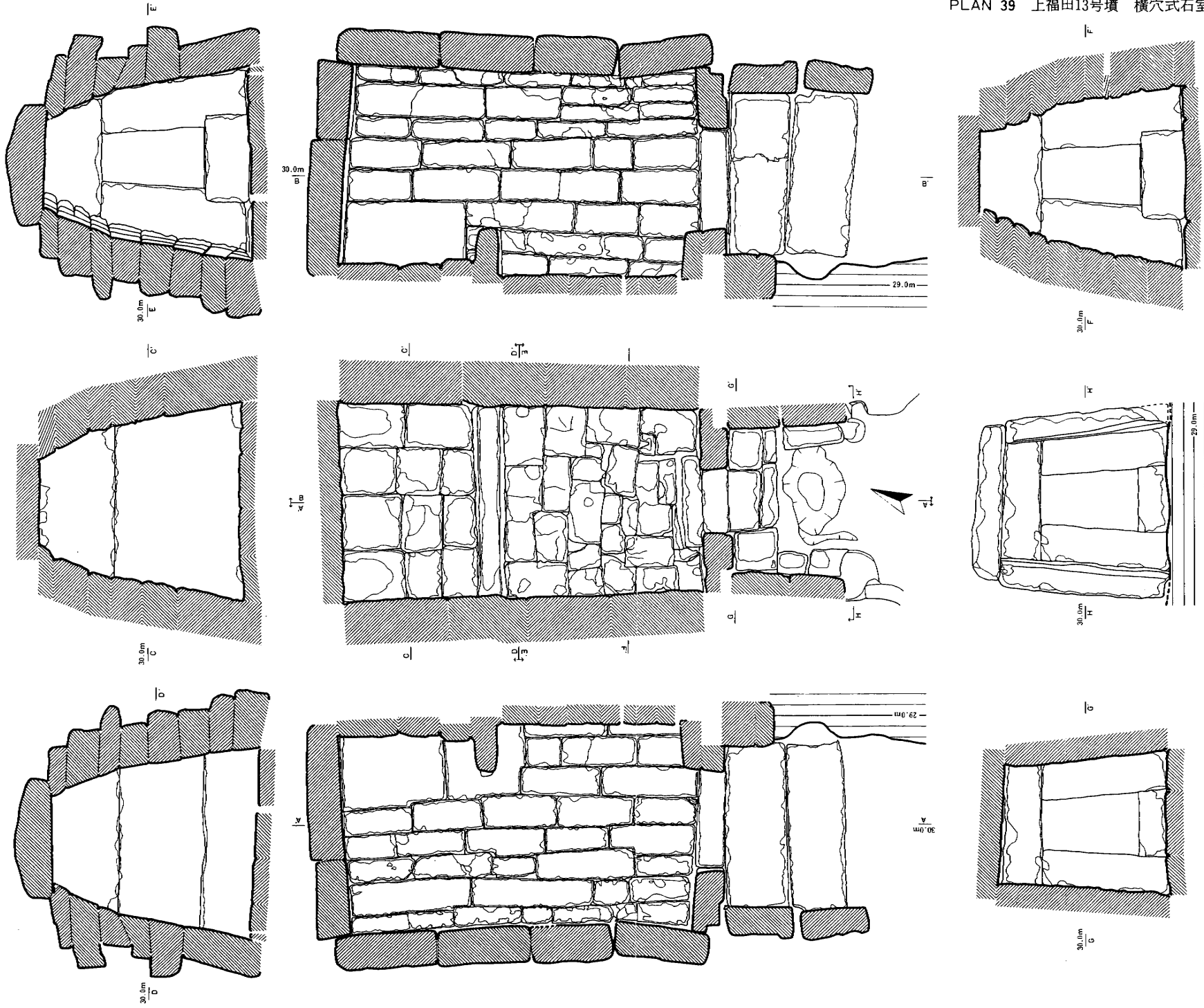


上福田13号墳

1. 石室全景
(南東から)
2. 石室前庭部
全景
(南東から)
3. 前庭部遺物
出土状況
(南から)

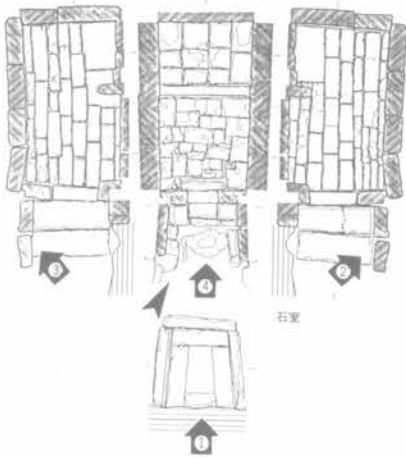
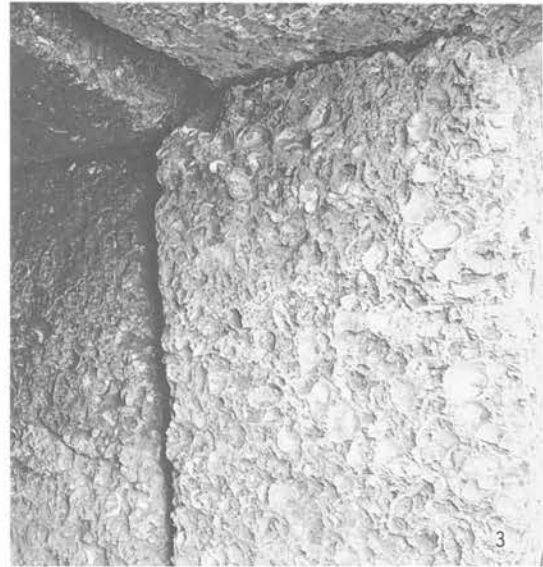
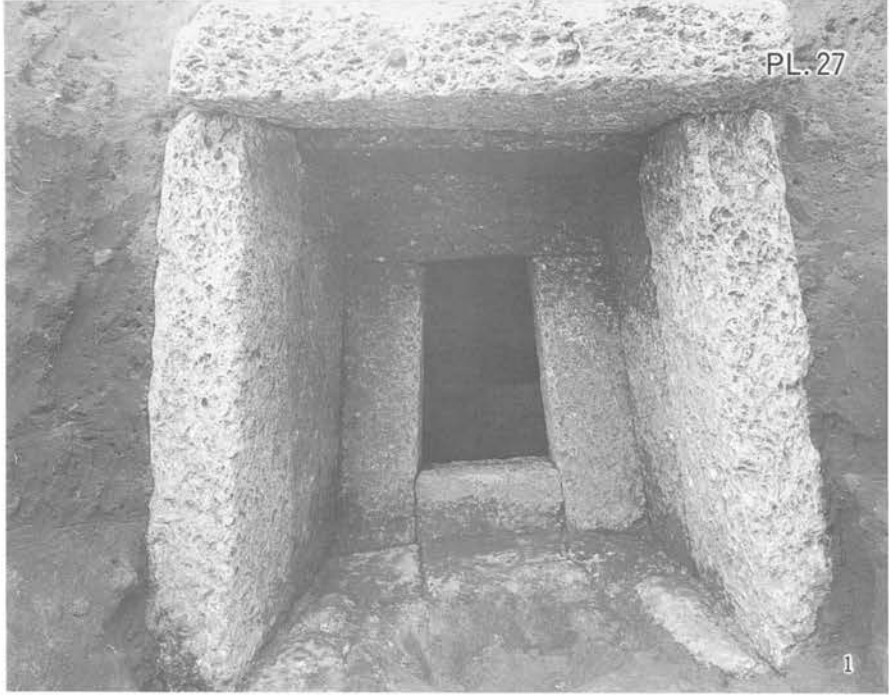


PLAN 39 上福田13号墳 横穴式石室実測図



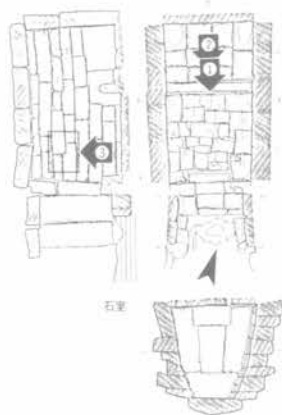
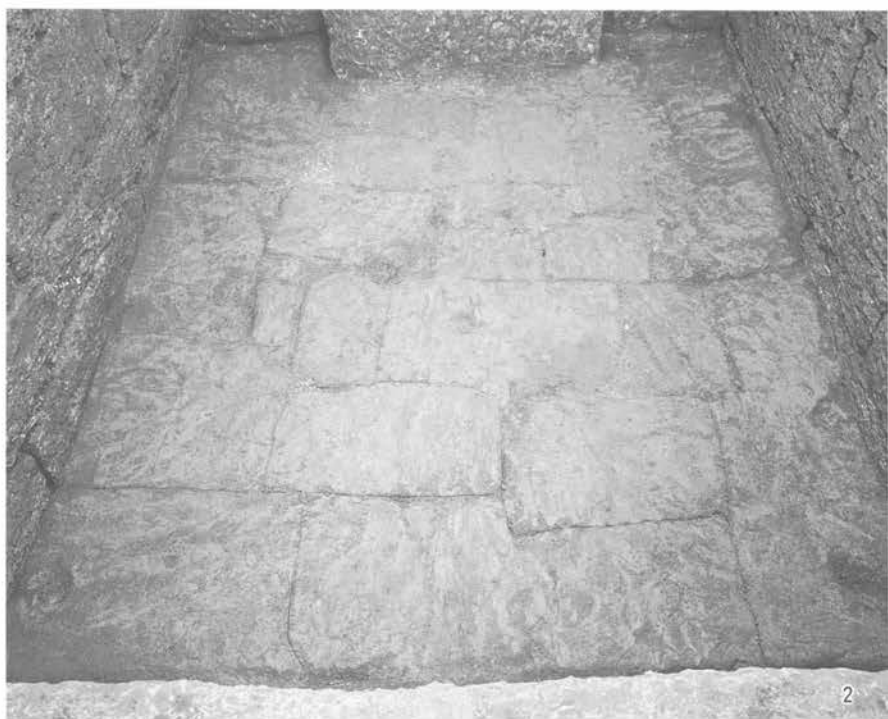
上福田13号墳

1. 羨道部全景
(南東から)
2. 羨道部
側壁部分
(南から)
3. 羨道部
側壁部分
(東から)
4. 羨道部床面
(南東上から)



上福田13号墳

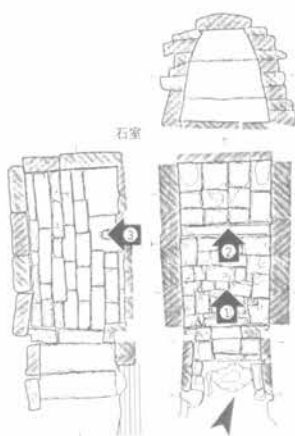
1. 玄門
(石室内から)
2. 玄室床面
(石室奥から)
3. 玄室西側壁
(東から)



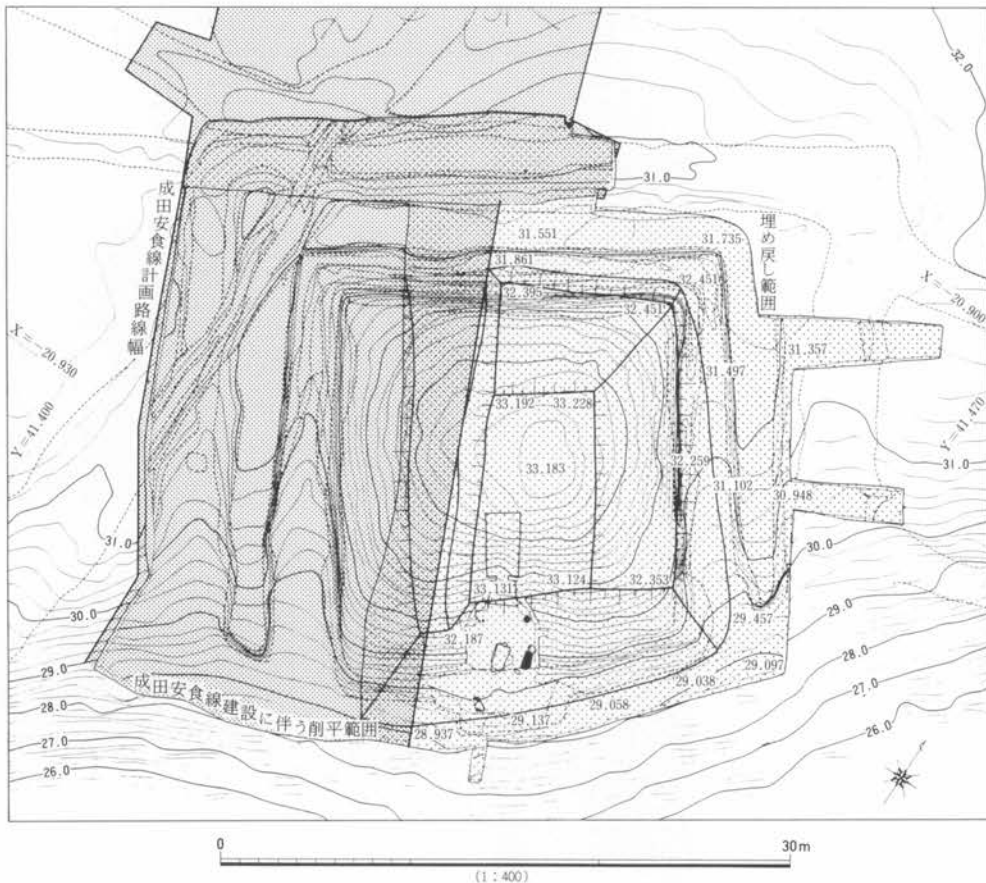
石室

上福田13号墳

1. 玄室奥壁
(玄門から)
2. 玄室奥床面
(玄室手前から)
3. 玄室西側壁
部分
(北東から)

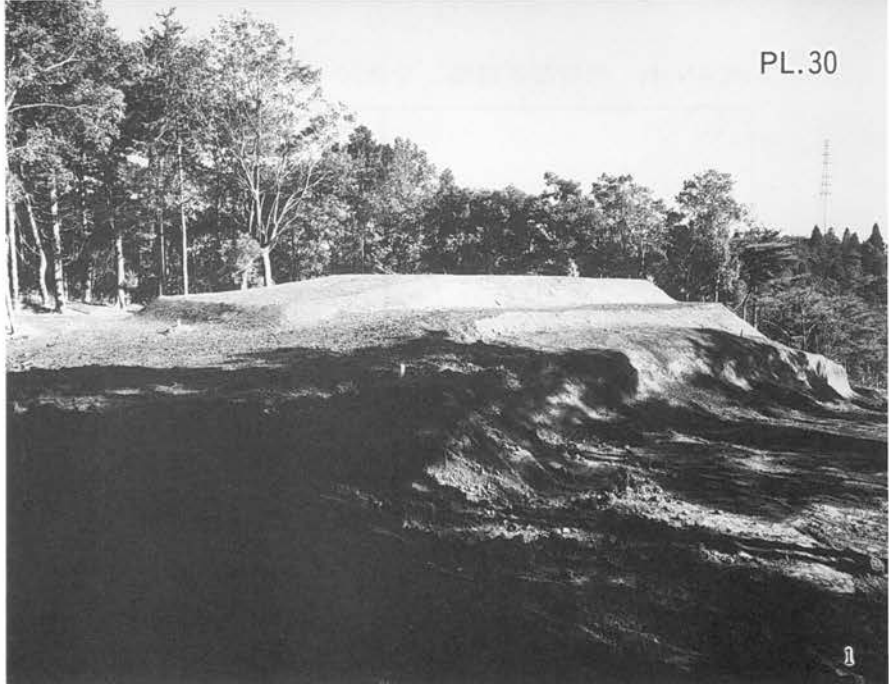


PLAN 40 上福田13号墳 石室保存盛土状況図

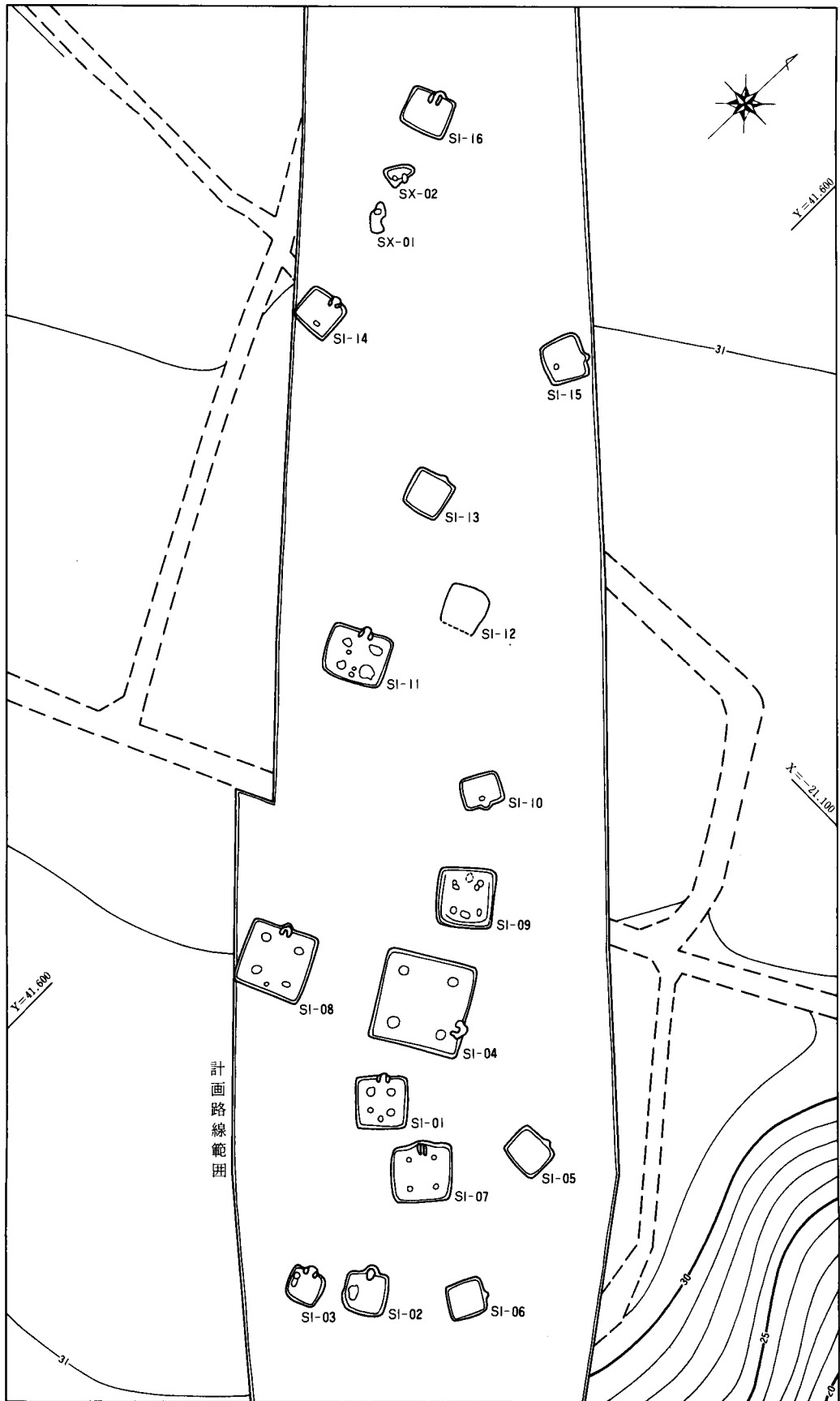


上福田13号墳

1. 石室養生作業完了
(西から)
2. 天井石養生作業
(南から)
3. 天井石養生完了
(北西から)
4. 墳丘盛土状況
(西から)
5. 前庭部埋め戻し状況
(南東から)
6. 前庭部埋め戻し完了
(西から)
7. 墳丘盛土終了
(北から)



PLAN 41 松崎播磨遺跡 全体図





南東遺構全景(北西から)

1

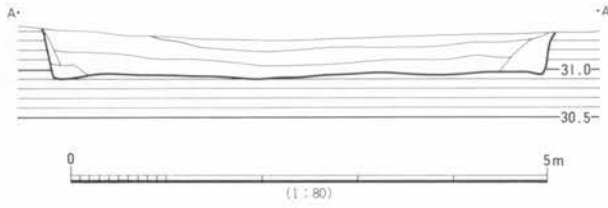
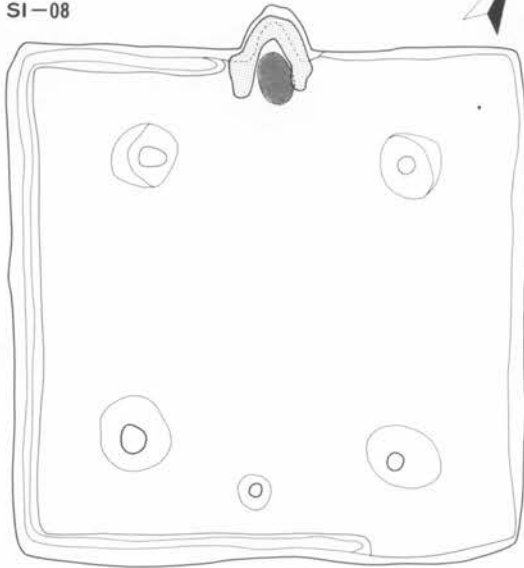


遺構全景(南東から)

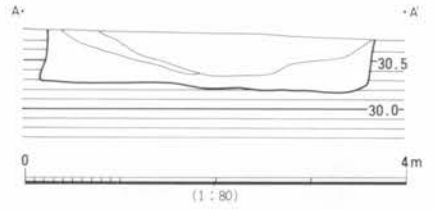
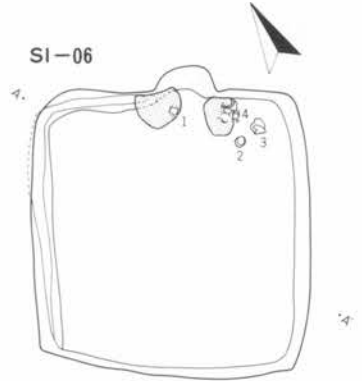
2

PLAN 42 松崎播磨遺跡 竪穴住居跡実測図 (1)

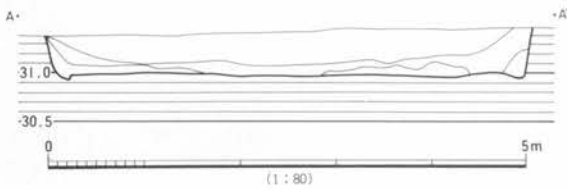
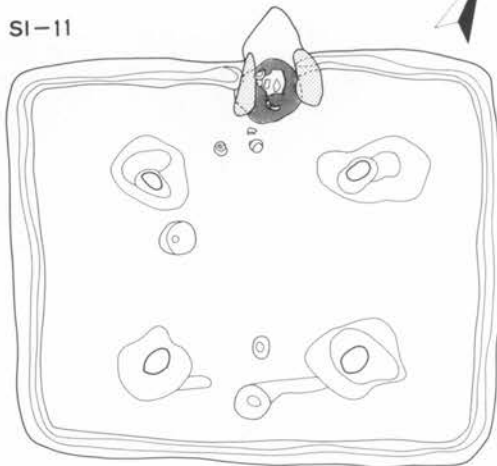
SI-08



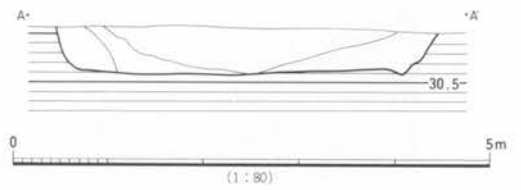
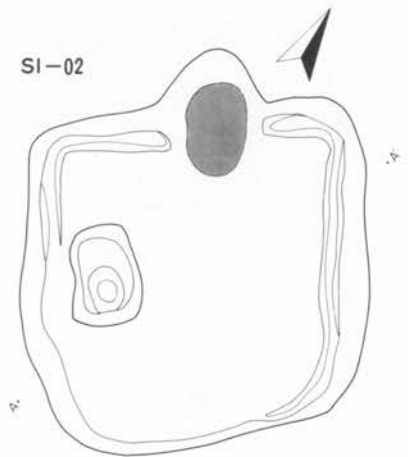
SI-06

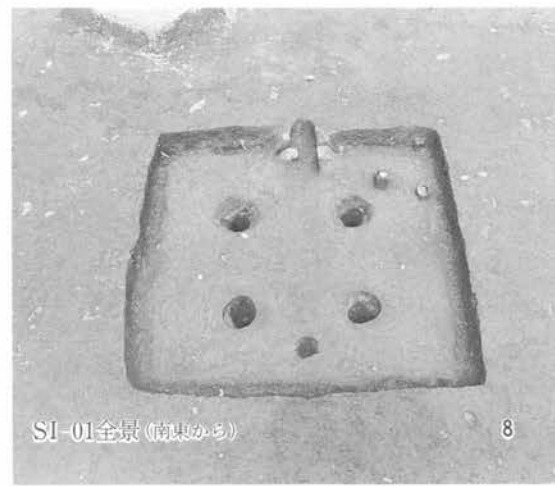
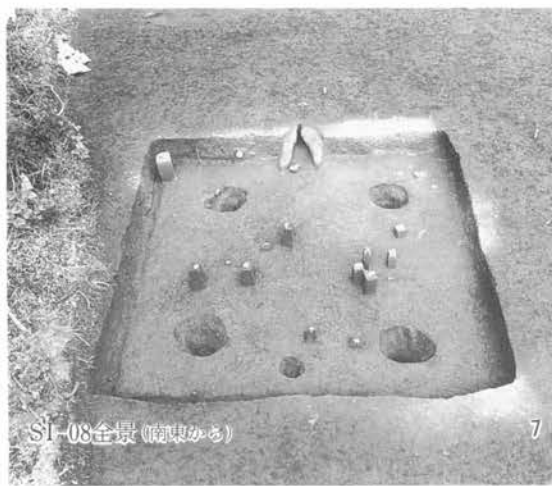
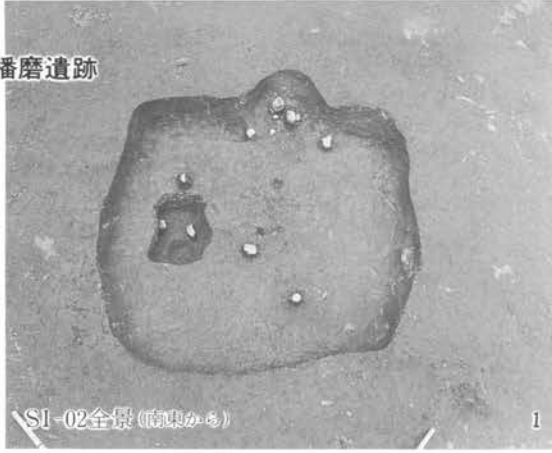


SI-11

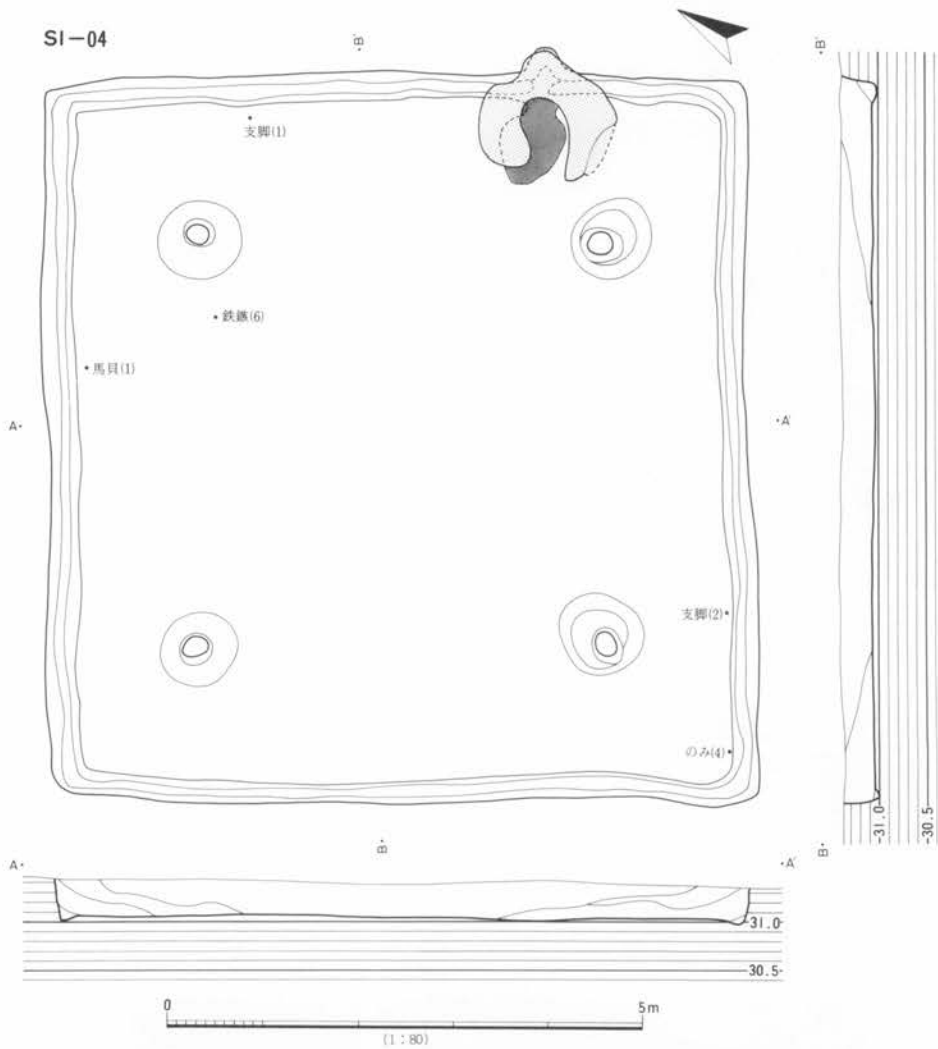
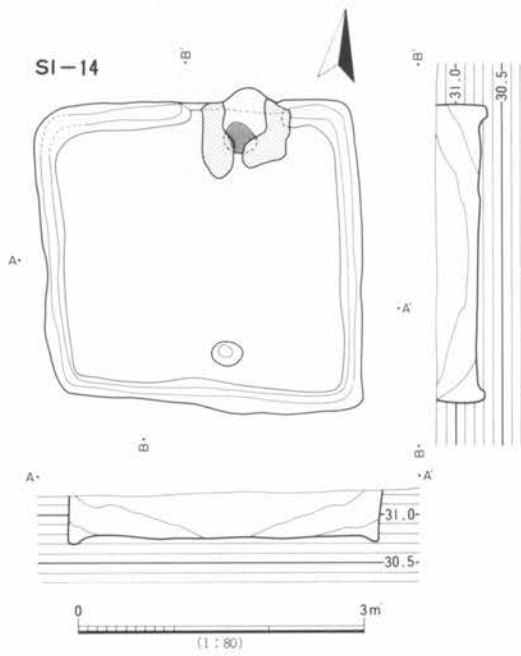


SI-02



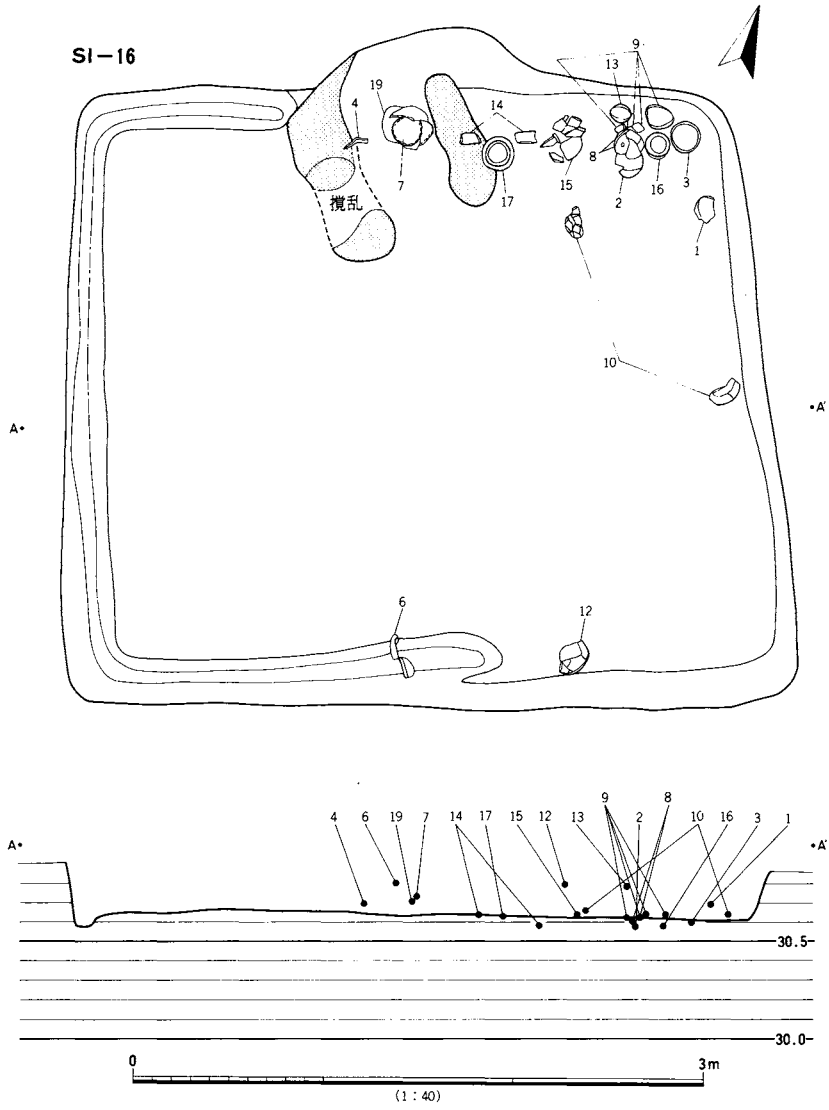


PLAN 43 松崎播磨遺跡 竪穴住居跡実測図 (2)





PLAN 44 松崎播磨遺跡 SI-16遺物出土状況図





SI-04馬具出土状況(東から)

1



SI-16遺物出土状況遠景(南東から)

2



SI-06遺物出土状況(南西から)

3



SI-16遺物出土状況近景(南東から)

4



SI-11遺物出土状況(南から)

5



SX-02全景(西から)

6



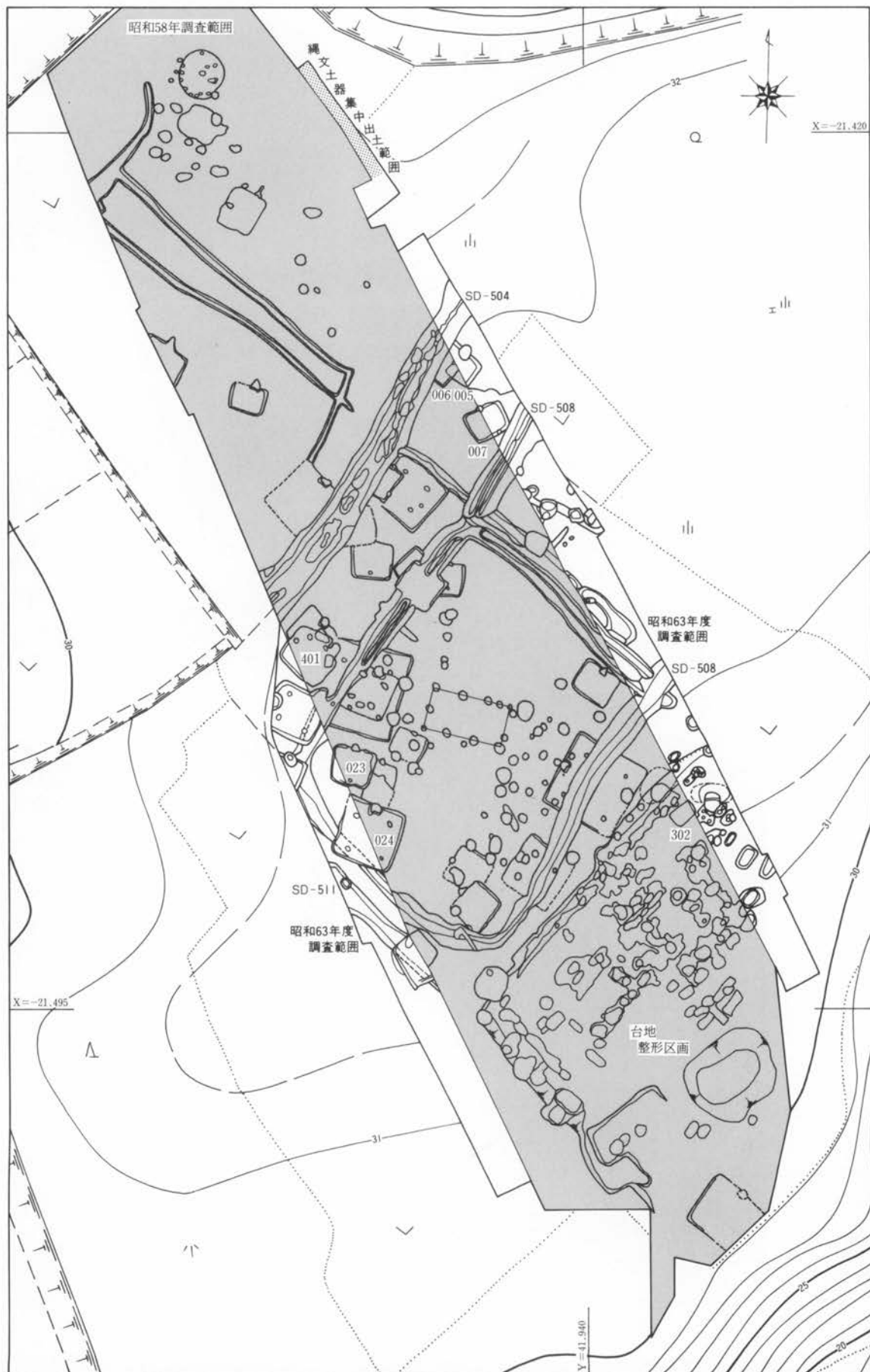
SX-02土層断面(南東から)

7



SX-01土層断面(南西から)

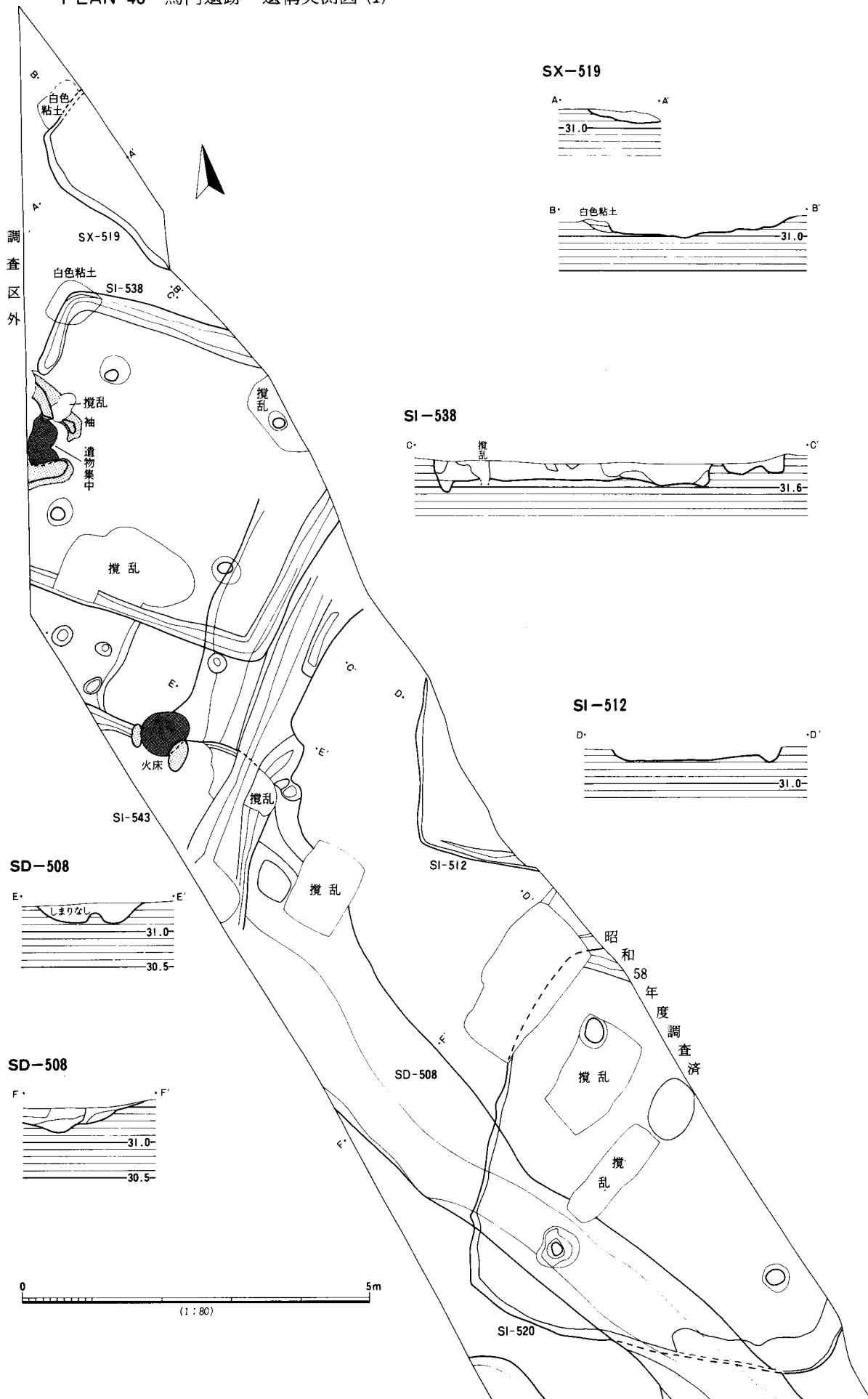
8



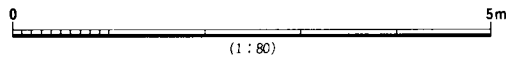
鳥内遺跡

1. 西側発掘前
(南東から)
2. 東側発掘前
(南東から)
3. 西側調査状況
(対岸 北東から)





調査区外

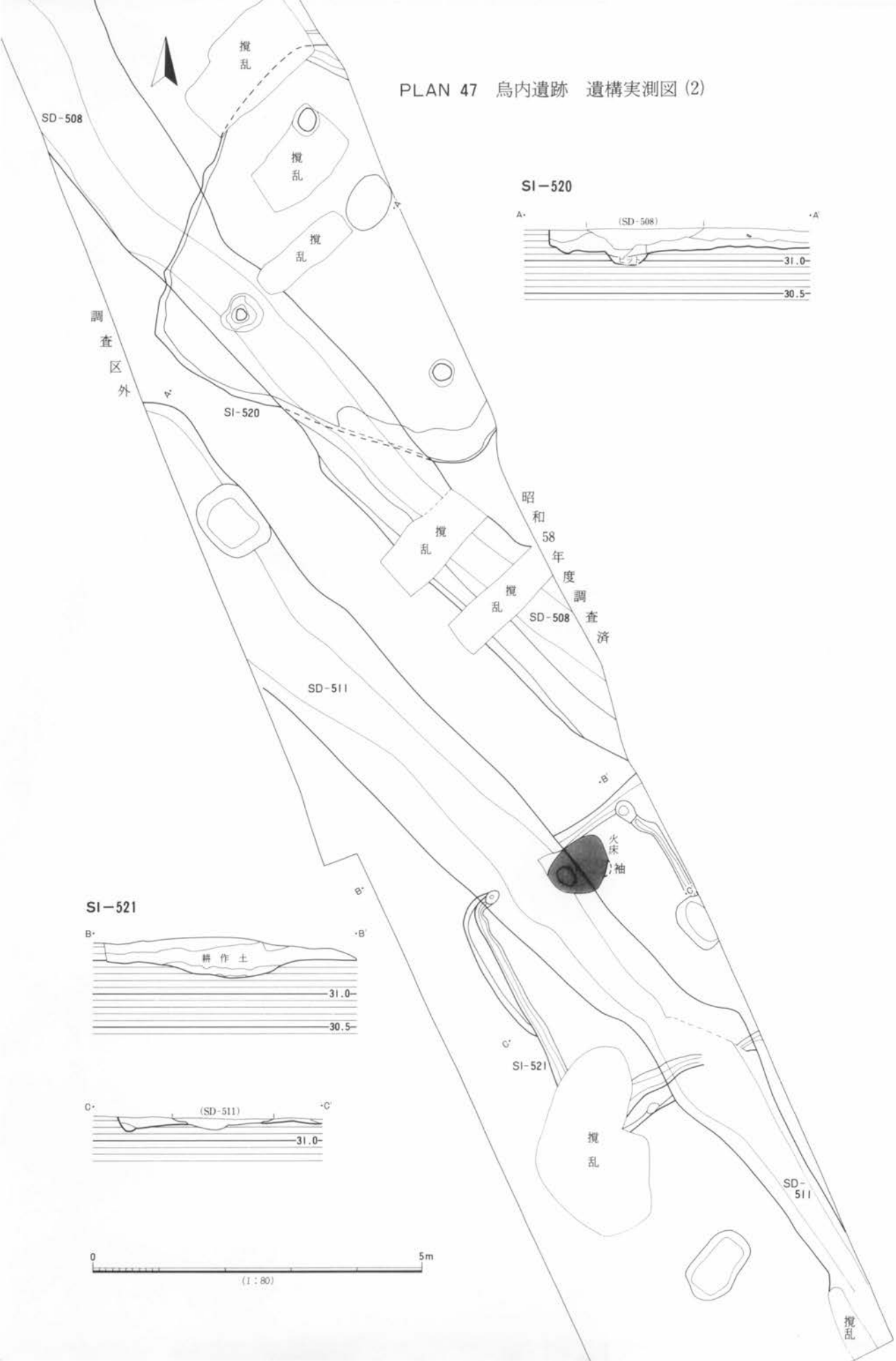


烏内遺跡

1. 西側遺構全景
(南東から)
2. SI-538全景
(南東から)
3. 西側遺構全景
(北西から)



PLAN 47 烏内遺跡 遺構実測図 (2)



鳥内遺跡

1. SI-520
調査状況
(西から)
2. SI-521
全景
(南東から)
3. 西側発掘状況
(北西から)

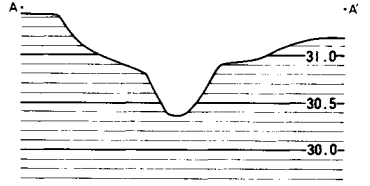


PLAN 48 烏内遺跡 遺構実測図 (3)

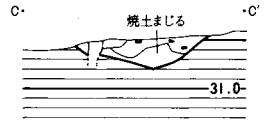
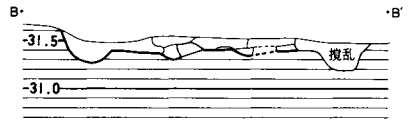
昭和58年度調査済



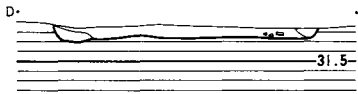
SD-504



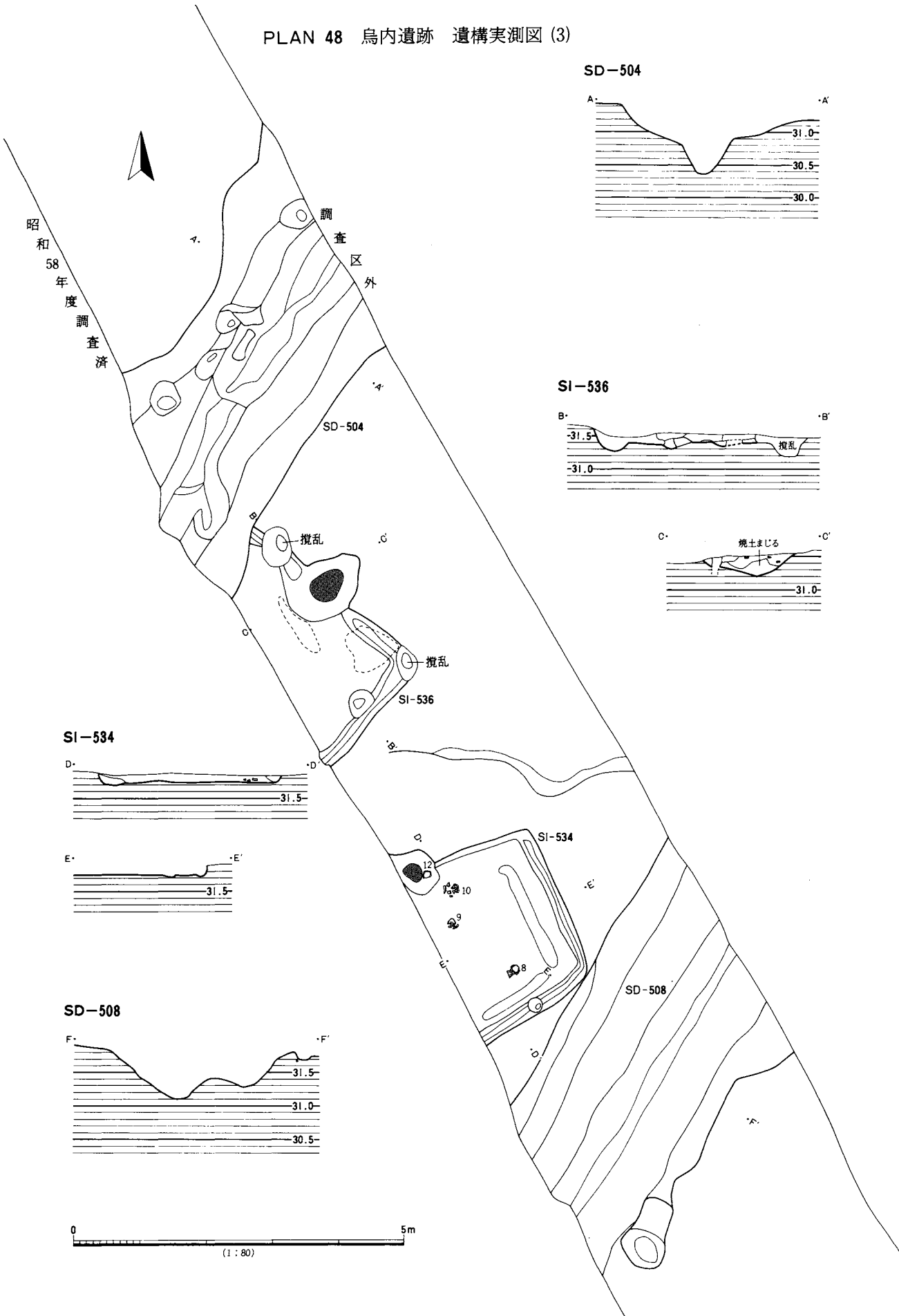
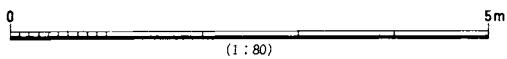
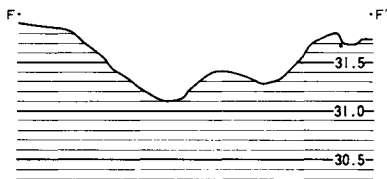
SI-536



SI-534



SD-508



鳥内遺跡

1. 東側
発掘状況
(北から)
2. SI-536
発掘状況
(北東から)
3. SI-534
発掘状況
(北西から)



1

2

3

PLAN 49 烏内遺跡 遺構実測図(4)

SK-533



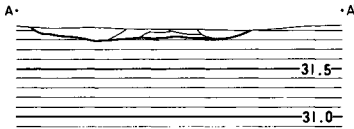
SK-530

畑の境か

昭和
58
年
度
調
査
済

調
査
区
外

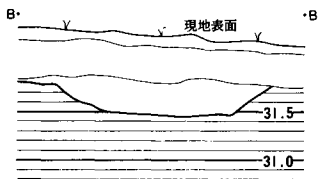
SD-506



SK-542

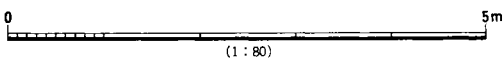
SD-506

SD-508



SD-507

SD-508



烏内遺跡

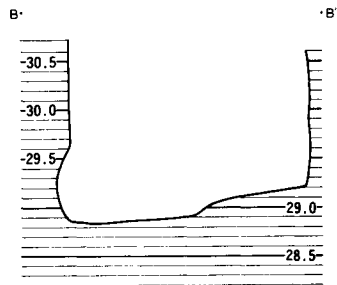
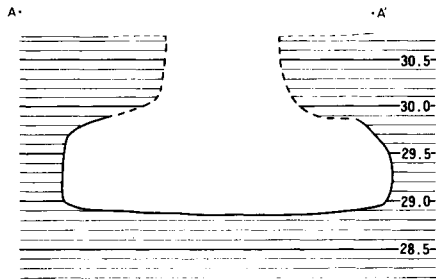
1. 東側
発掘状況
(南東から)
2. 東側
発掘状況
(北西から)



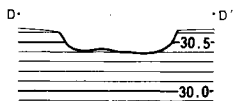
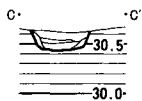
SD-508

PLAN 50 烏内遺跡 遺構実測図 (5)

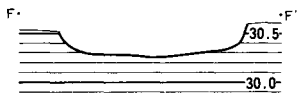
SK-523



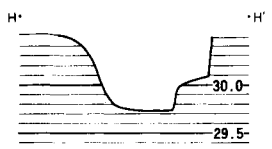
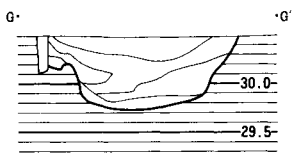
SK-515



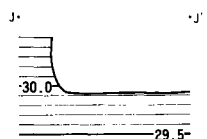
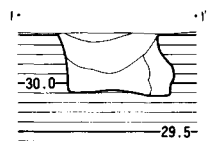
SK-514



SK-513



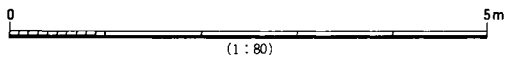
SK-517



昭和58年度
調査済
(302)

昭和
58
年度
調査
済

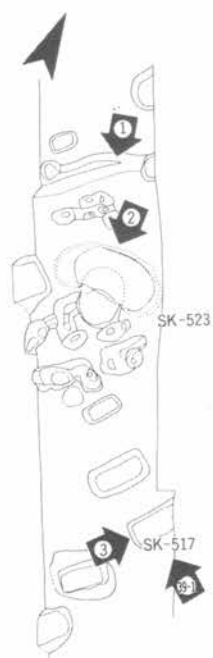
調
査
区
外



(1:80)

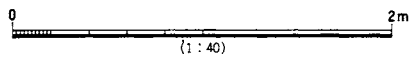
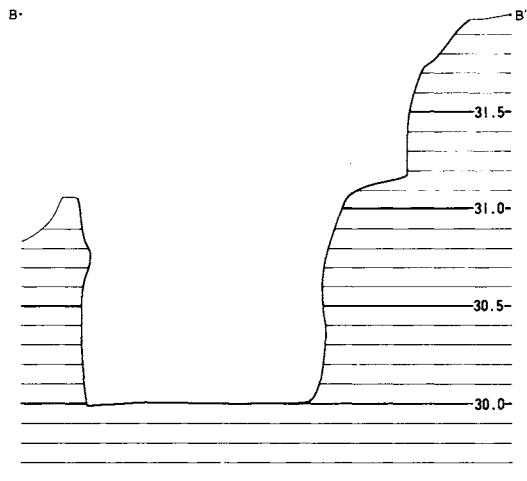
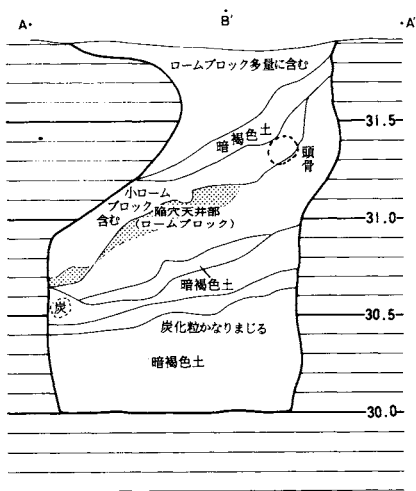
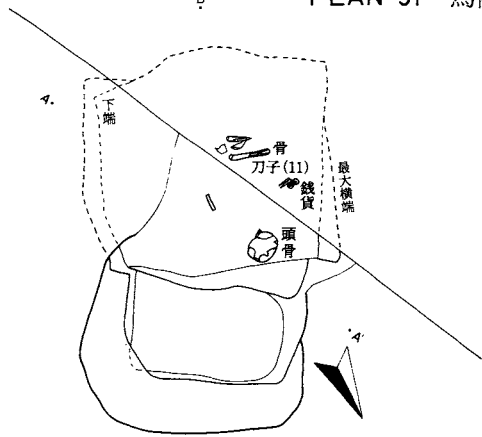
烏内遺跡

- 1. 東側
発掘状況
(北から)
- 2. SK-523
土層断面
- 3. SK-517
土層断面
(南西から)

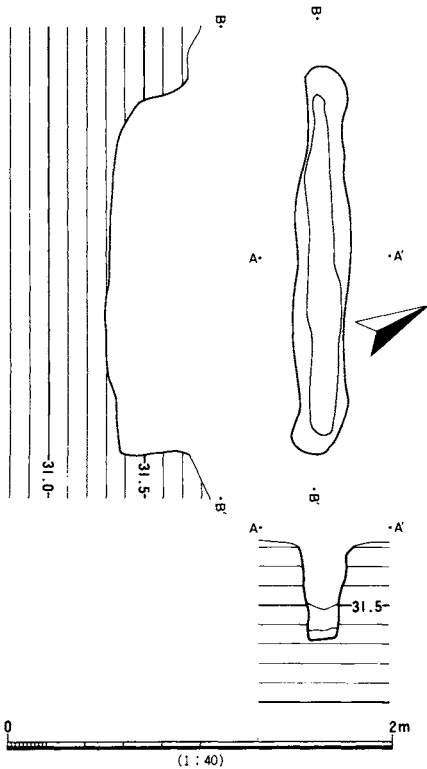


SK-533

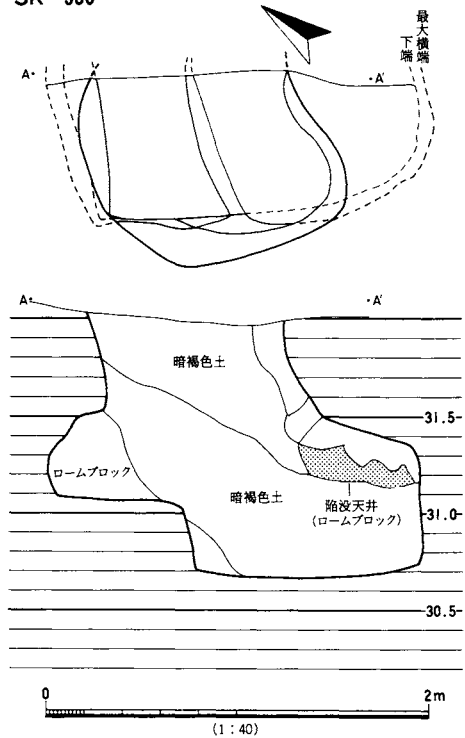
PLAN 51 烏内遺跡 遺構実測図 (6)



SK-542

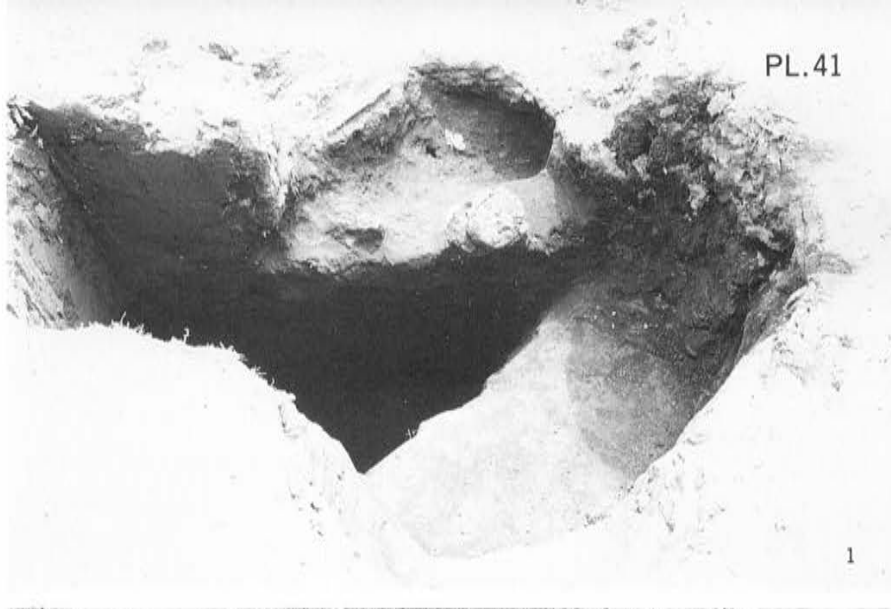


SK-530

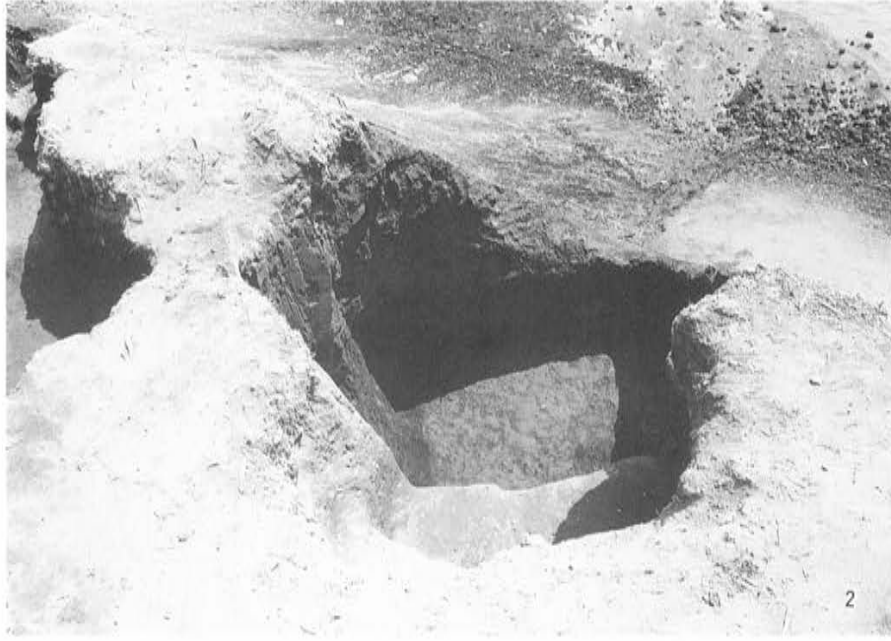


烏内遺跡

1. SK-533
人骨出土状況
(北東から)
2. SK-533
発掘状況
(北から)
3. SK-542
全景
(西から)



1



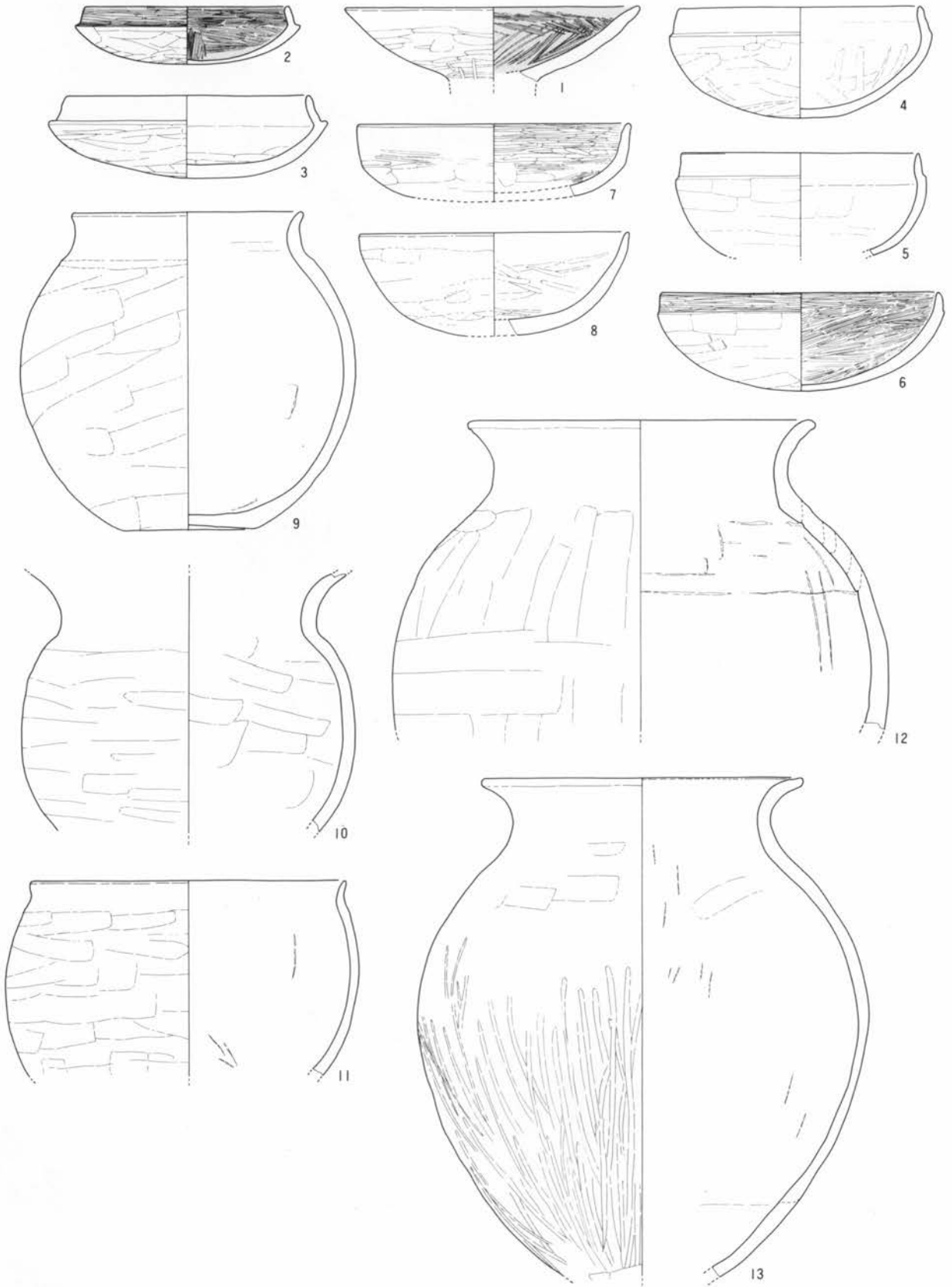
2



3

上福田和田谷津遺跡

SI-01



0 10 20 30cm
(1:3)



2



7



3



8



4



11



6



10



13



9

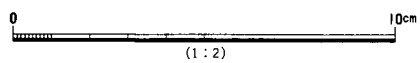
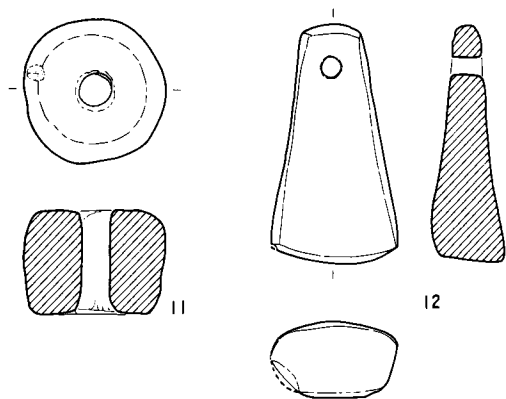
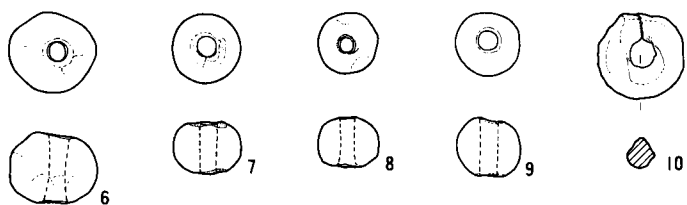
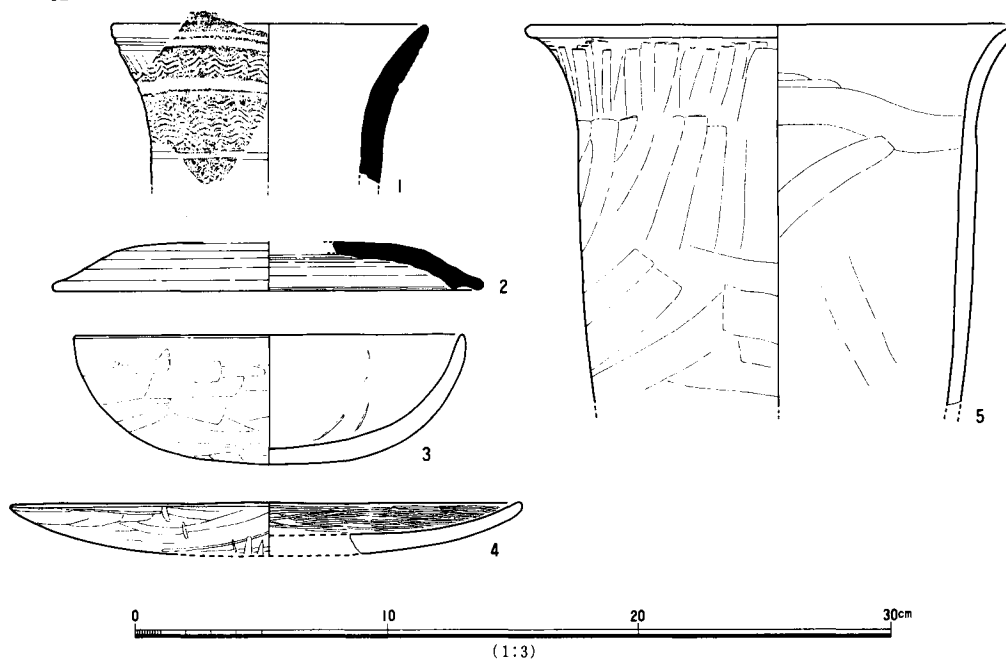


12

(1:3)

上福田和田谷津遺跡

SI-02



土器・土製品



(1:2)

1



2



3



(1:3)

4



(1:1)

6



7



8



9



(1:1)

10



(1:2)

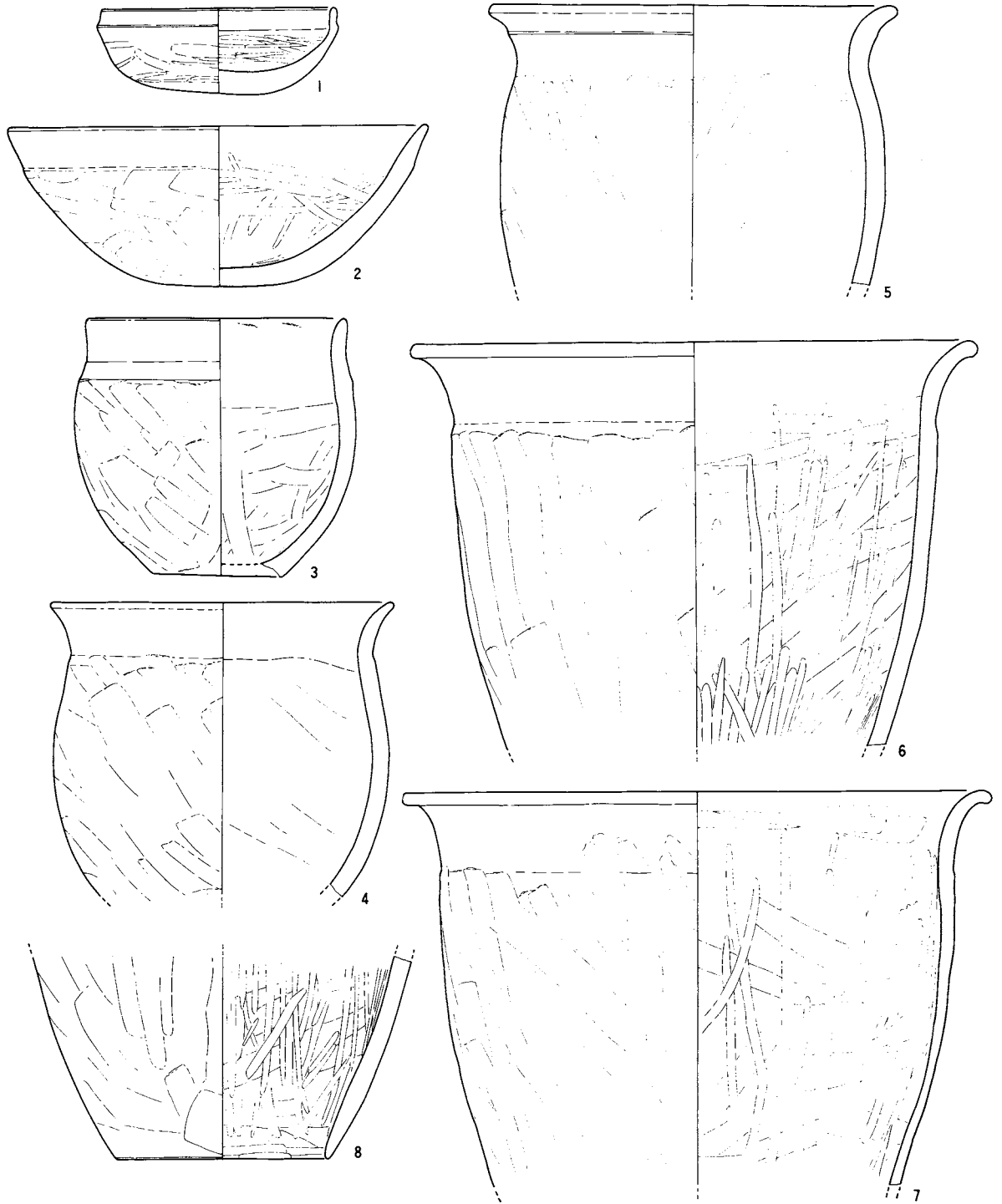
11



12

上福田保町遺跡

SI-01



0 10 20 30cm

(1:3)



1



2



3



5



7



4



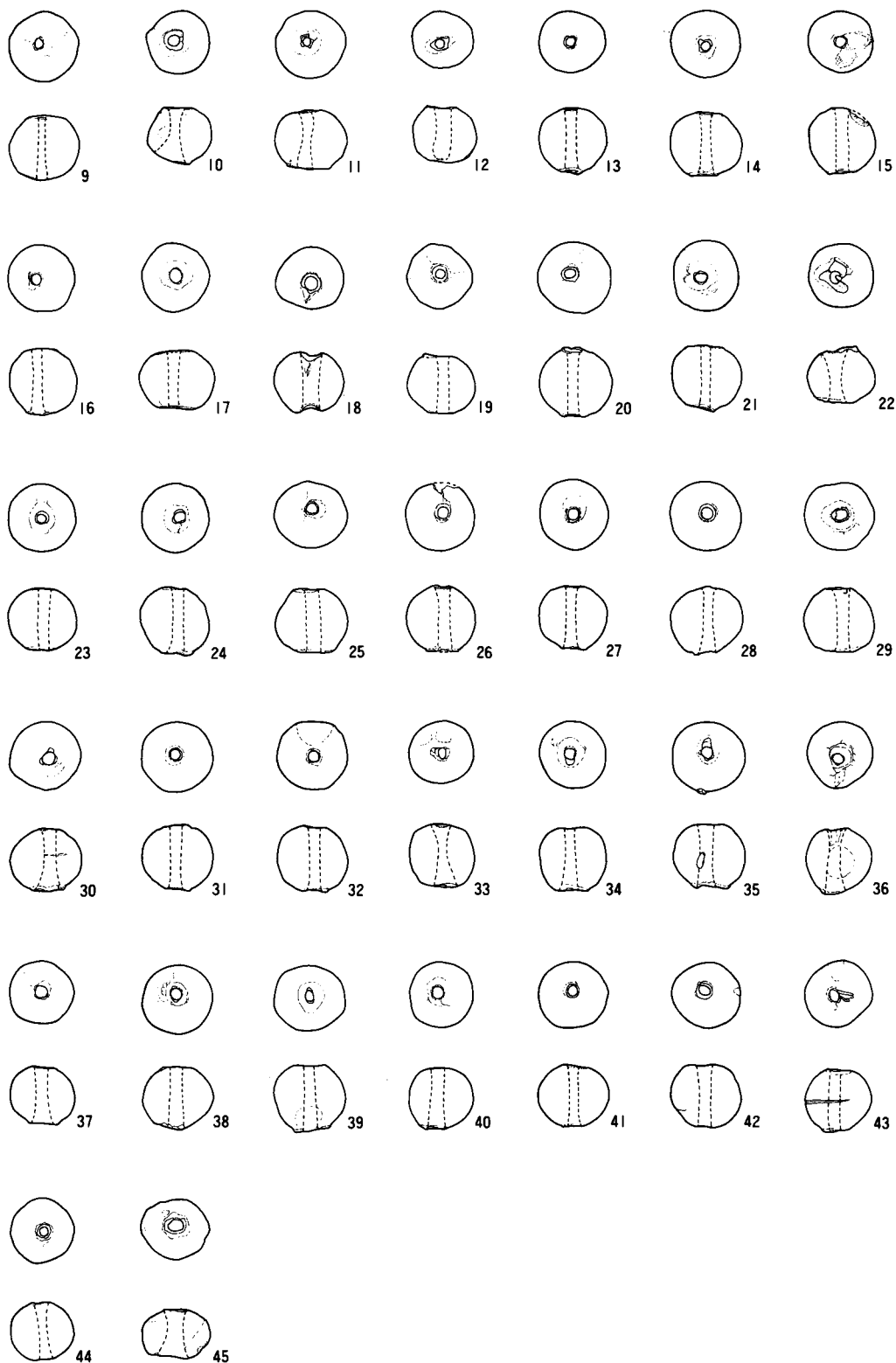
6



8

上福田保町遺跡

SI-01



0 5cm
(1:2)



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



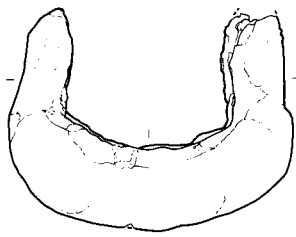
44



45

上福田保町遺跡

SI-01



47



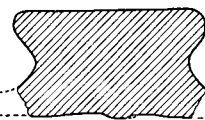
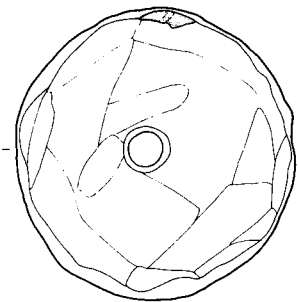
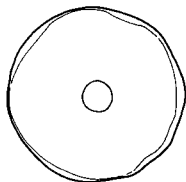
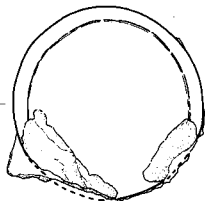
48



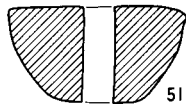
46



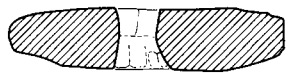
49



50



51

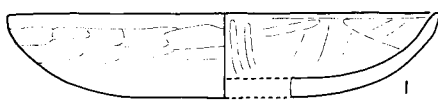


52

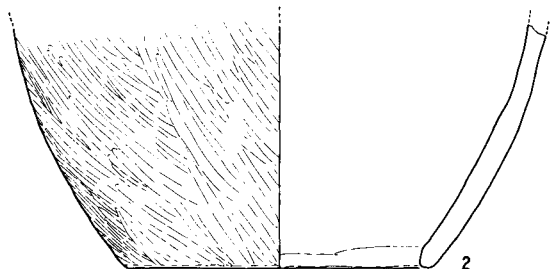


仲兵遺跡

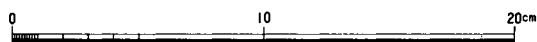
SI-01



1



2



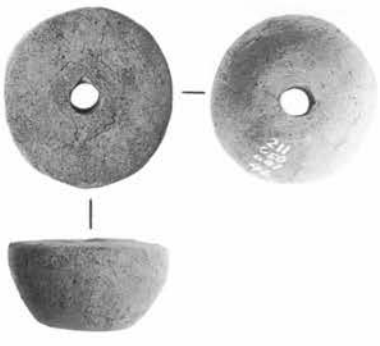
(1:3)



48



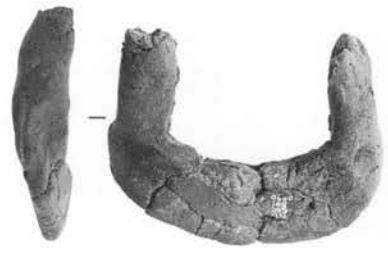
47



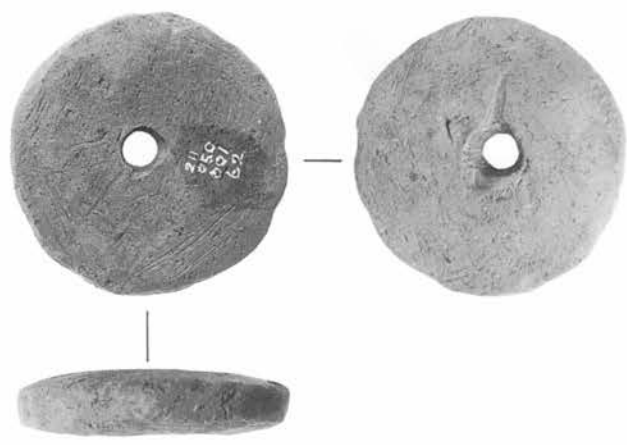
49



51



46



52



49



50



(1:3)

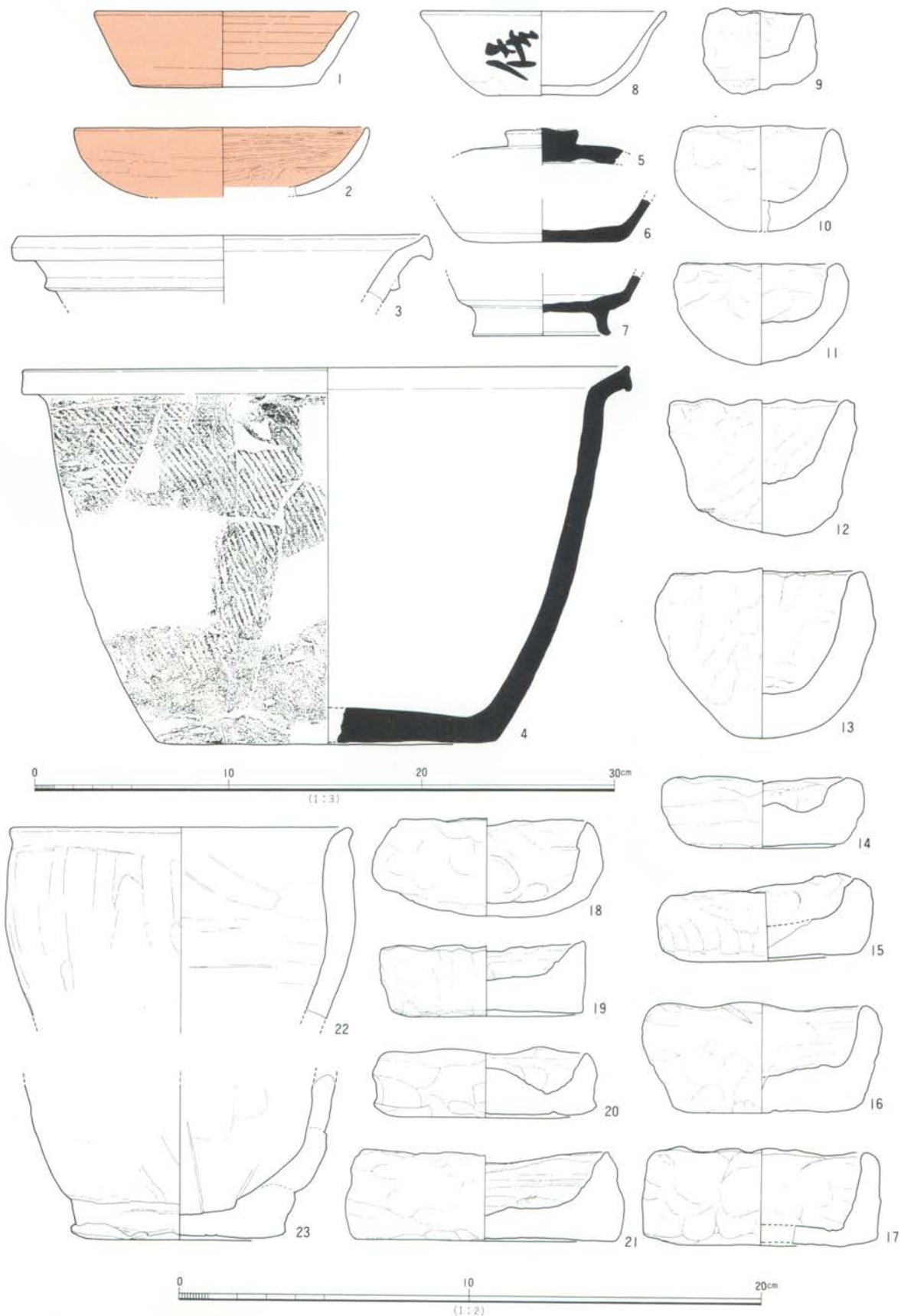


1 (1:3)

2

下福田稻荷原遺跡

SX-02





11



10



9



14



5



12



(1:3)

1



15



(1:3)

2



16



8



17



22



18



19



20



(1:2)

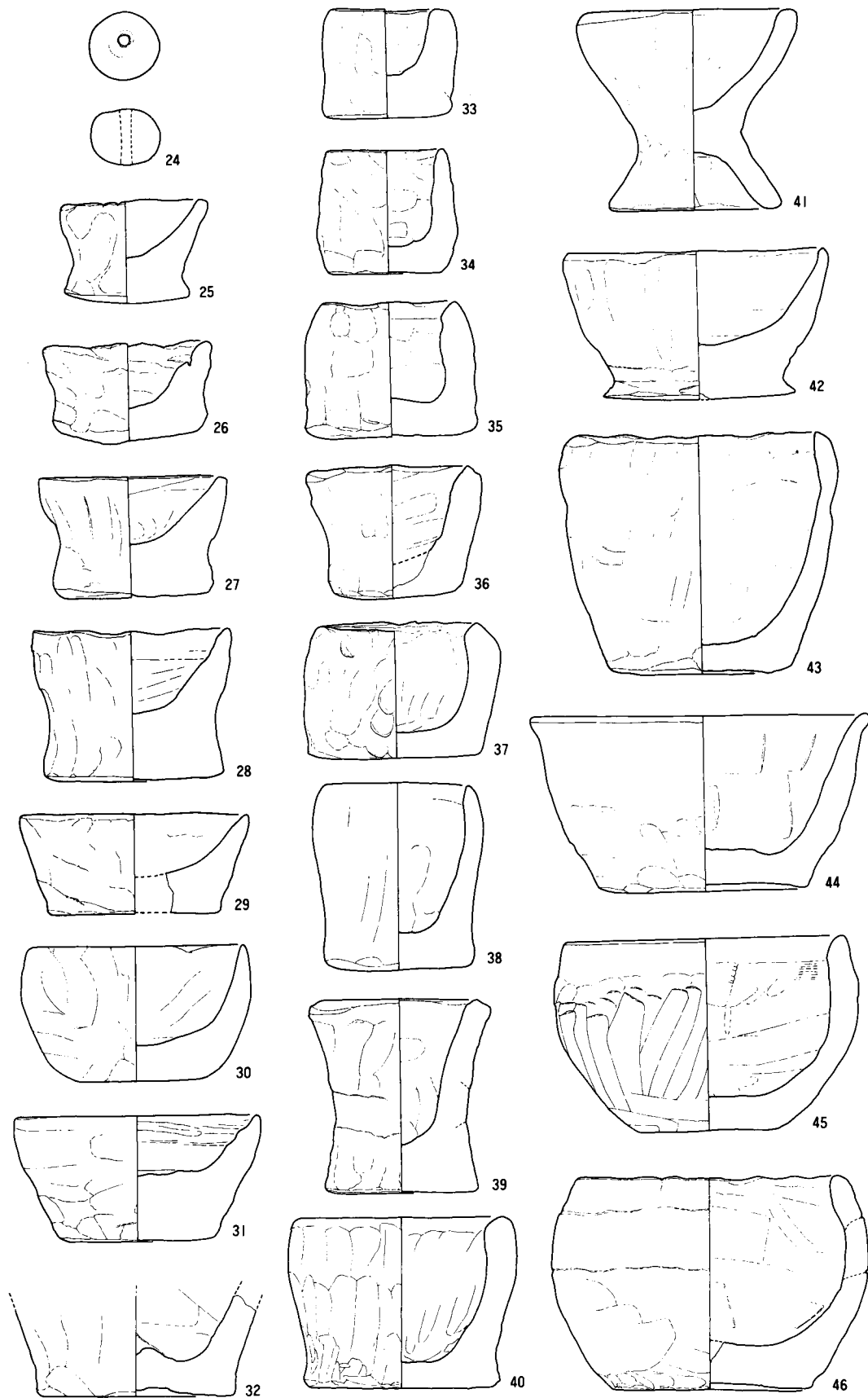
23



21

下福田稻荷原遺跡

SX-02



0 10 20cm

(1 : 2)

(1:1)



24



33



41



25



34



42



26



35



27



36



43



28



37



44



29



38



45



30



31



39



46



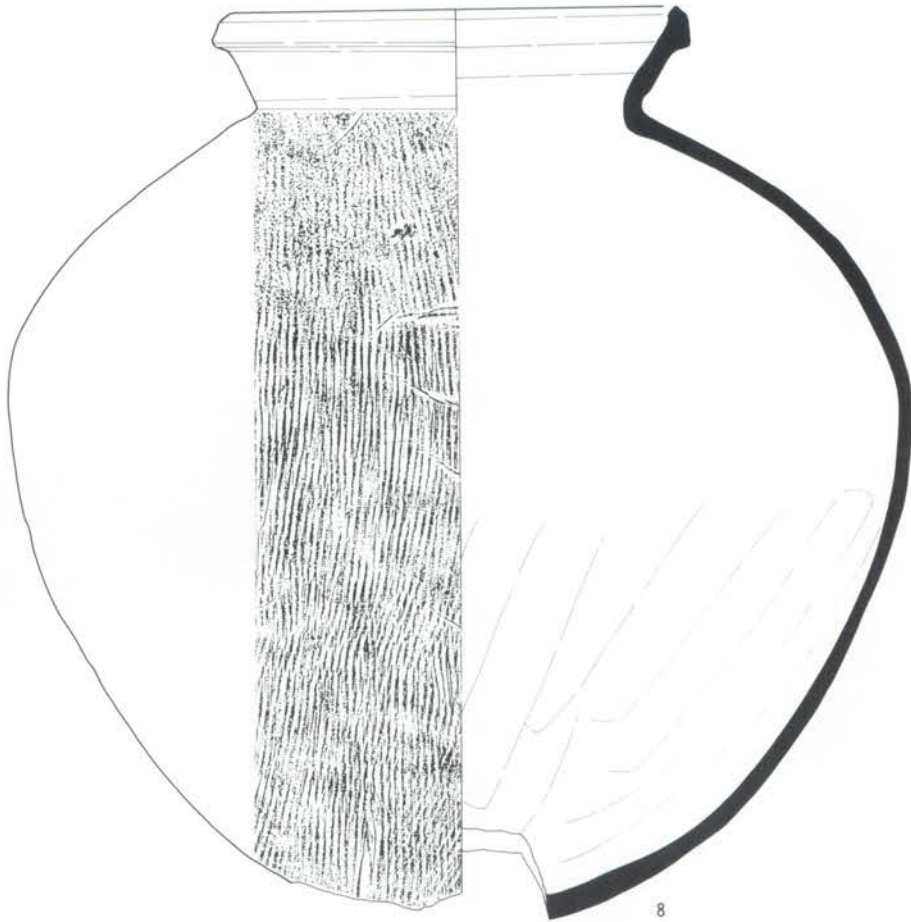
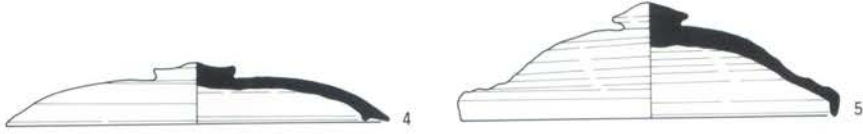
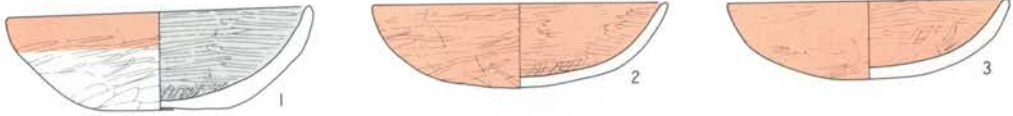
32



40

(1:2)

上福田13号墳





4



5



1



7



2



6



3



8



9



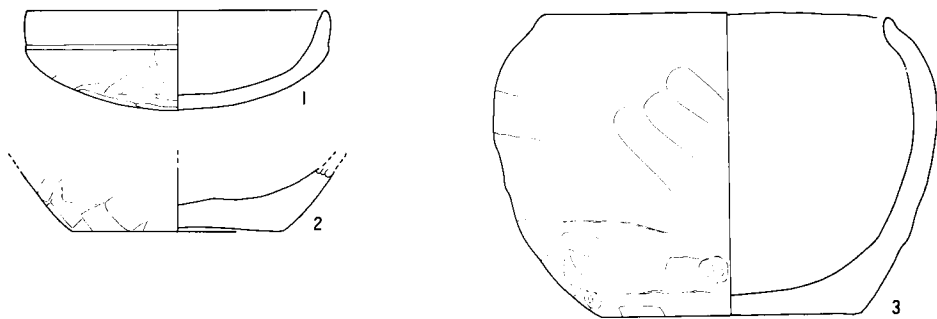
10



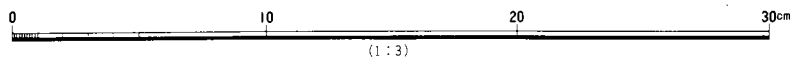
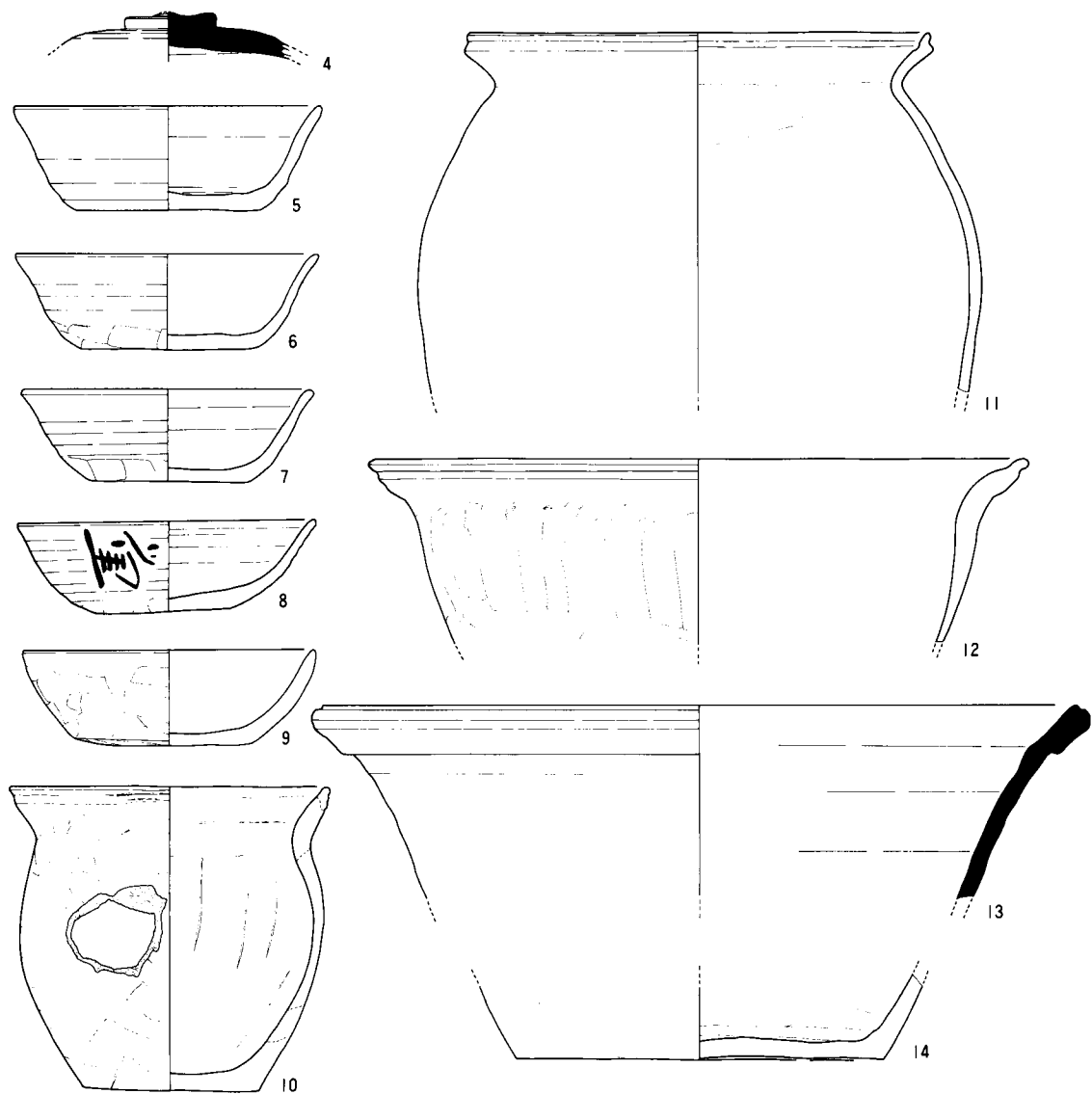
5

松崎播磨遺跡

SI-01



SI-02





(1:2)

1



3



(1:2)

5



10



(1:2)

6



(1:2)

7



12



(1:2)

8



11

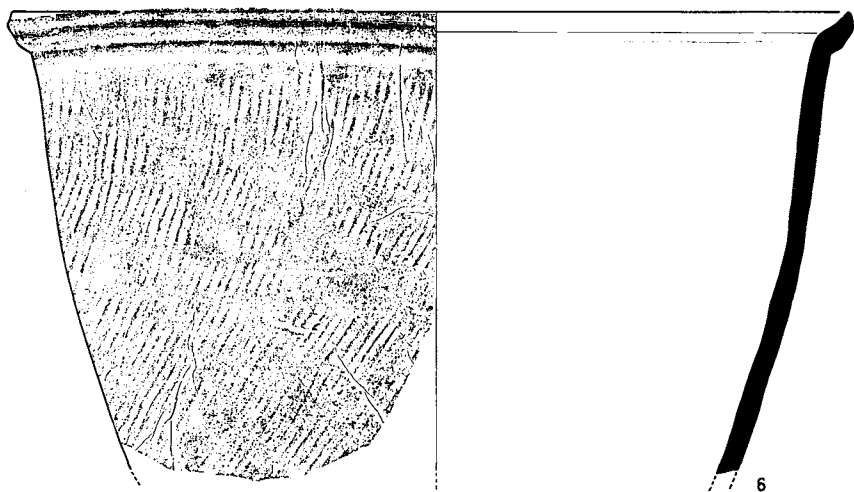
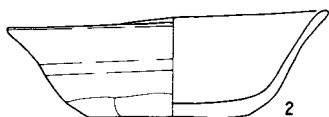
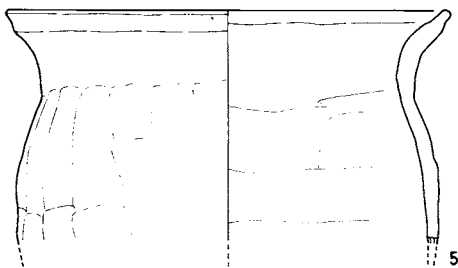
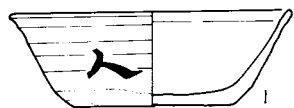
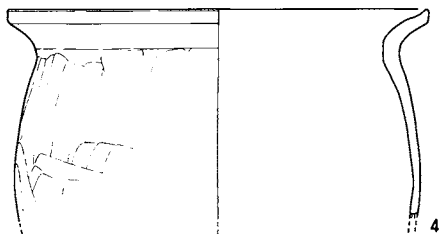
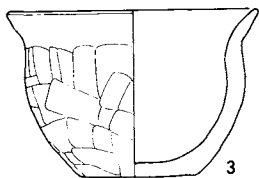
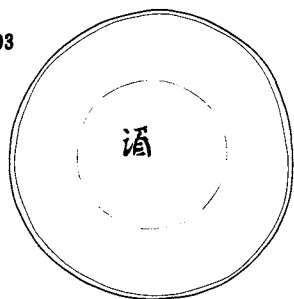


(1:3) (1:2)

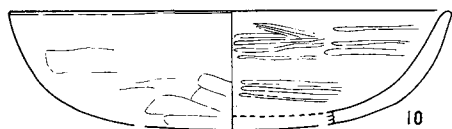
9

松崎播磨遺跡

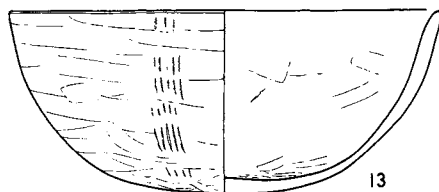
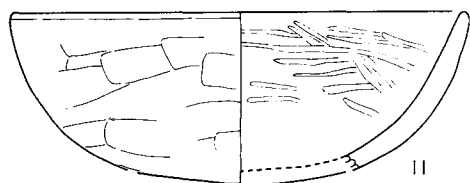
SI-03



SI-04



SI-05



(1 : 3)



1



3



5



(1:2)



4



(1:2)

2



(1:3) (1:2)



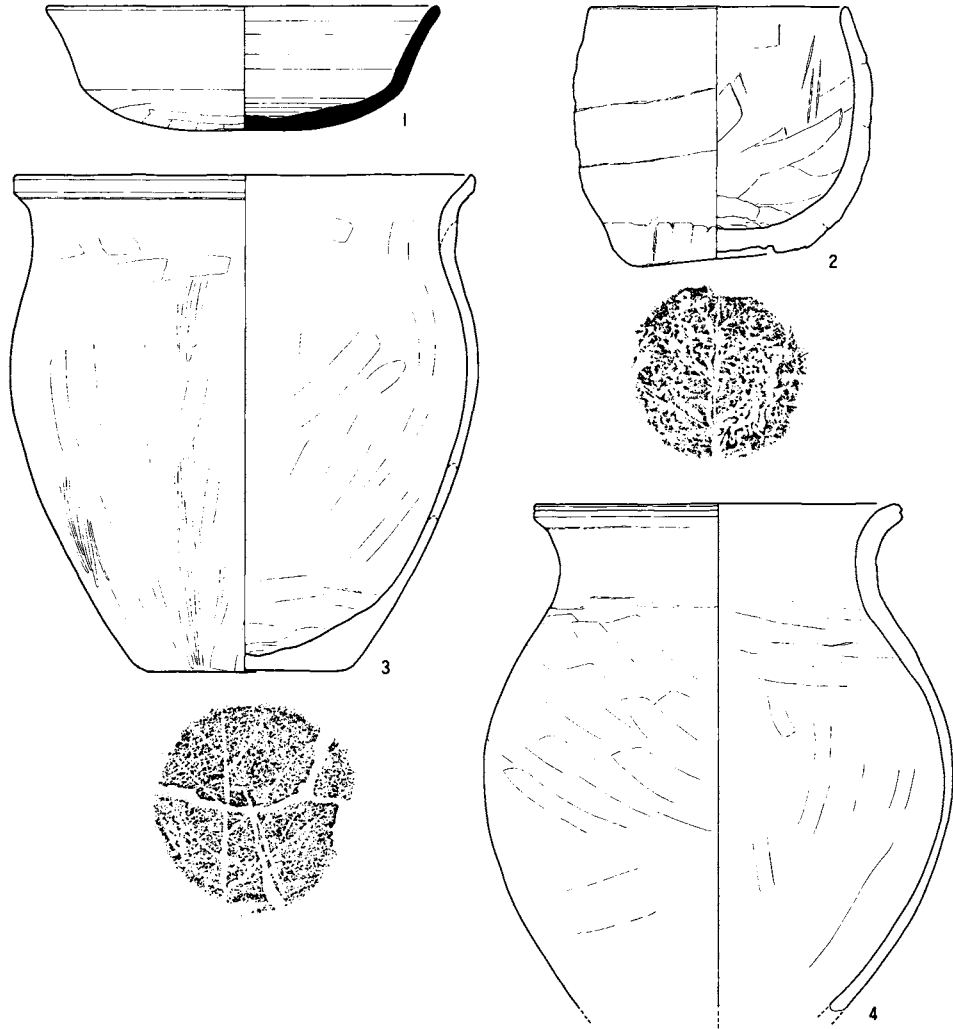
7



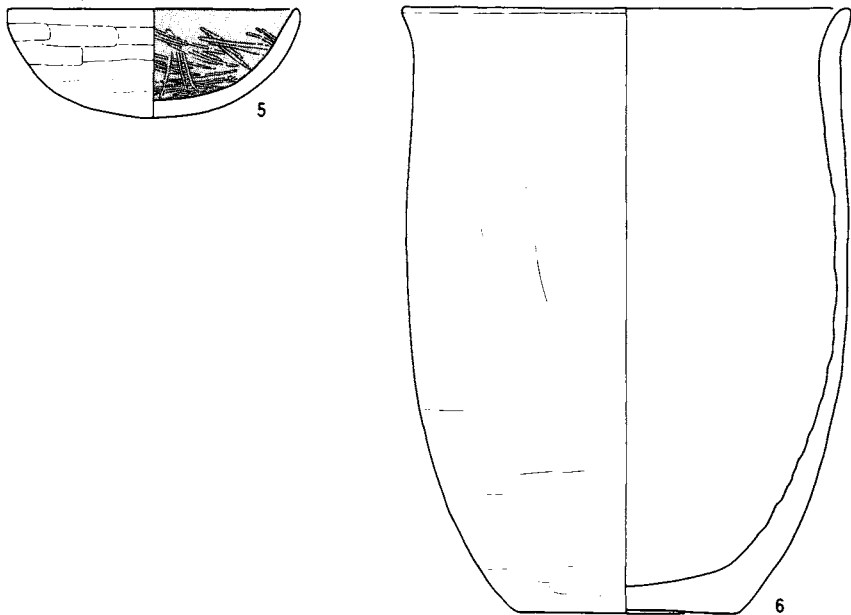
13

松崎播磨遺跡

SI-06



SI-07



0 10 20 30cm

(1:3)



1



2



3



6



4

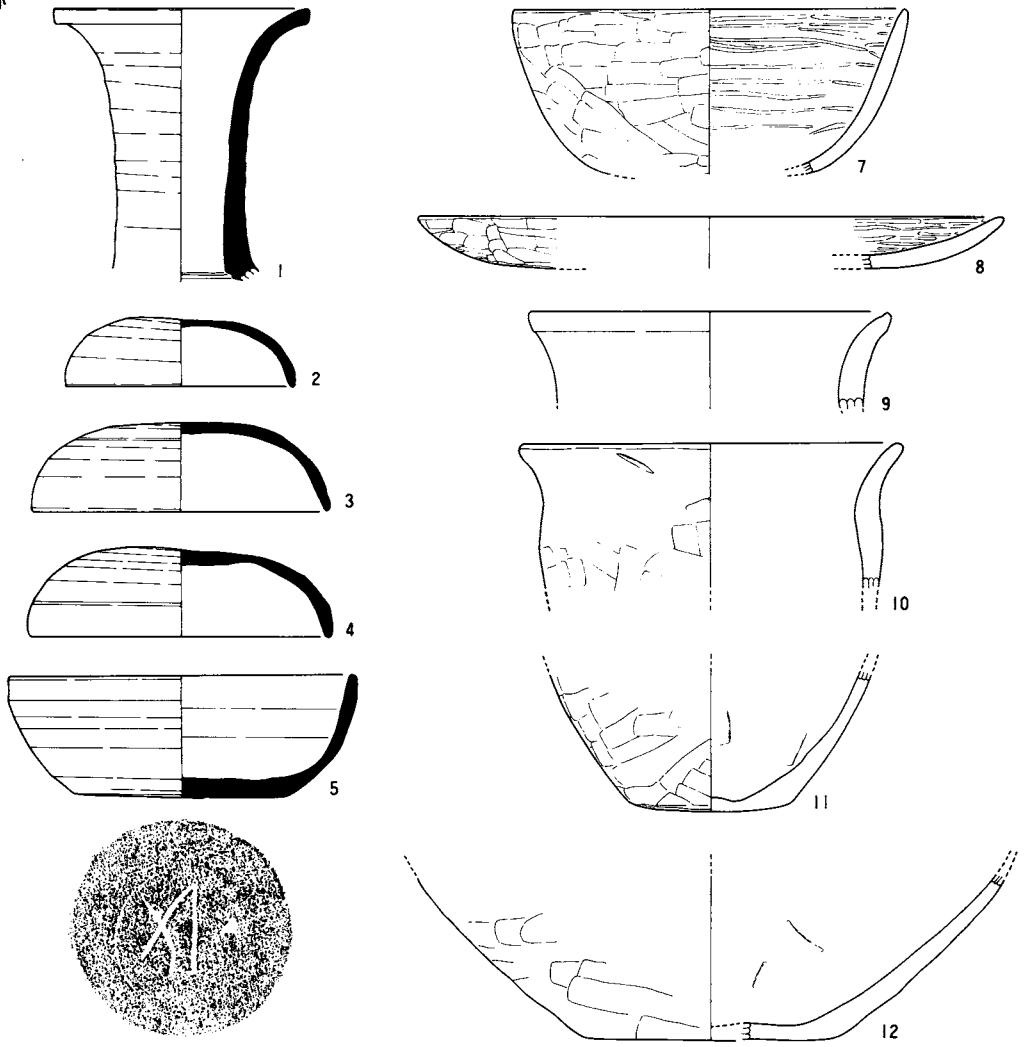


5

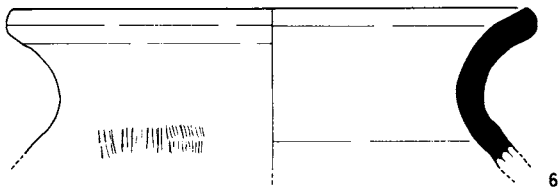
(1:3) (1:2)

松崎播磨遺跡

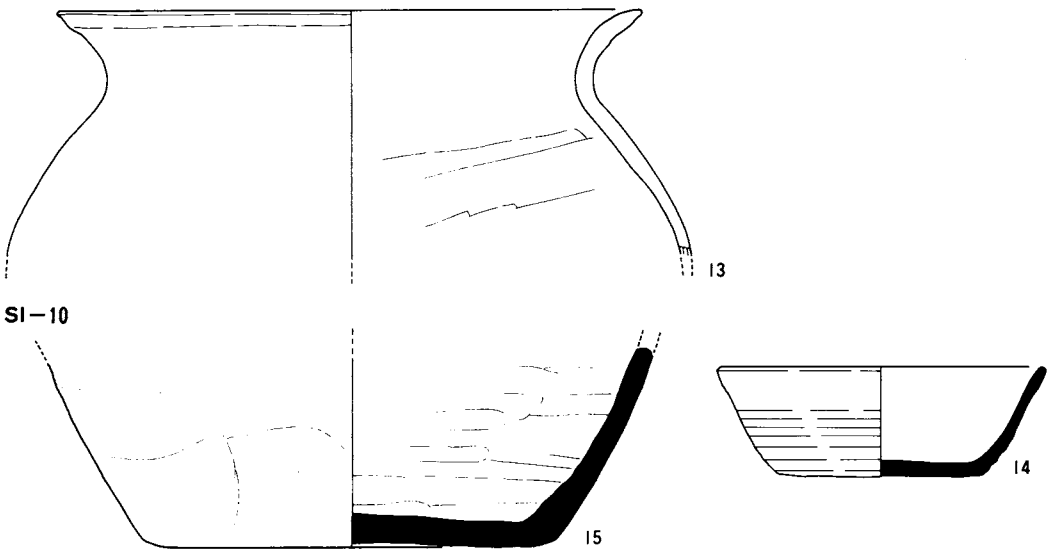
SI-08



SI-09



SI-10



0 10 20 30cm

(1 : 3)



1



(1:3)

7



(1:4)

8



2



(1:2)

11



3



(1:4)

12



4



(1:4)

13



5



14



(1:2)

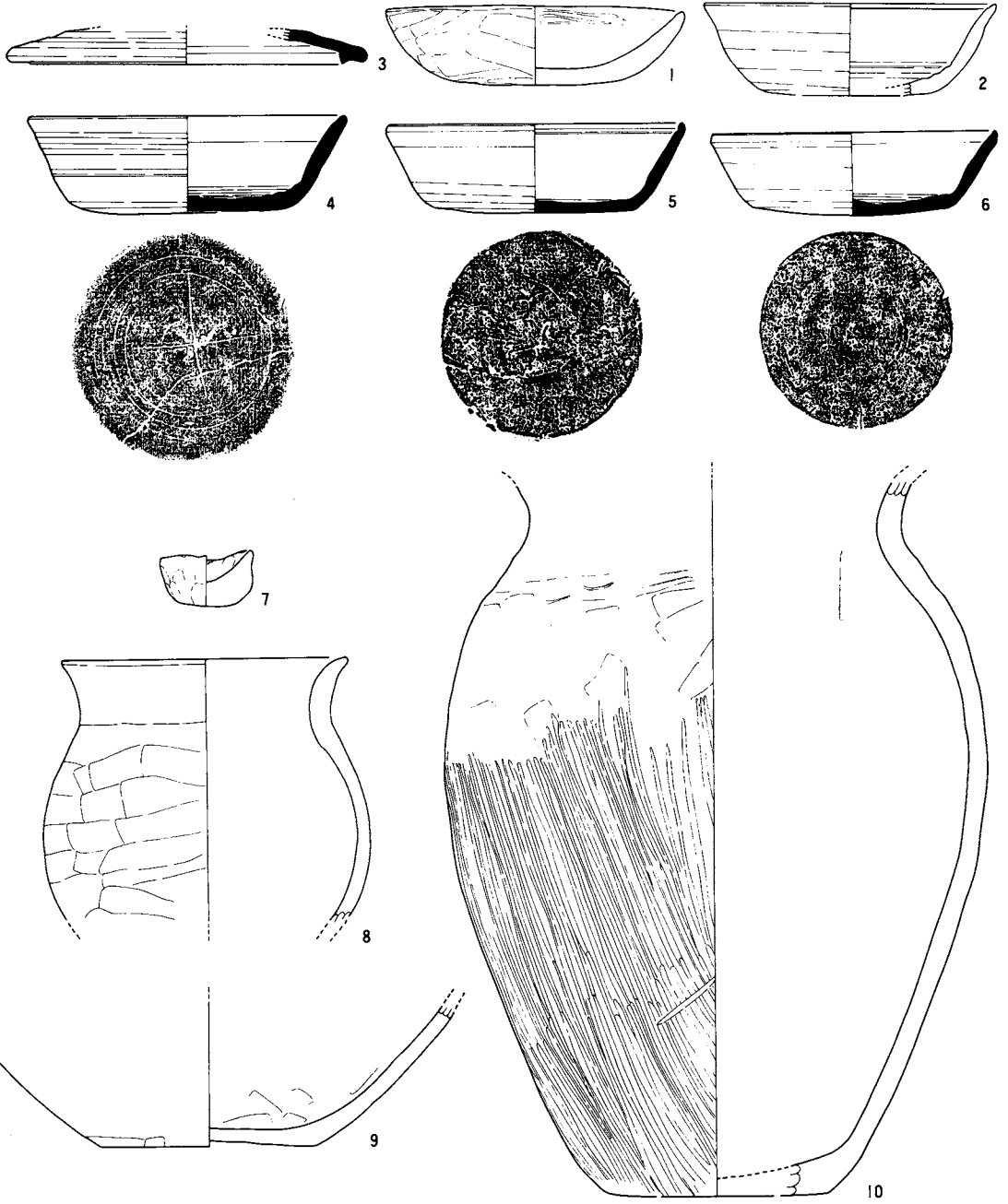


(1:4)

15

松崎播磨遺跡

SI-11



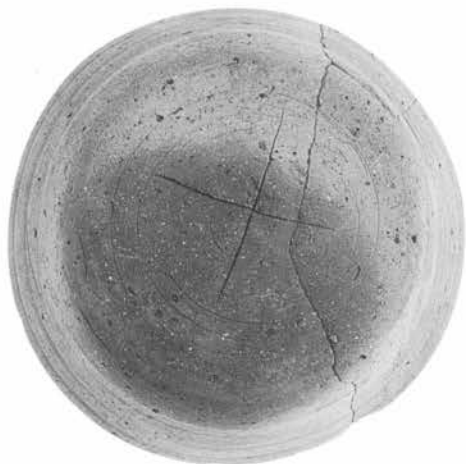
0 10 20 30cm
(1:3)



|

4

2



1



(1:3)



8

|

6



(1:4)



10



(1:2)

5

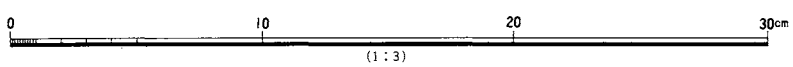
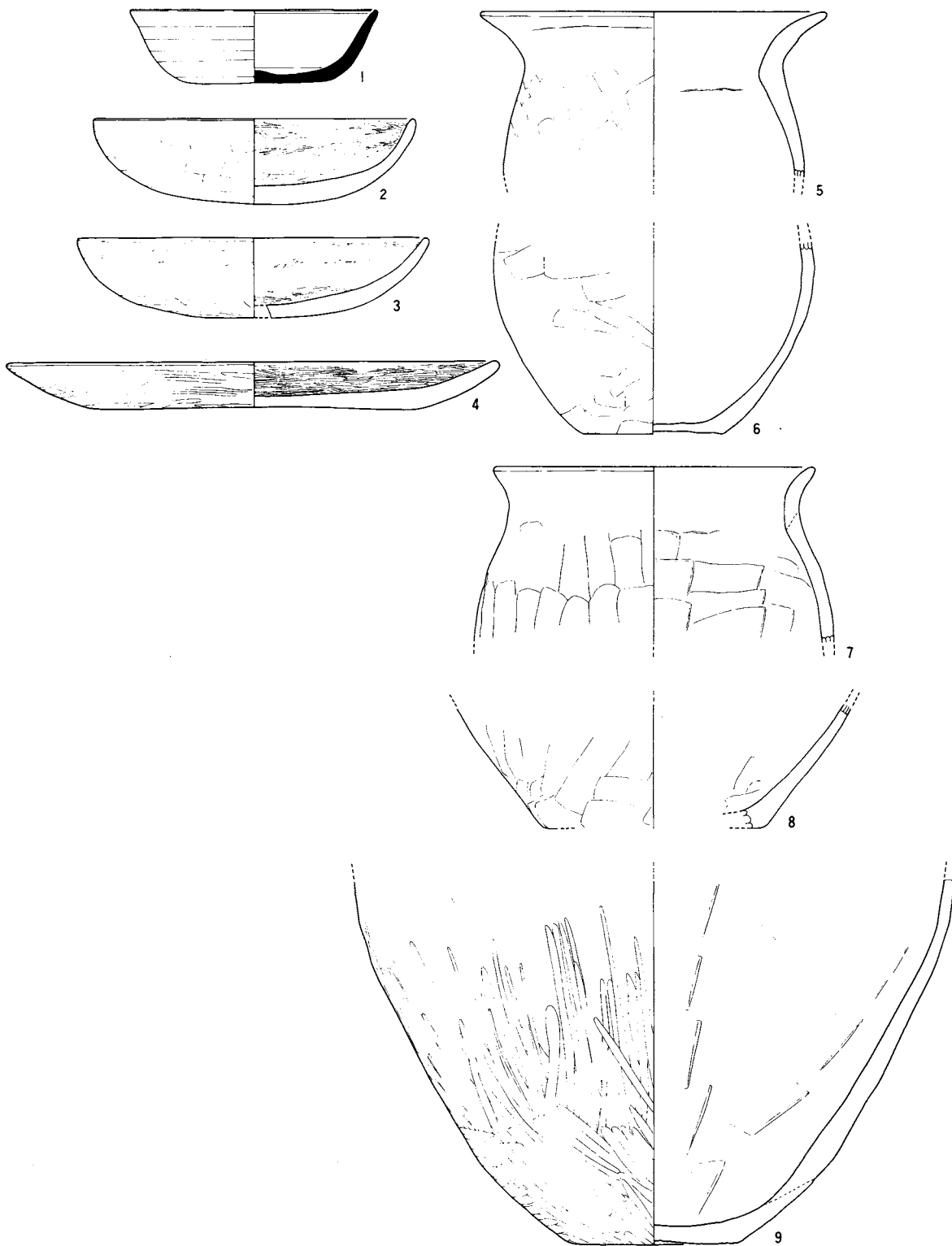
(1:4)



9

松崎播磨遺跡

SI-12



(1 : 3)



1



2



3



(1:4)

4



5



6



7



(1:4)

8

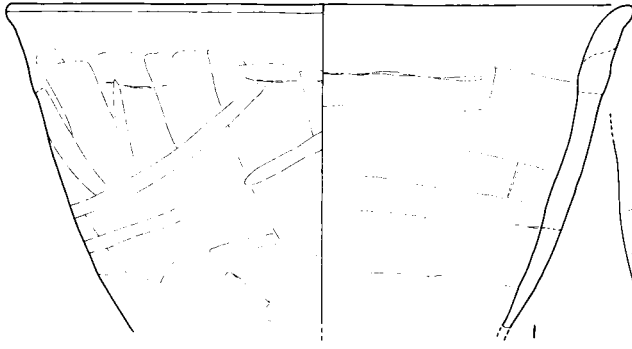


(1:3) (1:5)

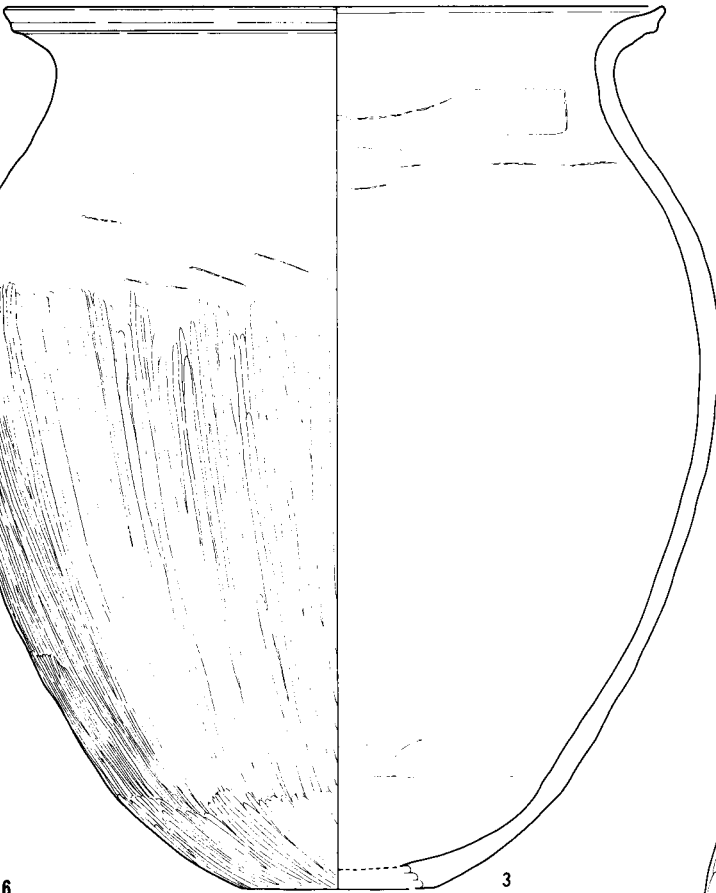
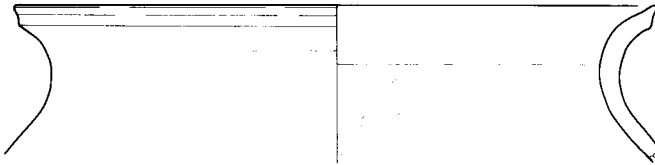
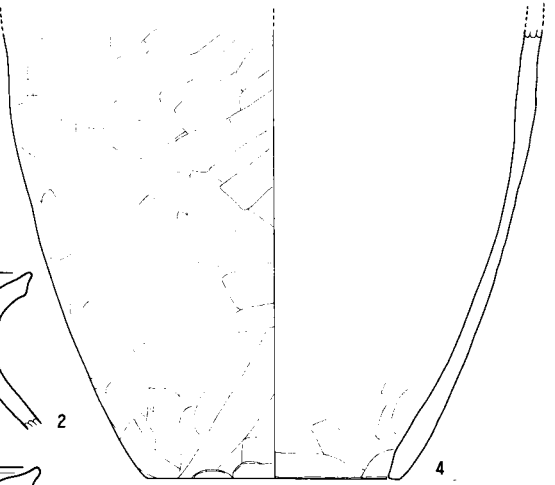
9

松崎播磨遺跡

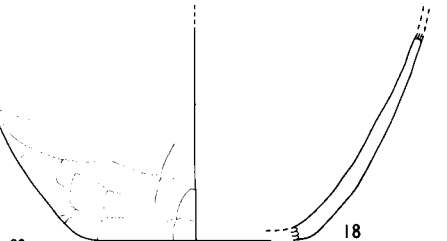
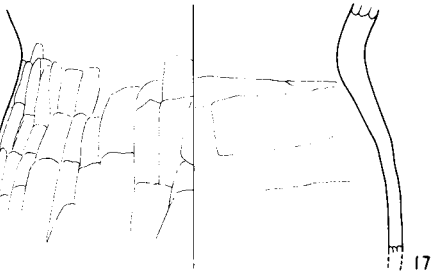
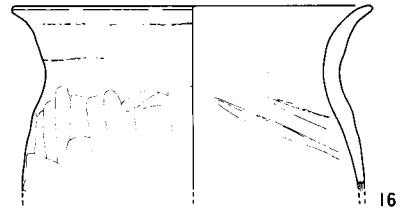
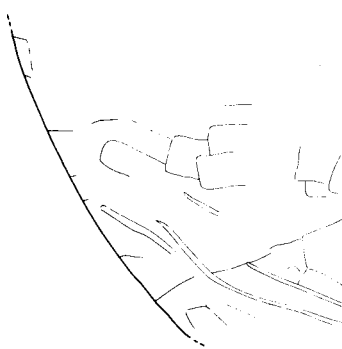
SI-13



SI-14



SI-16



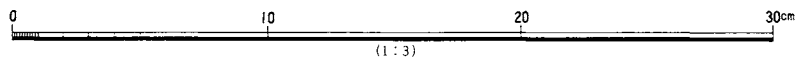
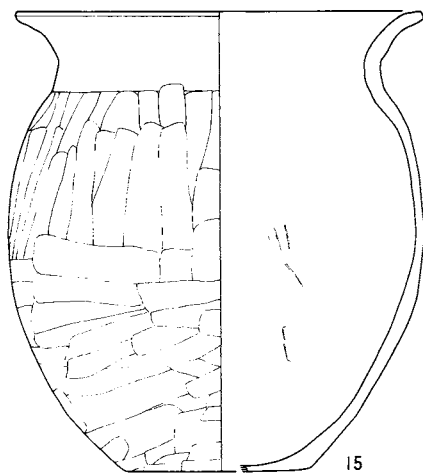
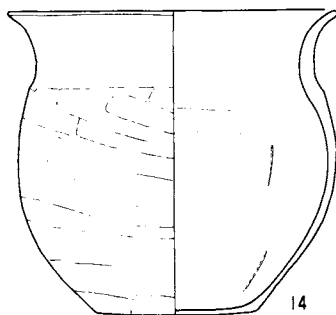
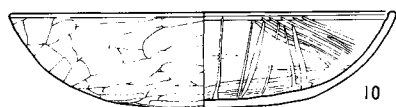
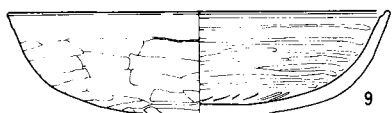
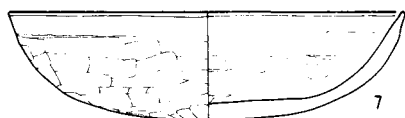
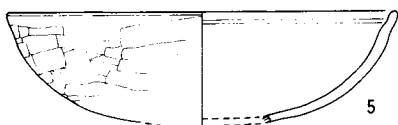
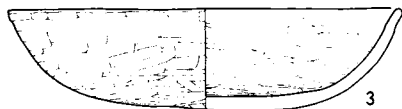
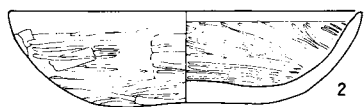
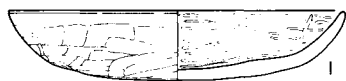
0 10 20 30cm

(1:3)



松崎播磨遺跡

SI-16





1



11



3

(1:4)



12



4



13



5



6



7



14



8



9



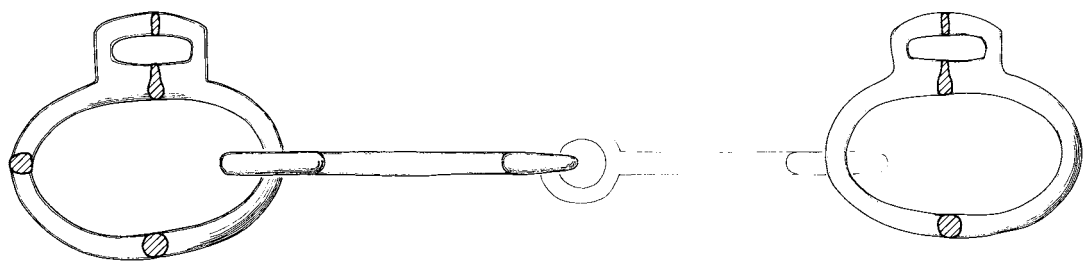
15



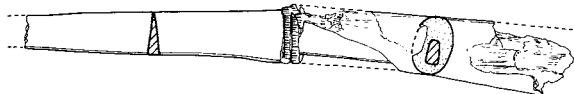
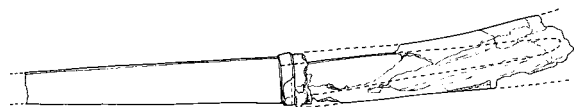
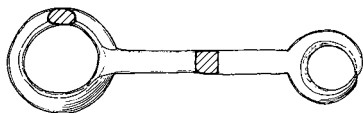
10

(1:3)

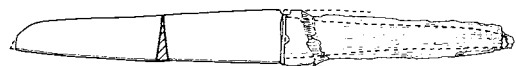
松崎播磨遺跡



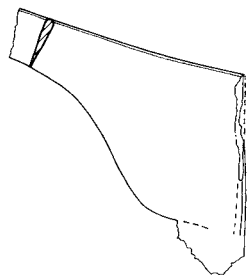
1 (SI-04)



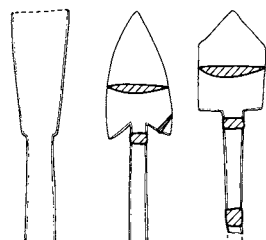
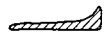
2 (SI-03)



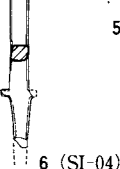
3 (SI-08)



7 (SI-08)



5 (SI-08)



6 (SI-04)



4 (SI-04)



8 (SI-01)



9 (SI-01)



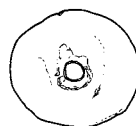
10 (SI-06)



11 (グリッド)

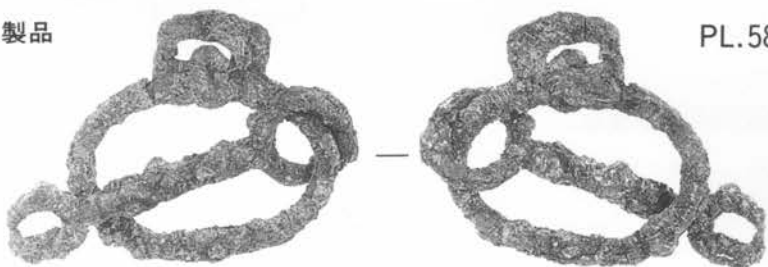


12 (グリッド)

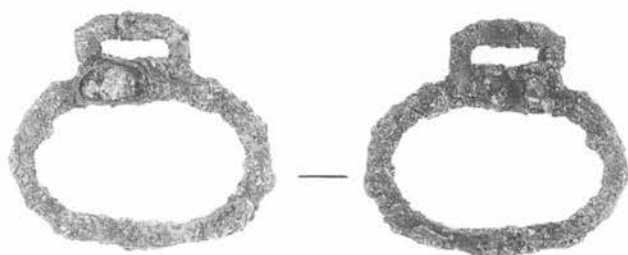


13 (グリッド)





1



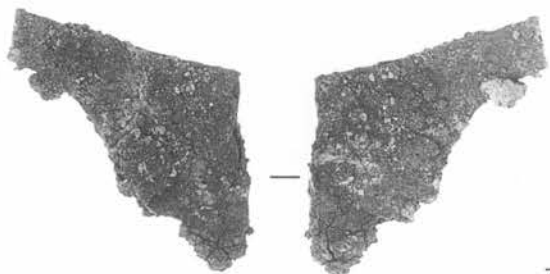
1



2



3



7



4



5



6



(1:2)

(1:1)

8



(1:1)

9



(1:1)

10



(1:1)

11



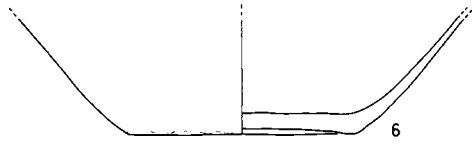
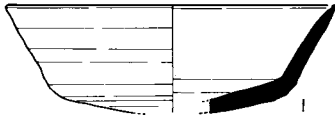
12



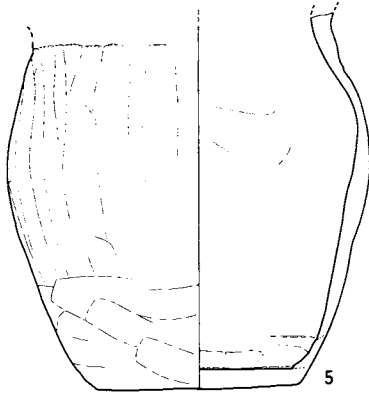
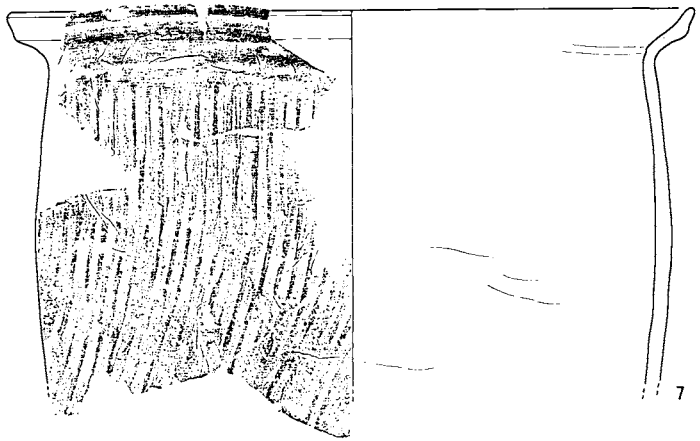
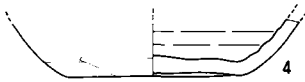
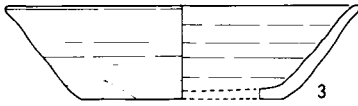
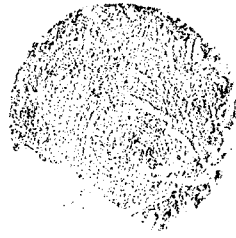
13

烏内遺跡

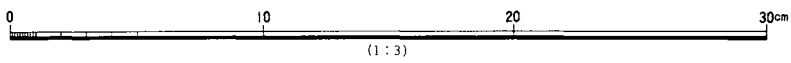
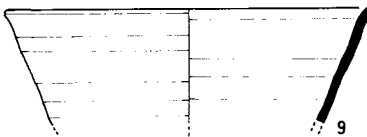
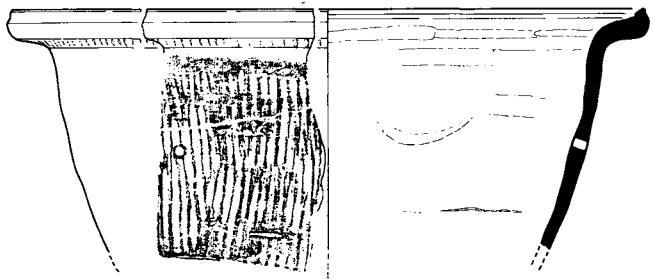
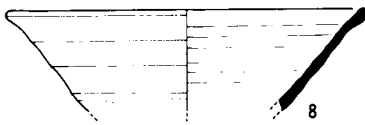
SI-520



SI-534

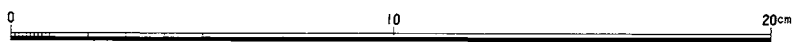
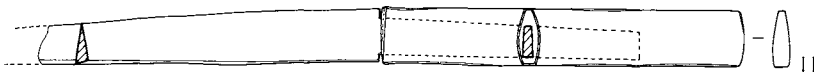


SI-536



(1:3)

SK-523



(1:2)



1



8



2



9



3



(1:2)



(1:4)

7



5



(1:2)

6

(1:2)

10



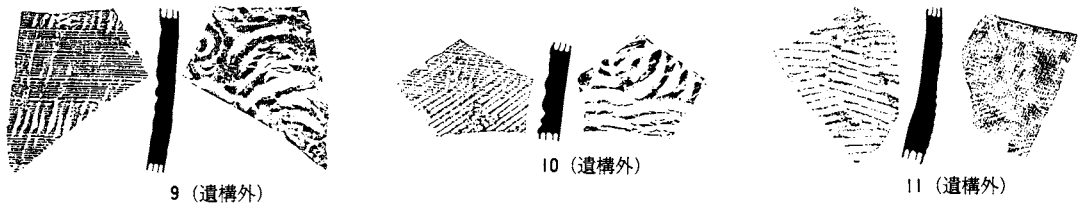
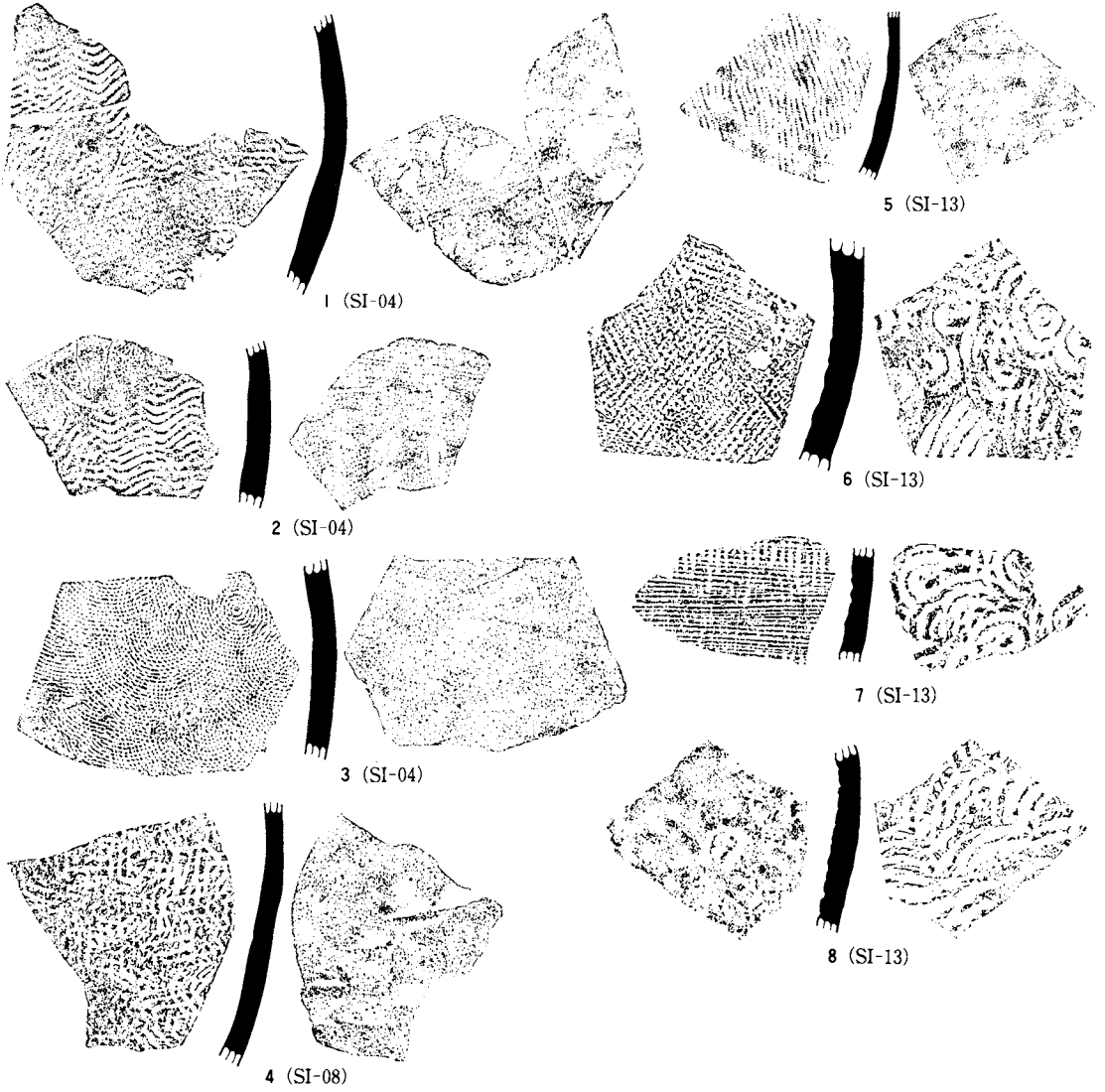
(1:3)



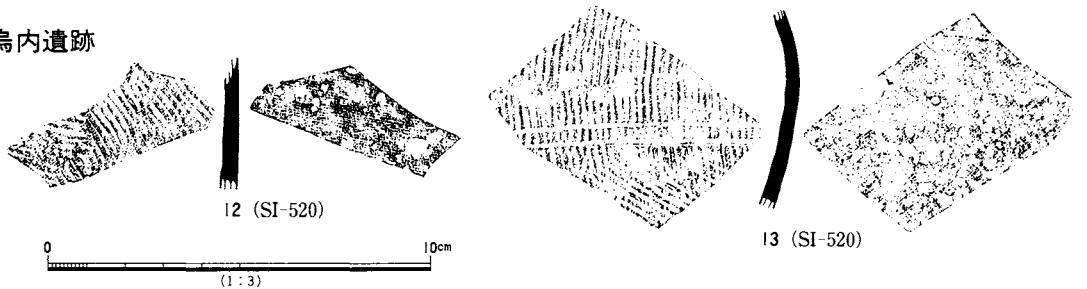
(1:2)

11

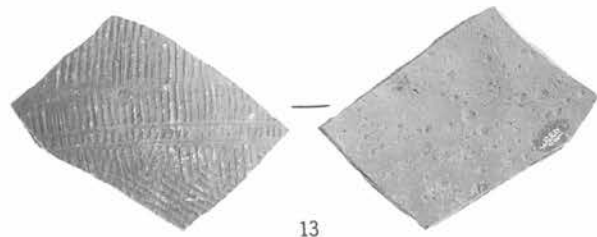
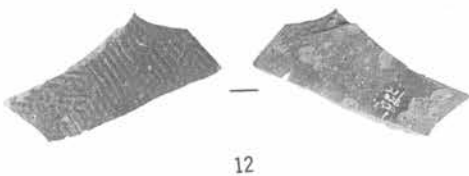
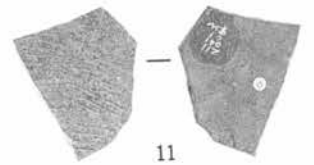
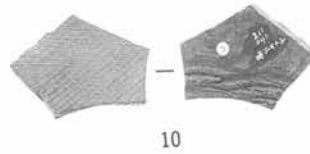
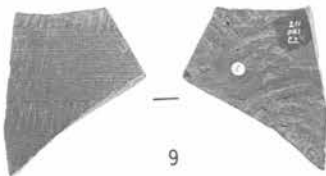
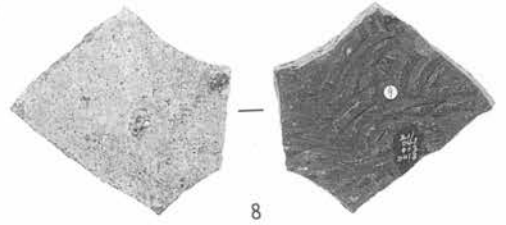
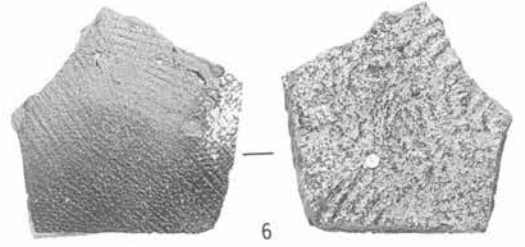
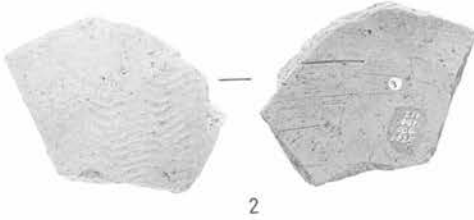
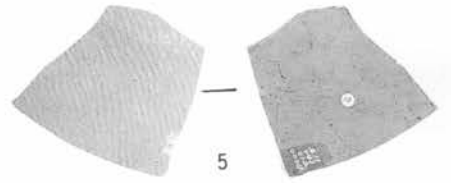
松崎播磨遺跡

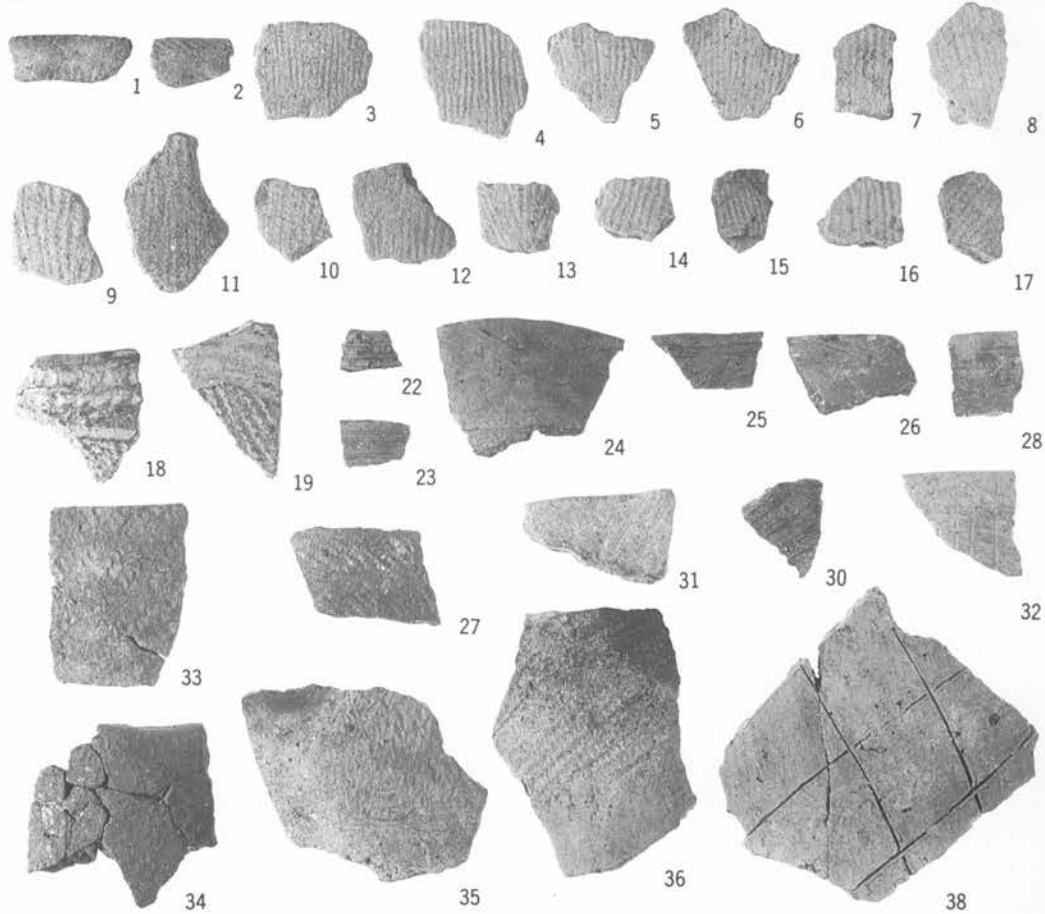


烏内遺跡



須恵器

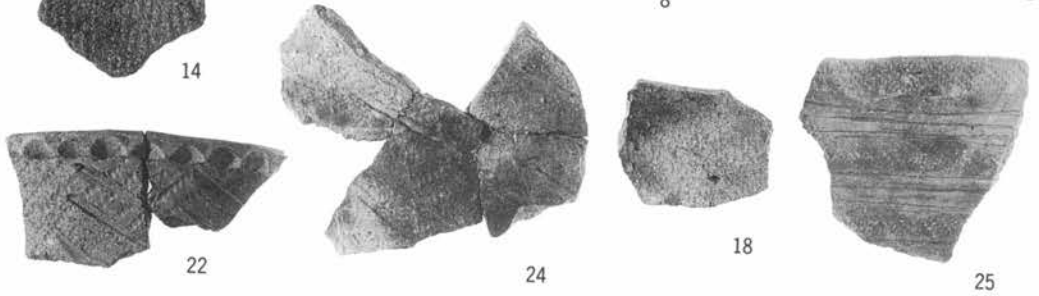
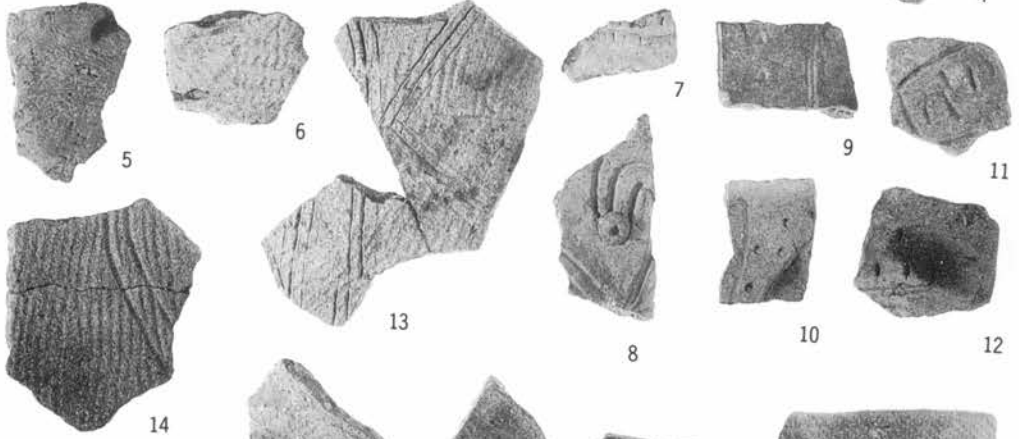




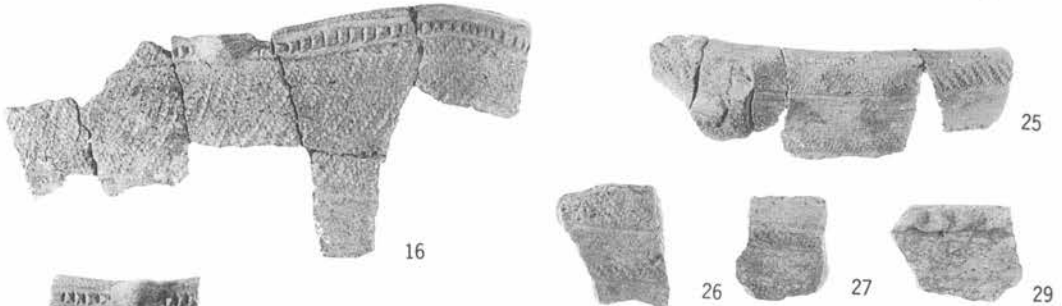
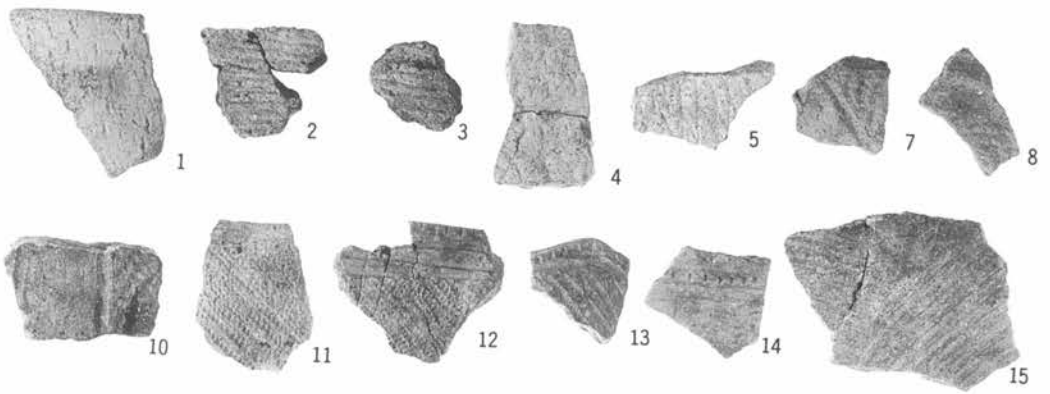
上福田
和田谷津
遺跡
(1:3)



上福田
保町遺跡
(1:4)



仲兵遺跡
(1:3)



下福田
稻荷原
遺跡
(1:3)





(1:4)

13



1



2



3



4



5



6



7



8



9



(1:4)

14



10



11



12

上福田
13号墳
(1:3)



1



2



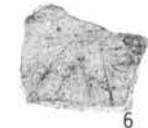
3



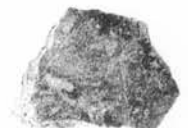
4



5



6



7



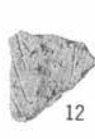
9



10



11



12



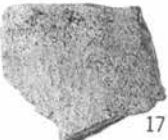
13



14



15



17



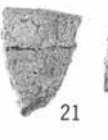
18



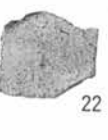
19



20



21



22



23



24



27



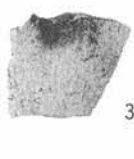
29



28



30



31



32



25



34

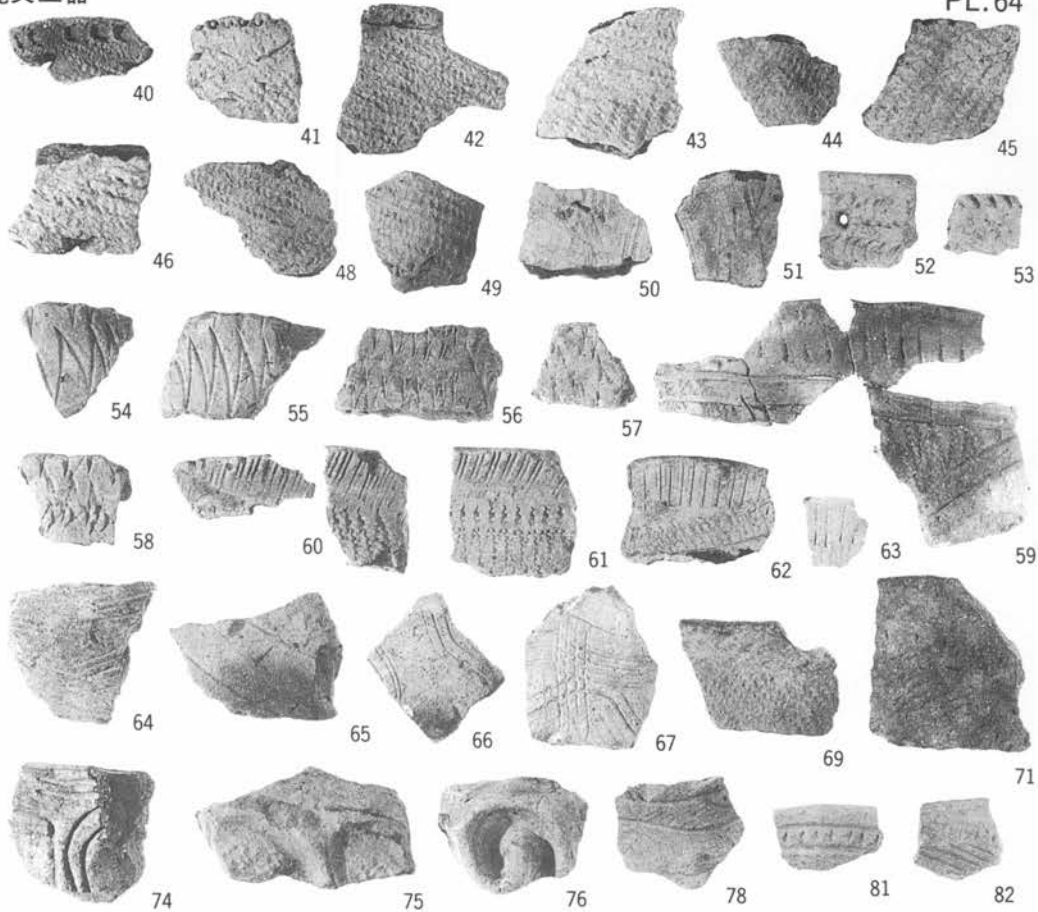


36

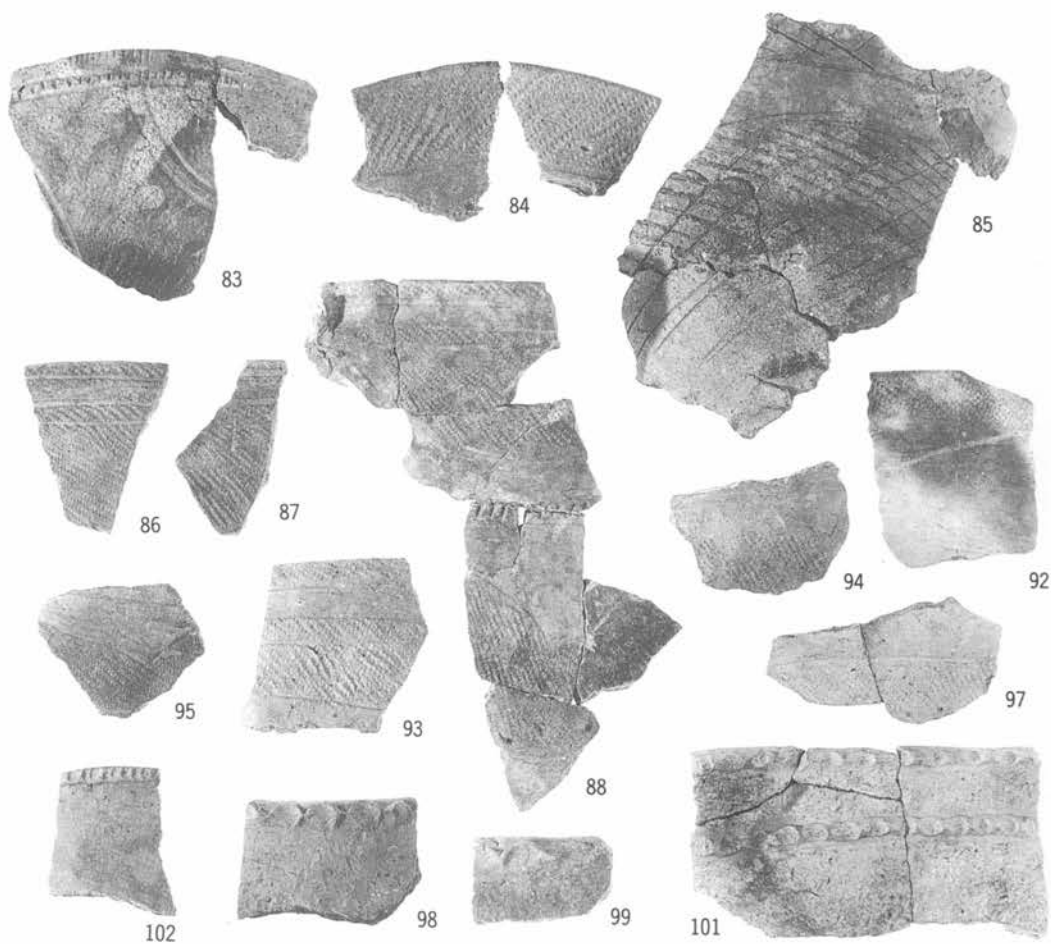


37

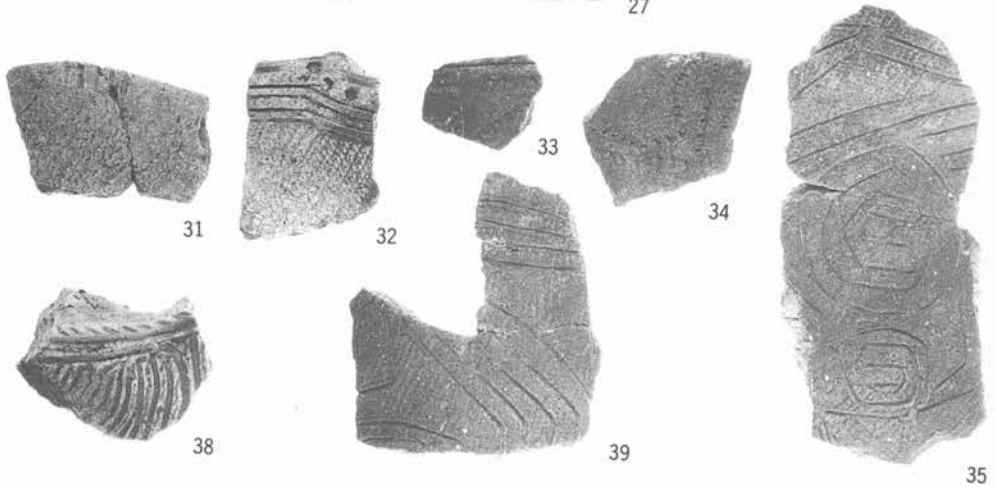
松崎播磨
遺跡 (1)
(1:3)



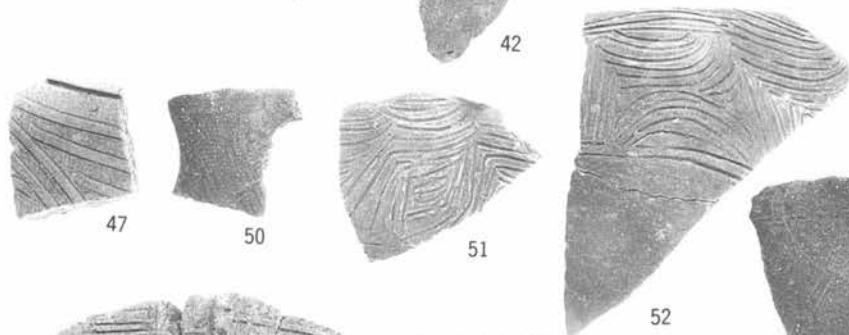
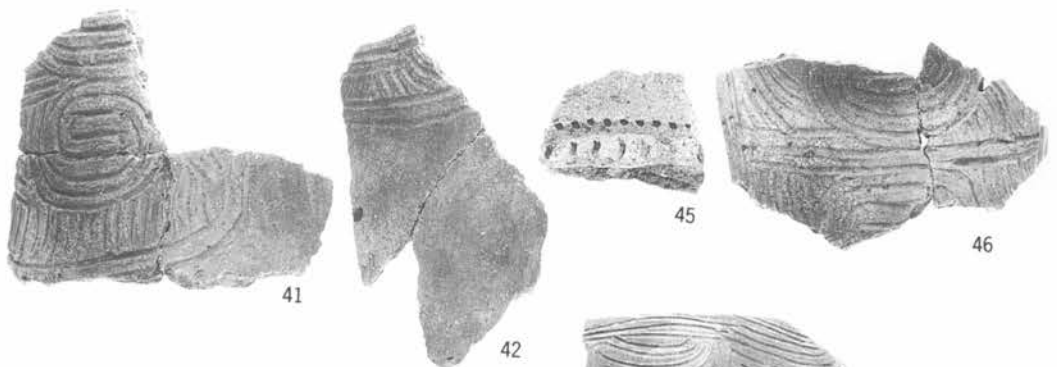
松崎播磨
遺跡 (2)
(1:3)



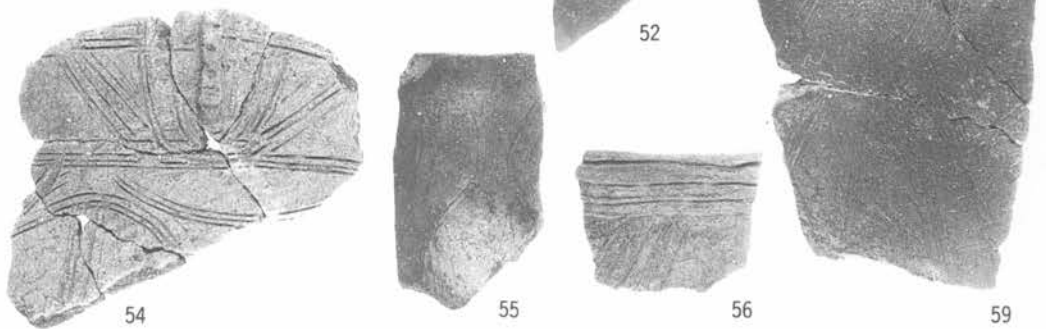
松崎播磨
遺跡 (3)
(1:3)

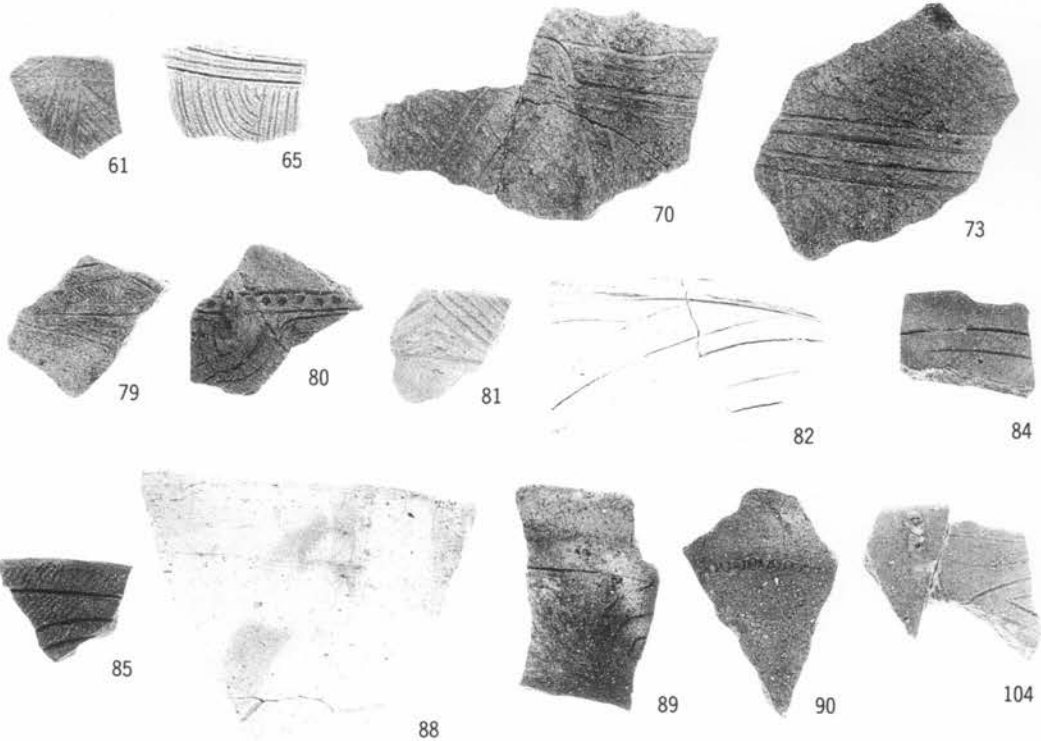


鳥内遺跡 (1) (1:3)

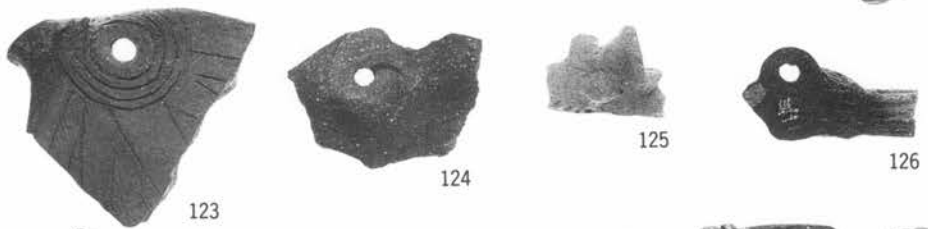
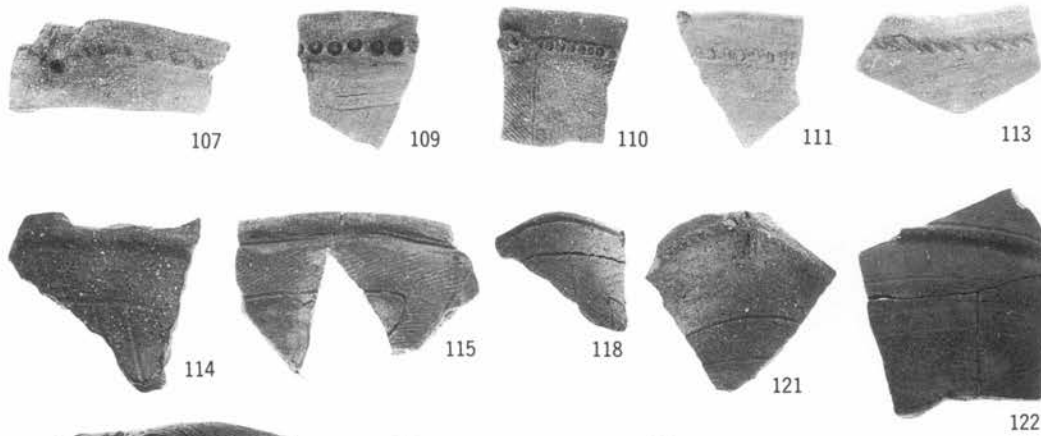


鳥内遺跡 (2) (1:3)

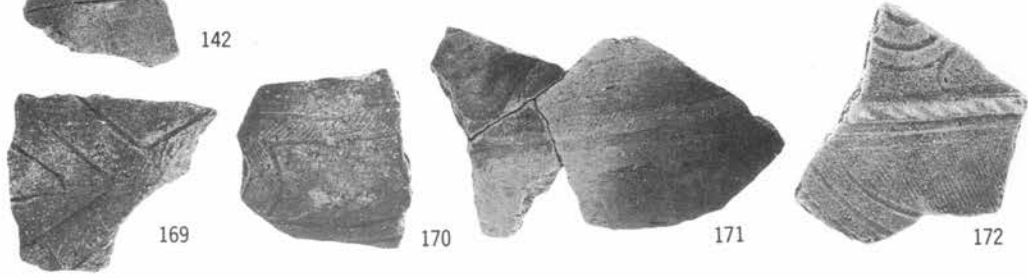


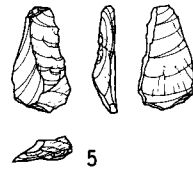
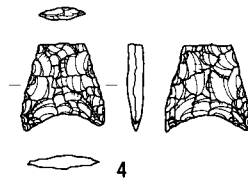
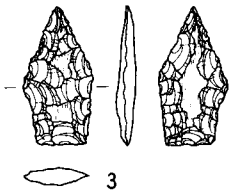
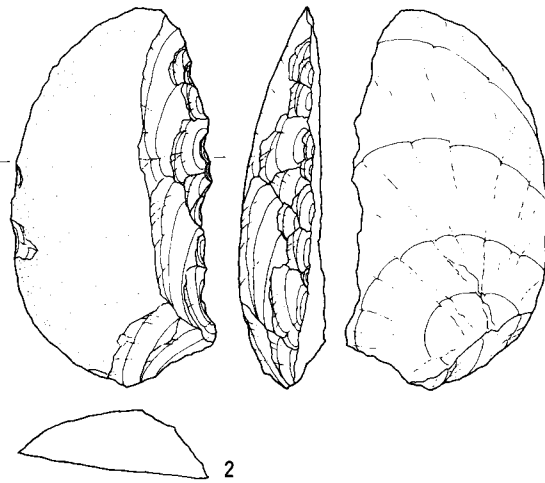
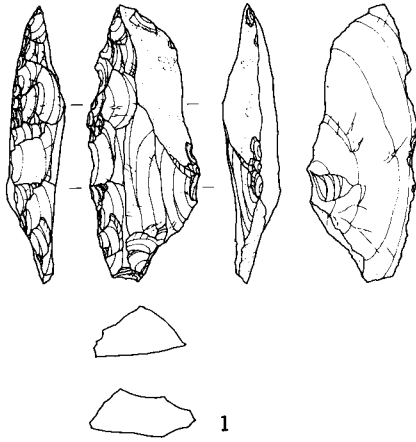


鳥内遺跡
(3)
(1:3)

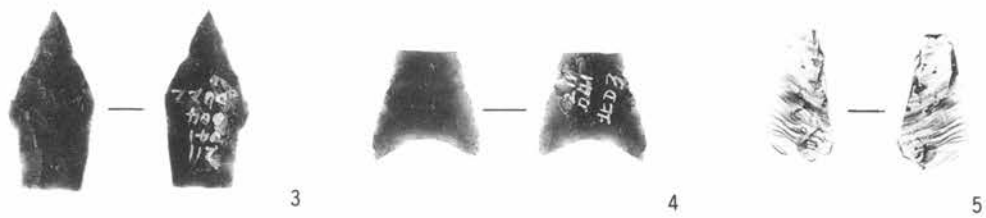
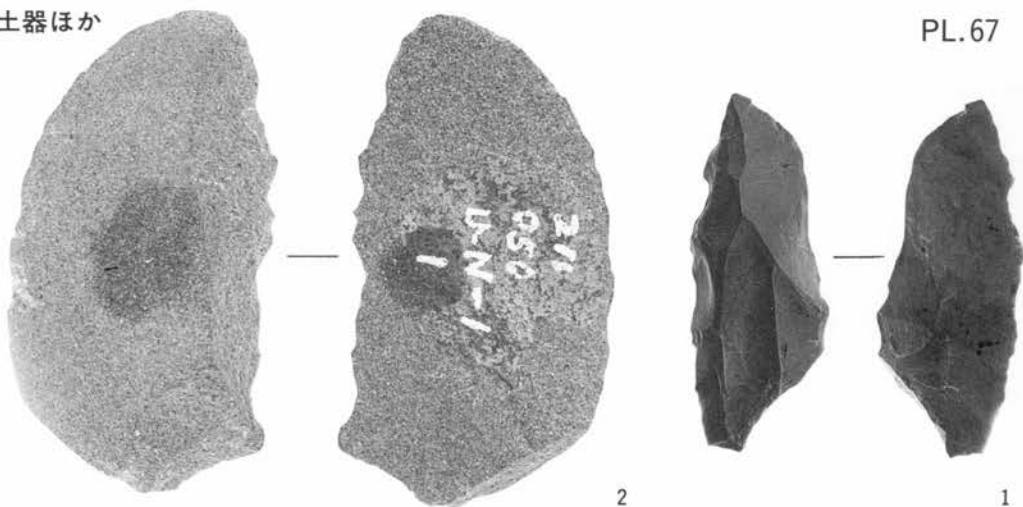


鳥内遺跡
(4)
(1:3)





0 5cm
(2:3)



- 1. 松崎播磨遺跡
- 2. 下福田稲荷原遺跡
- 3. 松崎播磨遺跡
- 4. 松崎播磨遺跡
- 5. 下福田稲荷原遺跡
- 6. 下神田稲荷原遺跡 SK-01
- 7. 松崎播磨遺跡 SK-02
- 8・9. 松崎播磨遺跡 SI-03
- 10・11. 松崎播磨遺跡遺構外



6



7



8



9



(1:1) (1:3)



10 (1:3)

11

報告書抄録

フリガナ	シュヨウチホウドウナリタアジキセンドウロカイリョウジギョウ
書名	主要地方道成田安食線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書II
副書名	成田市上福田和田谷津・上福田保町・仲兵・下福田稲荷原・上福田13号墳・松崎播磨・鳥内遺跡
巻次	II
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第229集
編集者名	永沼律朗
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2
発行年	西暦 1993年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上福田 和田谷津	成田市上福田字保町 241-1	12211	043	35°49'02"	140°17'10"	19861101- 19861130 19870901- 19871009	2,000	道路建設
上福田 保町	成田市上福田字宮前 317-1	12211	050	35°48'57"	140°17'20"	19881205- 19890131	1,670	〃
仲兵	成田市上福田字仲兵	12211	052	35°48'50"	140°17'28"	19900716- 19900907	440	〃
下福田 稲荷原	成田市下福田字稻荷原 731-2	12211	051	35°48'45"	140°17'32"	19890201- 19890329	1,100	〃
上福田 13号墳	成田市下福田字君作	12211	046	35°48'41"	140°17'34"	19871012- 19880130 19891101- 19900130	古墳1基	〃
松崎播磨	成田市松崎字播磨 103-4	12211	041	35°48'32"	140°17'38"	19860701- 19861031	3,000	〃
鳥内	成田市松崎字鳥内 354-3	12211	028	35°49'20"	140°17'49"	19880401- 19880531	550	〃

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上福田 和田谷津	住居	古墳時代	竪穴住居 2軒 掘立柱建物 2軒	土師器 須恵器 土玉 砥石	古墳時代終末期の方墳 石室完存 調査後保存 古墳時代終末期から奈良 時代にかけての集落 畿内産土師器模倣土器
		古墳時代	竪穴住居 1軒 溝 3条	土師器 須恵器 土製鎌 土製品 (紡錘車 鎌 鋤先) 石器	
上福田 保町	住居	先土器時代		土師器	
		古墳時代	竪穴住居 1軒	土師器	
仲兵	住居	古墳時代	竪穴住居 1軒	土師器	
		縄文時代	竪穴住居 5軒	縄文土器	
下福田 稲荷原	祭祀	古墳時代	祭祀遺構 1基	土師器 須恵器 土玉 手捏土器	
		江戸時代	塚 1基		
上福田 13号墳	古墳	古墳時代	方墳 1基	土師器 須恵器	
松崎播磨	住居	古墳時代	竪穴住居 12軒	土師器 須恵器 馬具	
		平安時代	竪穴住居 3軒 竪穴住居 1軒	土師器 須恵器 鉄鎌 土師器 須恵器	
鳥内	住居	縄文時代	竪穴住居 8軒	土師器 須恵器 縄文土器	
		平安時代 中世	地下式土壇 3基 土壇 17基	小刀 中世陶器	

1993年3月15日 印刷

1993年3月31日 発行

主要地方道 成田安食線
地方道道路改良事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書 II

千葉県文化財センター調査報告第229集

発行 千葉県土木部
編集 財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地の2
印刷 株式会社 弘文社
市川市市川南2丁目7番2号